㈶米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 49

鳥取県 米子市

諏訪西山ノ後遺跡

SU WA NISHI YAMA NO USHIRO

2006. 3

財団法人　米子市教育文化事業団

㈶米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 49

SU WA NISHI YAMA NO USHIRO
諏訪西山ノ後遺跡

2006. 3

財団法人　米子市教育文化事業団

序

米子市は鳥取県の西部、日本海側に位置し、山陰の商都と称される鳥取県西部の中核都市です。平成17年３月31日には、隣接する淀江町と合併し、国の史跡である妻木晩田遺跡や上淀廃寺など貴重な文化財を多く抱えることとなりました。今後は、文化財を活かした街づくりを進めることで、更なる発展が期待されます。

本書は、平成16、17年度に実施した、諏訪西山ノ後遺跡の発掘調査報告書です。

諏訪西山ノ後遺跡は、昭和56年の調査により、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての集落と、奈良時代の集落の存在が確認され、奈良時代の調査では、胞衣埋納遺構から、和銅開宝が見つかり、遺跡の南方に位置する、会見郡衙に関連する役人の居宅ではないかと考えられています。また、遺跡の北側に位置する諏訪古墳群は、平成12年に行われた調査で、諏訪５号墳の周溝部が確認され、古墳時代前期に造られた古墳であることが判明しています。

今回実施しました調査では、旧石器時代に遡るナイフ形石器が出土したほかに、これまで知られていなかった弥生時代後期の集落跡と、中世の掘立柱建物跡が確認されました。特に、弥生時代の集落からは火災の痕跡を留める焼失住居が７棟検出され、貴重な資料を得ることが出来ました。これらの成果は、今後の調査研究における重要な資料になるものと思われます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたって、多大なご理解とご協力を頂きました、地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました方々、関係各位に心から御礼を申し上げます。

平成18年（2006年）３月

財団法人　米子市教育文化事業団
理事長　足立　操

例　　言

1．本報告書は、一般国道181号線（岸本バイパス）道路改良工事に伴う発掘調査で、鳥取県の委託により実施した「諏訪西山ノ後遺跡」の発掘調査報告書である。
2．諏訪西山ノ後遺跡の所在地は、鳥取県米子市諏訪字西山ノ後である。
3．本報告書における方位は真北を示し、レベルは海抜標高を示す。
4．本報告書第２図の地図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「米子」を使用した。
5．本発掘調査にあたり、焼失住居の調査指導を鳥取環境大学浅川滋男氏、旧石器時代資料について、広島大学竹広文明氏、岡山理科大学白石純氏、石材鑑定について、鳥取大学赤木三郎氏にそれぞれお願いした。
6．本報告について、テフラ分析、樹種同定、年代測定、蛍光Ｘ線分析を株式会社古環境研究所に委託した。また現地の基準点測量をサンイン技術コンサルタント株式会社に委託した。金属製品の保存処理は、元興寺文化財研究所に委託した。
7．旧石器時代資料の調査については、鳥取県埋蔵文化財センター高橋章司氏の協力を得た。
8．本報告書は、第３章第３節の遺物を高橋章司氏が執筆、製図し、写真図版27、28の写真撮影も行っている。その他は、全て佐伯が執筆、編集した。
9．発掘調査によって作成された図面・写真・出土遺物は、米子市教育委員会によって保管されている。
10．現地調査及び報告書の作成には、上記の方々のほかにも多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）

厚見崇、安部和幸、稲田孝司、井上貴央、卜部吉博、置田雅昭、河合章行、
北浩明、君嶋俊行、国田俊雄、小池康明、下江健太、早田勉、高田健一、
中川寧、中森祥、西尾克己、丹羽野裕、濵田竜彦、日置智、東森晋、馬路晃祥、
根鈴輝雄、乗岡実、松井潔、三木雅子、八峠興、湯川善一、湯村功

凡　　例

1．発掘調査時、及び現地説明会において使用した遺構名、番号は、報告書作成時に変更している。
2．遺跡の略称は「SUW－NYU」である。
3．本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
4．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、その他の遺物は断面白抜きで表示した。
5．遺物実測図の縮尺は、土器、陶磁器類は4分の1で、金属製品は2分の1で統一した。石器は、旧石器が3分の2、それ以外が1分の1、4分の1、6分の1のスケールで図示している。
6．遺物番号には次の略号を付した。

Po：土器、陶磁器、土製品　S：石器　F：鉄製品　B：青銅製品
G：ガラス玉

目　　次

序

例　　言

凡　　例

目　　次

図版目次

写真図版目次

挿表目次

第1章　経過
　第1節　調査の経過 …… 1
　第2節　発掘作業の経過 …… 1
　第3節　整理等作業の経過 …… 2
　第4節　調査体制 …… 2

第2章　遺跡の位置と環境
　第1節　諏訪西山ノ後遺跡の地理的環境 …… 3
　第2節　諏訪西山ノ後遺跡の歴史的環境 …… 4

第3章　調査の方法と成果
　第1節　調査の方法 …… 7
　第2節　遺跡の層序 …… 10
　第3節　旧石器時代の調査 …… 13
　第4節　弥生時代中期後半から古墳時代前期の調査（集落） …… 18
　第5節　古墳時代前期から古墳時代後期の調査（墳墓） …… 75
　第6節　中・近世の調査 …… 95
　第7節　時期不明の遺構 …… 106
　第8節　遺構に伴わない遺物 …… 114

第4章　理化学的分析
　第1節　米子市諏訪西山ノ後遺跡の火山灰分析（株式会社　古環境研究所） …… 119

第２節　諏訪西山ノ後遺跡出土試料の放射性炭素年代測定（株式会社　古環境研究所）
……123
第３節　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定（その１）（株式会社　古環境研究所）
……124
第４節　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定（その２）（株式会社　古環境研究所）
……127
第５節　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定（その３）（株式会社　古環境研究所）
……130
第６節　諏訪西山ノ後遺跡の蛍光Ｘ線分析（株式会社　古環境研究所）　……136

第５章　総括　……138

写真図版

報告書抄録・要約

図版目次

第１図　諏訪西山ノ後遺跡位置図 …… 3
第２図　周辺遺跡分布図 …… 6
第３図　調査範囲図 …… 7
第４図　調査区全体図（南） …… 8
第５図　調査区全体図（北） …… 9
第６図　調査地区割図 ……10
第７図　調査区断面図１ ……11
第８図　調査区断面図２ ……12
第９図　旧石器調査グリッド配置図 ……13
第10図　ナイフ形石器S.1出土地点 ……13
第11図　旧石器実測図 ……15
第12図　土坑１　遺構図 ……18
第13図　土坑１　出土遺物図１ ……19
第14図　土坑１　出土遺物図２ ……20
第15図　土坑２　遺構・遺物図 ……21
第16図　土坑３　遺構・遺物図 ……22
第17図　土坑４　遺構・遺物図 ……23
第18図　土坑５～７　遺構図 ……24
第19図　土坑８　遺構図 ……25
第20図　竪穴住居１　遺物図 ……26
第21図　竪穴住居１　遺構図 ……27
第22図　竪穴住居１　焼土、炭化材出土状況図 ……28
第23図　竪穴住居２　遺構・遺物図 ……29
第24図　竪穴住居３　遺構図 ……30
第25図　竪穴住居３　焼土、炭化材出土状況図 ……31
第26図　竪穴住居３　遺物図 ……32
第27図　竪穴住居４　遺構図 ……33
第28図　竪穴住居４　遺物図１ ……34
第29図　竪穴住居４　遺物図２ ……35
第30図　竪穴住居４　遺物図３ ……36
第31図　竪穴住居５　遺構・遺物・焼土分布図 ……38
第32図　竪穴住居５　遺構・炭化材分布図 ……39

第33図　竪穴住居６　遺構・遺物図 ……40
第34図　竪穴住居７　遺物図１ ……41
第35図　竪穴住居７　遺構・遺物図２ ……42
第36図　竪穴住居８　遺構・遺物図 ……44
第37図　竪穴住居９　遺構・遺物図 ……45
第38図　竪穴住居10　遺構・遺物図１ ……46
第39図　竪穴住居10　遺物図２ ……47
第40図　竪穴住居10　遺物図３ ……48
第41図　竪穴住居10　遺物図４ ……49
第42図　竪穴住居11　遺構・遺物図 ……50
第43図　竪穴住居12　遺構・遺物図 ……51
第44図　竪穴住居13　遺構・遺物図 ……52
第45図　竪穴住居14　遺構・遺物図 ……53
第46図　竪穴住居15　遺構図 ……54
第47図　竪穴住居15　焼土、炭化材出土状況図 ……55
第48図　竪穴住居15　遺物図１ ……56
第49図　竪穴住居15　遺物図２ ……57
第50図　竪穴住居16　遺構・遺物図 ……58
第51図　竪穴住居17　遺構・遺物図 ……59
第52図　竪穴住居18　遺構・遺物図 ……60
第53図　竪穴住居19　遺構図 ……61
第54図　竪穴住居19　遺物図 ……62
第55図　竪穴住居20　遺構・遺物図 ……63
第56図　竪穴住居21　遺構・遺物図 ……64
第57図　掘立柱建物１・２　遺構図 ……65
第58図　掘立柱建物３～６　遺構図 ……67
第59図　掘立柱建物７～10　遺構・遺物図 ……68
第60図　掘立柱建物11～14　遺構・遺物図 ……70
第61図　掘立柱建物15～18　遺構図 ……71
第62図　掘立柱建物19～21　遺構図 ……73
第63図　溝状遺構１　遺構図 ……74
第64図　古墳１　遺構・遺物図１ ……76
第65図　古墳１　遺構・遺物図２ ……77
第66図　土壙墓１～３　遺構・遺物図 ……78
第67図　古墳２　遺構・遺物図 ……80

第68図　土壙墓４・５・11　遺構・遺物図 ……81
第69図　古墳３　遺構図 ……82
第70図　古墳４　遺構・遺物図 ……83
第71図　古墳５　遺構・遺物図 ……84
第72図　古墳６　遺構図 ……86
第73図　古墳６　遺物図 ……87
第74図　土壙墓６～10　遺構図 ……88
第75図　古墳７　遺構図 ……90
第76図　古墳７　遺物図 ……91
第77図　土器棺墓１　遺構・遺物図 ……92
第78図　横穴墓１　遺構図 ……93
第79図　横穴墓１　遺構・遺物図 ……94
第80図　周溝墓１・２　遺構・遺物図 ……96
第81図　諏訪神社旧境内調査地遺構図 ……97
第82図　掘立柱建物22～25　遺構図 ……99
第83図　掘立柱建物26～29　遺構・遺物図 ……100
第84図　掘立柱建物30～31・土坑９　遺構・遺物図 ……102
第85図　土坑10　遺構・遺物図 ……103
第86図　炉跡１～３　遺構図 ……104
第87図　テラス状遺構１・２　遺構・遺物図 ……105
第88図　落し穴１～６　遺構・遺物図 ……107
第89図　落し穴７～12　遺構・遺物図 ……109
第90図　落し穴13～18　遺構・遺物図 ……111
第91図　落し穴19～24　遺構・遺物図 ……113
第92図　遺構外出土遺物図１ ……116
第93図　遺構外出土遺物図２ ……117
第94図　遺構外出土遺物図３ ……118
第95図　Ｈ－Ⅳ区４－５グリッドの土層柱状図 ……122
第96図　ナイフ形石器S.1出土地点の土層柱状図 ……122
第97図　遺構変遷図１ ……140
第98図　遺構変遷図２ ……141

写真図版目次

写真図版１

１．諏訪西山ノ後遺跡　全景(北より)

写真図版２

１．Ｈ－Ⅳ区２－５グリッド西断面（東より）

２．旧石器時代調査トレンチ（上空より）

写真図版３

１．土坑１　土器出土状況（北より）

２．古墳７　全景（上空より）

写真図版４

１．ナイフ形石器S.1出土状況（北より）

２．ナイフ形石器S.1出土状況（東より）

３．土坑１　土器出土状況（西より）

４．土坑２　断面（南より）

５．土坑２　Po16・17出土状況（東より）

６．土坑３　完掘（南より）

７．土坑４　土器出土状況（西より）

８．土坑７・８　完掘（東より）

写真図版５

１．竪穴住居１　完掘（西より）

２．竪穴住居１　床面断割り(西より)

３．竪穴住居２　完掘（北より）

４．竪穴住居３　検出（東より）

５．竪穴住居３　断面（東より）

６．竪穴住居３　断面（南より）

７．竪穴住居３　断面（西より）

８．竪穴住居３　断面（北より）

写真図版６

１．竪穴住居３　焼土検出状況（北東より）

２．竪穴住居３　炭化材検出状況（北東より）

３．竪穴住居３　炭化材検出状況（東より）

４．竪穴住居３　炭化材検出状況（西より）

５．竪穴住居３　炭化材検出状況（北より）

６．竪穴住居３　完掘（南より）

７．竪穴住居５　炭化材検出状況（東より）

８．竪穴住居５　完掘（西より）

写真図版７

１．竪穴住居４　遺物出土状況（西より）

２．竪穴住居４　Po.77出土状況（西より）

３．竪穴住居４　完掘（北より）

４．竪穴住居４　貼床除去後（北西より）

５．竪穴住居６　完掘（北より）

６．竪穴住居７　焼土、炭化材検出状況（南西より）

７．竪穴住居７　炭化材検出状況（北

より）
8．竪穴住居7　完掘（東より）

写真図版8
1．竪穴住居8　西側断面（南より）
2．竪穴住居8　完掘（南より）
3．竪穴住居10　土器出土状況（南西より）
4．竪穴住居10　P7完掘（南西より）
5．竪穴住居10　完掘（南西より）
6．竪穴住居9　完掘（南より）
7．竪穴住居11　完掘（西より）
8．竪穴住居12　完掘（北より）

写真図版9
1．竪穴住居14　炭化材検出状況（北東より）
2．竪穴住居14　完掘（北東より）
3．竪穴住居15　焼土、炭化材検出（東より）
4．竪穴住居15　焼土、炭化材検出（北東より）
5．竪穴住居15　焼土、炭化材検出（東より）
6．竪穴住居15　完掘（北より）
7．竪穴住居16・17　検出状況（西より）
8．竪穴住居16　完掘（北より）

写真図版10
1．竪穴住居17　完掘（南西より）
2．竪穴住居19　完掘（南西より）
3．竪穴住居20　完掘（北より）
4．竪穴住居21　完掘（東より）
5．掘立柱建物4　完掘（北より）
6．掘立柱建物12　完掘（南より）
7．掘立柱建物16　検出（東より）
8．掘立柱建物17　完掘（北より）

写真図版11
1．掘立柱建物18　完掘（南西より）
2．掘立柱建物19・20　完掘(北より)
3．掘立柱建物21　完掘（南より）
4．溝状遺構1　検出状況(南東より)
5．溝状遺構1　断面（南東より）
6．溝状遺構1　断面（東より）
7．溝状遺構1　完掘（東より）
8．溝状遺構1　完掘（北西より）

写真図版12
1．古墳1　完掘（西より）
2．古墳1周構内　Po.202出土状況（南西より）
3．古墳2　検出状況（北西より）
4．古墳2　完掘（北西より）
5．古墳3　検出状況（北西より）
6．古墳7周構内　Po.235出土状況（南東より）
7．古墳6　検出状況（西より）
8．古墳6　周溝内土器出土状況（北東より）

写真図版13
1．土壙墓1　完掘（北より）
2．土壙墓2　完掘（東より）
3．土壙墓9　完掘（北より）
4．土器棺墓1　検出状況（東より）
5．横穴墓1　断面（東より）
6．横穴墓1　閉塞石検出状況（北東より）

7．横穴墓１　完掘（北東より）
8．周溝墓１・２　完掘（南東より）

写真図版14
1．諏訪神社旧境内地　遠景（北より）
2．テラス状遺構１　S.56出土状況（東より）
3．土坑10　検出（南より）
4．土坑10　B.1出土状況（西より）
5．炉跡　検出状況（東より）
6．炉跡　完掘（北東より）
7．掘立柱建物22　完掘（西より）
8．掘立柱建物31　完掘（西より）

写真図版15
1．諏訪神社旧境内地　平坦地完掘（南東より）
2．諏訪神社旧境内地　平坦地完掘（南より）
3．諏訪神社旧境内地　平坦地完掘（南西より）
4．Po.318出土地点（北東より）
5．Po.318出土状況（北東より）
6．落し穴１　完掘（西より）
7．落し穴４　完掘（西より）
8．落し穴６　完掘（西より）

写真図版16
1．落し穴11　完掘（南西より）
2．落し穴12　完掘（西より）
3．落し穴13　完掘（北西より）
4．落し穴17　完掘（南西より）
5．落し穴18　完掘（東より）
6．落し穴21　断面（北より）
7．落し穴21　完掘（北より）
8．落し穴24　完掘（東より）

写真図版17
旧石器時代の遺物（表面）

写真図版18
旧石器写真の遺物（裏面）

写真図版19
土坑１　Po.1
土坑１　Po.2
土坑１　Po.6
土坑２　Po.17
土坑４　Po.34

写真図版20
竪穴住居１　Po.36
竪穴住居３　Po.48
竪穴住居４　Po.76
竪穴住居４　Po.77
竪穴住居４　Po.84
竪穴住居６　Po.99

写真図版21
竪穴住居10　Po.141
竪穴住居19　Po.191
古墳１　Po.201・202
古墳１　Po.213
土壙墓１　Po.215

写真図版22
古墳５　Po.221
古墳６　Po.226・229・227
古墳７　Po.235
土器棺墓１　Po.249

横穴墓１　Po.250
横穴墓１　Po.251

写真図版23
遺構外出土遺物　Po.261
遺構外出土遺物　Po.265
遺構外出土遺物　Po.318
遺構外出土遺物　Po.319
遺構外出土遺物　Po.305・306

写真図版24
１．竪穴住居出土遺物１
２．竪穴住居出土遺物２

写真図版25
第４章　第３節　樹種同定写真

写真図版26
第４章　第３節　樹種同定写真

写真図版27
第４章　第３節　樹種同定写真

写真図版28
第４章　第４節　樹種同定写真

写真図版29
第４章　第４節　樹種同定写真

写真図版30
第４章　第４節　樹種同定写真

写真図版31
第４章　第５節　樹種同定写真

写真図版32
第４章　第５節　樹種同定写真

挿表目次

表１　諏訪西山ノ後遺跡出土　旧石器一覧表 ……17
表２　火山ガラス比分析結果 ……122
表３　屈折率測定結果 ……122
表４　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定結果（その１） ……134
表５　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定結果（その２） ……135
表６　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定結果（その３） ……136
表７　諏訪西山ノ後遺跡の蛍光Ｘ線分析結果 ……137
表８　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表１ ……145
表９　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表２ ……146
表10　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表３ ……147
表11　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表４ ……148
表12　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表５ ……149
表13　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表６ ……150
表14　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表７ ……151
表15　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表８ ……152
表16　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表９ ……153
表17　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表10 ……154
表18　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表11 ……155
表19　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表12 ……156
表20　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表13 ……157
表21　諏訪西山ノ後遺跡出土土器観察表14 ……158
表22　諏訪西山ノ後遺跡出土石器観察表 ……159
表23　諏訪西山ノ後遺跡出土金属器観察表 ……160
表24　諏訪西山ノ後遺跡出土玉類観察表 ……160

第1章　経過

第1節　調査の経過

本発掘調査は、鳥取県が進める一般国道181号線道路改良工事を調査原因とする。

発掘調査範囲は、米子市諏訪地内のうち、工事予定地に含まれる6,400㎡を対象とした。この諏訪西山ノ後遺跡は、昭和56年に行われた、県営五千石地区のほ場整備に伴う発掘調査（註１）や、平成12年に携帯電話基地局建設工事に伴う発掘調査(註２)によって、古墳時代前期の竪穴住居、古墳群、奈良時代の掘立柱建物跡の存在が確認され、当該期の集落遺跡の存在が予想されていた。

そのため、工事に先立ち、平成15年度に米子市教育委員会による試掘調査（註３）が行われた。その調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期の集落と古墳群の存在が推定され、工事予定範囲の全域を調査する必要があるものと判断された。この結果を受けて、鳥取県と米子市教育委員会文化課が協議を行い、鳥取県が文化財保護法の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会に提出した。その後、鳥取県教育委員会より事前発掘の指示を受けた鳥取県は、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託し、平成16年度から埋蔵文化財調査室が発掘調査を行うこととなった。

（註１）小原貴樹　1982年『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』　米子市教育委員会
（註２）佐伯純也　1999年『諏訪西山ノ後遺跡（諏訪５号墳)』　㈶米子市教育文化事業団
（註３）下高瑞哉　2004年『米子市内遺跡発掘調査報告書（遺跡分布調査)』　米子市教育委員会

第2節　発掘作業の経過

調査は、平成16年４月１日より、調査前の地形測量と草刈を行い、４月12日より、重機を用いて表土の掘削と排土の搬出を行った。調査は、南側から北へと徐々に移動しながら掘り進め、順次表土掘削、遺構検出、写真撮影、遺構掘削作業を行い、完掘する方法を採用した。

包含層の掘り下げについては、すべて人力により、鍬を用いて行い、排出された土砂は、一輪車を用いて場外に排出した。また、検出された遺構は、仮番号を付け、100分の１スケールの平面図を平板にて測量してから、検出状況の写真を撮影し、任意にセクションを設定して掘り下げた。

遺物の取り上げは、地区、層位、遺構ごとに行い、状況に応じて、出土状況の写真撮影、図面作成を行った。

平成16年10月23日には、現地説明会を開催し、発掘調査の現場を一般市民に公開し、200名を超える参加があった。また、平成17年11月８日から５日間、米子市教育委員会が実施する職場体験学習として、米子市立後藤ヶ丘中学校の２年生生徒３名を受け入れ、発掘作業や整理作業の体験をした。

現地調査は、平成17年３月31日に一旦終了したのち、現行農業用道路の下に埋没している竪穴住居の残りの部分と、古墳の周溝の道路下部分の調査を、平成17年６月21日より開始し、平成17年６月29日に終了した。調査総面積は6,400㎡である。

第3節　整理等作業の経過

出土遺物の整理作業は、適宜遺物洗浄を始め、注記、接合作業と同時に土器の実測作業を並行して行った。平成17年度には、土器実測のほか、石器の実測作業、図面のトレース作業を進めた。

報告書の作成は、関連する資料の調査なども実施しつつ、平成18年3月末までにすべて終了した。

第4節　調査体制

平成16年度（発掘調査）

調査主体　財団法人米子市教育文化事業団

理事長　山岡宏（米子市教育長）

埋蔵文化財調査室

室長　比企裕（米子市教育委員会文化課課長）

主任調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

調査担当　調査員　佐伯純也

原あづさ

臨時職員　森田静香

平成17年度（報告書作成）

調査主体　財団法人米子市教育文化事業団

理事長　山岡宏（平成17年5月25日まで）

足立操（平成17年5月26日より）

埋蔵文化財調査室

室長　比企裕（米子市教育委員会文化課課長）

主任調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

調査担当　調査員　佐伯純也

臨時職員　森田静香

秦美香（平成17年5月9日より）

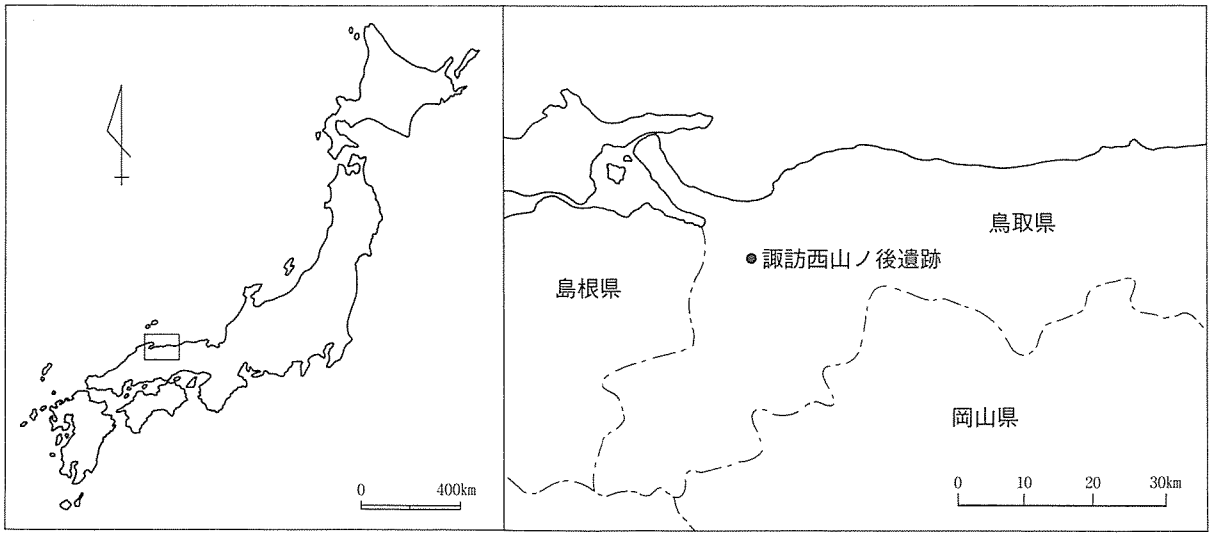
調査協力　米子市教育委員会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　諏訪西山ノ後遺跡の地理的環境

諏訪西山ノ後遺跡は、米子市諏訪字西山ノ後に所在する。この遺跡は、米子市の南部にあり、日野川と法勝寺川に挟まれた、標高42mから45m程度の丘陵上に位置する。この丘陵は、長者原台地と呼ばれ、南北４km、東西２kmの範囲に舌状に広がっており、ほぼその全域が小規模な谷によって開析されている。このうち諏訪西山ノ後遺跡は、長寿原台地の東端部に位置し、馬の背状に細長く伸びる丘陵上一帯に展開しているものと考えられる。台地の基盤は、大山の降下火山灰がベースとなり、表層には黒ボクが堆積している。遺跡の東側に広がる日野川の扇状地との比高差は約20m程度あり、東側の丘陵斜面部は急傾斜地となっている。一方、西側の斜面はなだらかに傾斜するが、現況では、ほ場整備による整然とした区画の農地が広がっており、旧景観とは様相が異なっている。

台地上の自然環境は、古墳時代前期にはヨモギ属の草木類などが生育する草原が広がっていたものが、のちにアカマツやクロマツなどの二次林が増加したものと考えられている。古代から中世の自然環境は不明であるが、幕末に開削された佐野川用水によって、台地上が広範囲に開墾されており、近代以降は、水田や畑、果樹などが栽培される田園の風景が広がっていた。また、昭和40年代には長者原台地の北部に位置する、福市・青木遺跡において大規模な住宅団地が造成され、この周辺の景観は一変したが、諏訪西山ノ後跡の周辺は、引き続き農地として活用されてきたため、周辺には、現在でものどかな田園風景が広がっている。



第１図　諏訪西山ノ後遺跡位置図

第2節　諏訪西山ノ後遺跡の歴史的環境

諏訪西山ノ後遺跡(1)の周辺には、縄紋時代から近世の遺跡が多数分布しているが、そのほとんどは丘陵上に立地する遺跡である。諏訪西山ノ後遺跡の東には、日野川によって形成された扇状地が広がり、広大な平野を有しているが、その平野部において発掘調査が行われた事例が少なく、平野部の遺跡の展開についてはよくわかっていない。唯一、今在家下井上遺跡(46)において、古墳時代前期から奈良・平安時代に至る時期の集落が確認されている程度である。また、日野川の扇状地上に、条里制遺構が存在する可能性も指摘されており、現行集落の分布や、地名などから、この平野部にも未知の遺跡が多数埋没している可能性が高いものと考えられる。

旧石器時代には、米子市淀江町原畑(63)や、泉中峰遺跡(58)のような、大山山麓の丘陵上において、ナイフ形石器の出土事例をいくつか見出すことが出来るが、原位置をとどめない状況で確認された資料が主体であり、石器製作に伴って形成されるブロックを持つ資料は、これまで確認されていなかった。ところが、平成15年に大山町門前第2遺跡(93)から、AT層の下位より、黒耀石製のナイフ形石器を含むブロックが確認され、鳥取県内でもナイフ形石器文化期の良好な資料が存在することが明らかとなった。一方、細石刃文化期の資料は、南部町龍徳遺跡、琴浦町笠見第3遺跡等において知られており、旧石器時代に生活していた人々の足跡を辿ることが出来るが、まだまだ全容を解明するには至っておらず、不明な点が多く残されている。

縄紋時代の資料については、草創期に該当する時期の資料は、鳥取県内ではいまだ出土しておらず、不明であるが、尖頭器の出土例が奈喜良遺跡(25)、伯耆町貝田原遺跡(48)、大山町荘田(86)などで見られることから、旧石器時代から縄紋時代草創期にかけての時期においても、各地で活発な狩猟活動が行われていたものと考えられる。早期には、上福万遺跡(51)から押型紋土器が、前期には目久美遺跡(35)、陰田第9遺跡(31)において西川津式段階の資料が豊富に出土している。中期から後期段階の資料は少ないが、晩期頃には南部町口朝金遺跡(8)をはじめとして、古市遺跡群(26)など、内陸低地部への集落の拡散が顕著に認められる。遺構に関しては、落とし穴状の土坑が青木遺跡(45)や妻木晩田遺跡(81)などから多量に確認されているが、そのほかの貯蔵穴や住居跡などの遺構は、資料数が少なく全容は不明である。

弥生時代前期の集落は、目久美遺跡において水田域が確認されているが、集落の本体については調査が及んでおらず、実態は不明である。おそらく、低湿地に面する微高地か、丘陵斜面に集落が存在したものと考えられる。また、弥生前期には、丘陵上に環壕を伴う遺跡が、南部町諸木遺跡(10)、天王原遺跡(9)、今津岸の上遺跡(80)、大塚塚根遺跡(88)などで見つかっている。諏訪地区においては、別所地区で前期の土壙墓群が見つかっているが、これに伴う集落は見つかっていない。中期前葉には、目久美遺跡、長砂第1遺跡(38)、古市河原田遺跡(26)、今津岸の上遺跡、大山町上野遺跡(87)などでまとまった土器の出土が見られるが、集落の全容を窺える資料は、今のところ見つかっていない。中期中葉には、青木遺跡(45)において集落が開始され、徐々に拡大していくが、諏訪地区においては、後期まで顕著な生活痕跡は認められない。弥生中期後葉から、集落の検出例が増加し、集落の立地が丘陵部へと

移動していく。後期には、西山ノ後において集落が営まれるほか、越敷山遺跡群(7)、別所地区、上安曇地区などにも集落が展開し、長者原丘陵の各所において、まとまった居住単位が形成される。また墳墓に関しては、陰田第6遺跡(29)や、妻木晩田遺跡、尾高浅山遺跡(54)、日下古墳群(53)、日原6号墓(42)などで確認されているが、集落遺跡の数と比較して少ない。

古墳時代前期には、弥生時代後期に引き続いて集落が拡大し、福市遺跡、青木遺跡、妻木晩田遺跡などで最盛期を迎えるが、古墳時代中期を境に集落から墓域へと変化していく事例が多い。これは青木遺跡にも認められる現象であるが、集落の移動を伴う変化があったことを窺わせる資料であり、また古墳時代後期には集落活動が不明瞭であり、中心的な集落を抽出することも難しくなる。古墳群の分布は、丘陵の東端部に位置するものが多く、樋ノ口古墳群、横穴式石室を持つ前方後円墳別所1号墳などが所在している。

奈良時代以降には、諏訪の丘陵において再び集落が展開する。昭和56年の調査では、掘立柱建物とそれに付随すると見られる土坑から、胞衣の埋納遺構が検出され、土器の中から和銅開宝、鉄鋤先、刀子、墨挺状の炭化物が出土している。特に山陰地方では、唯一の和銅開宝出土遺跡であり、付近に所在した会見郡衙に関連する人物の屋敷跡と考えられている。会見郡衙に関しては、遺跡の南1kmの地点には、大形の掘立柱建物が見つかった長者屋敷遺跡(3)があり、ここを中心に大寺廃寺(6)や坂中廃寺(5)などの奈良時代の遺跡が集中している。この長者屋敷遺跡周辺が、会見郡衙の推定地と目されているが、郡衙跡の範囲や消長など、不明な点が多い。また、北に位置する青木遺跡でも奈良時代の集落が見つかっており、長者原台地の各所に当該期の集落が分布しているものと考えられる。

中世には集落の検出例が少なく、顕著な遺構は確認されていない。諏訪地区では、中原地区や南山崎遺跡(2)において、地下式の横穴が作られているほか、五輪塔などが見つかっている。比較的、中世の墳墓資料が豊富な地域と考えられる。また、平安時代には、長者原台地一帯が、紀成盛の本願地と考えられており、関連する遺構の存在が注目される。近世の集落は、現在の新庄集落に位置し、その周辺の低地部が、主たる農耕地であったと考えられる。また幕末に開通した佐野川用水の掘削事業により、耕作地として丘陵上が開発され、今回の調査地もその後に削平されることとなったと考えられる。諏訪の名称の起こりは、明治の初めに諏訪神社から採用したものであり、近世には新庄と呼ばれていた。諏訪神社の起源は定かではないが、棟札によると寛永5年の造営にまで遡る。また、明治時代には、山根集落内において、瓦製造や磁器の焼継が行われており、窯業遺跡の存在についても注目される地域と考えられる。

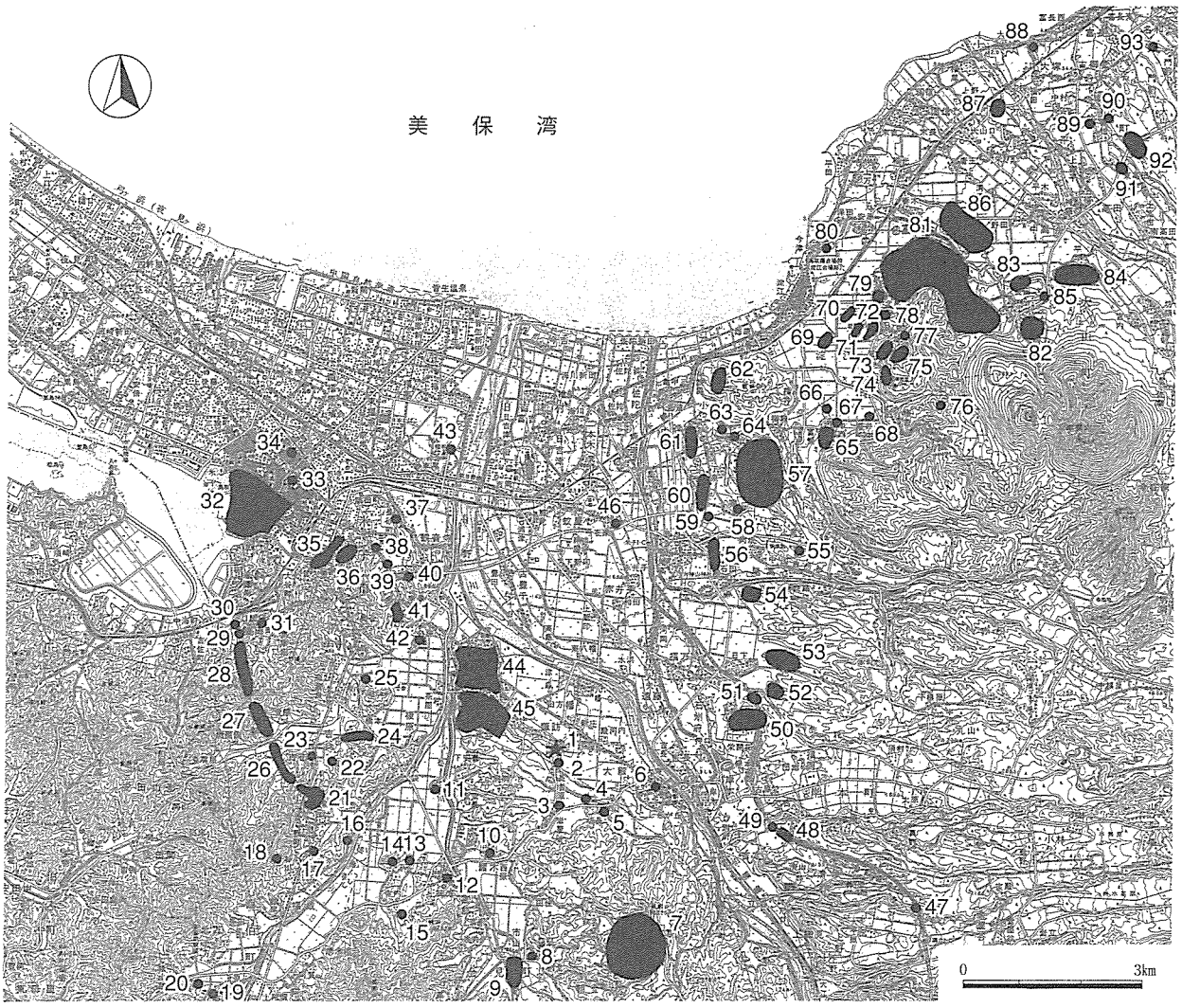
文献

『鳥取県における旧石器文化の様相』第21回　中・四国旧石器文化談話会　2004年

『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会　2003年

『長者原遺跡群発掘調査報告書』岸本町教育委員会　1982年

『泉中峰・泉前田遺跡』鳥取県教育文化財団　1994年



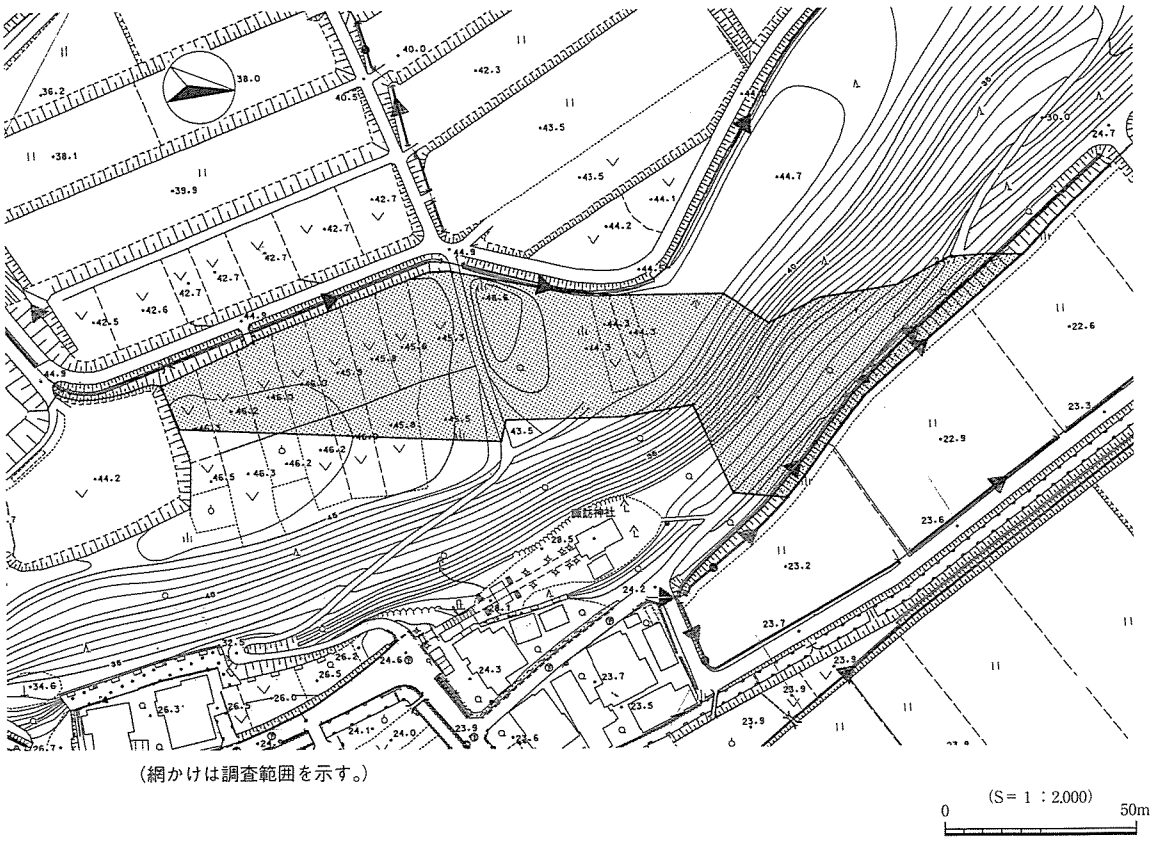
1 諏訪西山ノ後遺跡
2 諏訪南山崎遺跡
3 長者屋敷遺跡
4 坂長下屋敷遺跡
5 坂中廃寺
6 大寺廃寺
7 越敷山遺跡群
8 口朝金遺跡
9 天王原遺跡
10 諸木遺跡
11 大袋丸山遺跡
12 天万遺跡
13 宮尾遺跡
14 三崎殿山古墳
15 普段寺古墳群
16 早里遺跡
17 石佛前遺跡
18 清水谷遺跡
19 マケン堀横穴墓群
20 北方廣畑遺跡
21 吉谷遺跡群
22 吉谷トコ遺跡
23 吉谷上原山遺跡
24 橋本遺跡群
25 奈喜良遺跡
26 古市遺跡群
27 萱原遺跡群
28 陰田遺跡群
29 陰田第6遺跡
30 陰田第7遺跡
31 陰田第9遺跡
32 米子城跡
33 角盤町遺跡
34 錦町第1遺跡
35 目久美遺跡
36 池ノ内遺跡
37 長砂第3遺跡
38 長砂第1遺跡
39 長砂第2遺跡
40 東宗像遺跡
41 宗像古墳群
42 日原6号墓
43 車尾西浜中遺跡
44 福市遺跡
45 青木遺跡
46 今在家下井上遺跡
47 林ヶ原遺跡
48 貝田原遺跡
49 久古第3遺跡
50 石州府古墳群
51 上福万遺跡
52 日下寺山遺跡
53 日下古墳群
54 尾高浅山遺跡
55 岡成第9遺跡
56 尾高城跡
57 百塚遺跡群
58 泉中峰遺跡
59 大下畑遺跡
60 尾高古墳群
61 中間古墳群
62 壺瓶古墳群
63 原畑遺跡
64 小波遺跡
65 中西尾古墳群
66 鮒ヶ口遺跡
67 河原田遺跡
68 稲吉角田遺跡
69 井手胯遺跡
70 福岡遺跡
71 瓶山古墳群
72 向山古墳群
73 彼岸田遺跡
74 城山古墳群
75 小枝山古墳群
76 四十九谷横穴墓群
77 上淀廃寺
78 礎利遺跡
79 晩田遺跡
80 今津岸の上遺跡
81 妻木晩田遺跡
82 源平山古墳群
83 向山古墳群
84 平古墳群
85 徳楽方墳
86 荘田遺跡群
87 上野遺跡
88 大塚塚根遺跡
89 茶畑山道遺跡
90 茶畑第1遺跡
91 東高田遺跡
92 茶畑第2遺跡
93 門前第2遺跡

第2図　周辺遺跡分布図

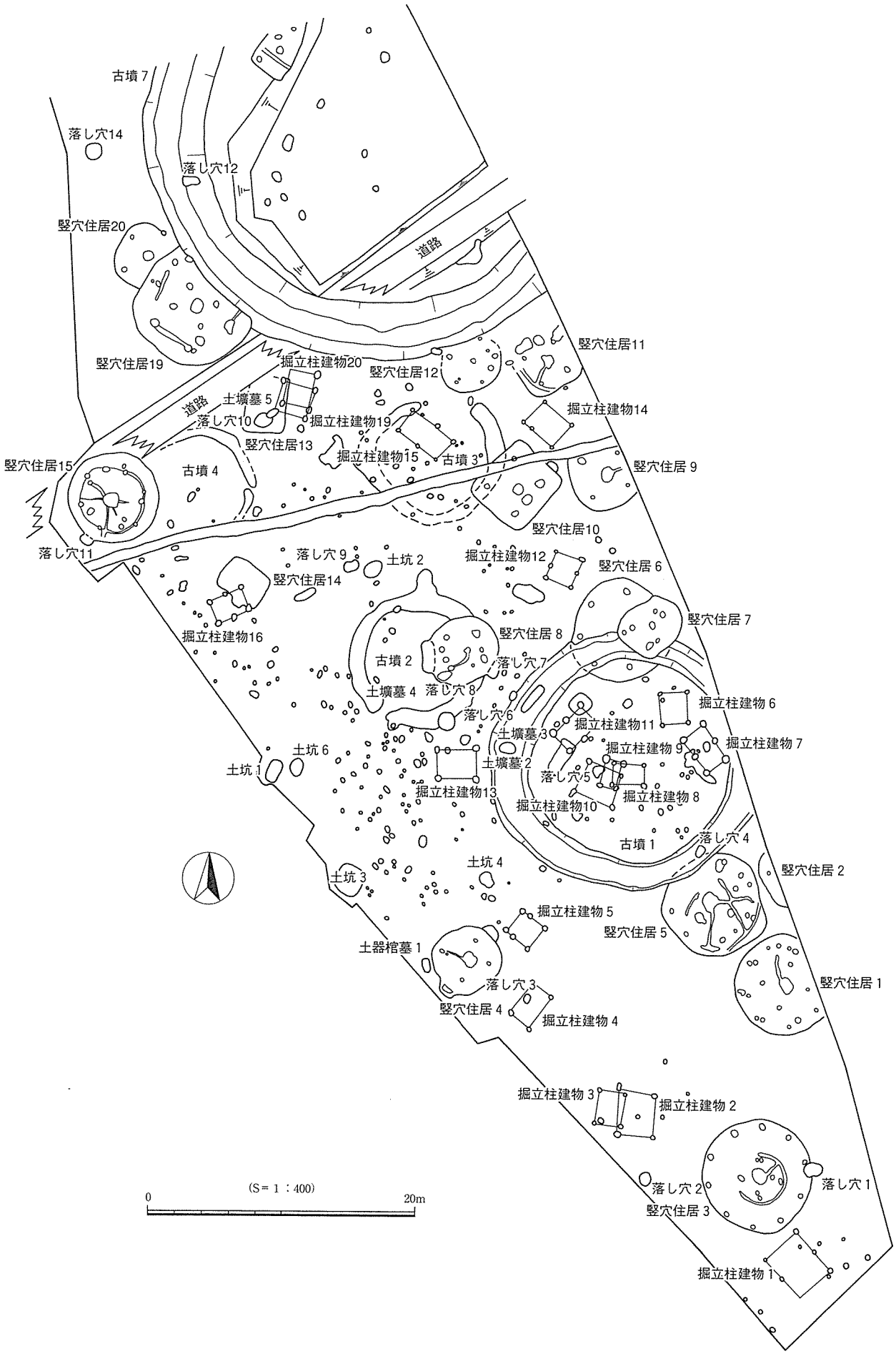
第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

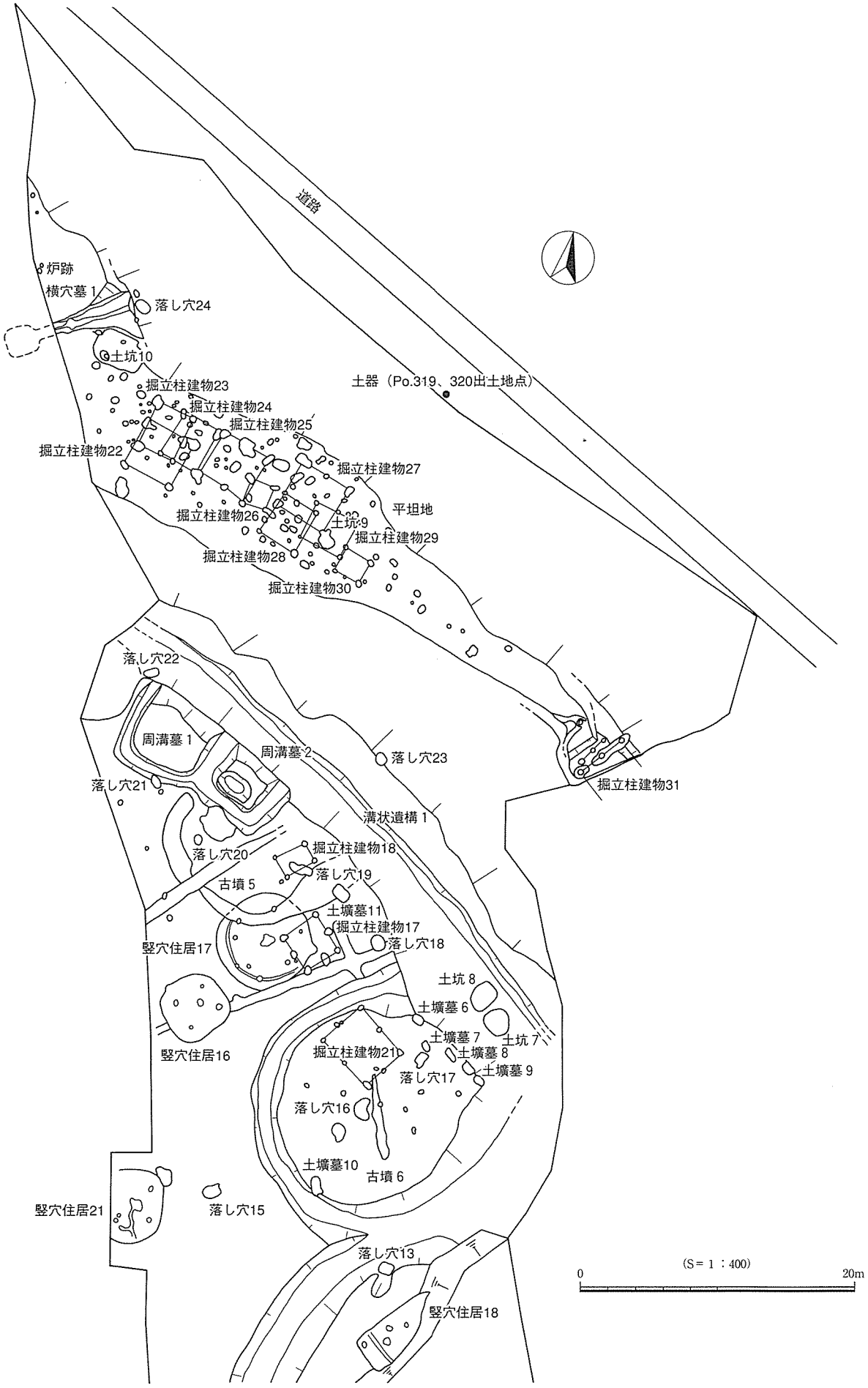
発掘調査は、南側の調査区より開始し、表土掘削と同時に遺構検出を行いながら、順次北側へと移動していった。また丘陵北端部の調査区では、表土掘削後の土砂を斜面下の諏訪神社旧境内地へ排出し、さらに重機にて北側の道路建設予定地内へ排出した。重機による表土剥ぎは耕作土までとし、それ以下は人力により検出作業を行った。また、遺構検出時の排土も一輪車を用いて人力で運び出している。調査区の地区割りは、道路本線の中央線を利用し、一辺が20mのメッシュを設定した。検出した遺構、遺物の記録には平板とトータルステーションを用い、座標値を記録した。写真記録は、35mmと4×5版を用い、白黒とカラーリバーサルフィルムで撮影し、サブカメラとしてデジタルカメラも併用して記録している。



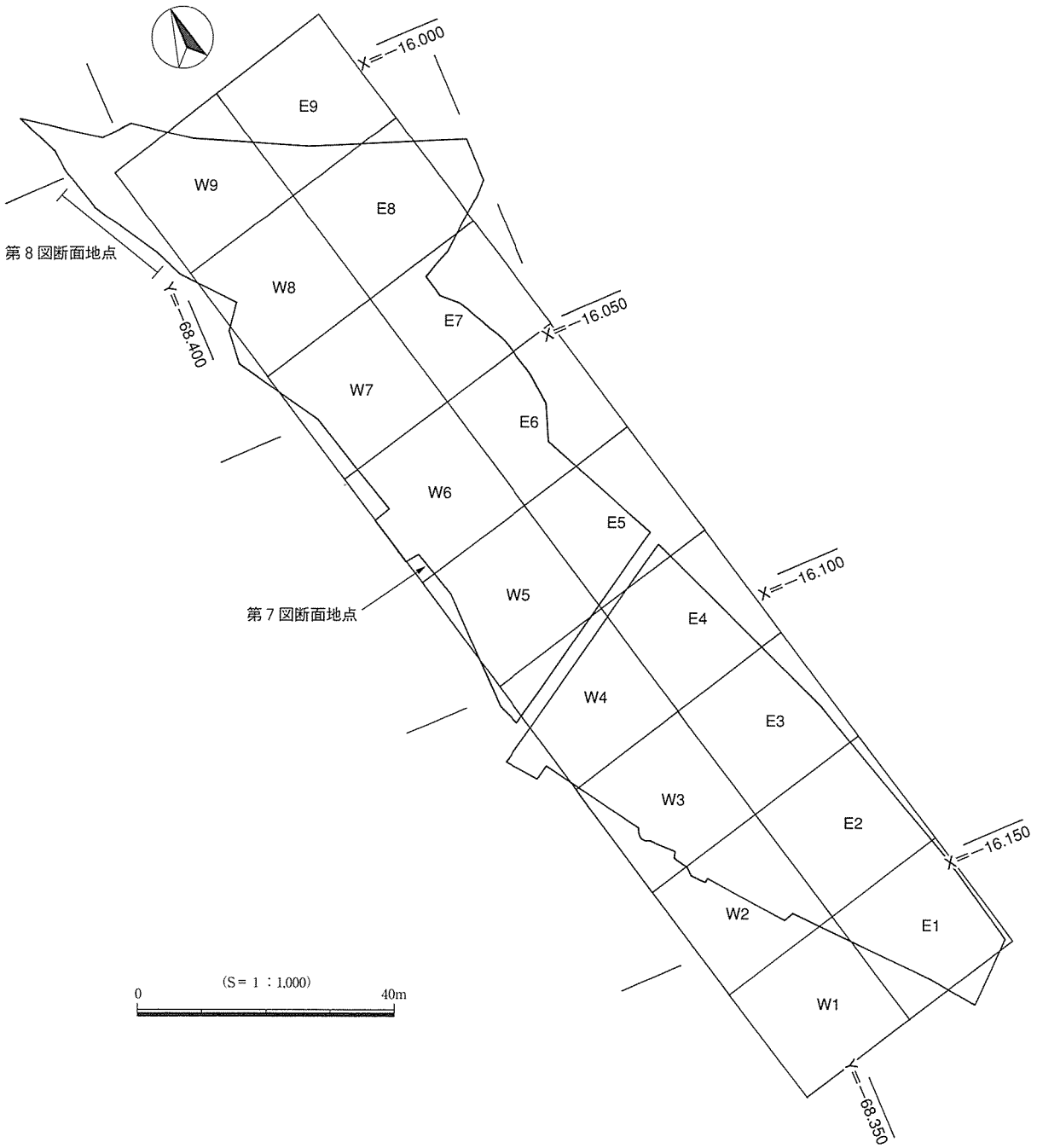
第3図　調査範囲図


古墳7
落し穴14
落し穴12
竪穴住居20
道路
竪穴住居19
竪穴住居11
掘立柱建物20
竪穴住居12
掘立柱建物14
道路
土壙墓5
落し穴10
掘立柱建物19
竪穴住居13
竪穴住居15
古墳4
掘立柱建物15
古墳3
竪穴住居9
竪穴住居10
落し穴11
落し穴9
土坑2
掘立柱建物12
竪穴住居6
竪穴住居14
竪穴住居7
掘立柱建物16
竪穴住居8
古墳2
落し穴7
土壙墓4
落し穴8
掘立柱建物6
落し穴6
掘立柱建物11
土壙墓3
掘立柱建物9
掘立柱建物7
土坑6
土坑1
土壙墓2
落し穴5
掘立柱建物13
掘立柱建物8
掘立柱建物10
古墳1
落し穴4
竪穴住居2
土坑4
土坑3
掘立柱建物5
竪穴住居5
土器棺墓1
竪穴住居1
落し穴3
竪穴住居4
掘立柱建物4
掘立柱建物3
掘立柱建物2
落し穴2
落し穴1
竪穴住居3
掘立柱建物1
(S=1:400)
0
20m

第4図　調査区全体図（南）


道路
炉跡
横穴墓 1
落し穴24
土坑10
土器（Po.319、320出土地点）
掘立柱建物23
掘立柱建物24
掘立柱建物25
掘立柱建物22
掘立柱建物27
平坦地
掘立柱建物26
土坑9
掘立柱建物29
掘立柱建物28
掘立柱建物30
落し穴22
周溝墓 1
周溝墓 2
落し穴23
落し穴21
掘立柱建物31
溝状遺構 1
落し穴20
掘立柱建物18
落し穴19
古墳 5
土壙墓11
掘立柱建物17
竪穴住居17
落し穴18
土坑 8
土壙墓 6
竪穴住居16
土壙墓 7
土坑 7
掘立柱建物21
土壙墓 8
落し穴17
土壙墓 9
落し穴16
土壙墓10
古墳 6
竪穴住居21
落し穴15
落し穴13
竪穴住居18
(S＝1：400)
0
20m

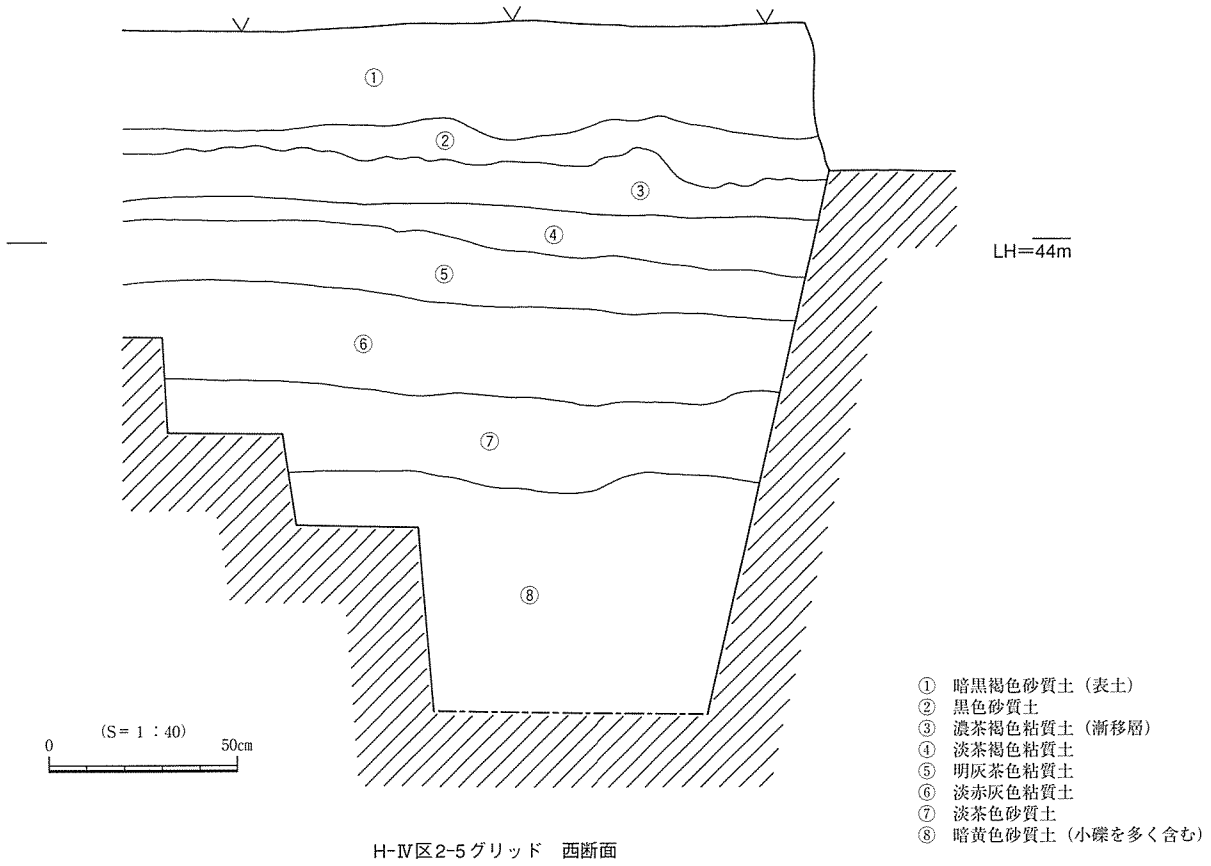
第５図　調査区全体図（北）



第6図　調査地区割図

第2節　遺跡の層序

諏訪西山ノ後遺跡は、長者原台地の東端部の丘陵上、標高42mから45m前後に位置する。遺跡の西側は、昭和50年代に行われたほ場整備により改変され、現在は段状の耕作地が広がっている。調査区内は、ほ場整備による地形の改変は受けていなかったが、丘陵上全体が東西方向に向かって耕作されており、遺物包含層から遺構面に至るまで削平され、ローム層までが畝状に削り取られている状況であった。また、調査区内で検出した古墳は、墳丘が完全に削り取られており、かろうじて周溝のみが残存しているような状況であった。以上のような堆積環境にあったため、遺跡を覆っていた埋土は、すべて耕作土に置き換えられ、遺物包含層も完全に失われていた。しかしながら、落とし穴状の土坑の中には、黒ボクの堆積が埋土中に見られるものがあることから、縄紋時代から弥生時代中期以前に



H-Ⅳ区2-5グリッド　西断面

第7図　調査区断面図1

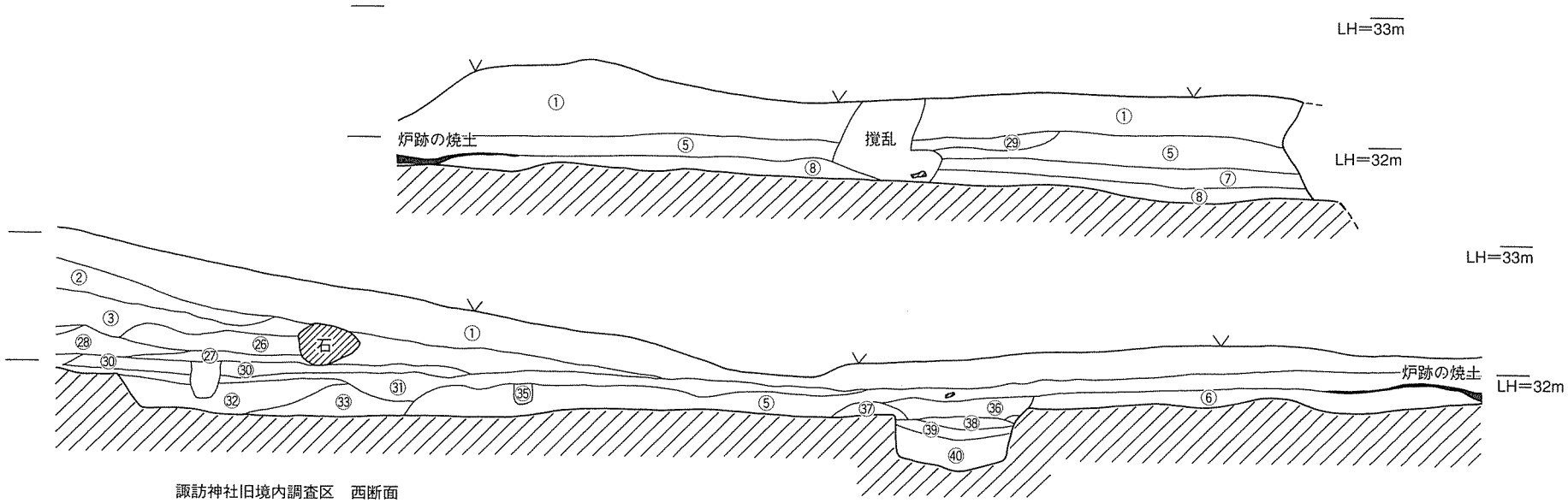
おいては、黒ボクが厚く堆積した環境であったと考えられる。

また、調査区の南にある土手は、「築土手」と呼ばれ、幕末に坂中まで開通した佐野川用水を諏訪、樋ノ口、青木地区へと延長通水するためのものであるが、この工事は文久元年（1861年）に行われており、調査区の表土層や、調査区の中央に残る土取の痕跡なども、この土手の築堤に際して削平された可能性があるものと考えられる。

一方、旧石器時代の遺物を含む包含層は、弥生時代の遺構検出面である、濃茶褐色粘質土のさらに下位のローム層中に存在する。このローム層は、上層から漸移的な色調を呈する濃茶褐色粘質土（3層）となり、茶褐色粘質土（4層）、明灰茶色粘質土（5層）、淡赤灰色粘質土（6層）、淡茶色砂質土（7層）、暗黄色砂質土（8層）が堆積している。このうち、ナイフ形石器が出土している層は、第5層の明灰茶色粘質土と考えられる。ちなみに、この第5層からは、火山灰分析（第4章第1節）の結果、ATが検出され、この層の堆積時期が、およそ二万四千年から二万五千年前と推定され、後期旧石器時代に相当する遺跡であると考えられる根拠の一つとなった。また、最下層の第8層は、約十三万年前に大山から噴出した大山松江軽石（DMP）であると推定された。

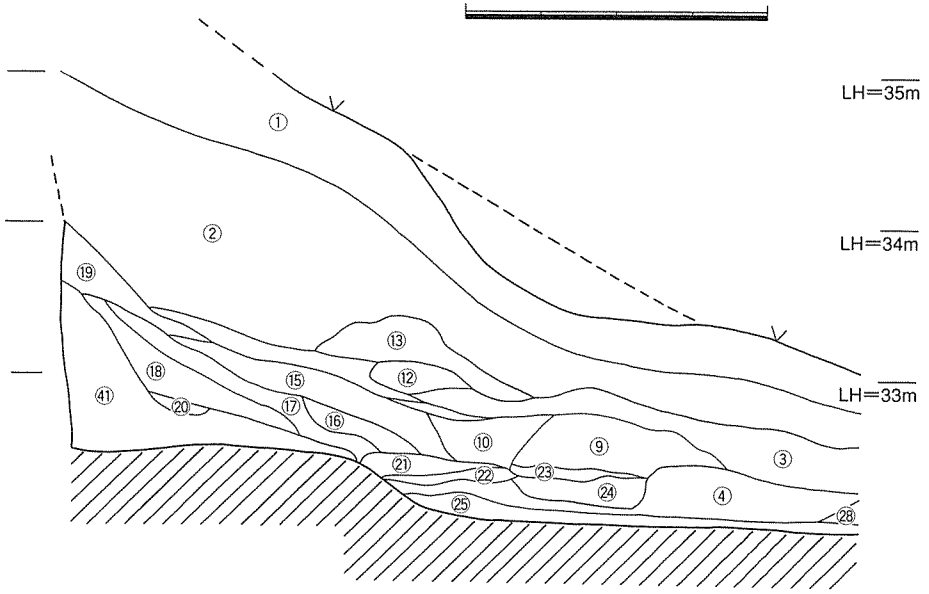
丘陵下の諏訪神社旧境内地の調査区内の堆積環境は、中世後半期において造成された平坦地が見つかり、それ以前に存在した横穴墓を削平している状況が窺えた。また、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土しており、当該期の遺構が存在した可能性が考えられる。

中世に造成された平坦地では、掘立柱建物群が軒を連ねているが、中世末から近世初頭ごろに平坦地の南側斜面に、新たに盛土をして小規模なテラスを再造成している状況が窺えた。土層には、その造成の際の盛土の痕跡が明瞭に窺えるが、こうした整地作業を行った時期を示す遺物が少なく、確実な年代を提示できる資料には恵まれなかった。



諏訪神社旧境内調査区　西断面

(S＝1：50)
0
2m



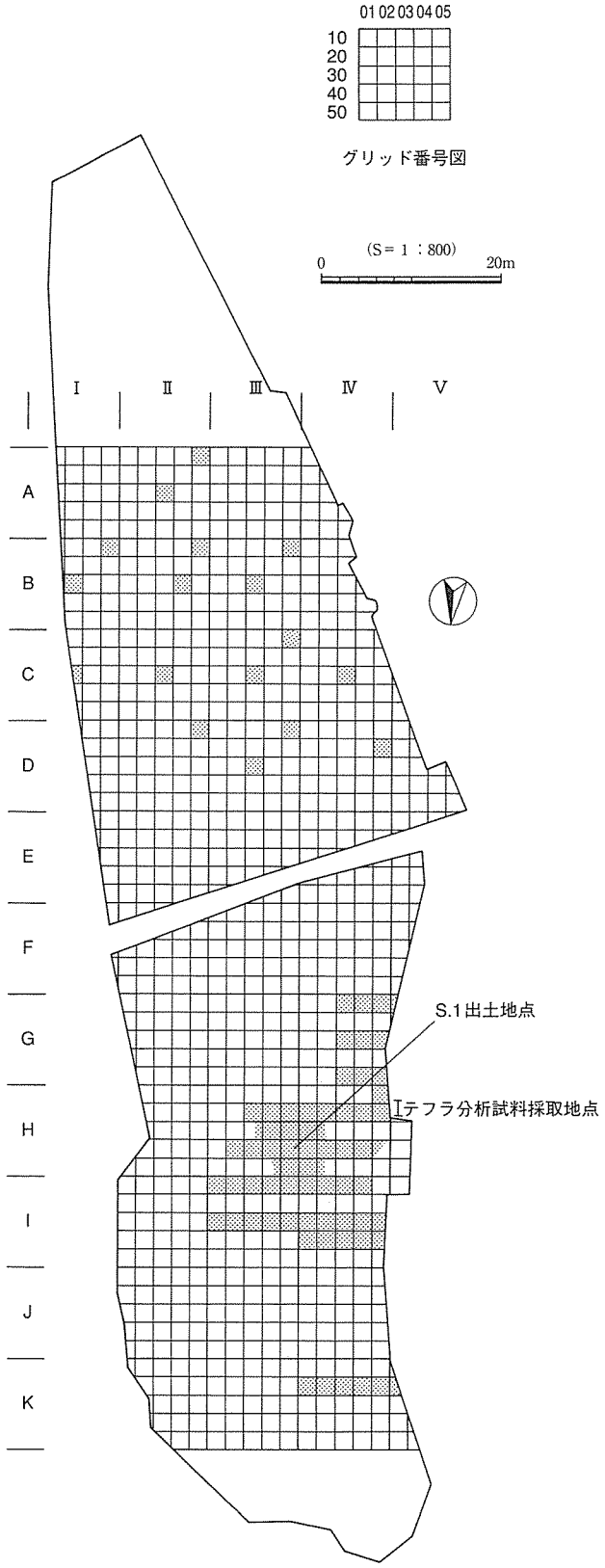
① 暗褐色土（竹根が密集している）
② 明黄灰色砂質土（地山ブロックを多く含む）
③ 淡黒灰色砂質土
④ 暗黒褐色砂質土
⑤ 明茶灰色砂質土
⑥ 明灰白色砂質土
⑦ 黒灰色砂質土
⑧ 暗褐色砂質土
⑨ 明黄灰色砂質土
⑩ 暗茶灰色砂質土
⑪ 淡褐色砂質土
⑫ 暗黄茶色土
⑬ 暗黒色土
⑭ 明白色粘質土
⑮ 淡黒灰色砂質土
⑯ 淡黒茶褐色砂質土
⑰ 暗黒色砂質土
⑱ 暗黒灰色砂質土
⑲ 暗茶色砂質土
⑳ 明灰色土
㉑ 暗黒灰色砂質土
㉒ 淡黄色ブロック土
㉓ 黄灰色ブロック土
㉔ 淡黒灰色砂質土
㉕ 灰褐色砂質土
㉖ 淡黒灰色砂質土
㉗ 明灰色砂質土
㉘ 明白色粘土
㉙ 明灰色砂質土
㉚ 淡黄灰色砂質土
㉛ 黒色砂質土
㉜ 暗灰茶色砂質土
㉝ 明茶色砂質土
㉞ 暗灰色砂質土
㉟ 暗灰色砂質土（礫を含む）
㊱ 淡黒色砂質土
㊲ 黒茶色砂質土
㊳ 明灰色砂質土
㊴ 淡黒茶色砂質土（横穴墓１）
㊵ 暗黒灰色砂質土（横穴墓１）

第８図　調査区断面図２

第３節　旧石器時代の調査

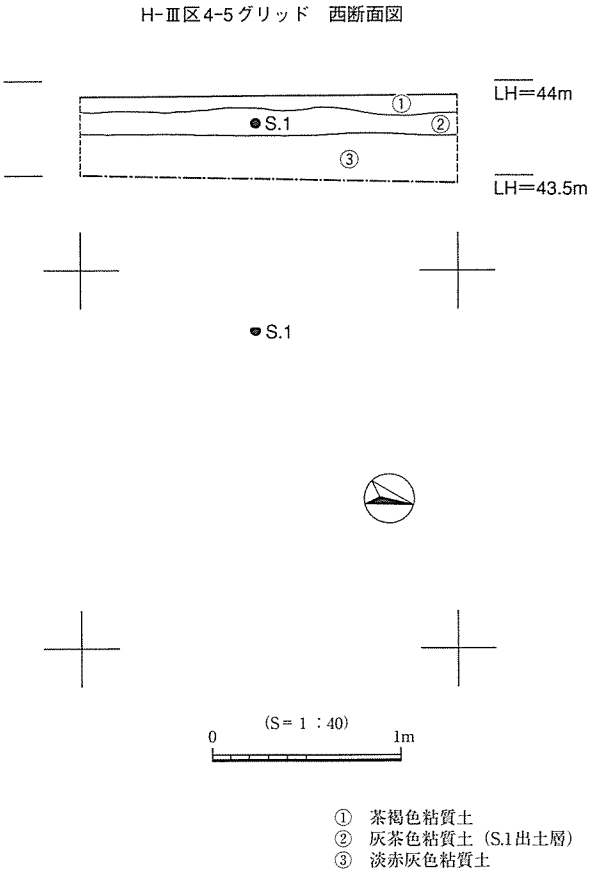
１．発見の契機

旧石器時代遺跡の発見の端緒となったのは、丘陵上の調査区の表土中より出土した遺物を洗浄していた際に、数点の鉄石英製のチップが含まれていることを確認したことによる。この時点では、調査区内に、旧石器時代から縄紋時代に相当する時期の生活跡か、弥生時代の玉作遺構が存在するものと考えられた。しかしながら、その後の調査でも玉作に関連する遺構や遺物は確認されず、縄紋時代の遺物も見つからなかったため、これまで出土していた鉄石英のチップが、旧石器時代にまで遡る可能性が考えられた。そして、調査も終盤にさしかかった頃、調査区の中央部に位置する、古墳７の北側の周溝を調査していたところ、その埋土中よりナイフ形石器（S.2）が１点出土したことから、この地点において、後期旧石器時代にまで遡る時期の遺跡が包蔵されている可能性が高



（網かけは発掘地点を示す。）

第９図　旧石器調査グリッド配置図



第10図　ナイフ形石器S.1出土地点

くなった。

2．調査の状況

旧石器時代の調査は、弥生時代の調査が終了した後に行った。まず、調査区に一辺10mの大グリッドを設定し、さらに、一辺２mの小メッシュを張り巡らせて、小グリッド単位での調査を行った。まず最初に、Ａ区からＤ区までの範囲内で、17箇所の正方形グリッドを発掘した。調査では、30cmから50cmの深さまで、ガリにて少しずつ削りながら掘り下げていったが、表土中から出土したような鉄石英製のチップの出土は全く見られなかった。

Ｇ区より北側の調査区では、古墳７の周溝埋土よりナイフ形石器（S.2）が出土しており、この地点を中心に、幅２mのトレンチを７本設定し、ガリにてローム層を少しずつ削りながら調査を行った。調査の結果、新たなチップの出土は見られなかったが、Ｈ－Ⅲ区４－５グリッドにて、地表面から深さ15cmの地点にて、ナイフ形石器（S.1）が１点出土した。この出土地点とＨ－Ⅳ区２－５グリッドの西壁のテフラ分析を古環境研究所に依頼した。（佐伯）

3．出土した遺物

諏訪西山ノ後遺跡では、計21点の石器が出土している。

このうちの２点は、後期旧石器時代後半期のものと考えられるナイフ形石器である。それ以外の石器は、全て表土掘削中に出土したものである。今回は、このうちの14点を図化した。

ナイフ形石器

S.1は、珪岩製のナイフ形石器で、Ｈ－Ⅲ区４－５グリッドの灰茶色土(ローム層)の中から出土した。

S.2も珪岩製で、古墳７の埋土中から出土した。

原位置を保っていたと考えられるのは、S.1のみであるが、２点のナイフ形石器には共通した技術的特徴が認められるので、同時期のものである可能性が高い。

素材はともに長さ５cm前後の小型の石刃で、中央に１稜を持つように剥がされている。素材面から推定できる石刃石核の形態は、S.1は単設打面で、S.2は両設打面だが、S.2も最も古い剥離面以外は主剥離面方向であり、基本的に単設打面である。側面と横断面の曲率はともに適切で、洗練された石刃剥離技術によると考えられる。S.1がより側面の曲率が強いのは、素材がより小さいからであろう。打面部の調整は頭部調整によっていることがS.2から知られる。

二次加工時には、素材の打面部を石器の基部側とし、わずかに斜位に用いる。一見すると、ともに左側縁は、連続した背部整形をもつように見えるが、素材を急角度に大きく改変して背部を形成するのは先端の３分の１から半分ほどで、基部側は調整の角度が緩かったり（１）、深度が浅かったり（２）と、素材の改変度は乏しい。右側縁は５分の２程を整形して基部を形成する。これも調整の角度はやや緩い。素材の用い方、調整の程度の小ささは、ともに素材剥片の形態に大きく規制された石器づくりの様子を示している。

整った小型の石刃にあまり手を加えることなく、先端部と片側基部の部分的な形成を主たる二次加工、もう片側基部の調整を副次的な二次加工とするナイフ形石器づくりが特徴である。

第11図　旧石器実測図

S.2には刃こぼれとみられる微細剥離が、S.1には着柄の際のものの可能性がある微細剥離が認められ、ともに完成された石器として持ち込まれたと考えられる。完成された少量の石器のみがあることと、日野川に臨む台地縁辺という本遺跡の立地を考えれば、狩場あるいは獲物の見張り場としての性格を想定することができよう。

その他の石器

その他の石器類は、19点が出土している。いずれも弥生時代以降の遺構や包含層から出土したもので、定型的な石器が含まれていないこともあり、時期は不明である。二次加工ある剥片が3点（うち2つは接合する）と、石核片が1点あり、他はすべて剥片である。石材は、16点が鉄石英を、3点が黒耀石を用い、鉄石英の比率が高い。

鉄石英製の石器類は11点を図示する。S.3は石核片で、礫面から入っていた潜在ヒビのところで割れ、破片となったため作業の全体像を知ることは難しいが、単剥離面の打面に、わずかな打面調整を施し、作業面の稜線を取り込むように小さな縦長の剥片を取っていることが読み取れる。S.4からS.12は二次加工のある剥片である。中央付近に稜線をもち側縁に刃縁を付着させる薄手のもの（S.5、S.6、S.11、S.12）と、末端に刃縁を作り出す厚手で方形のもの（S.7、S.8）の、2種類が少なくともあるようである。

黒耀石製の石器のうち2点は細片のため図化しなかった。S.14は横形剥片の一部である。あたかも、船底形細石刃核の側面から剥がされた剥片のような剥離面構成をしているが、表面の風化があまり進んでおらず、それ程古い時期のものとは考えにくい。

鉄石英製の石器類には、旧石器の可能性があると考えられる。その理由として、石器製作技術に関することでは、1）中央に稜線を持つように打点を選ぶ意識が読み取れるものがあること（S.3、S.5、S.6、S.12）、2）両縁もしくは末端に刃縁たりうる鋭い縁部を付着させるものが多いこと（S.4～S.13）、3）薄い剥片が多く石鏃などの両面調整石器の素材としては不向きであること（S.5、S.6、S.11～S.13）、4）打面部の特徴から硬質ハンマーの直接打撃を用いているようであり（S.4、S.7）、両面調整石器の製作時に出る剥片の特徴を示すものが含まれないこと、などをあげることができる。

鉄石英は在地の石材と考えられ、旧溝口町内にも産地があるとされる。しかし、黒曜石やサヌカイトが広く流通した縄紋時代以降の当地では、このような在地の石材を主体とした石器群の存在は知られていないようである。また、割り方から見ても、弥生時代の玉作に関連する遺物とは考えにくい。石材の面からも、旧石器である可能性があると考えられる。

最大の問題は、珪岩製のナイフ形石器との関係である。珪岩の剥片や砕片が出土していない一方で、鉄石英には確実な旧石器が含まれていない。また、たとえ鉄石英の石器群に旧石器的な製作技術を読み取ることができるとしても、珪岩製のナイフ形石器の製作に用いられている洗練された石刃剥離技術とは異質のものである。このことから、現時点では、両者は別の時期あるいは系統に属するものであると考えるのが妥当であろう。鉄石英製の石器群の時期や性格については、今後の類例の増加を待ちたいと思う。（高橋章司）

表１　諏訪西山ノ後遺跡出土　旧石器一覧表

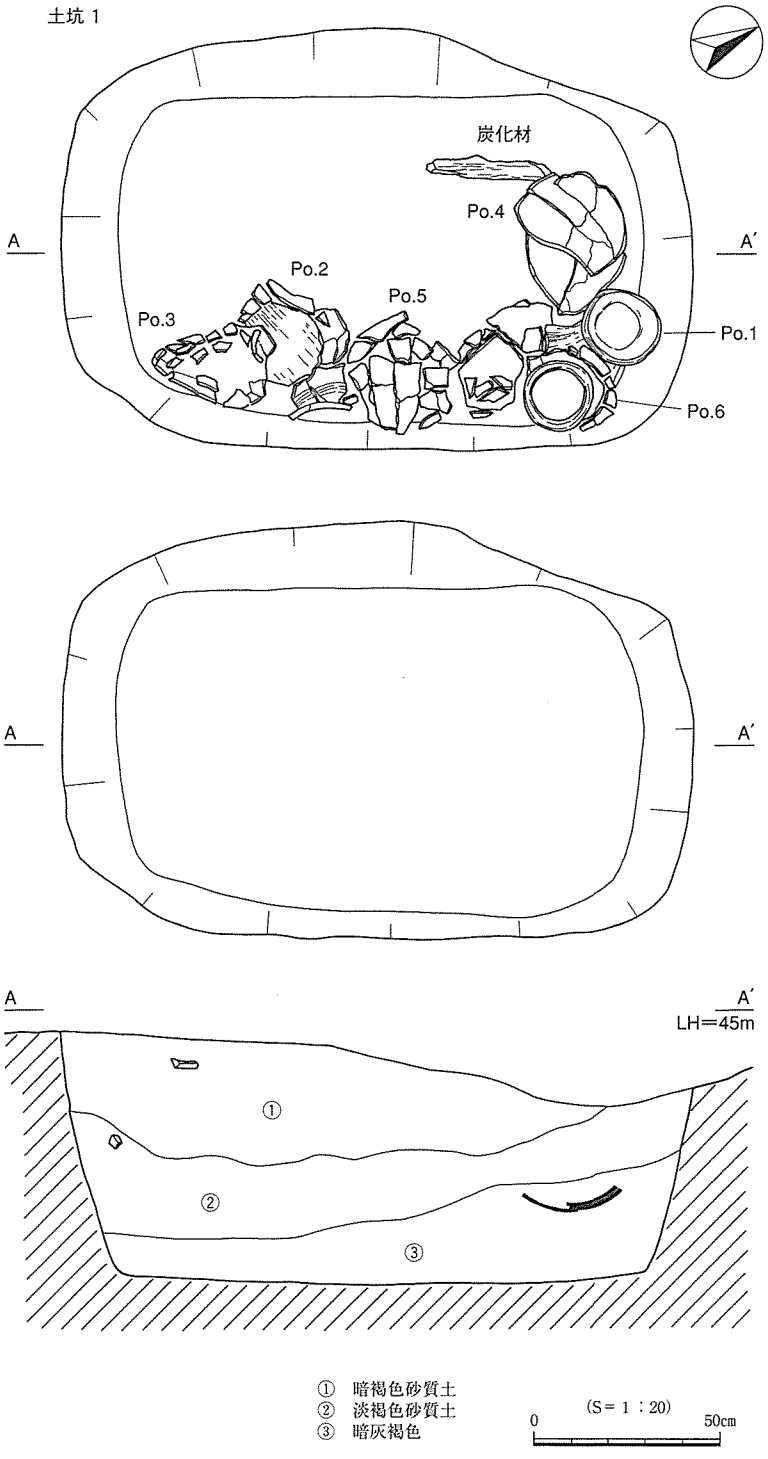
図番号	型　式	部 分	剥　離　軸			打　　面					石　　器			石 材
			長	幅	厚	型 式	幅	厚	剥離角	前面角	長	幅	刃角	
1	ナイフ形石器	完全	38.0	16.3	5.7						40.0	13.4	35	珪岩
2	ナイフ形石器	完全	39.1	17.4	4.0						39.2	15.8	25	珪岩
4	二次加工ある剥片	完全(接合)	33.2	36.5	8.2	調整	17.1	6.2	100	70				鉄石英
	二次加工ある剥片	末端	7.9	10.9	2.2	新欠損								黒耀石
9	剥片	完全	24.7	17.6	7.1	２面	16.3	6.8	115	60				鉄石英
6	剥片	完全	36.6	33.5	6.0	線状								鉄石英
5	剥片	打面部欠	36.2	25.3	6.6	折損								鉄石英
	剥片	打面部	24.9	43.2	11.5	原面	36.1	11.5	80	100				鉄石英
11	剥片	中央部	21.6	19.0	4.2	折損								鉄石英
	剥片	中央部	31.5	47.0	10.7	折損								鉄石英
13	剥片	末端部	14.9	29.3	4.4	折損								鉄石英
12	剥片	末端部	13.6	16.6	3.1	折損								鉄石英
	剥片	末端部	20.0	33.5	10.4	折損								鉄石英
	剥片	末端部	20.6	31.3	7.6	折損								鉄石英
	剥片	末端部	23.9	31.6	6.3	折損								黒耀石
10	横形剥片	完全	16.5	26.8	6.9	２面	26.8	6.9	80	85				鉄石英
7	横形剥片	完全	38.6	45.1	9.5	分割面	38.3	9.6	95	90				鉄石英
8	横形剥片	末端部	20.5	39.0	6.7	折損								鉄石英
14	横形剥片	右半部	18.2	37.1	8.0	単剥離面			105	70				黒耀石
3	石核片	右一部	27.6	22.3	17.7	単剥離面								鉄石英

第４節　弥生時代中期後半から古墳時代前期の調査（集落）

弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺構は、丘陵部の調査区全域において、土坑、竪穴住居、掘立柱建物、溝状遺構などが見つかっている。

弥生時代の集落の開始期は、貯蔵穴と見られる土坑１が作られる弥生時代中期後半と考えられるが、それに伴う竪穴住居や掘立柱建物は確認できなかった。それに続く後期初頭より、竪穴住居が作られ始め、弥生時代終末期から古墳時代前期まで継続する。竪穴住居には、直径が８mを超える大形のものが複数棟存在し、焼失した住居も多く認められるなど、一般の集落とはやや異なる様相も見られる。

掘立柱建物については、出土遺物が少なく、明確な時期を示せないが、弥生時代後期から古墳時代前期に属するものと考え、本節において掲載している。

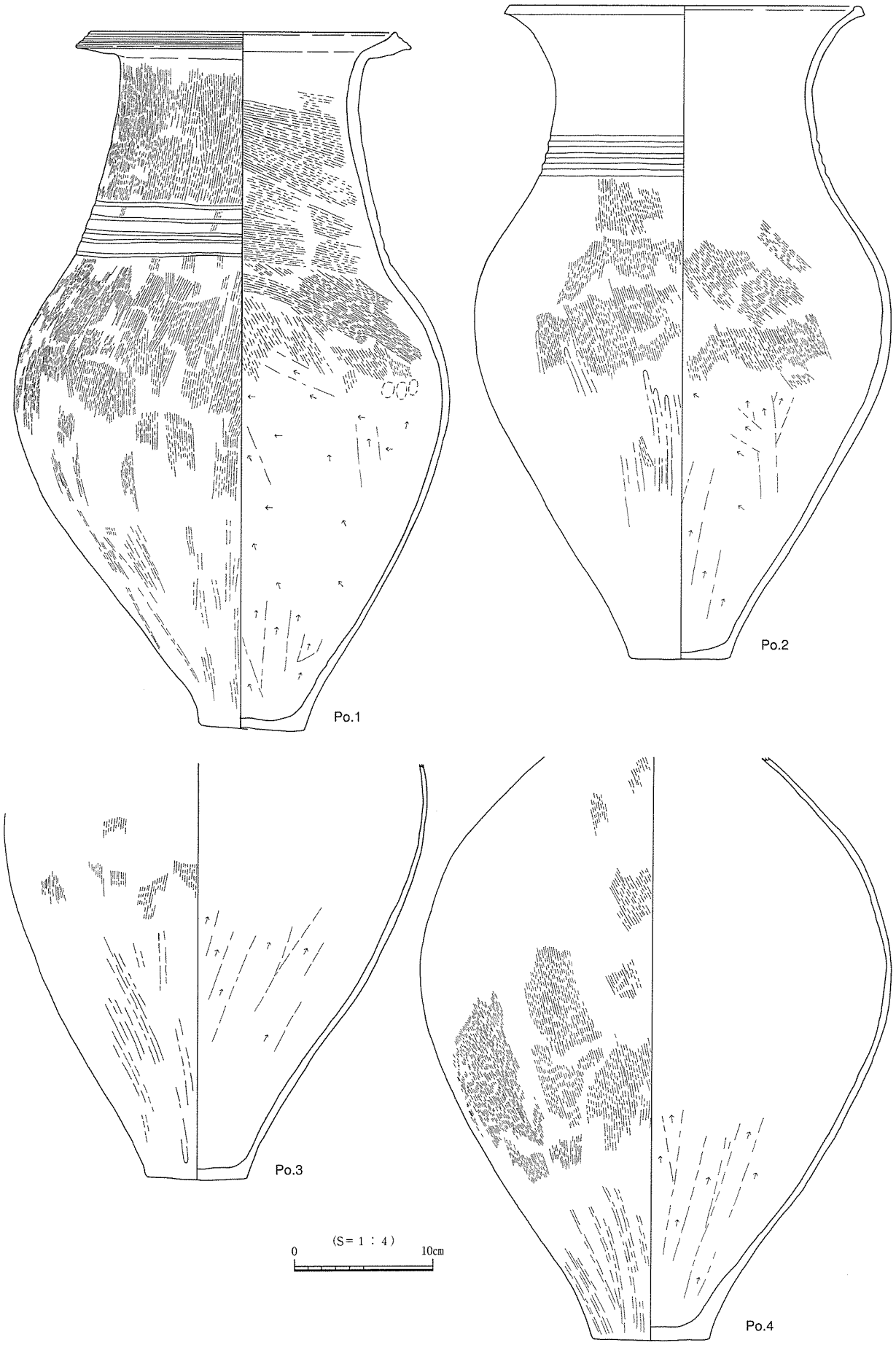


第12図　土坑１　遺構図

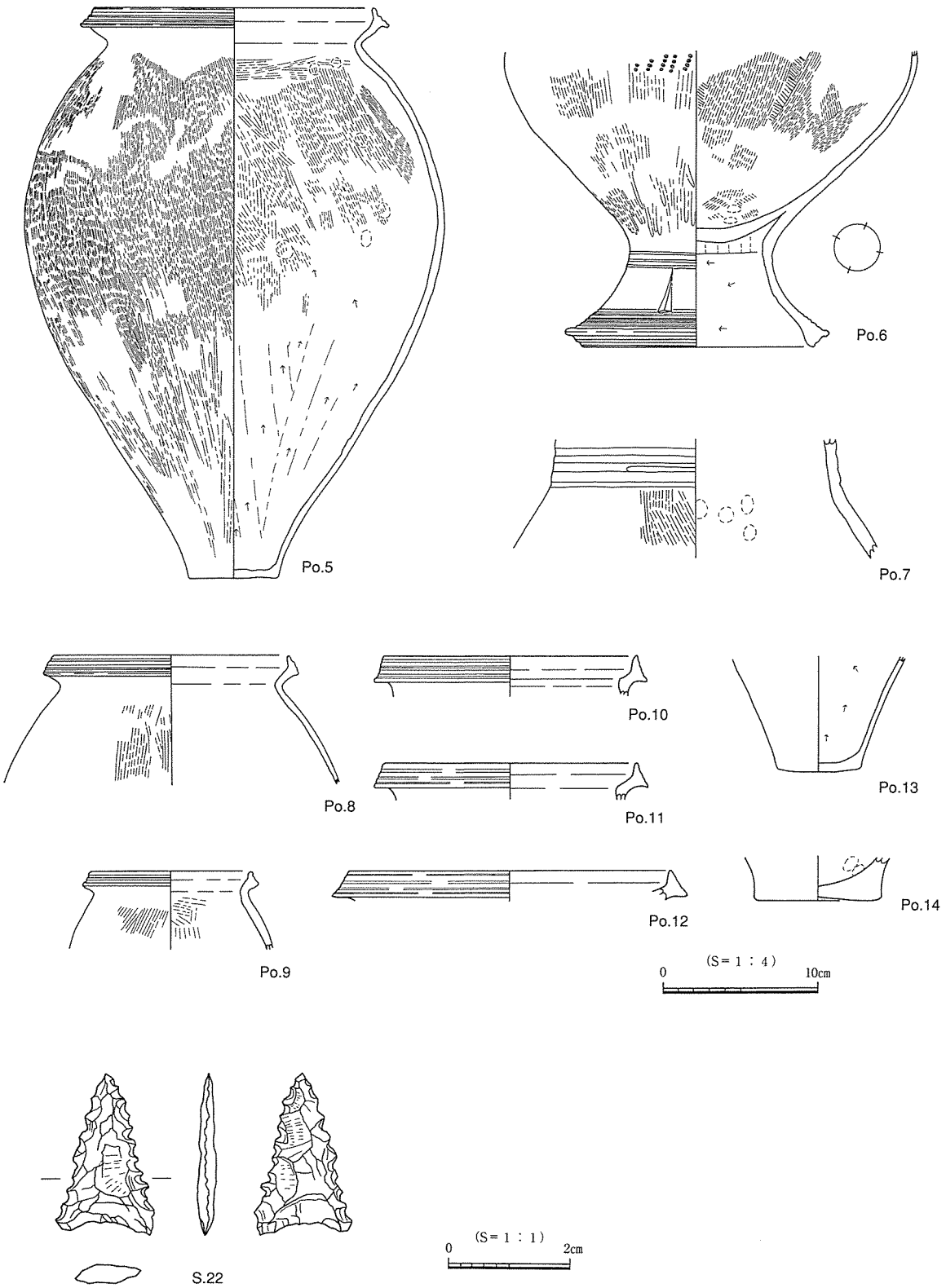
１．土坑

土坑１（第12～14図）

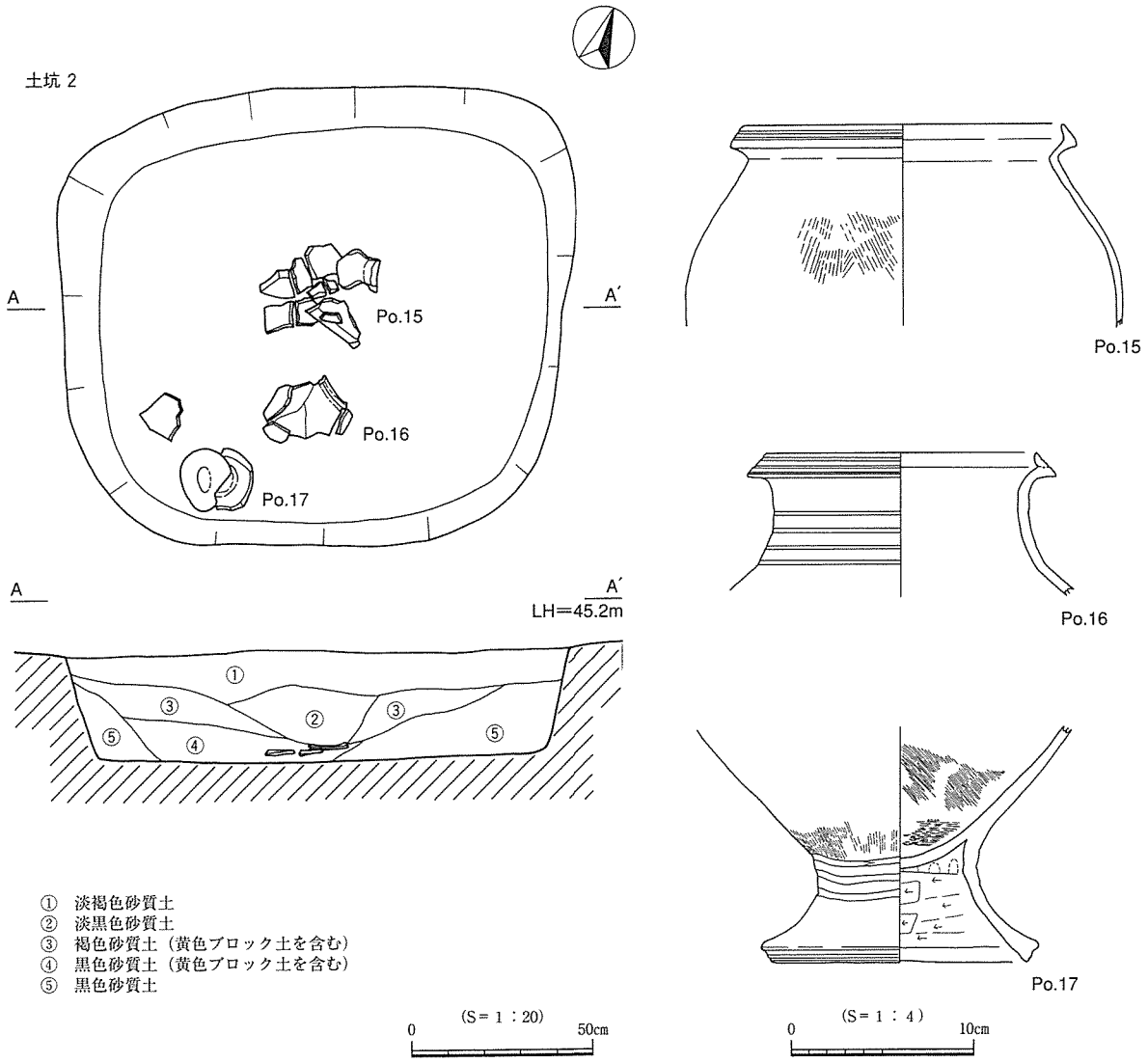
Ｗ－３区の西端部において検出した平面形が隅丸の長方形を呈する土坑である。規模は、長辺が1.7m、短辺が1.1m、深さ0.65mである。土坑の南側下層より壺４点、台付壺１点、甕１点が出土した。また、北側の底面より、棒状の炭化材が出土したが、風化が著しく取り上げることが出来なかった。遺構の掘削中に土器片と石鏃が１点出土した。土坑の形態的な特徴から、貯蔵穴と見られる。時期については、出土した遺物から、弥生時代中期後半のものと考えられる。



第13図　土坑１　出土遺物図１



第14図　土坑１　出土遺物図２



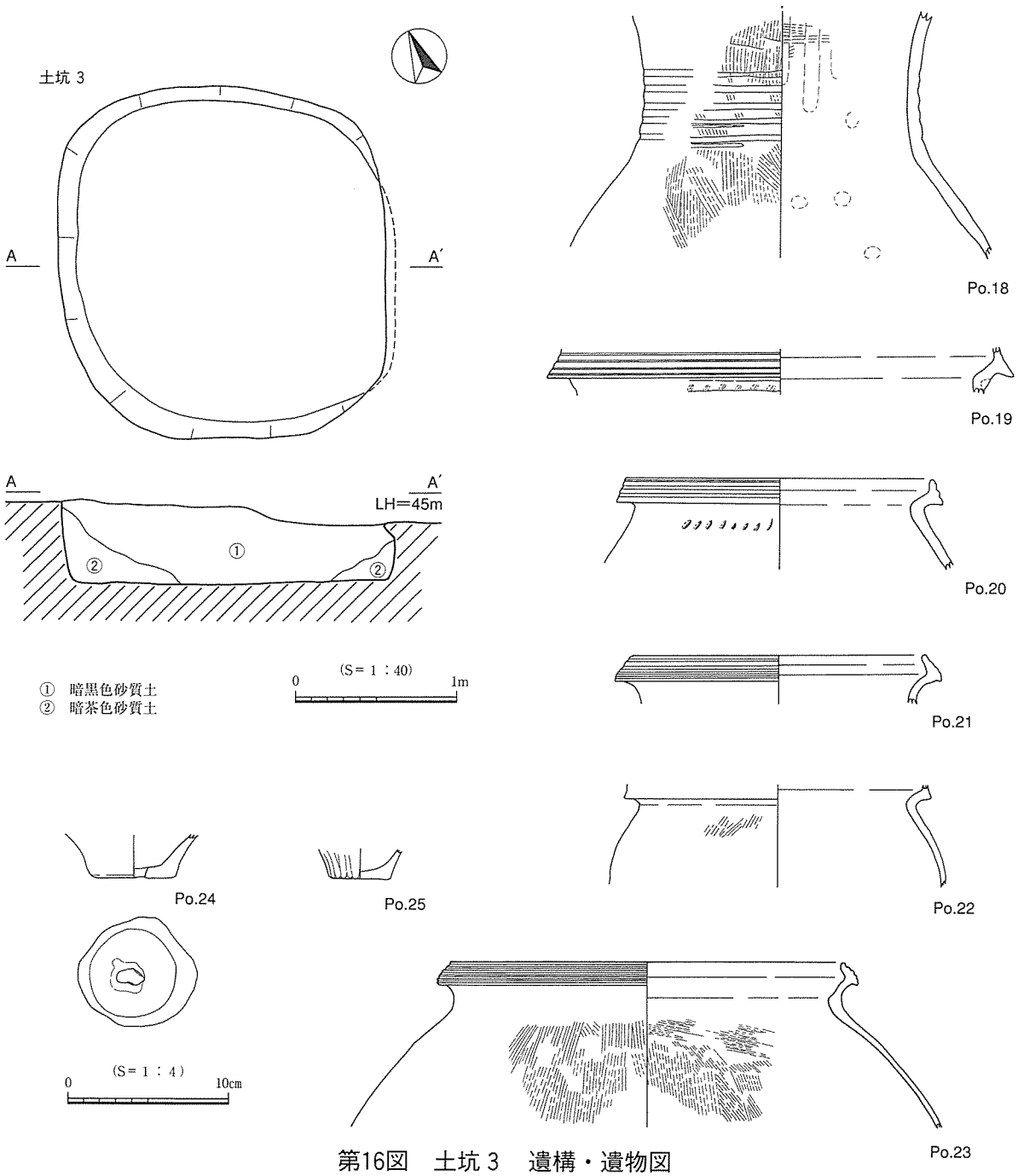
第15図　土坑２　遺構・遺物図

土坑２（第15図）

W－４区の東南部で検出した平面形が隅丸方形を呈する土坑である。長辺が1.4m、短辺が1.3m、現存する深さは0.3mである。遺物は、底面付近から甕と台付壺が出土している。土坑の形態的な特徴から、貯蔵穴と見られる。出土した遺物から、この遺構の時期は、弥生時代中期後半のものと考えられる。

土坑３（第16図）

W－２区の北西部で検出した、平面形が隅丸方形を呈する土坑である。規模は、長辺が1.1m、短辺が１mで、現存する深さは0.5mである。南東部の壁面がオーバーハングしており、袋状の土坑であったものと考えられる。遺物は、壺、甕の破片が出土している。土坑の形態的な特徴から、貯蔵穴と見られる。この遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後半のものと考えられる。



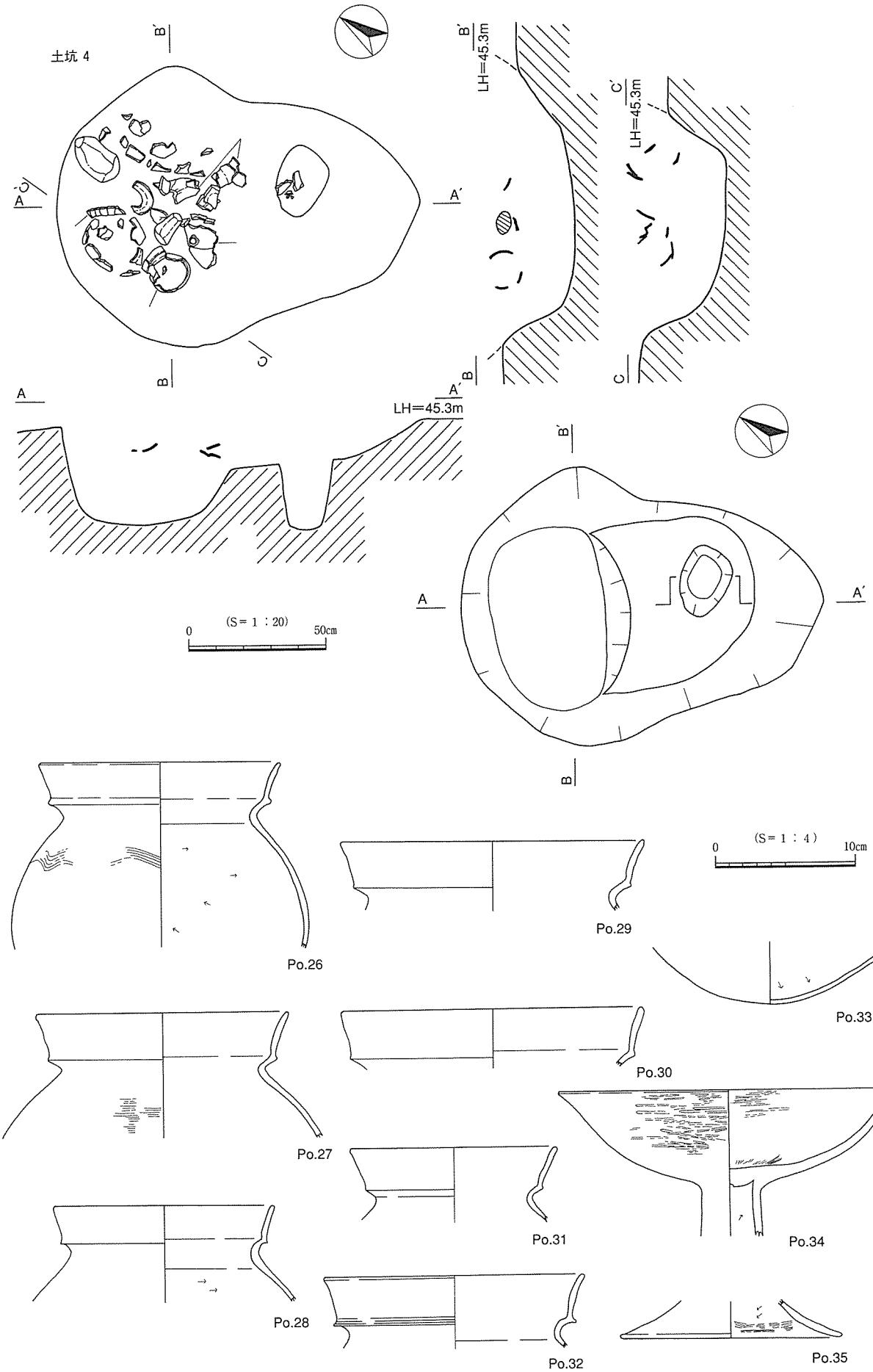
第16図　土坑３　遺構・遺物図

土坑４（第17図）

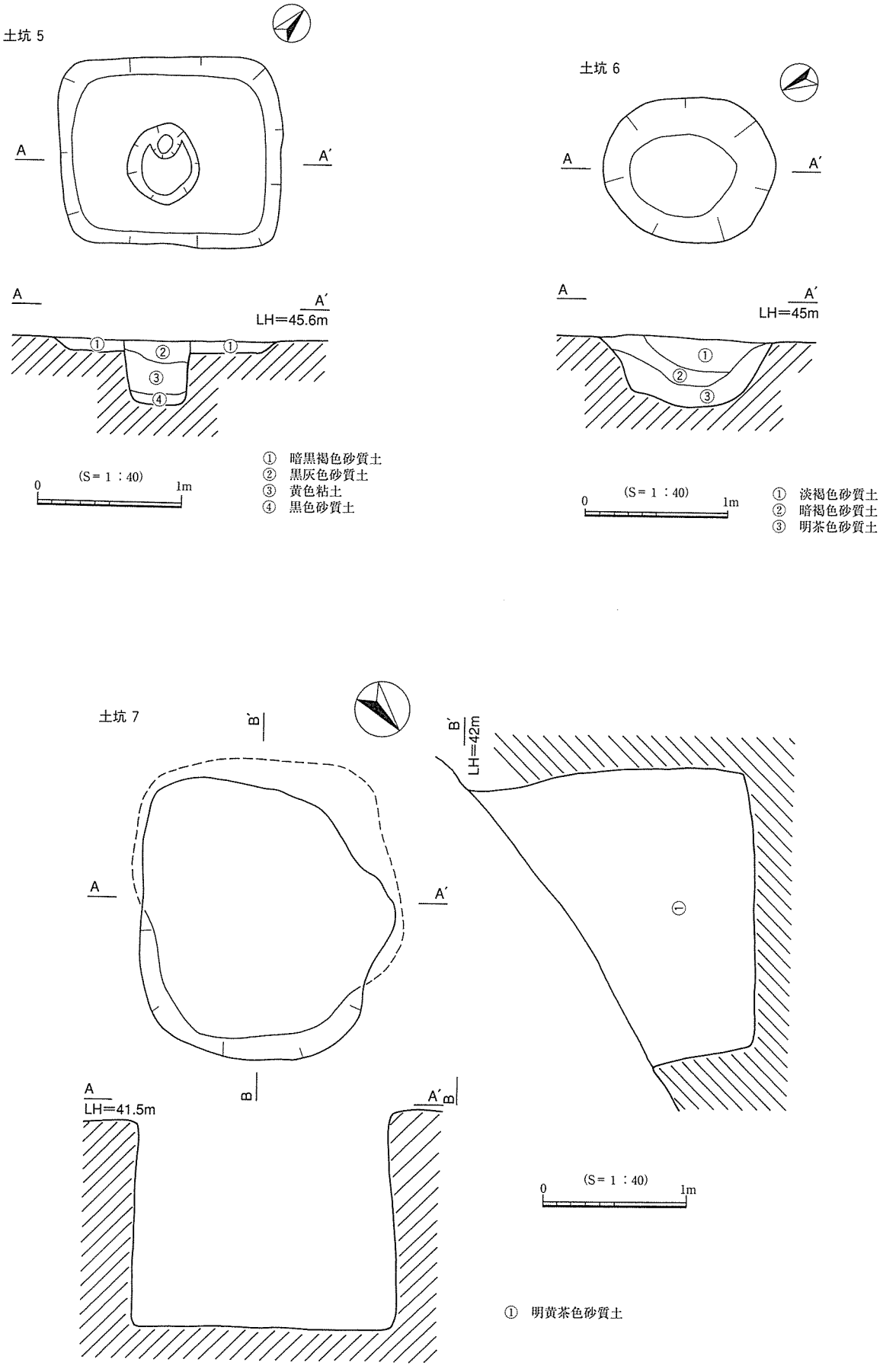
Ｗ－２区、竪穴住居４の北西約３mの地点で検出した、不整円形の土坑である。長辺が1.3m、短辺が１m、深さは0.4mで、北側に向かって段状を呈する。土坑の南側は、時期不明のピットを切っている。遺物は、土坑の上層から甕と高坏がまとまって出土している。遺構の性格は不明であるが、貯蔵穴の他に廃棄土坑の可能性も考えられる。この遺構の時期は、出土した遺物から青木Ⅴ・Ⅵ期と見られる。

土坑５（第18図）

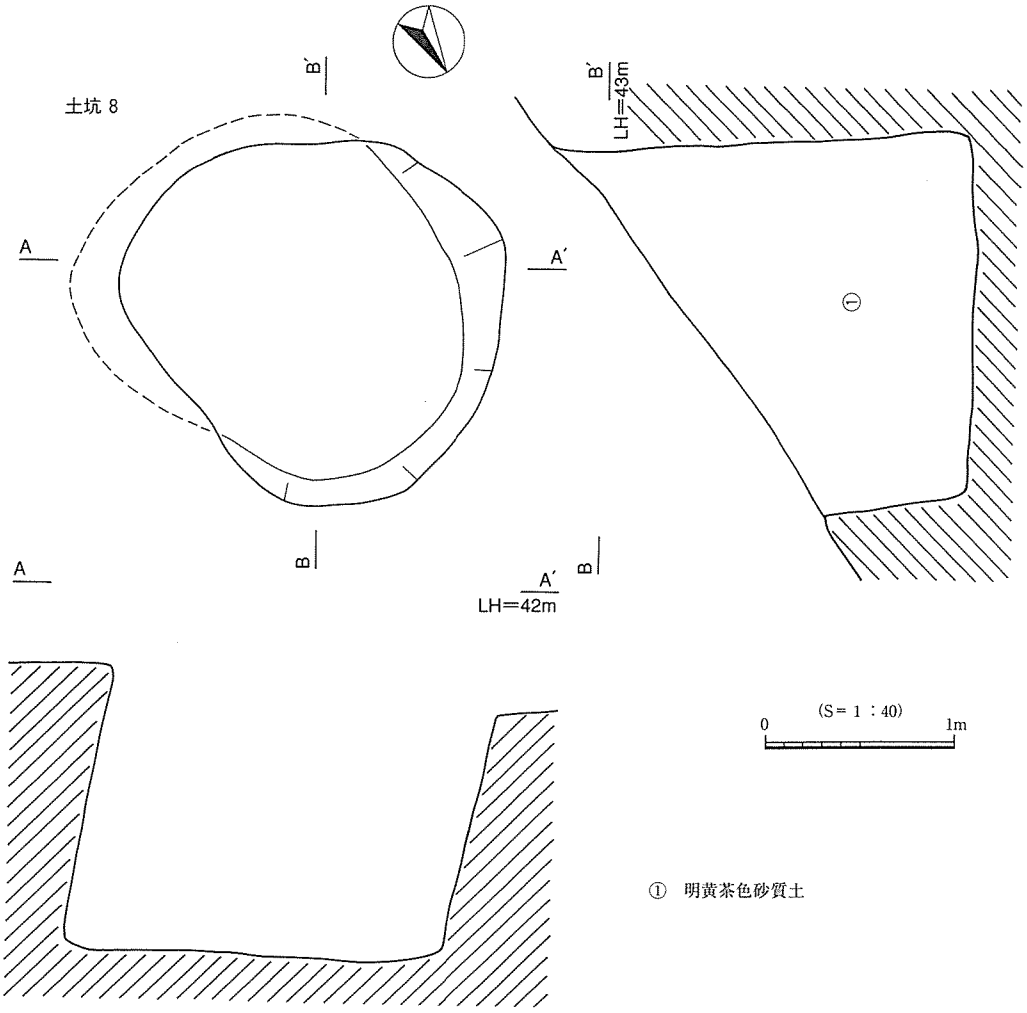
Ｅ－３区の古墳１の墳丘部で検出した、浅い方形の土坑である。遺構の中央部を掘立柱建物11の柱穴に切られている。長辺が1.5m、短辺が1.3m、現存する深さは0.1mである。遺構の性格については不明であるが、先述した土坑２のような貯蔵穴の可能性も考えられるが、断定は出来ない。遺構内からの出土遺物は無く、時期は不明であるが、掘立柱建物11に先行するものと考えられる。



第17図　土坑 4　遺構・遺物図



第18図　土坑５～７　遺構図



第19図　土坑８　遺構図

土坑６（第18図）

Ｗ－３区の土坑１の東側で検出した円形の土坑である。長径が1.2m、短径が１m、深さは0.5mである。遺構内からの出土遺物は無く、時期は不明である。

土坑７（第18図）

Ｅ－７区の南部、溝状遺構１の斜面で検出した、直径1.8m程度の大形土坑である。遺構の北側は、溝状遺構１によって切られている。当初の深さは不明であるが、現状でも２mもの深さがある。埋土は、明黄茶色の砂質土であり、ローム層の土と類似している。出土遺物は無く、時期は不明であるが、溝状遺構１に先行するものと考えられる。

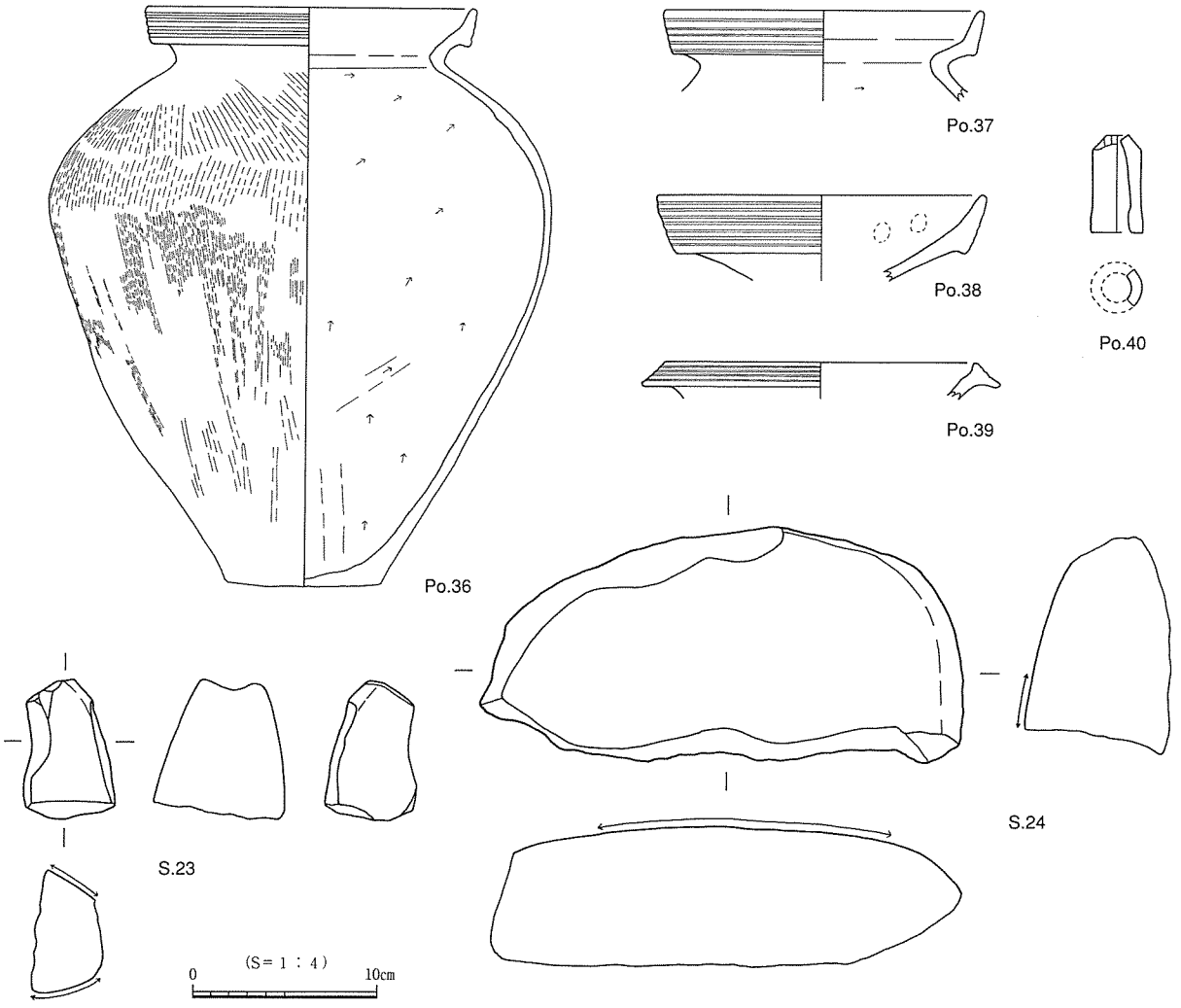
土坑８（第19図）

土坑７の北西部に隣接する、直径２m程度の大形土坑である。埋土は、土坑７と同様の埋土であり、同時期に埋め戻された可能性が高いものと考えられる。土坑内部からの出土遺物は無く、時期は不明であるが、溝状遺構１に先行するものと考えられる。遺構の性格については不明であるが、土坑７とともに大形の貯蔵穴の可能性も考えられるが、断定する根拠に乏しい。

2．竪穴住居跡

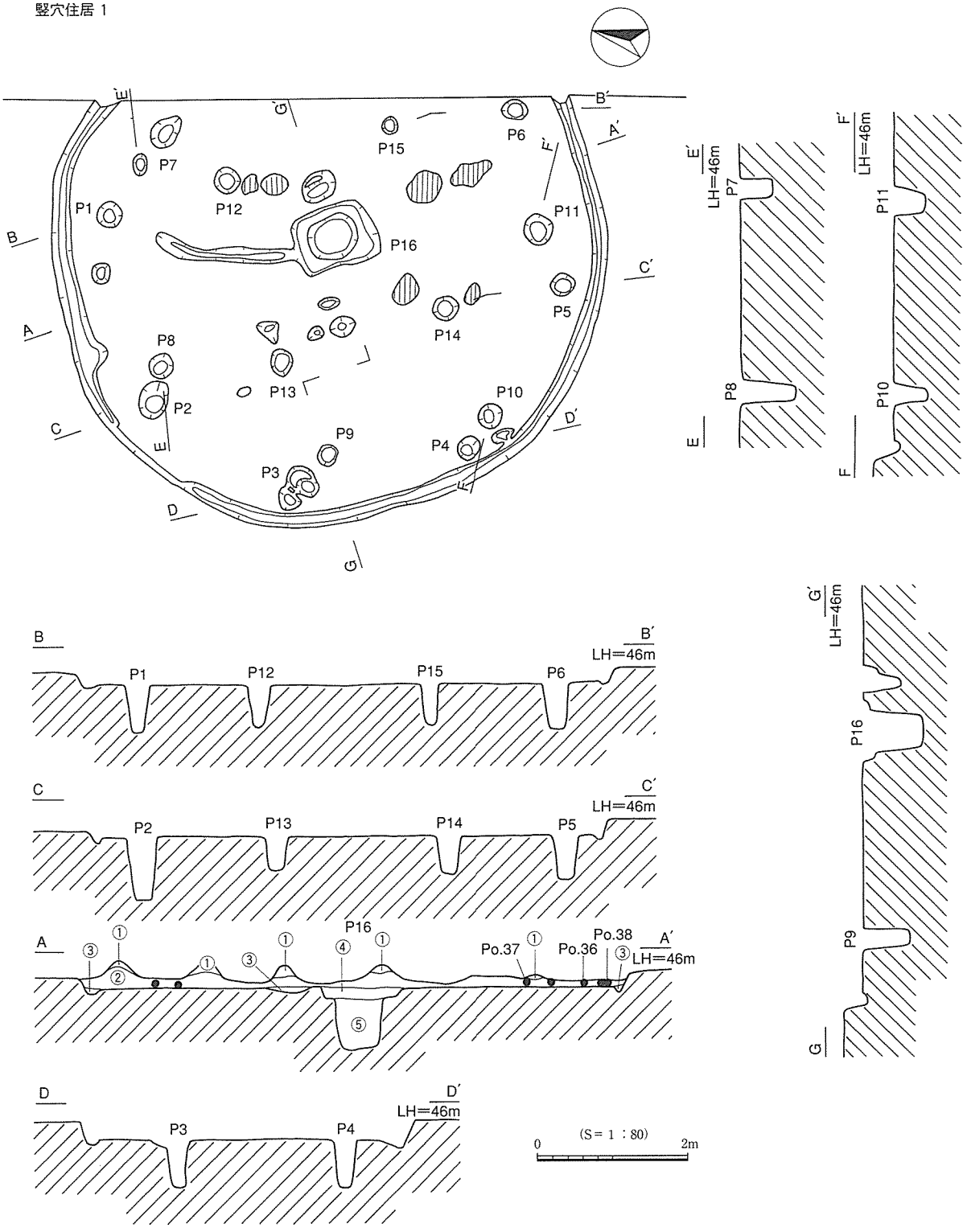
竪穴住居１（第20～22図）

Ｅ－２区の東側において検出した円形の竪穴住居である。遺構の東側が調査区外にのびるため、全形は把握できないが、概ね直径は7.2m、深さ15cmで、中央ピットとそれに続く溝が伸びる。主柱穴は中央ピットの周りに４基、住居の壁面付近に６基以上と推測される。また、柱穴の配列から、建替が行われているものと考えられる。建替の前後関係は、完形品の甕Po.36が、古段階の柱穴上面から出土したことから推測した。中央ピットは、検出面で長辺１m、短辺80cmの長方形を呈し、底部は、直径50cm程度の円形である。中央ピットの深さは約80cmである。また、本住居の北側において、焼土と炭化材の分布が見られたことから、上屋の一部が焼失しているものと考えられる。焼土の分布状況は、住居の北側、３m×１mの範囲に集中し、20cm程度の厚さがあった。炭化材は、床面に分布しているもののほか、W4のように焼土の上面で検出されたものもあった。出土遺物は、埋土中から甕（Po.36、37）、高坏（Po.38）、壺（Po.39）、土錘（Po.40）などが出土している。このうち、完形で出土した甕（Po.36）は、床面直上に口縁を下に伏せた状態で置かれていた。この住居の時期は、出土遺物から、弥生時代後期中葉に相当するものと考えられる。



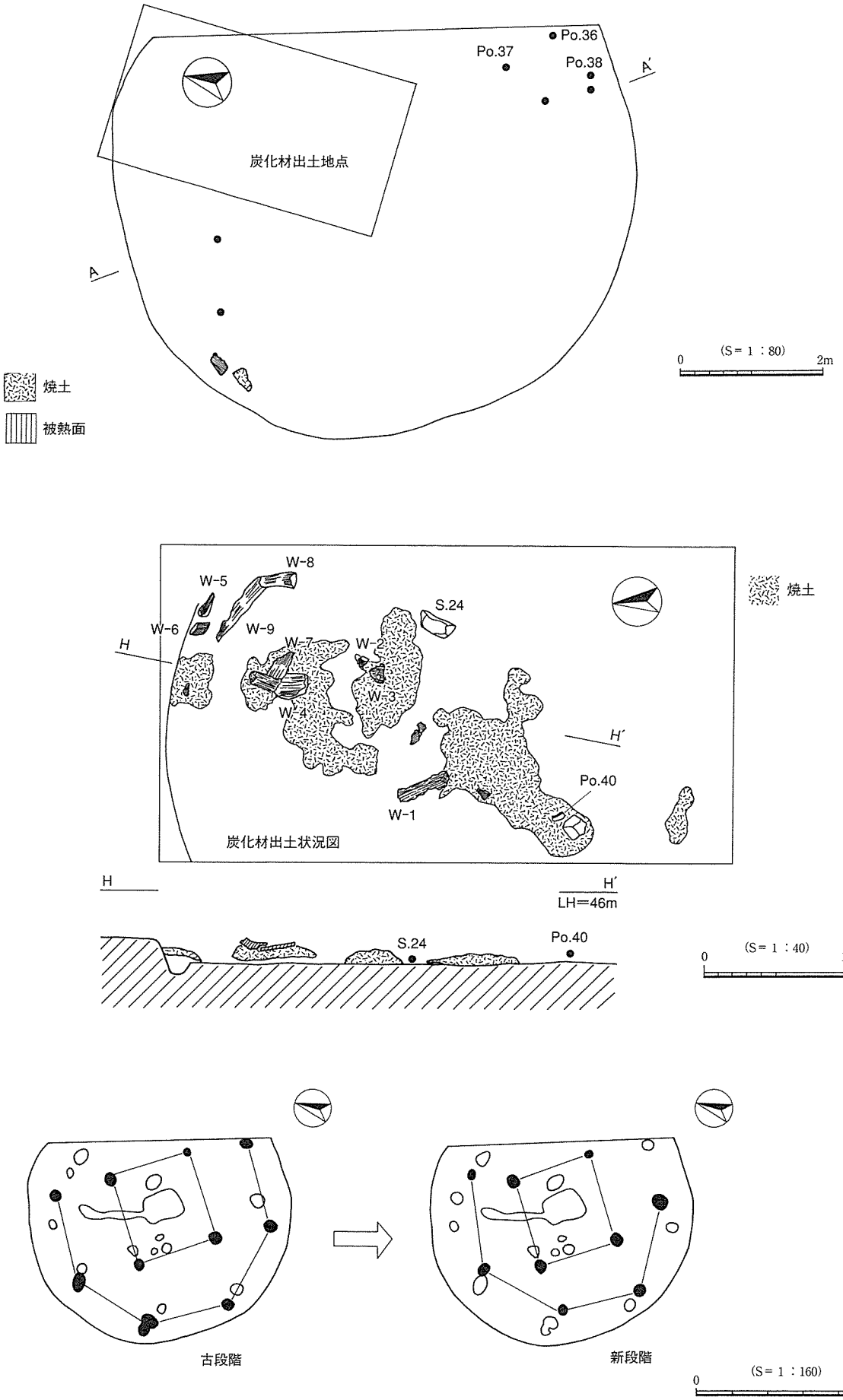
第20図　竪穴住居１　遺物図

竪穴住居 1

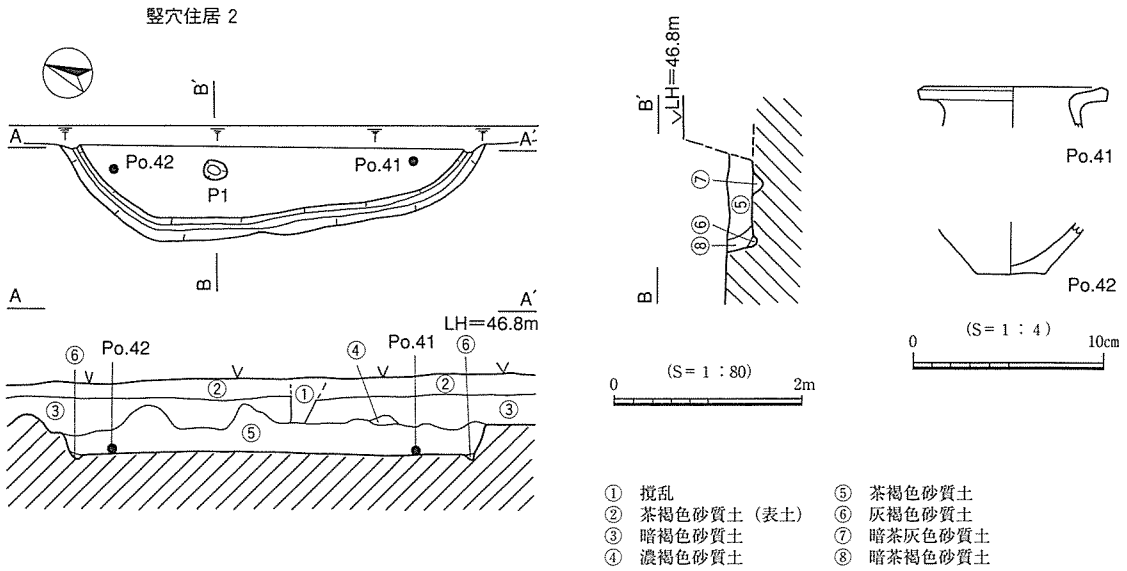


① 表土
② 暗褐色砂質土（炭を多く含む。）
③ 淡黒色砂質土
④ 暗灰色砂質土
⑤ 黒色砂質土（黄色ブロック土を含む。）

第21図　竪穴住居 1　遺構図



第22図　竪穴住居１　焼土、炭化材出土状況図



第23図　竪穴住居２　遺構・遺物図

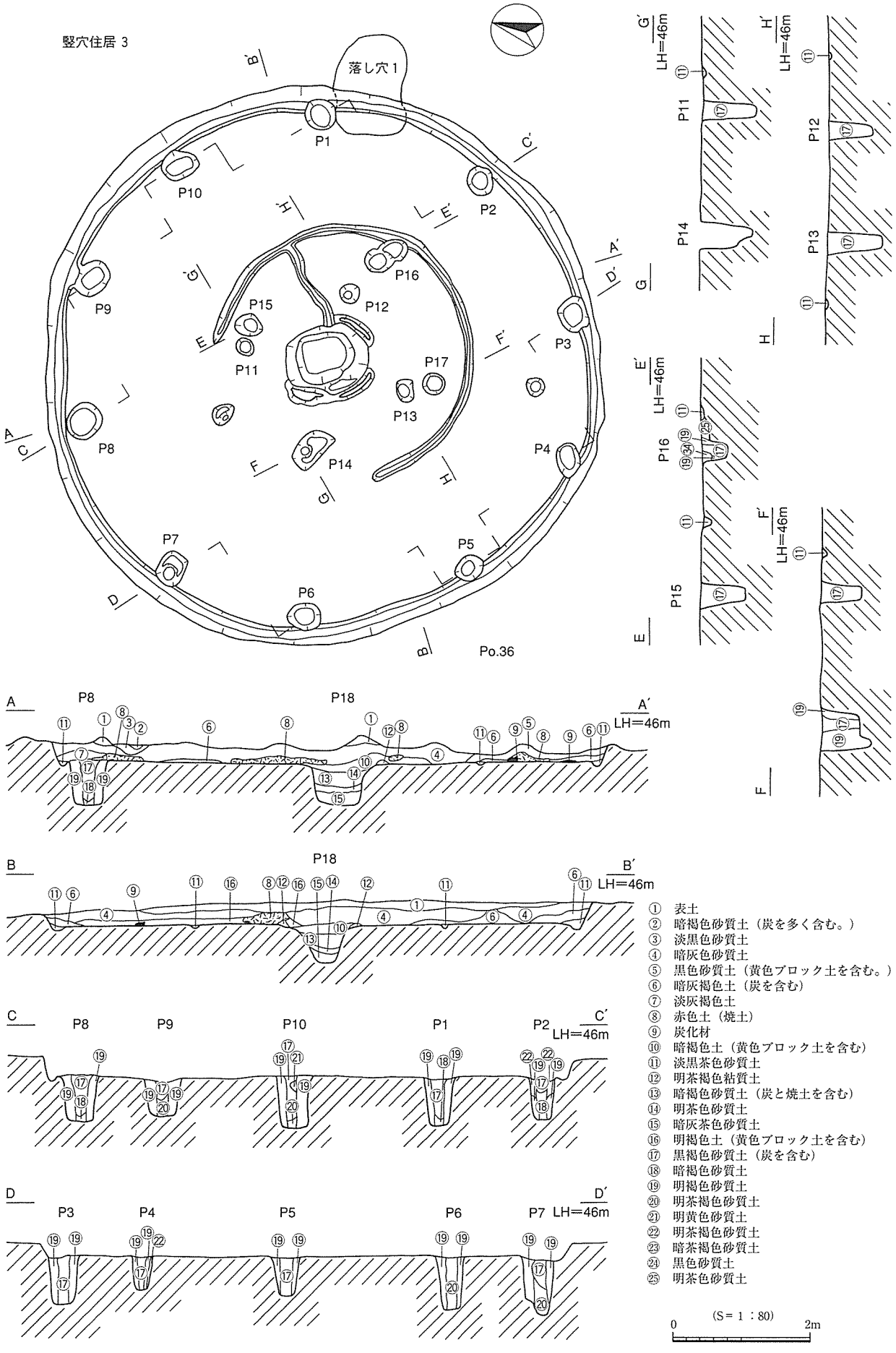
竪穴住居２（第23図）

Ｅ－２区の東側において検出した竪穴住居である。遺構の大半が調査区外に伸びるため、全形については不明であるが、隅丸方形の住居と考えられる。規模は、一辺が４ｍを超えるもので、深さ40cm程が残存している。住居内からは、ピットを一基検出しているが、直径20cm、深さが10cm程度と規模が小さく、主柱穴とはならないものと考えられる。出土遺物は、床面から壺の口縁部片（Po.41）が出土している。この遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期末から古墳時代前期前葉のものと考えられる。

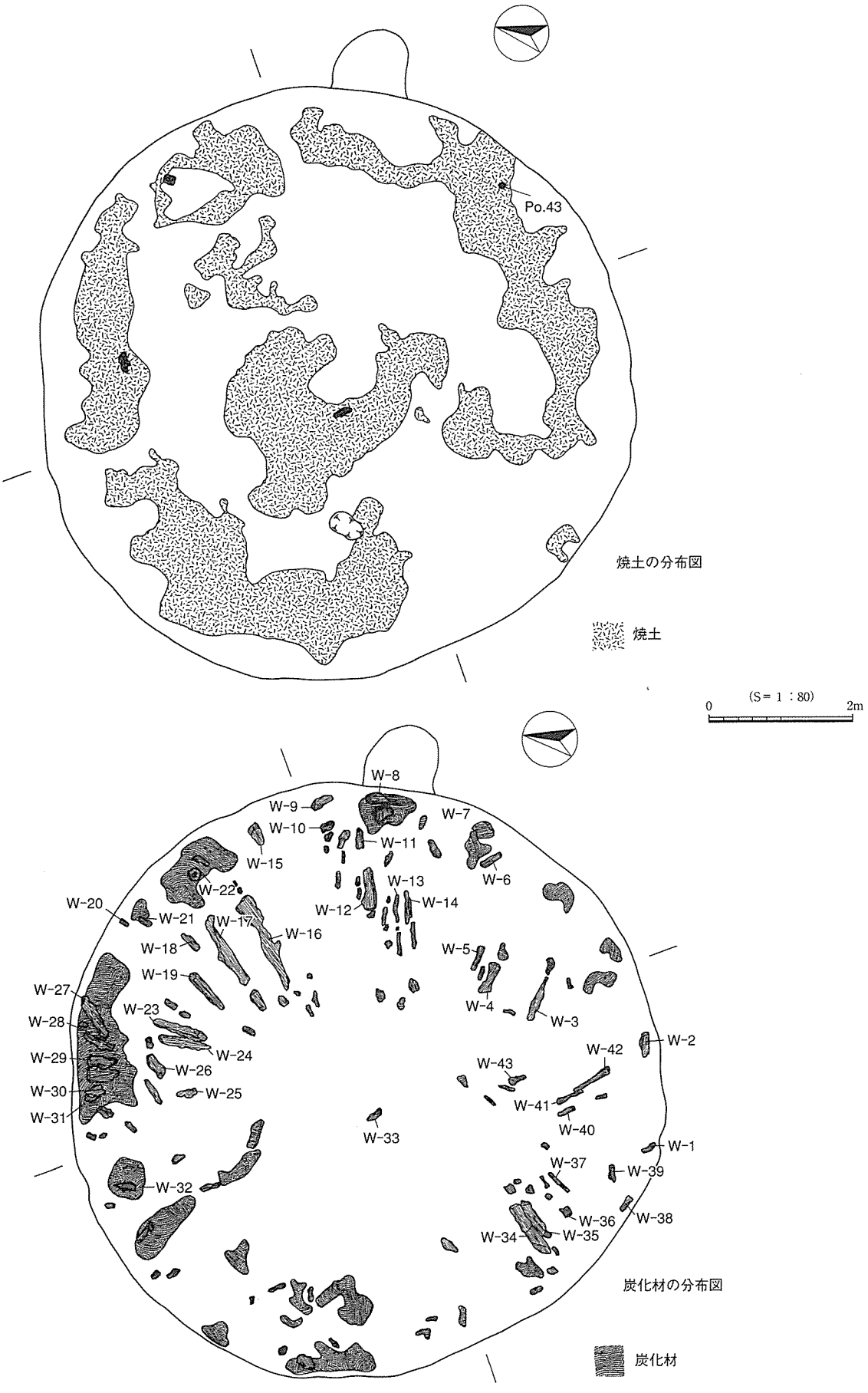
竪穴住居３（第24～26図）

Ｅ－１区で検出した円形の竪穴住居である。本遺構は、焼失した竪穴住居であり、検出面において、焼土、炭化材の分布が顕著に見られる。規模は、直径が8.2m、残存する深さは、東側が30cm、西側が20cmである。柱穴と見られるピットは、壁面寄りに10基、中央ピットの周囲に８基見られ、中央ピット寄りの柱穴は、切り合いがないため前後関係が不明であるが、建替によるものと考えられる。柱穴は、直径が30cmから50cm、深さ50cmから80cm程度で、ほぼ全ての柱穴の底面で柱当たりの痕跡を留めていた。柱痕跡から、直径15cmから20cm程度の丸い木材が柱として使用されていたものと考えられる。壁溝は、幅10cmから15cmで、深さ10cmである。住居の中央を「Ｃ」字状に半周する溝は、幅10cm、深さ５cmから10cm程度と、壁溝よりも浅い。また、この溝は中央ピットへと繋がっている。中央ピットは、長辺1.2m、短辺0.8m、深さ50cmで、周囲を土手状に10cmほど盛り上げている。

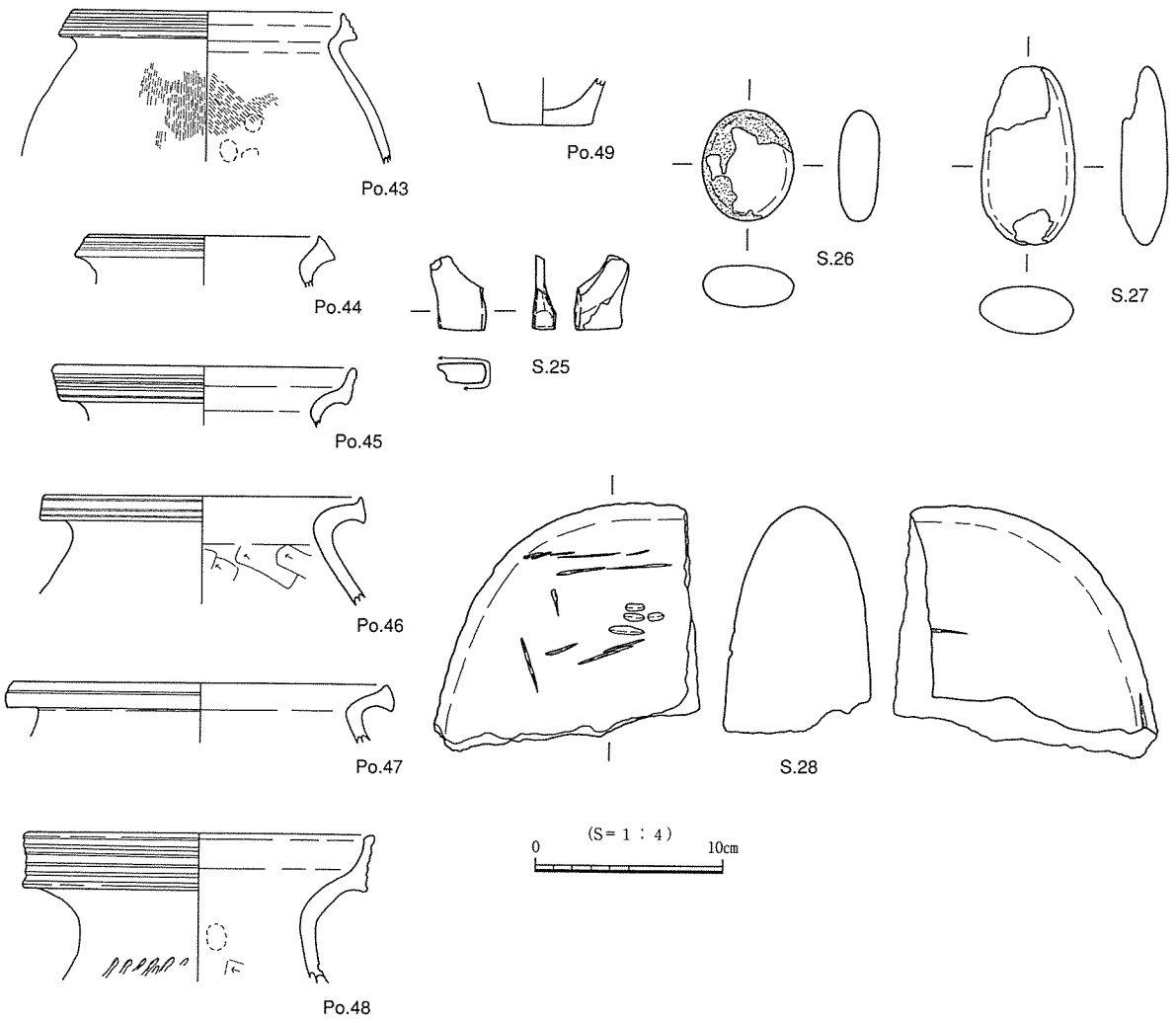
焼失に伴い堆積した焼土は、ドーナツ状に分布し、中央部にも厚く堆積している。炭化材は、焼土の下層、床面の直上から検出した。出土状況から、北側に板状の垂木材が中央に向かって倒れこんでいる状況が窺われた。東側では、棒状の垂木材が放射状に分布している。西側では炭化材の保存状態は悪く、形状をとどめるものは少なかった。また垂木材の周囲からは、炭化したカヤ状の植物繊維が認められた。そのほか柱材、梁材については、現地での観察では確定できなかった。出土遺物は、埋土中から内面をハケ調整する甕（Po.43）、壺、砥石などが出土している。この竪穴住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期前葉頃のものであると考えられる。



第24図　竪穴住居 3　遺構図



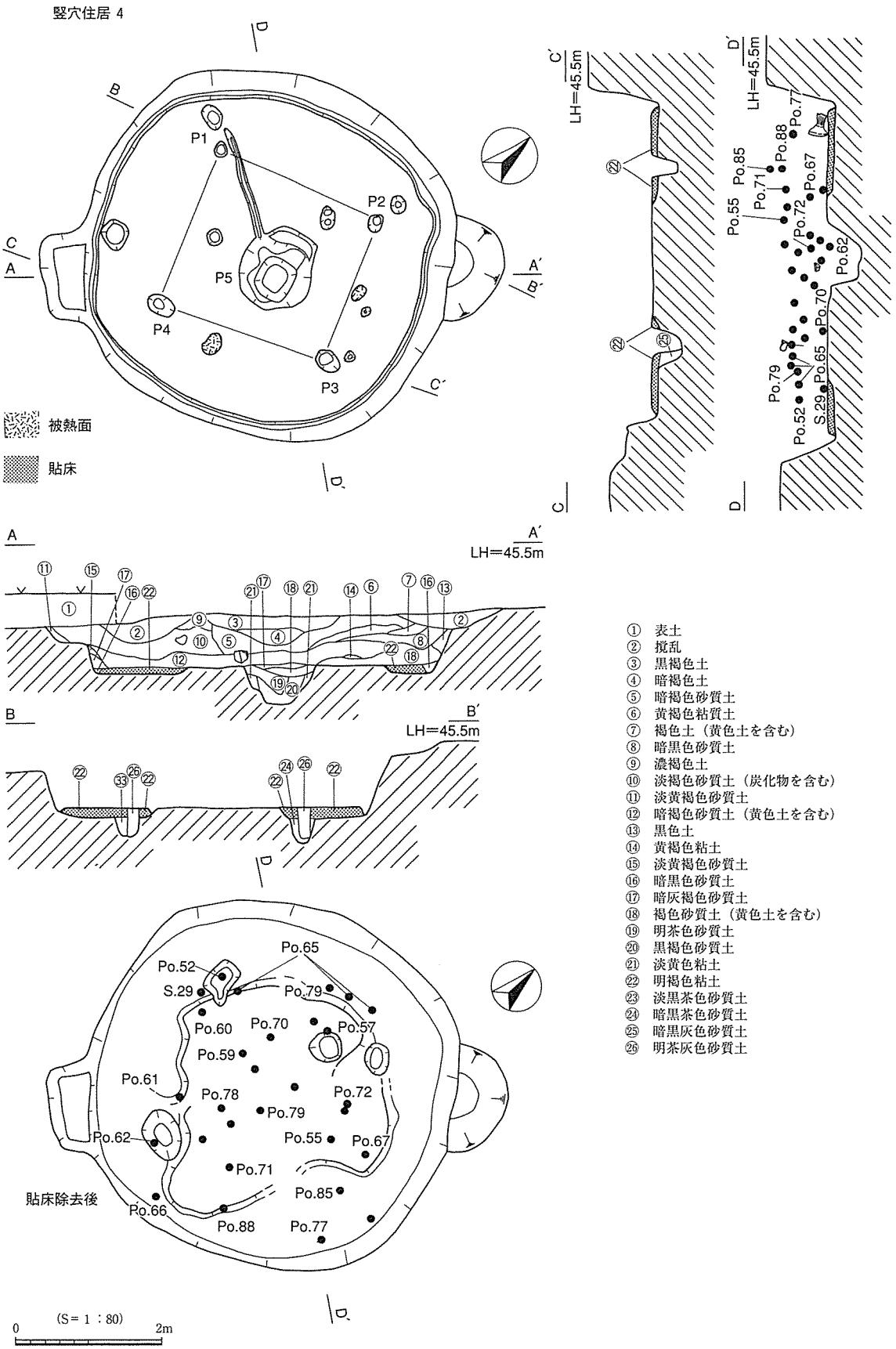
第25図　竪穴住居３　焼土、炭化材出土状況図



第26図　竪穴住居３　遺物図

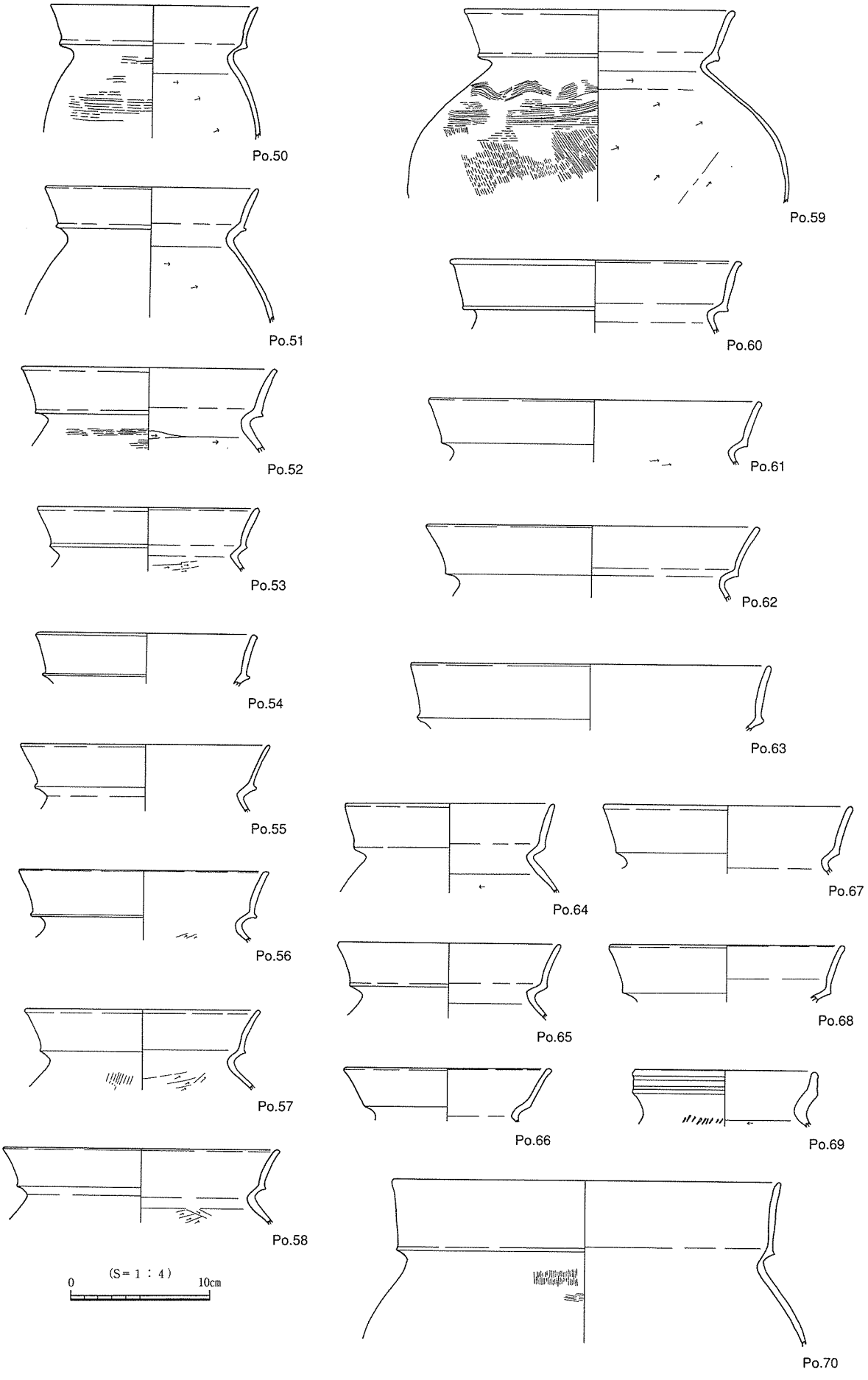
竪穴住居４（第27～30図）

Ｗ－２区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。南西側に突出部を持ち、住居の床面から40cm程の段差がつけられている。恐らく住居への出入りに使われた階段と考えられる。直径が約５m、残存する深さは東側で90cmと、この集落内で最も深い。壁溝は全周し、幅15cm、深さ10cmである。主柱穴は４基で、中央ピットと壁溝へと伸びる溝を持つ。柱穴は、15cmから30cmで、深さは40cm程度である。中央ピットは、検出面が長方形をなし、長辺が1.2m、短辺が１m、深さは50cmである。床面は、中心部を残して10cm程度の深さにドーナツ状に掘り窪められ、明褐色の粘土が貼床状に敷かれている。この貼床の上面に２箇所の被熱面が残る。出土遺物は、埋土中から細片化した土器の破片が多量に出土しており、住居を埋め戻す際に投棄されたものと考えられる。器種は、甕（Po.50～70）、壺（Po.71～75）、高坏（Po.76、77）、台付壺（Po.78）、台付鉢（Po.79）、低脚坏（Po.82、84）、器台（Po.85～87）、有溝石錘（S.29）、器種不明鉄器（F.1、F.2）などが出土している。また、大形の器台として図化した土器（Po.87）は、甑形土器の口縁部の可能性も考えられる。この住居の埋没時期は、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉に相当するものと考えられる。

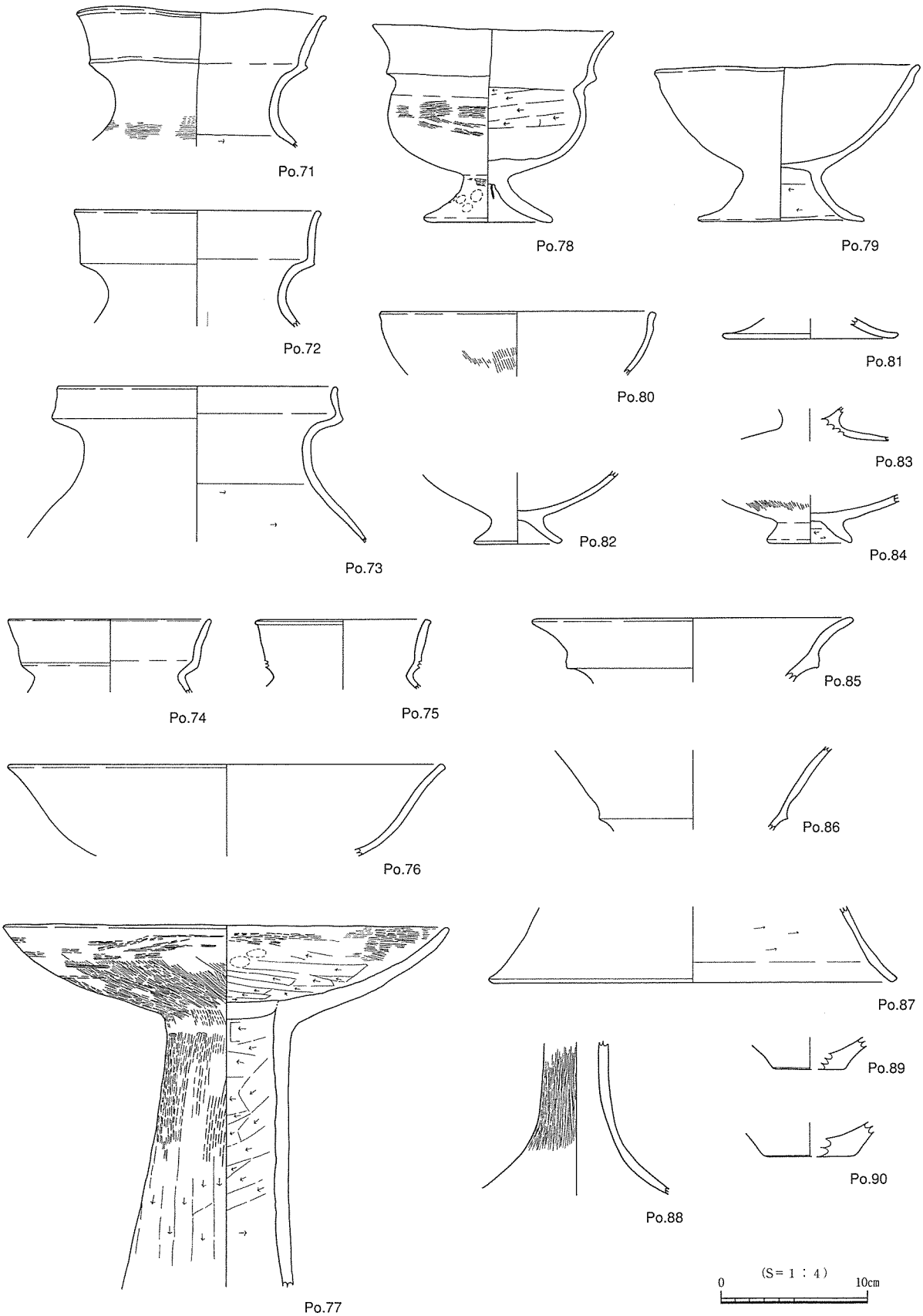


① 表土
② 撹乱
③ 黒褐色土
④ 暗褐色土
⑤ 暗褐色砂質土
⑥ 黄褐色粘質土
⑦ 褐色土（黄色土を含む）
⑧ 暗黒色砂質土
⑨ 濃褐色土
⑩ 淡褐色砂質土（炭化物を含む）
⑪ 淡黄褐色砂質土
⑫ 暗褐色砂質土（黄色土を含む）
⑬ 黒色土
⑭ 黄褐色粘土
⑮ 淡黄褐色砂質土
⑯ 暗黒色砂質土
⑰ 暗灰褐色砂質土
⑱ 褐色砂質土（黄色土を含む）
⑲ 明茶色砂質土
⑳ 黒褐色砂質土
㉑ 淡黄色粘土
㉒ 明褐色粘土
㉓ 淡黒茶色砂質土
㉔ 暗黒茶色砂質土
㉕ 暗黒灰色砂質土
㉖ 明茶灰色砂質土

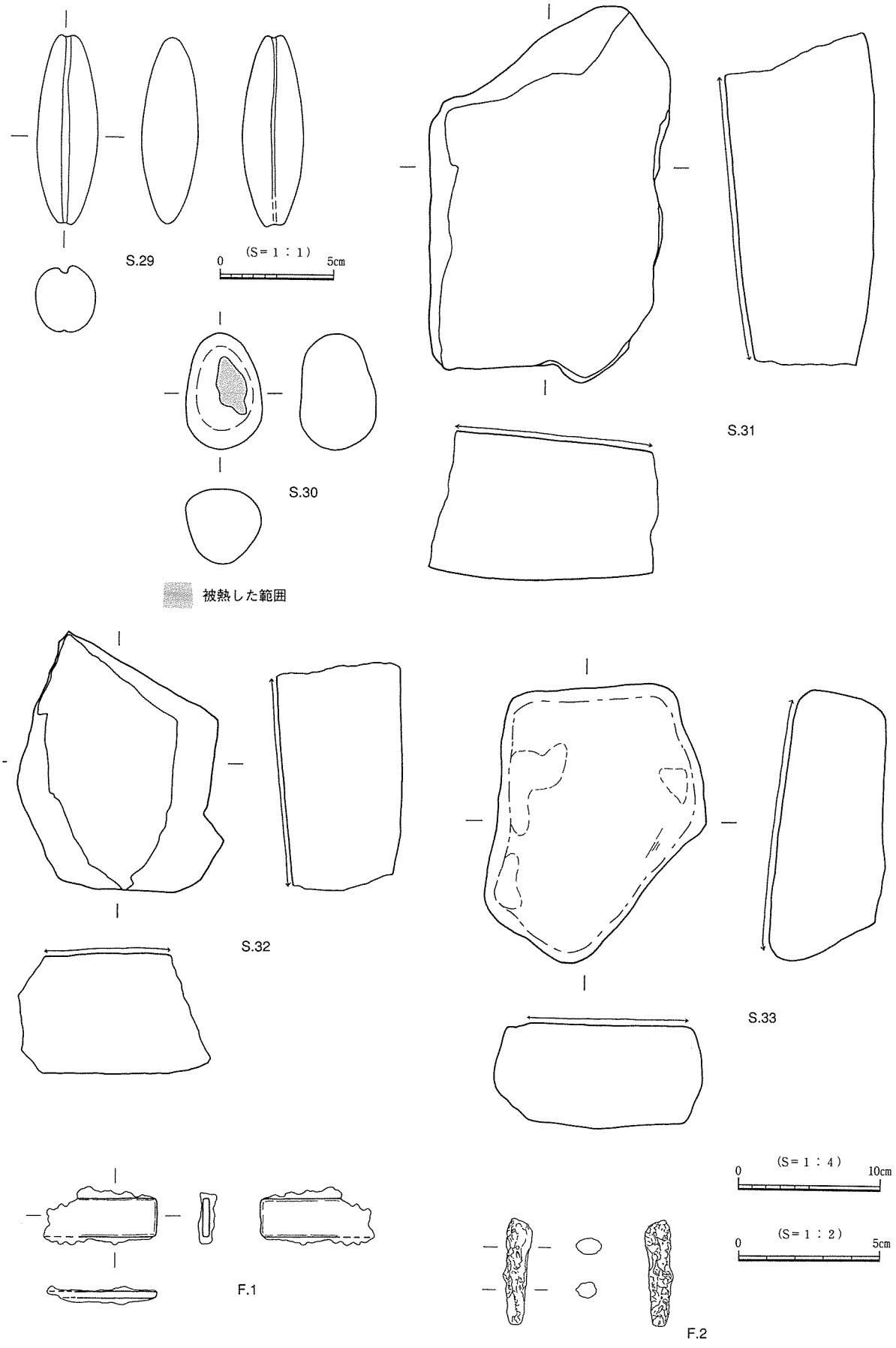
第27図　竪穴住居 4　遺構図



第28図　竪穴住居4　遺物図1



第29図　竪穴住居4　遺物図2



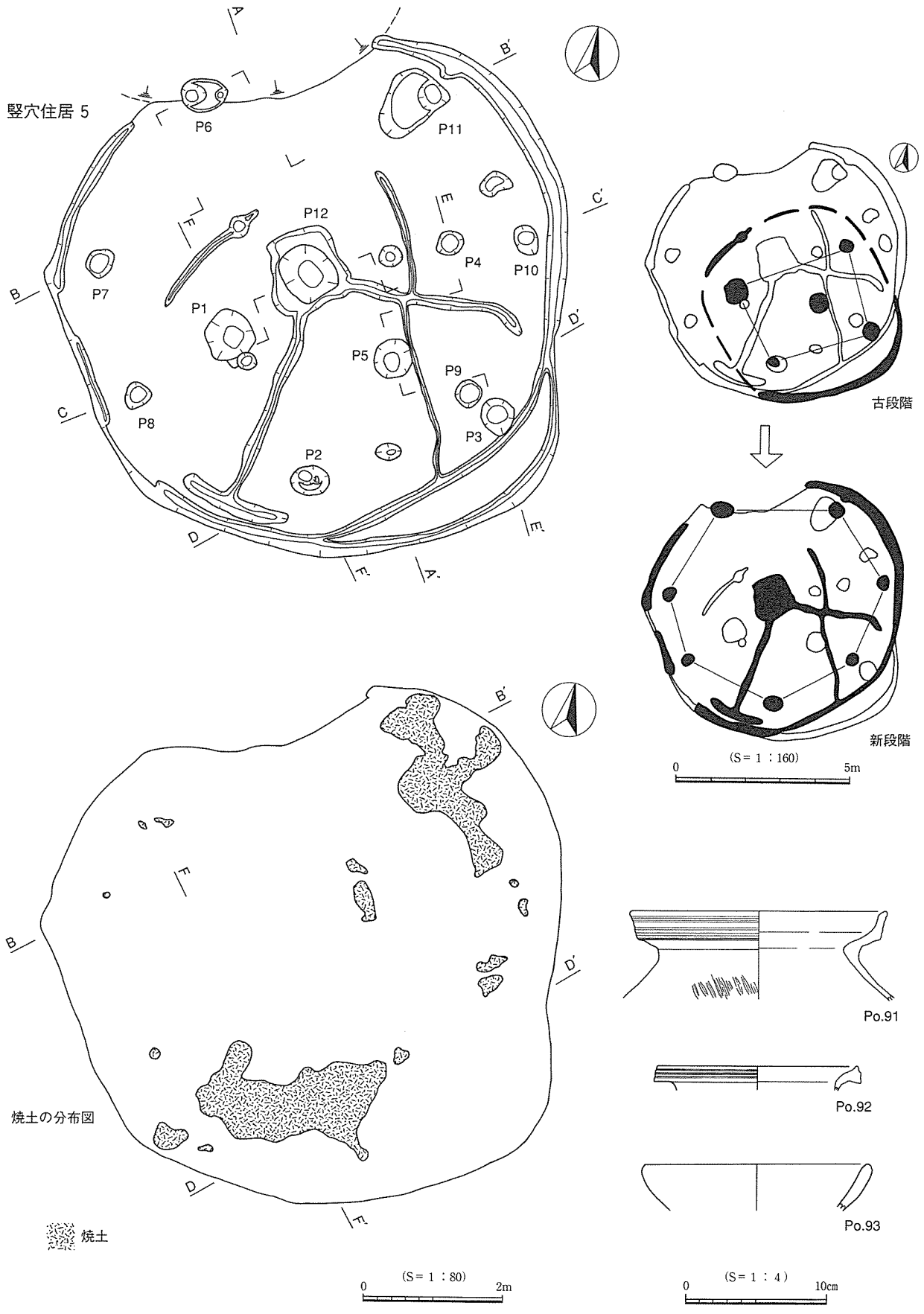
第30図　竪穴住居4　遺物図3

竪穴住居５（第31～32図）

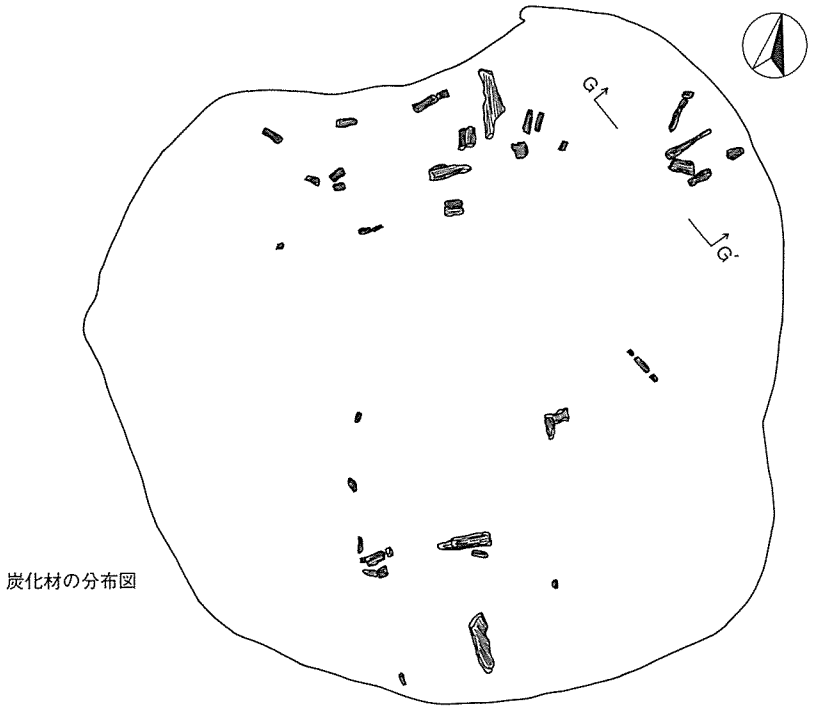
Ｅ－２区で検出した竪穴住居である。２時期の建物が重複し、古段階のものが隅丸方形ないし円形、新段階のものが円形で、焼失住居である。遺構の上面は、耕作により畝状に激しく削平されており、住居の西側では、床面まで露出している状況であった。古段階の住居は、床面に残る溝から、直径2.5m前後と推測され、深さ10cm程度が遺存している。壁溝は、南側は良好に遺存するが、北西側に一部残るのみである。主柱穴は４基で、直径30cmから60cm、深さ60cmから80cmである。P5は、位置的な関係から、古段階の住居に伴う中央ピットの可能性があるものと考えた。P5の直径は50cmで、深さは80cmである。住居の南側のみ、撹乱されていない埋土が残るが、そこからは本住居に伴う遺物は出土しなかった。新段階の住居は、円形で北側を古墳１の周溝によって切られている。直径は7.3m、深さは約15cm程度が残存している。壁溝は、幅が15cm、深さ８cmで、南西部は２箇所で途切れている。主柱穴は７基で、中央ピットとそれに続く溝が存在する。柱穴は直径40cm前後で、深さは40cmから60cmである。中央ピットは検出面が長方形を呈し、長辺が80cm、短辺が70cm、深さは50cmである。住居の焼失時に堆積した焼土と炭化材は、削平により多くが失われている状況であったが、畝状の撹乱が及ばない地点で、原位置を留めるものが南側と北側に残り、床面には垂木などの炭化材や、カヤ状の炭化物なども確認できる状況であった。出土遺物は、埋土中から壺（Po.91）、甕（Po.92）、鉢（Po.93）が出土している。この住居の時期は、出土した遺物から、新段階のものが弥生時代後期中葉と考えられる。

竪穴住居６（第33図）

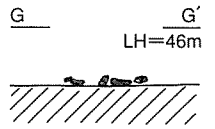
Ｅ－３区で検出した円形の竪穴住居である。東側を竪穴住居７に、南側を古墳１の周溝に切られている。直径は7.4m、深さ20cmである。壁溝は、幅15cm、深さ10cmである。主柱穴は、７基あり、P2の底面には石が置かれており、根固めか、柱の寸法を合わせるために置かれたものと考えられる。柱穴の規模は、概ね40cm程度で、深さは60cmから80cmである。中央ピットは、竪穴住居７に切られているが、検出長が、長径40cm、短径30cmの楕円形で、深さは当初60cm程度あったものと考えられる。また中央ピットの底部から石が数点出土している。出土遺物は、埋土中から甕（Po.94～97）、壺（Po.98）、高坏（Po.99、100）、台付壺の底部（Po.104）などが出土している。この住居の時期は、出土した遺物から、弥生時代後期中葉に相当するものと考えられる。

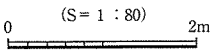


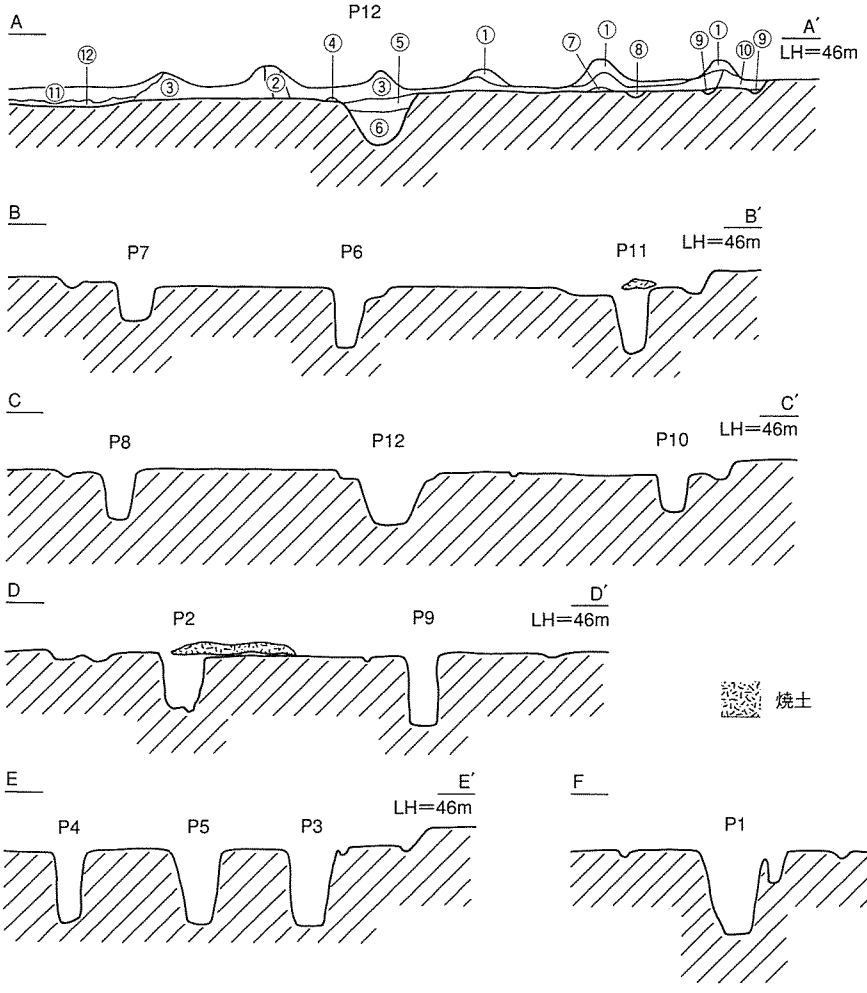
第31図　竪穴住居 5　遺構・遺物・焼土分布図



炭化材の分布図

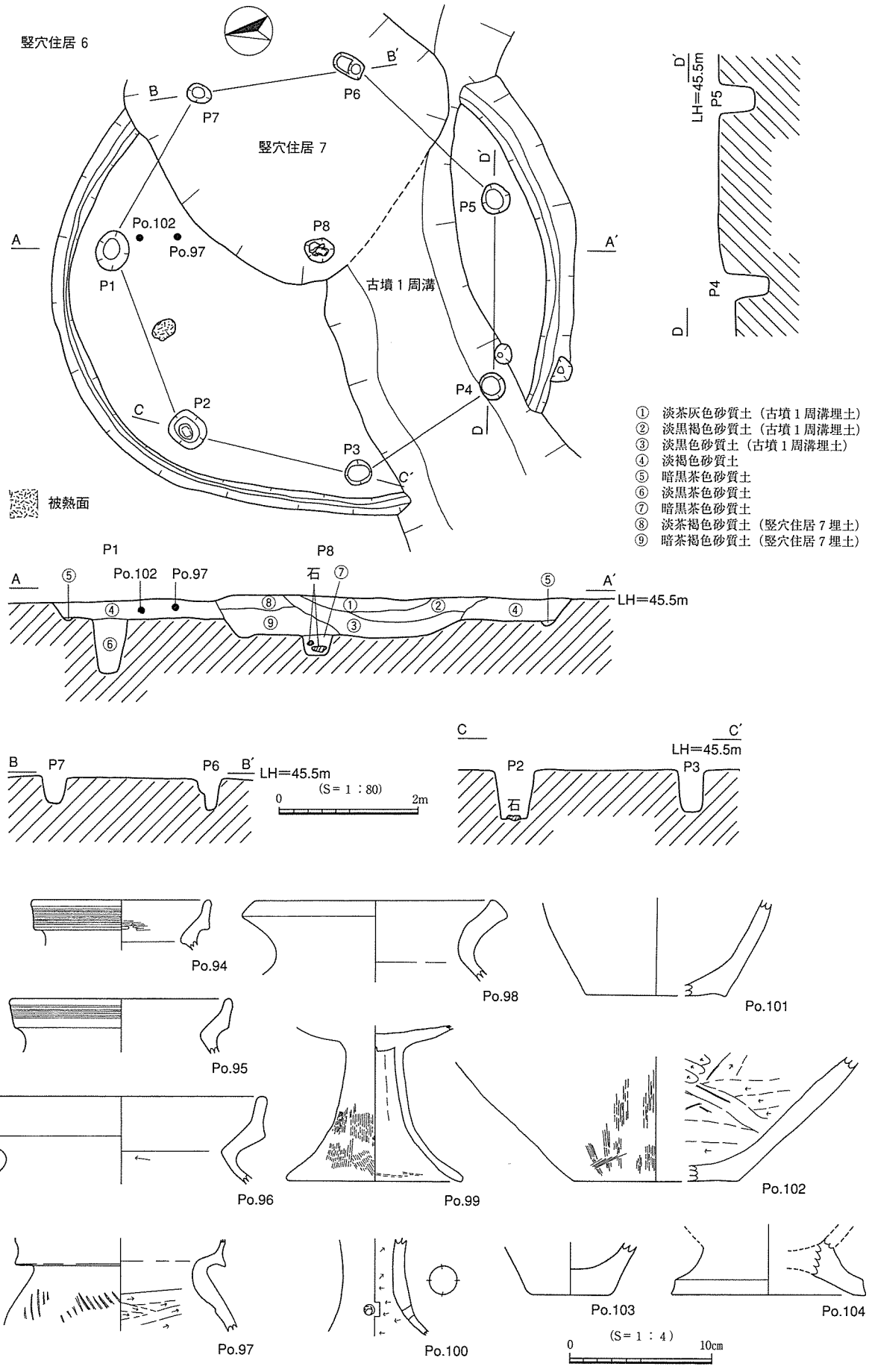






① 表土
② 撹乱
③ 暗褐色砂質土
④ 暗黄褐色砂質土
⑤ 黒褐色砂質土
⑥ 淡黒褐色砂質土
⑦ 赤褐色土（焼土）
⑧ 黒色砂質土
⑨ 淡黒色砂質土
⑩ 淡黒褐色砂質土
⑪ 暗黒茶色砂質土（古墳1周溝埋土）
⑫ 黒茶色砂質土（古墳1周溝埋土）

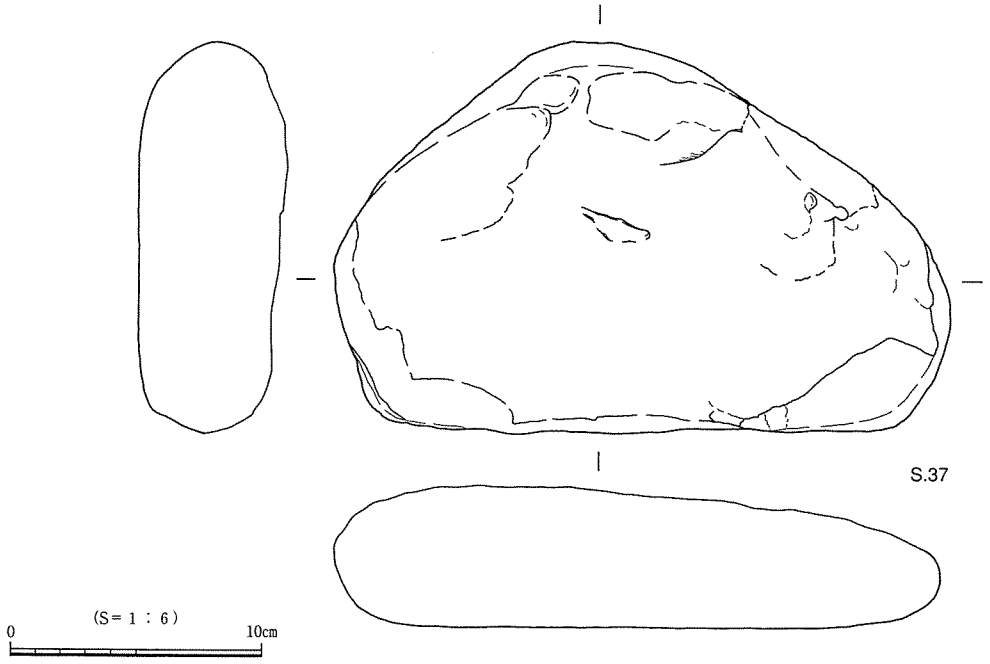
第32図　竪穴住居5　遺構・炭化材分布図

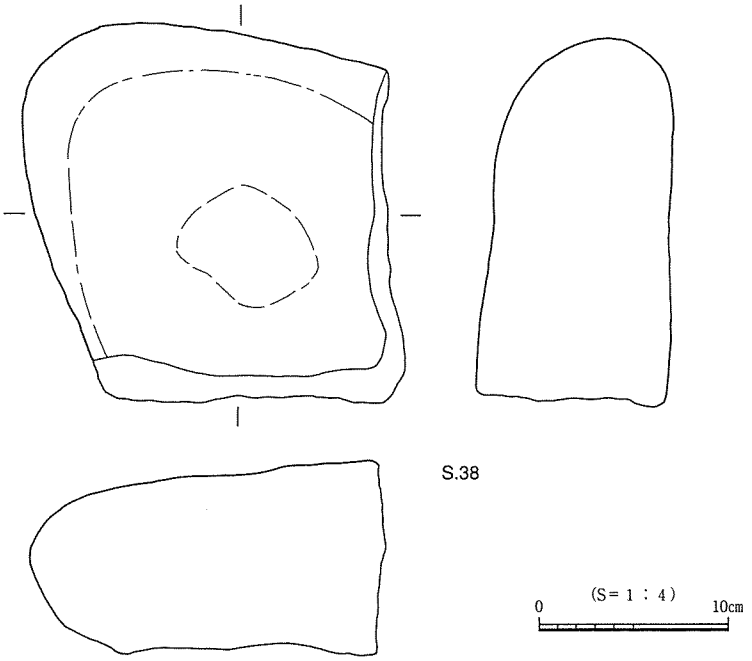


第33図　竪穴住居 6　遺構・遺物図

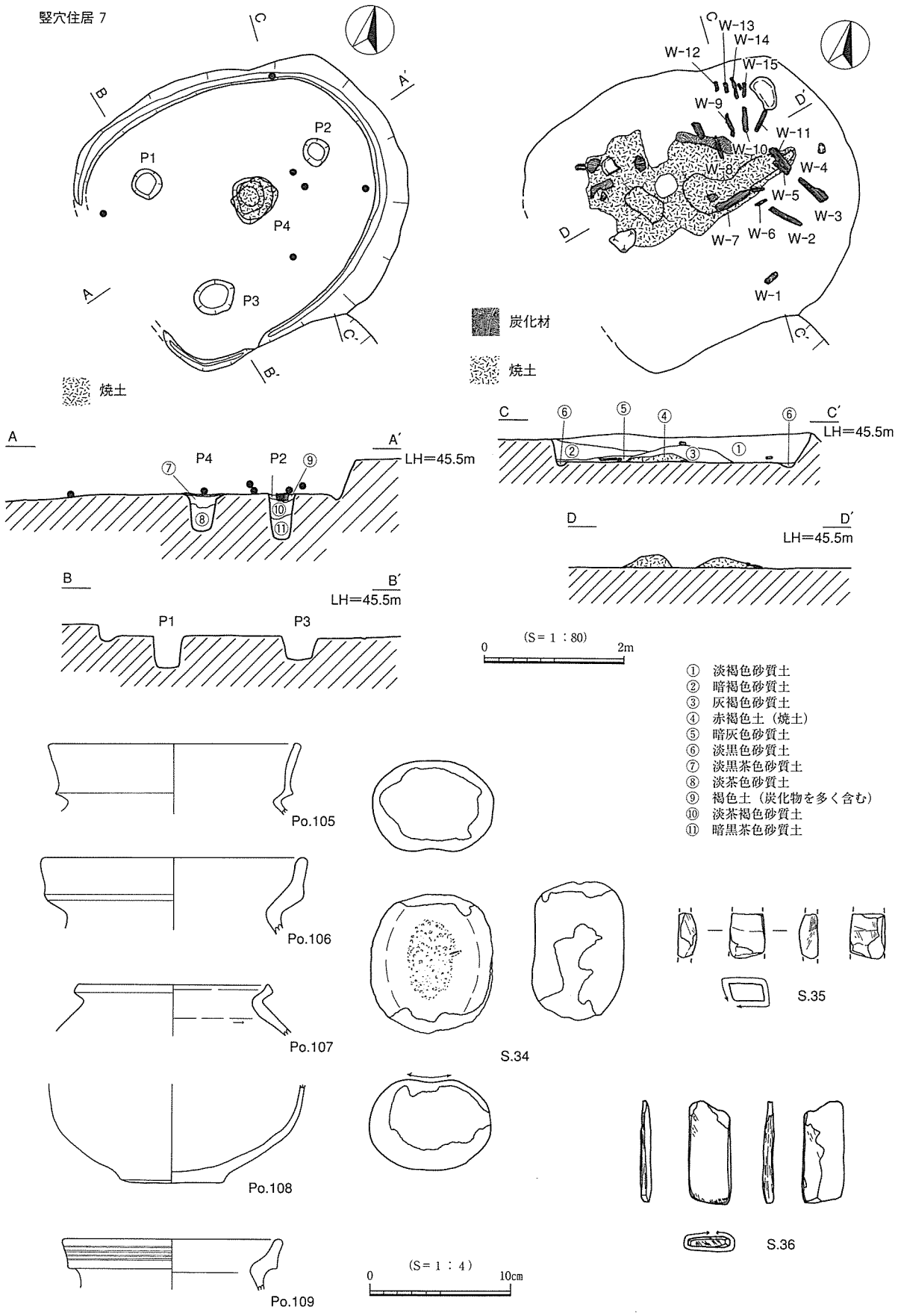
竪穴住居７（第34・35図）

Ｅ－３区で検出した長楕円形の竪穴住居である。本住居は焼失住居であり、中央部に焼土と炭化材が良好に遺存している。住居の長辺は、4.5m程度と推測され、短辺は４m、深さは70cm程度が残存している。壁溝は、幅15cm、深さ10cmで南西部は、古墳１の周溝により削平されている。主柱穴は３基で、中央ピットを持つ。柱穴の規模は、直径30cmから40cm、深さは30cmから65cmである。中央ピットは、直径60cmの円形で、深さは50cmである。また、中央ピットの検出上面において、焼土が広がっていた。そのため、住居が焼失した際には、すでに中央ピットは、床面付近まで埋め戻されていたと





第34図　竪穴住居７　遺物図１



第35図　竪穴住居 7　遺構・遺物図 2

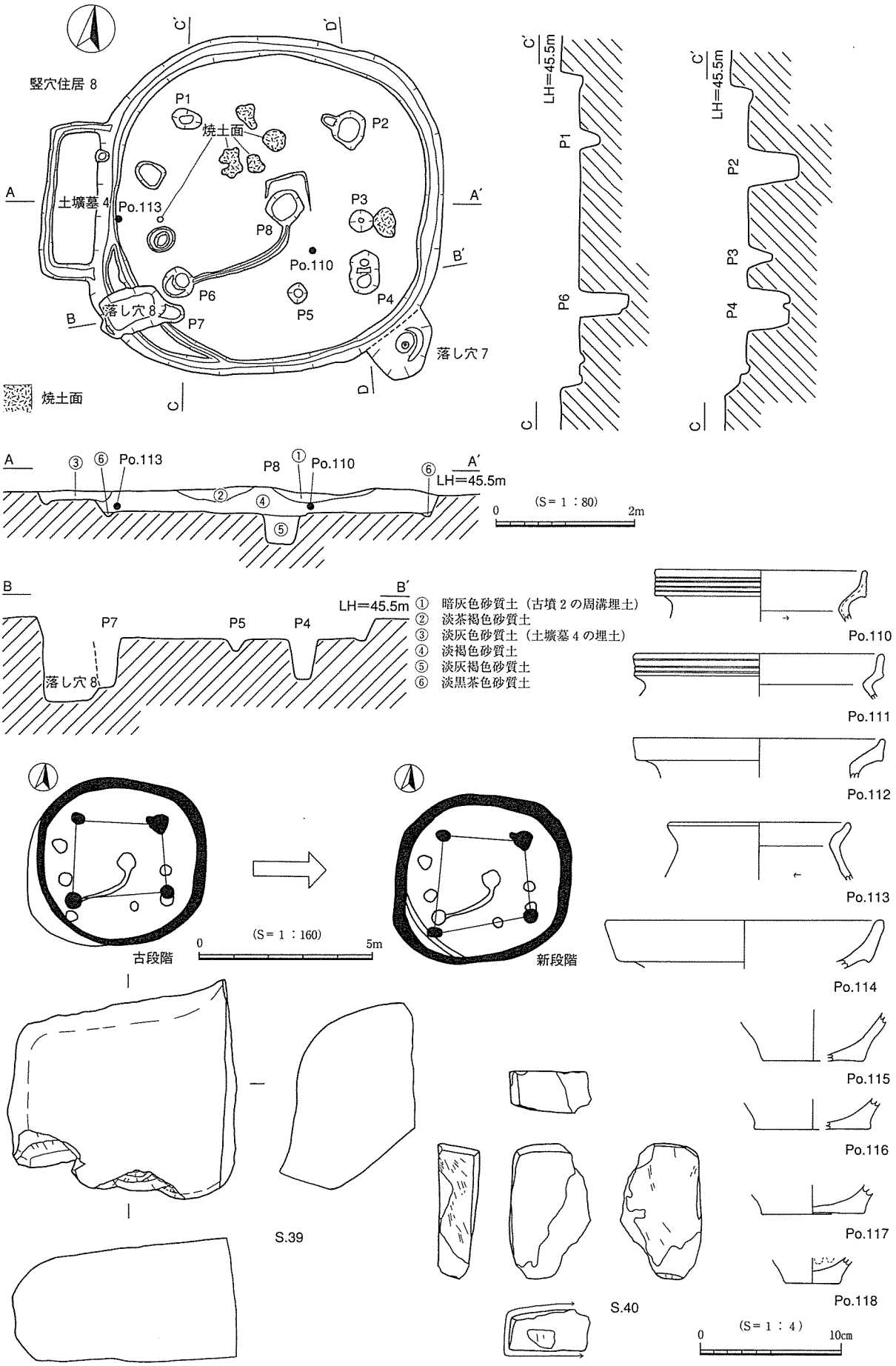
考えられる。焼土は、住居の中央にドーナツ状に分布し、上面から大形の炭化材（W3、４、７）を検出した。北側の床面付近からは、放射状に残る炭化材が見つかり、垂木の一部と考えられた。また、焼土の下からは炭化材の分布は認められなかった。出土遺物は、甕、敲打痕の残る石（S.34）、砥石（S.35、36）のほか、住居の北側の壁溝寄りの地点から、扁平な石（S.37）が壁面寄りに置かれた状態で出土した。表面は、火災時の被熱により剥離しており、表面の加工痕や使用痕は認められなかった。住居内で日常作業に使用された台石と考えられる。この住居の時期は、出土した遺物から古墳時代前期前葉に相当するものと考えられる。

竪穴住居８（第36図）

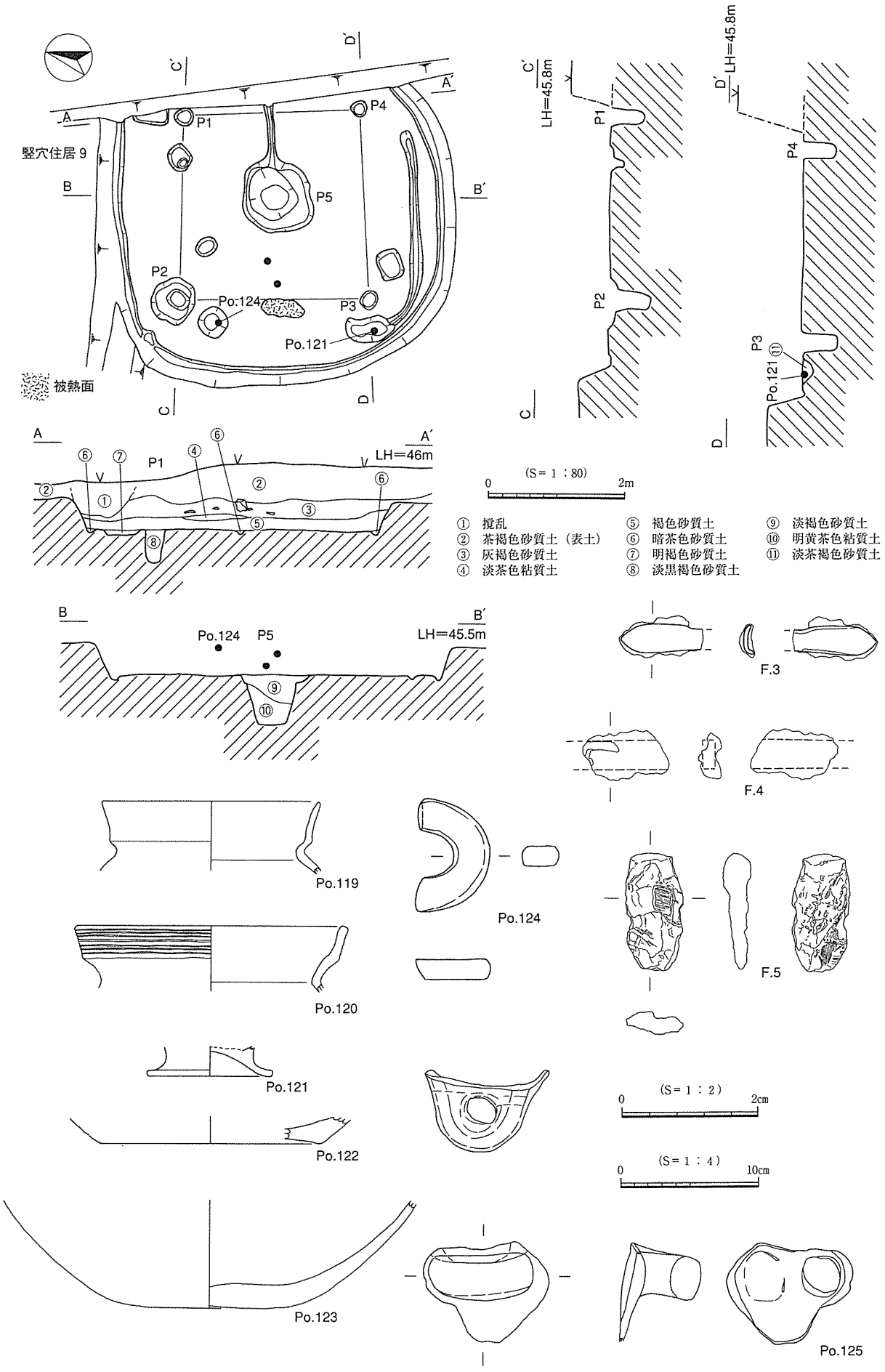
Ｅ－３区の西側で検出した隅丸方形の竪穴住居である。住居の南西部は、拡張の痕跡を留めており、建替の可能性を示唆するものである。また、住居の西側を土壙墓４に切られる。また、本住居によって落し穴７、落し穴17を切っている。住居の規模は、長辺が５m、短辺が4.8m、深さ30cmである。主柱穴は４基で、直径が40cm程度、深さ60cmから80cm程度の規模である。拡張に伴いP6からP7へ柱の位置が移動しているものと考えられる。またこの移動に伴い、壁溝も広げられている。中央ピットはややいびつな円形で、直径50cm程度、深さは約40cmである。床面には被熱面が６箇所認められる。出土遺物は、埋土中から甕（Po.110、113）、器台（Po.114）、砥石（S.40）などが出土している。この住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期中葉に相当するものと考えられる。

竪穴住居９（第37図）

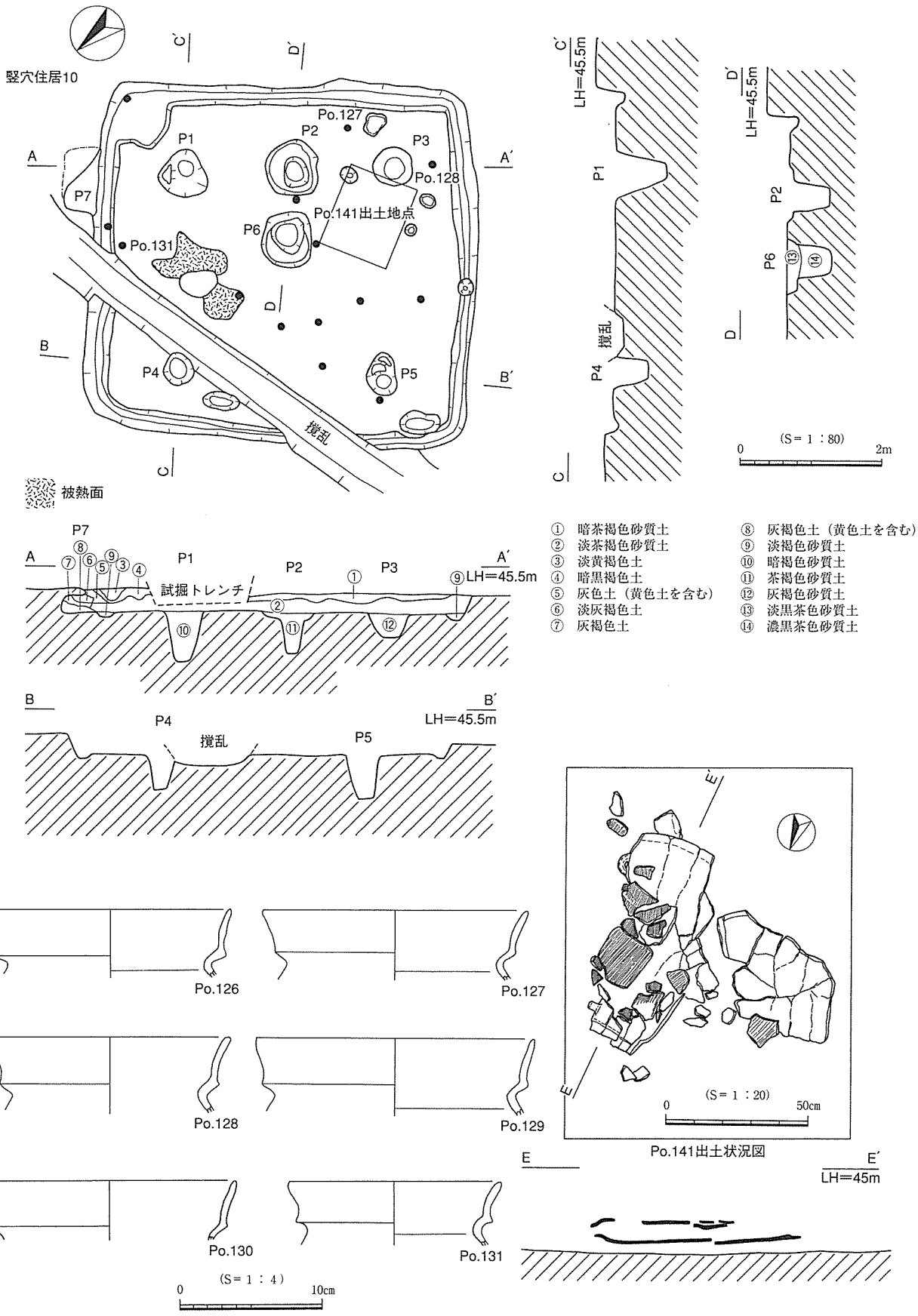
Ｅ－４区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。遺構の東側は、調査区外に伸びる。規模は、一辺が5.2m、深さは約40cmである。主柱穴は４基あり、直径20cmから30cm、深さ50cm程度である。中央ピットは、検出面が方形、底面が円形を呈し、直径が70cm程度である。また、東側から中央ピットへと溝が伸びている。壁溝は、幅が10cm、深さ10cmで、南側は２条になる。住居を拡張した痕跡の可能性も考えられるが、断定することはできなかった。出土遺物は、埋土中から甕（Po.119、120）、台付土器の底部（Po.121）、甑形土器の把手部（Po.124、125）、鉄製品（F.3～5）が出土している。この住居の時期は、出土した遺物から古墳時代前期前葉に相当するものと考えられる。



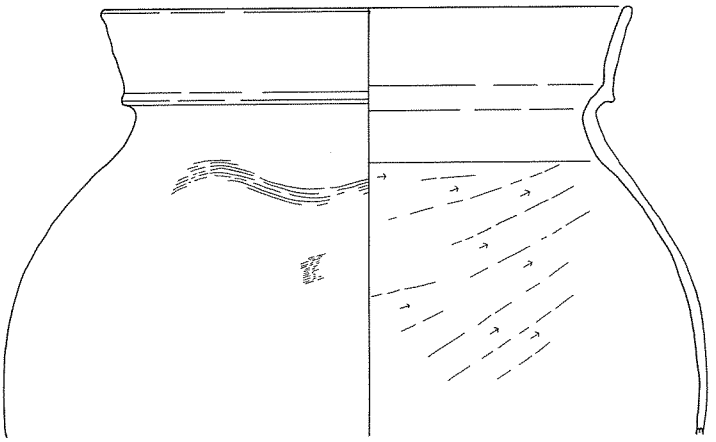
第36図　竪穴住居 8　遺構・遺物図



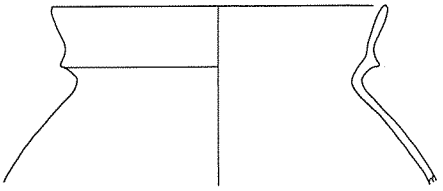
第37図　竪穴住居 9　遺構・遺物図



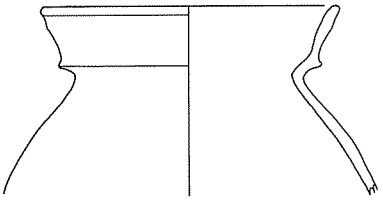
第38図　竪穴住居10　遺構・遺物図1



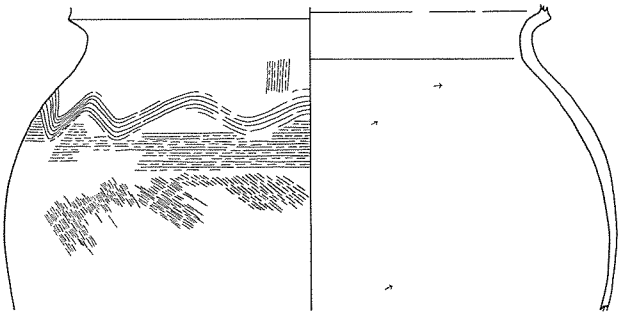
Po.132



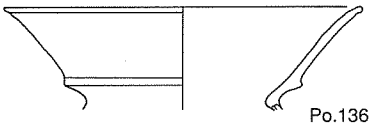
Po.134



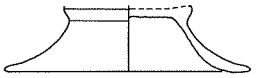
Po.135



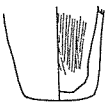
Po.133



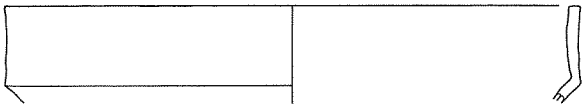
Po.136



Po.137



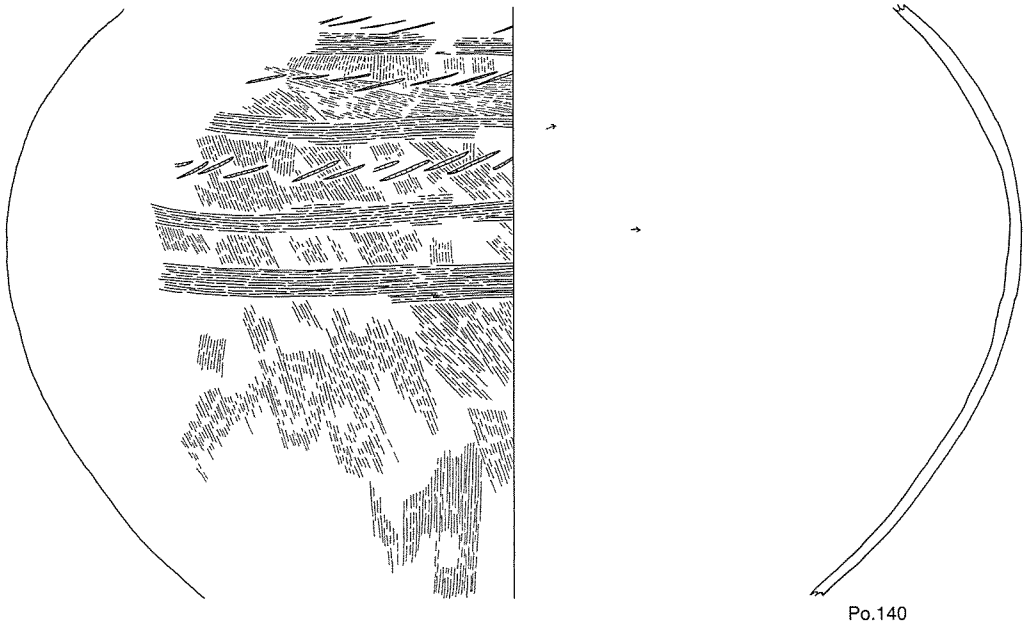
Po.138



Po.139

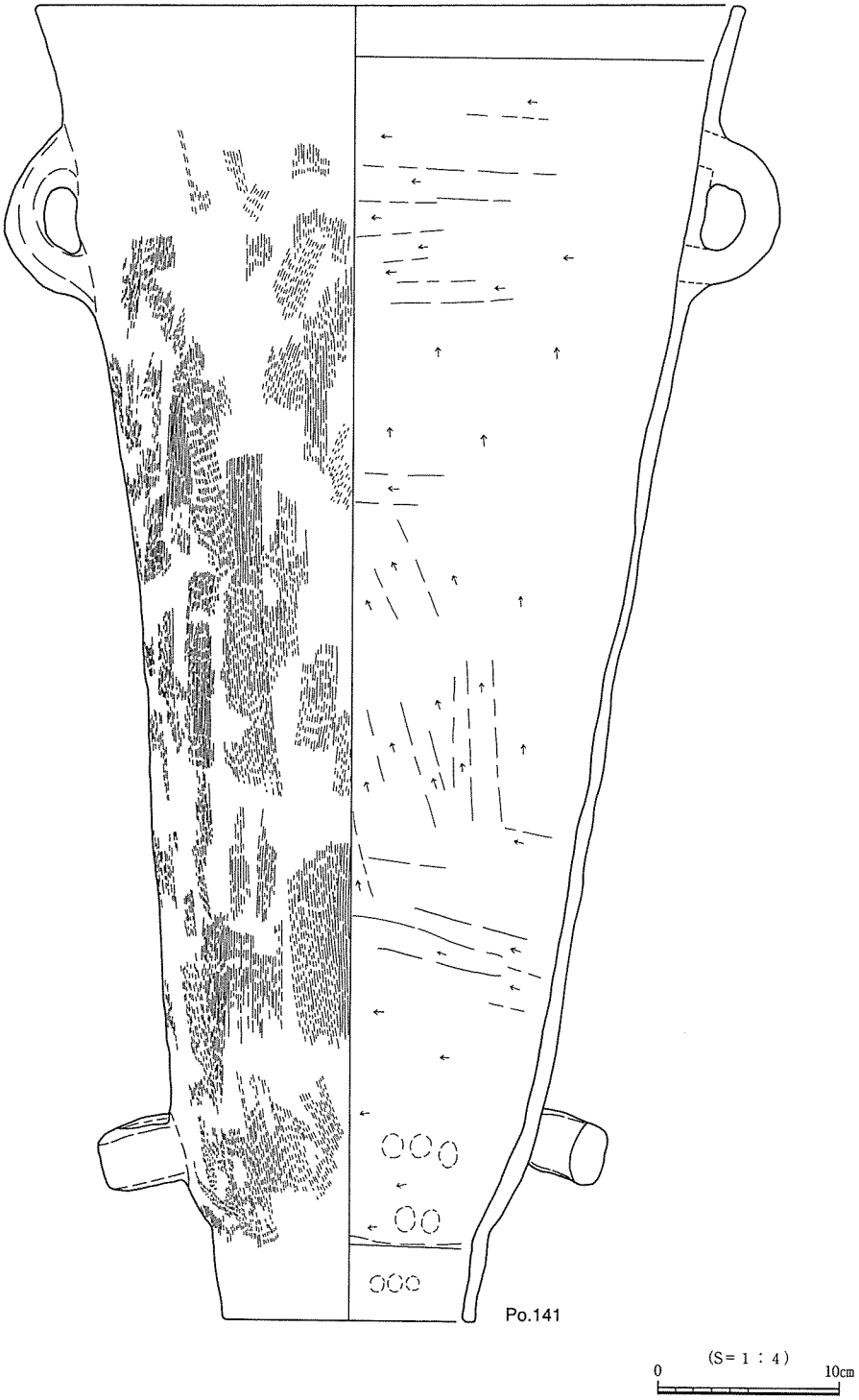
(S=1:4)

0 10cm



Po.140

第39図　竪穴住居10　遺物図２

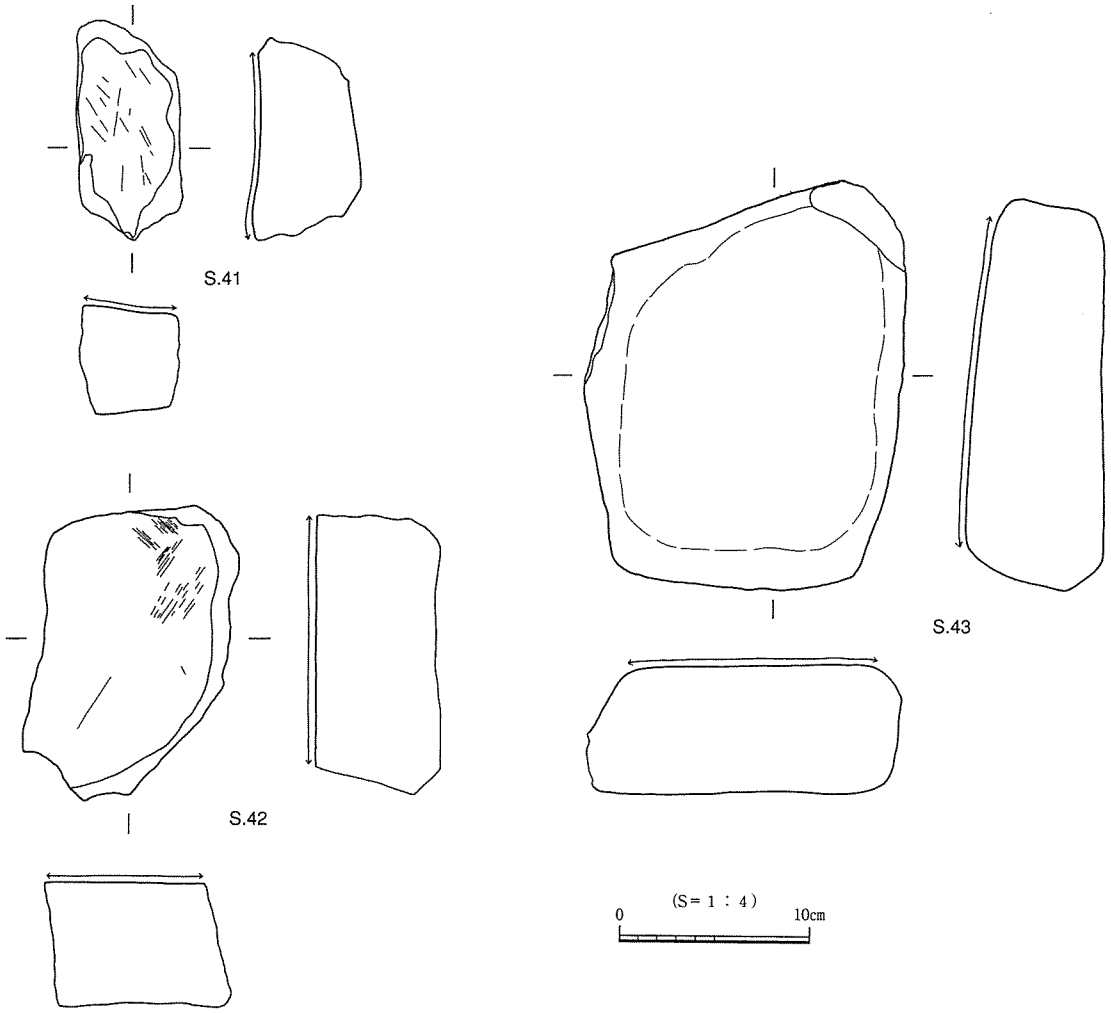


第40図　竪穴住居10　遺物図３

竪穴住居10（第38～41図）

Ｅ－４区で検出した方形の竪穴住居である。住居の北部は現代の溝により撹乱されている。規模は長辺5.4m、短辺が５m、深さは40cm程である。主柱穴は４基あり、直径40cmから60cm、深さ35cmから70cmである。中央ピットは、底面の直径30cm、深さ60cmである。また、中央ピットの南に性格不明のピットが存在する。本住居の特徴として、住居の東壁に、幅90cm、奥行き40cm、高さ25cmの横穴が掘られている。この遺構は、貯蔵穴と考えられるが、遺構内からの出土遺物は無く、どのようなものが収められていたのかは不明である。また、住居の北側床面に広い範囲で被熱面が認められる。出土

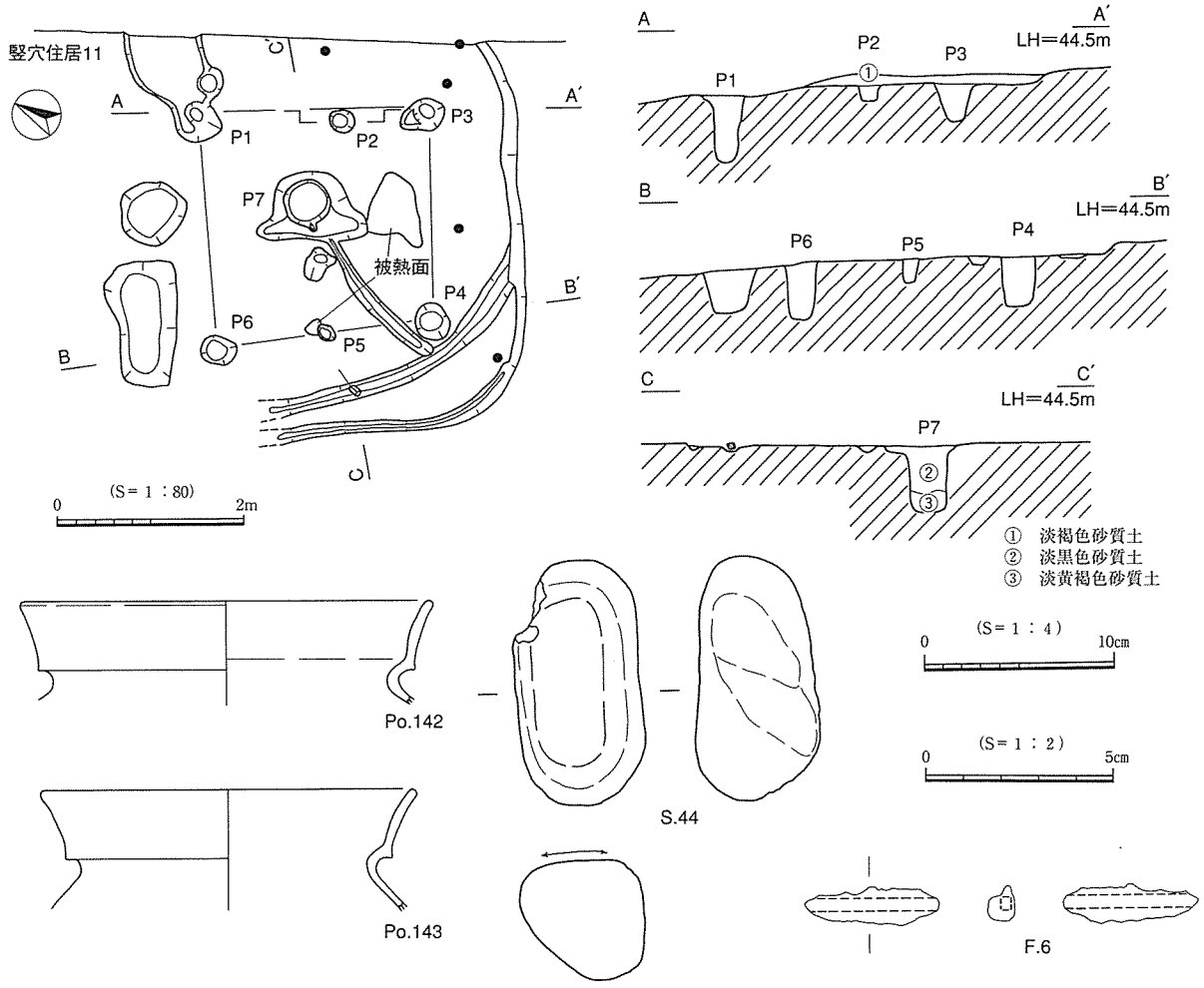
遺物は、埋土中から甕（Po.126～135）、器台（Po.136）、台付土器（Po.137）、壺（Po.139、140）、甑形土器（Po.141）などが出土している。また、器種不明の土器（Po.138）は、コップ形の土器として図化しているが、高坏の脚部の可能性も考えられる。この住居の時期は、出土した遺物から古墳時代前期前葉に相当するものと考えられる。



第41図　竪穴住居10　遺物図4

竪穴住居11（第42図）

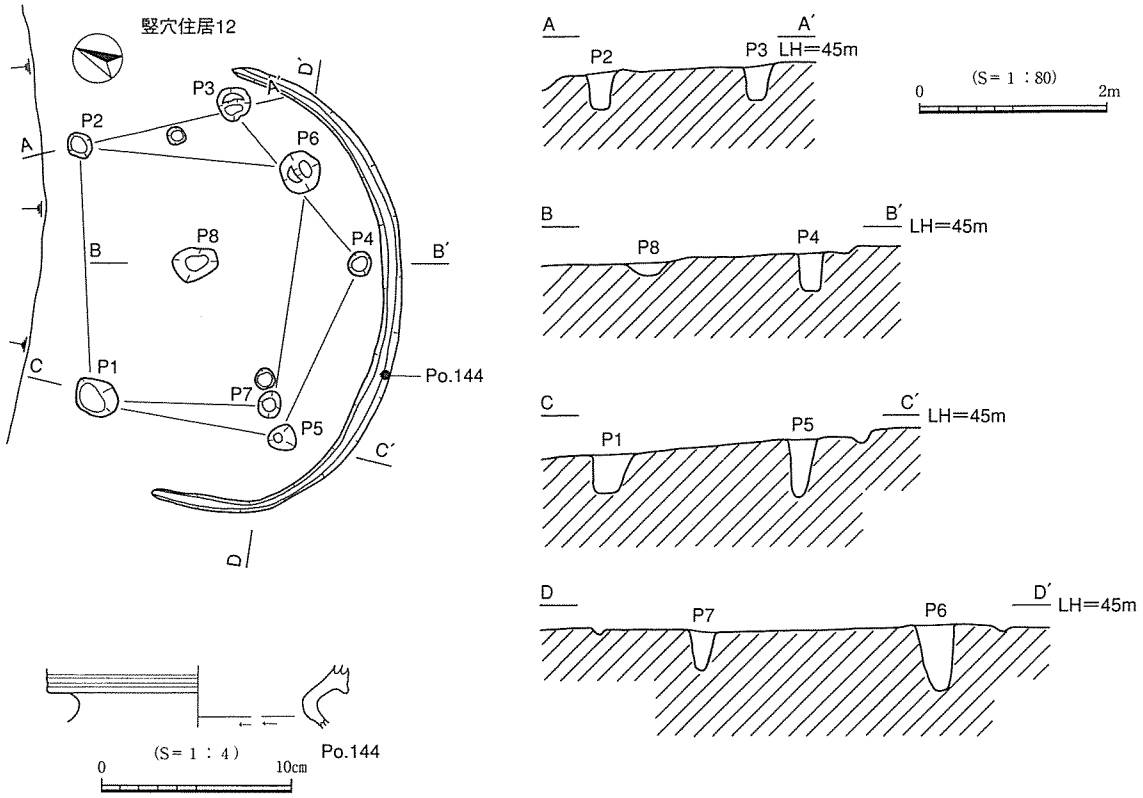
Ｅ－４区で検出した隅丸方形と推定される竪穴住居である。住居の北側床面は、削平により消滅している。主柱穴は６基で、直径20cmから35cm、深さ20cmから70cmである。中央ピットは円形で、直径70cm、深さ90cmで、東側は溝に繋がっている。壁溝は、西側に２条が平行に伸びており、幅10cmから20cm、深さ８cm程度である。出土遺物は、甕口縁部片（Po.142、143）、擦石（S.44）、棒状の鉄製品（F.6）が埋土中から出土している。この住居の時期は、出土した遺物から古墳時代前期前葉に相当するものと考えられる。



第42図　竪穴住居11　遺構・遺物図

竪穴住居12（第43図）

Ｅ－４区で検出した円形の竪穴住居である。古墳７の周溝に切られており、住居内は床面まで削平され、柱穴と南側に壁溝が一部残るのみである。柱穴の分布状況から、建て替えが行われた可能性が考えられるが、その前後関係については明らかに出来なかった。住居の規模は、直径4.8m程度と推測され、主柱穴は４基ないし５基存在したものと考えられる。壁溝は、幅20cm程度で、柱穴は直径20cmから40cm、深さ60cm程度遺存している。この住居に伴う遺物は、壁溝内から甕口縁部片が１点出土している。この住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期に相当するものと考えられる。

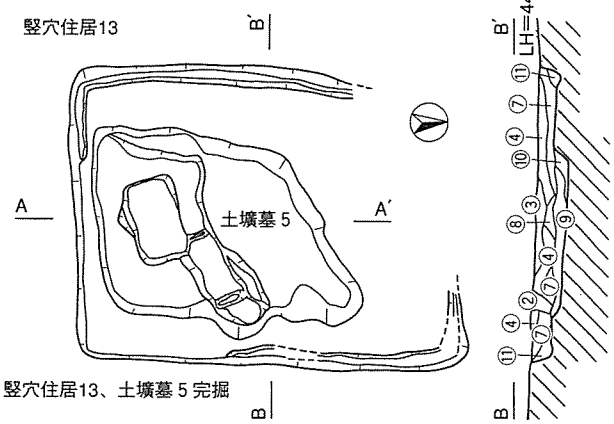


第43図　竪穴住居12　遺構・遺物図

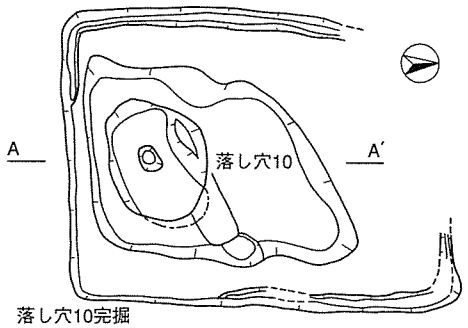
竪穴住居13（第44図）

W－4区で検出した竪穴住居である。北側を道路によって削平されているが、長方形を呈するものと思われる。建物内には柱穴が無く、中央部に大きな土坑が掘られている。ここから、土壙墓5、落し穴10を検出した。建物の規模は、長辺約4m、短辺3.2m、深さ20cmで、中央の土坑は、ややいびつな菱形を呈し、長辺2.4m、短辺1m、深さ20cmである。壁溝は、幅20cm、深さ10cmで、南東側は途切れている。この住居は、落し穴10と掘立柱建物19、20を切り、土壙墓5に切られているものと考えられる。出土遺物は、埋土中から壺（Po.145）、甕（Po.146～148）、器台（Po.149～151）、甑形土器（Po.152、153）、砥石（S.45）が出土した。この住居の時期は、出土した遺物から古墳時代前期前半期に相当するものと考えられる。

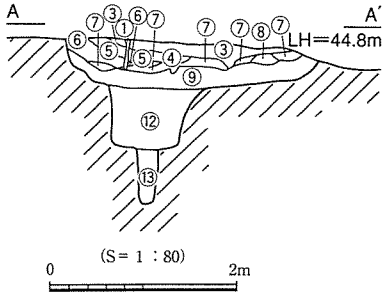
竪穴住居13



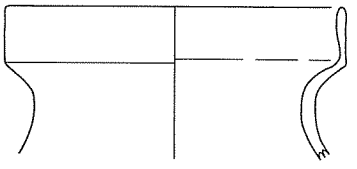
竪穴住居13、土壙墓5完掘

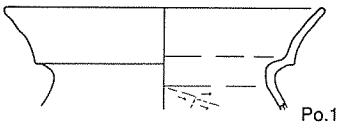


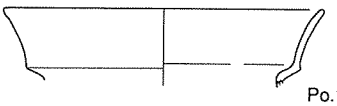
落し穴10完掘

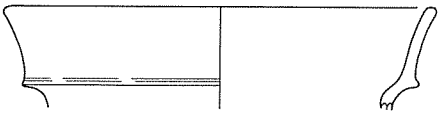


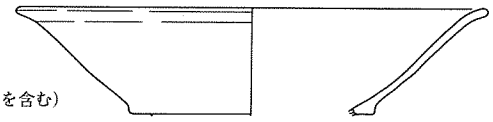
① 木根
② 明黄褐色シルト
③ 灰黄褐色砂質土
④ 灰黄褐色砂質土（ロームブロックを含む）
⑤ 黒褐色シルト
⑥ 黒褐色シルト（ロームブロックを多く含む）
⑦ にぶい黄褐色シルト
⑧ にぶい黄褐色シルト（ロームブロック、土器を多く含む）
⑨ 黒褐色シルト
⑩ 明茶褐色シルト
⑪ 黒褐色シルト
⑫ 明黄褐色砂質土
⑬ 明黄褐色砂質土（黒色土を含む）

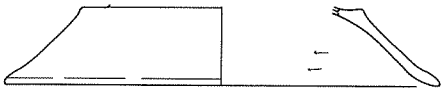

Po.145

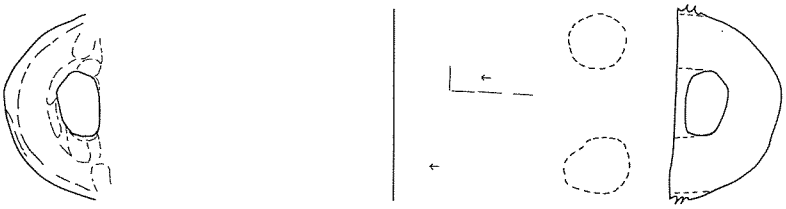

Po.146

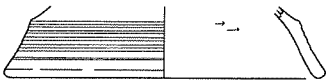

Po.147

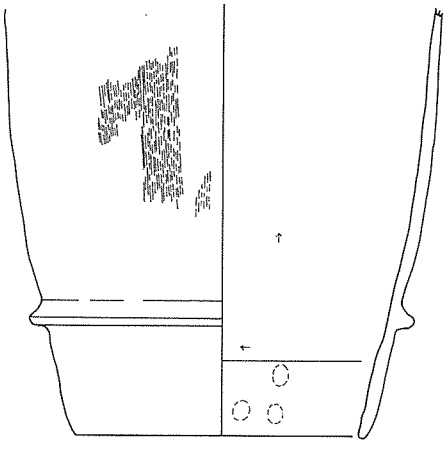

Po.148

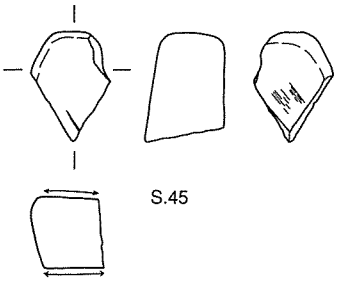

Po.149


Po.150

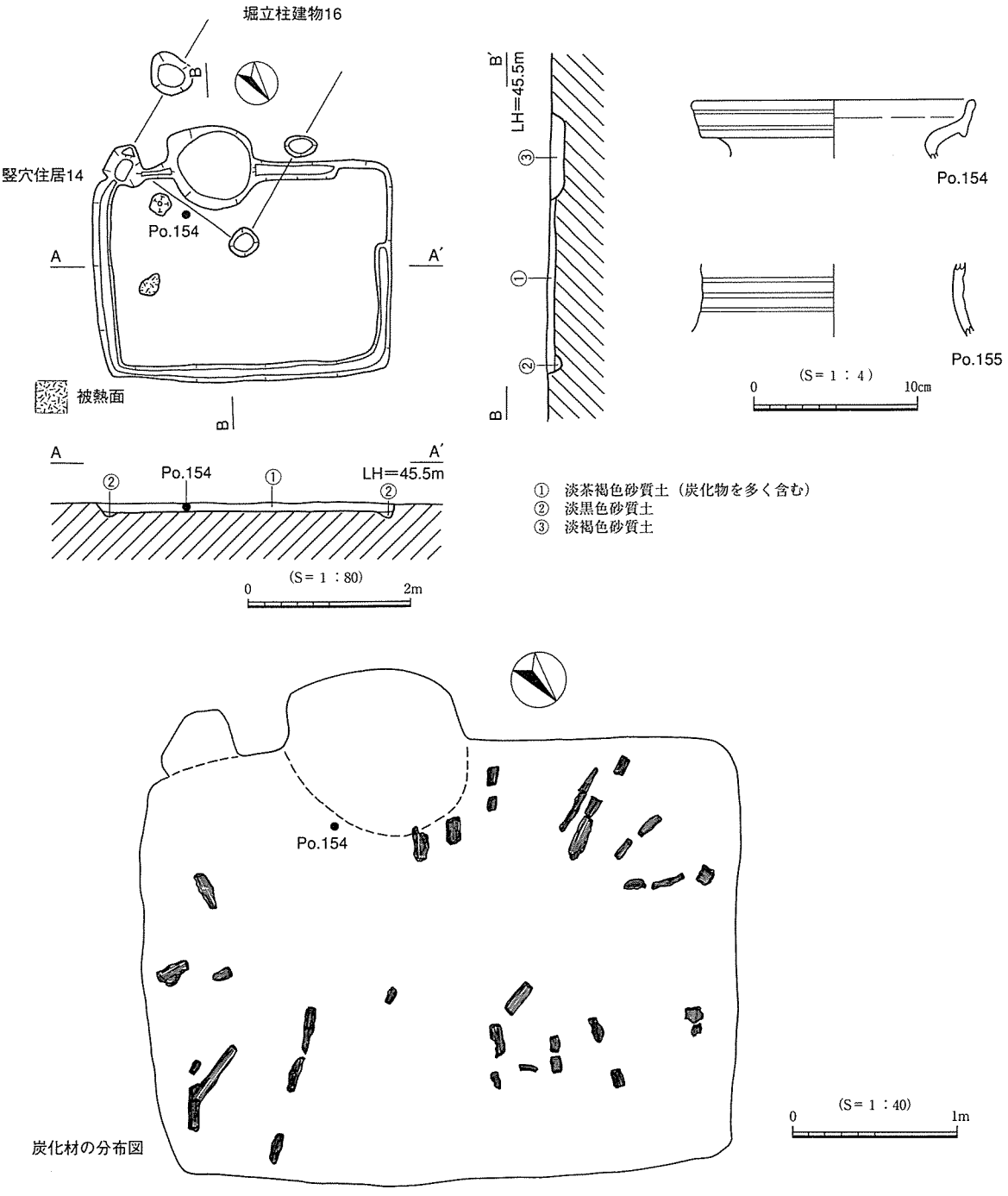

Po.152


Po.151


Po.153



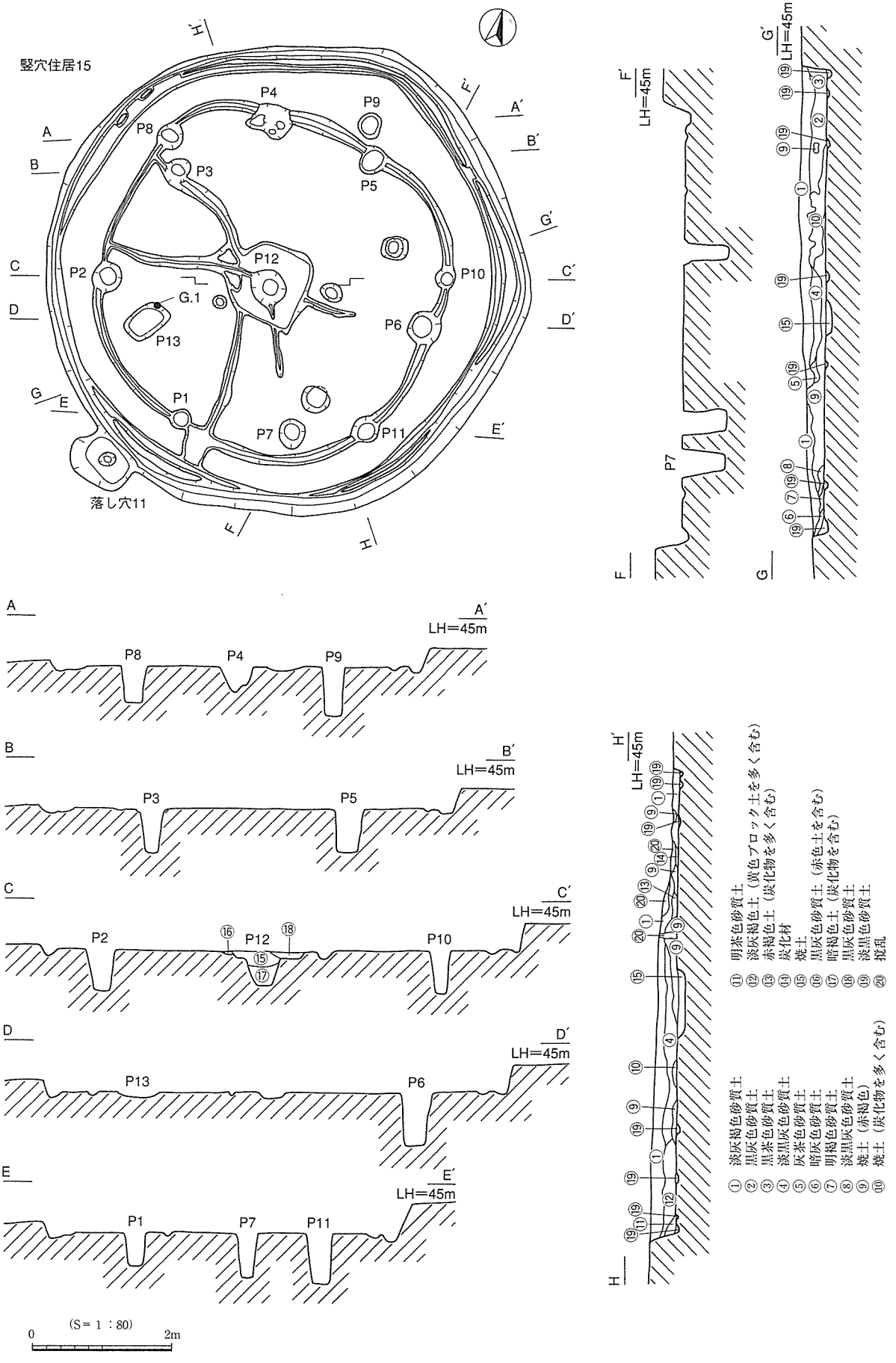
第44図　竪穴住居13　遺構・遺物図



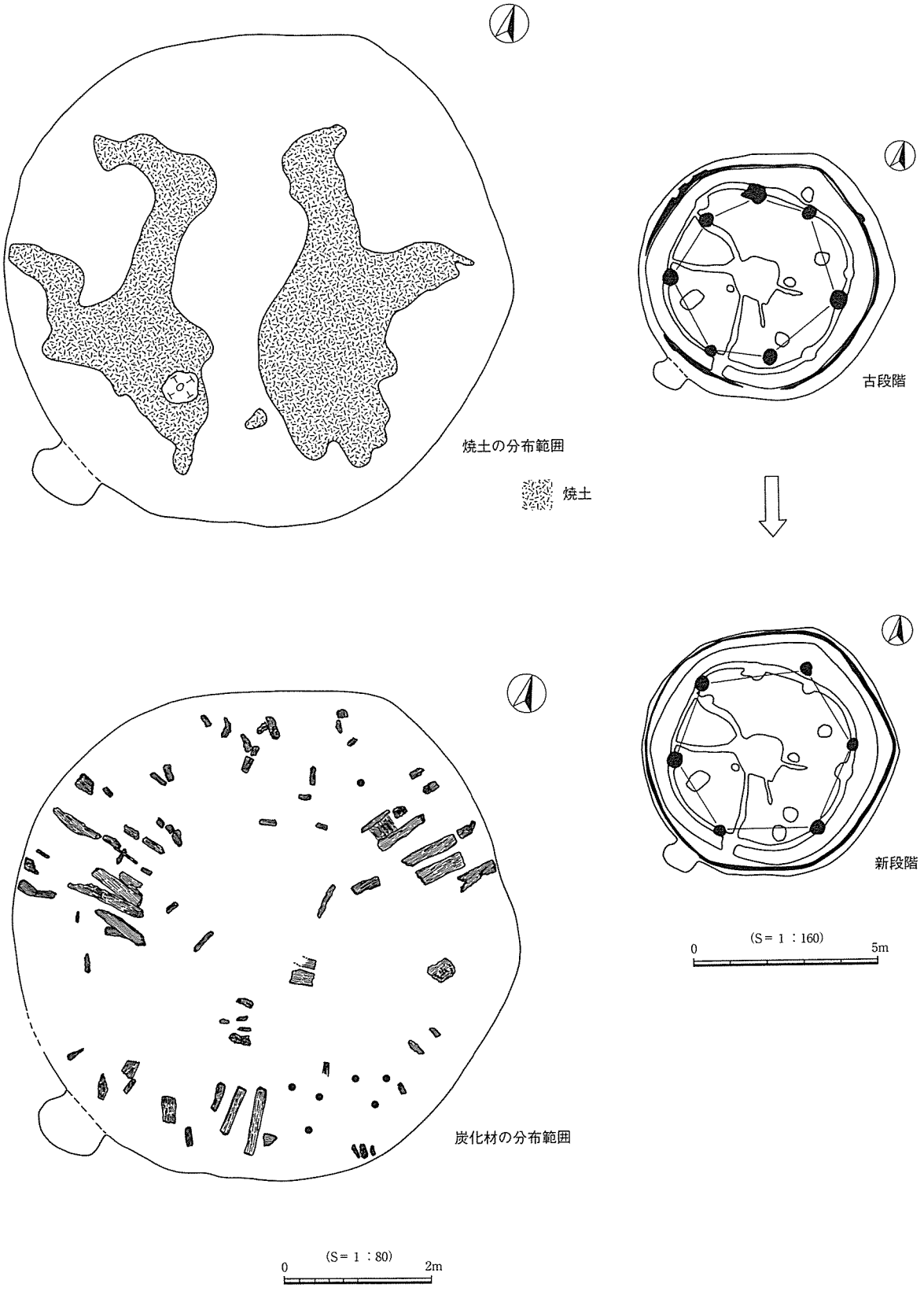
第45図　竪穴住居14　遺構・遺物図

竪穴住居14（第45図）

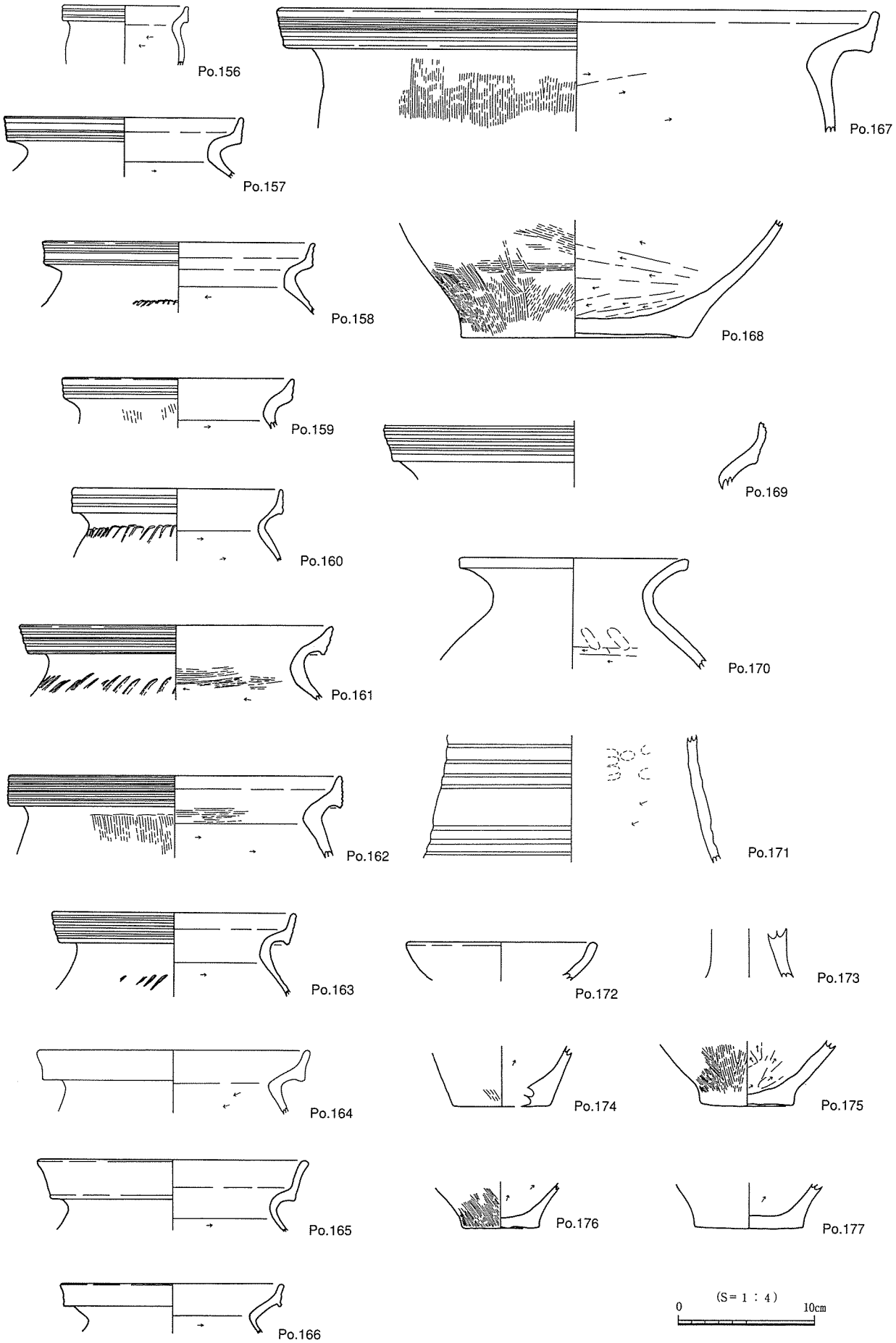
W－4区で検出した長方形の竪穴住居である。掘立柱建物16を切る。規模は、長辺が3.6m、短辺2.6m、深さ10cmで、南側は現代の土坑によって撹乱されている。床面に炭化材が分布する焼失住居である。埋土中に焼土が全く認められないことから、草葺の建物であった可能性が考えられる。炭化材の分布は、中央に向かって棒状の垂木材が伸びる。住居の南側床面で1箇所、被熱面が残る。壁溝は、幅15cm、深さ10cm程度で、西側が途切れる。この住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期中葉に相当するものと考えられる。



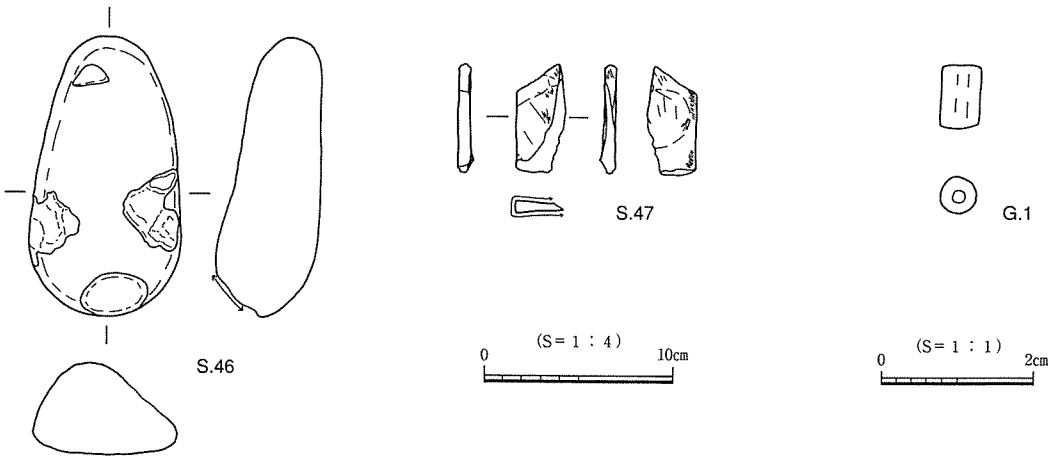
第46図　竪穴住居15　遺構図



第47図　竪穴住居15　焼土、炭化材出土状況図



第48図　竪穴住居15　遺物図1

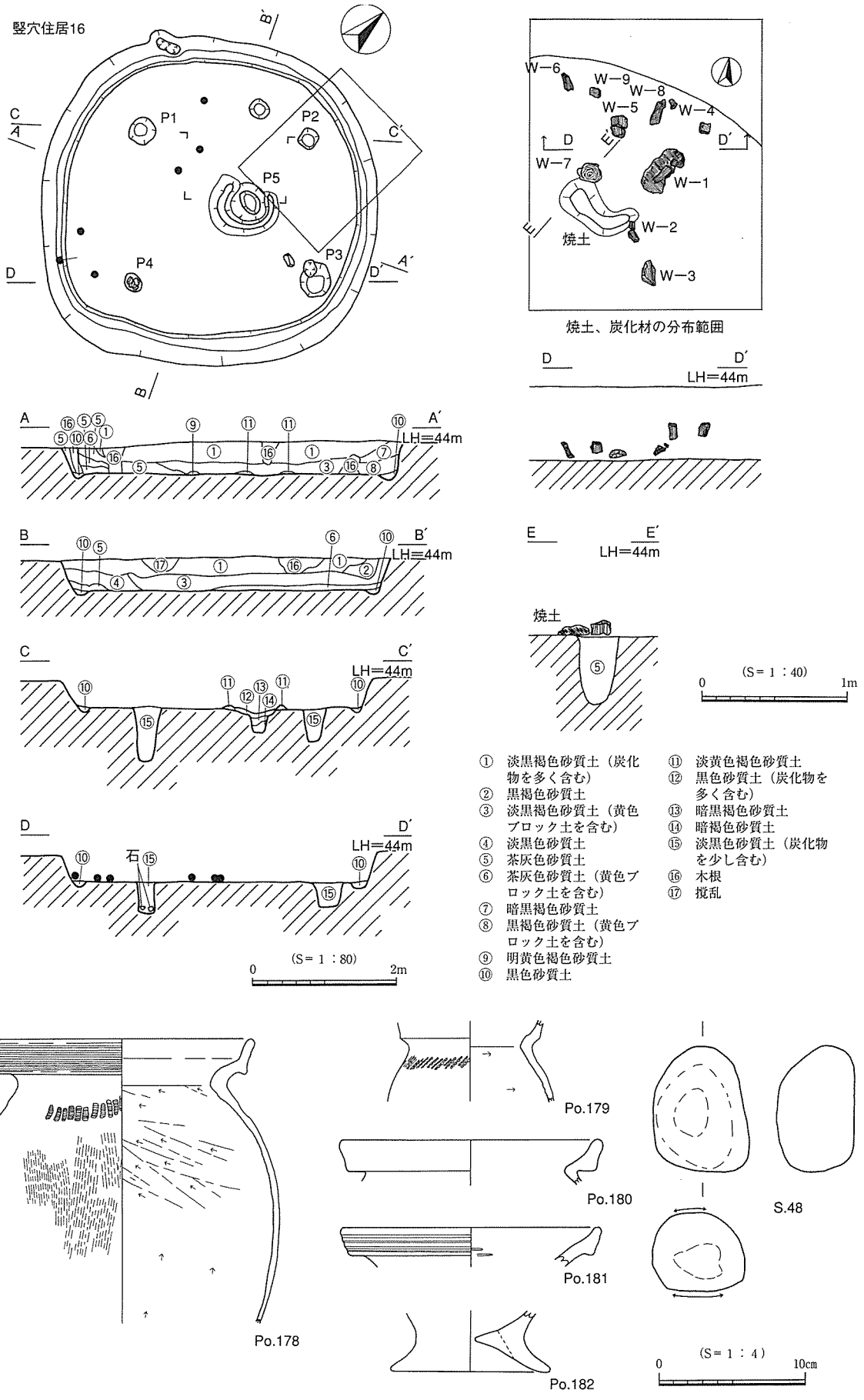


第49図　竪穴住居15　遺物図２

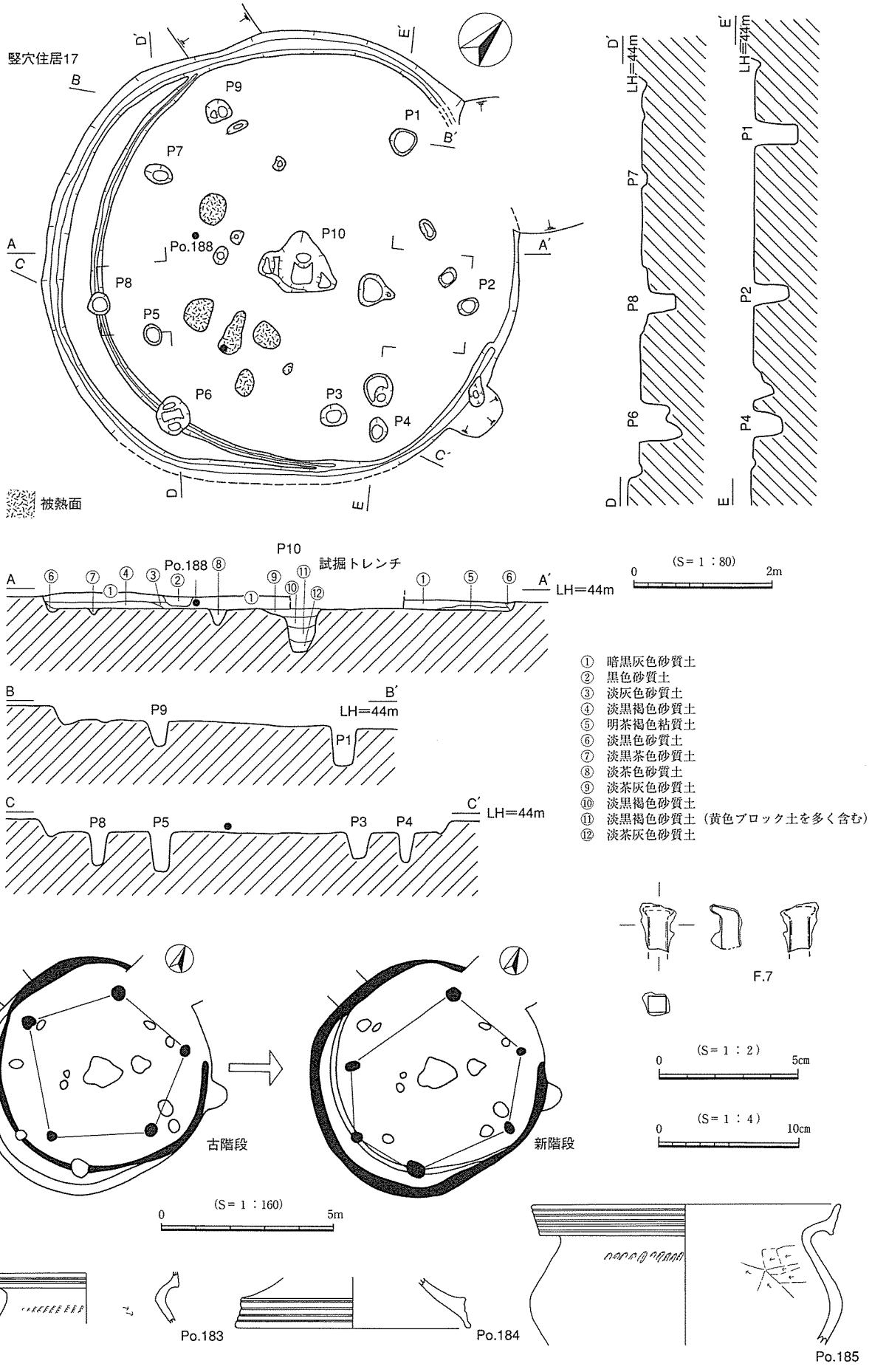
竪穴住居15（第46～49図）

Ｗ－４区で検出した円形の竪穴住居である。本住居は、多量の焼土、炭化材の分布が見られる焼失住居である。壁溝は３条巡るが、住居の拡張の痕跡を示すものは、前後２時期のものに限られる。住居の規模は、古段階で直径６ｍ程度、新段階で直径6.6mから6.8mであり、新段階には平面形が多角形状を呈する。住居の深さは40cm程度残存している。柱穴は、古段階で７基、新段階で６基と推測され、P1、P2は、新段階の住居でも掘り直されることなく使用されている。柱穴の規模は、30cmから40cm程度で、深さは45cmから70cmである。中央ピットは、深さが約50cmあり、検出面が一辺１ｍの正方形状で、底面は直径40cm程の円形を呈する。中央ピット内の埋土は、上層が焼土であり、焼失時まで埋没していなかったことを示していると考えられる。また中央ピットから、壁溝に向かって複数条の溝が伸びるが、どの段階の住居に伴うのかは明らかにすることは出来なかった。壁溝は、幅15cm程度で、深さは10cmである。また中央部を円形に巡る溝は、深さ数cm程度とやや浅い。焼土は、住居の東西に分布し、厚さは最大で20cmにも及ぶ。炭化材は、床面に板状の垂木材が中心部に向かって倒れており、それと直交するカヤ状の炭化材の分布も見られた。板材の寸法は、長いもので120cm、幅が10cmから20cm程度で、幅15cm前後のものが主体を占めるようである。厚さは２cmから６cm程度のものが多い。なお建築材として使用されている樹木は、樹種同定の結果、ケヤキとヤマグワの使用頻度が高いという結果が出ている。

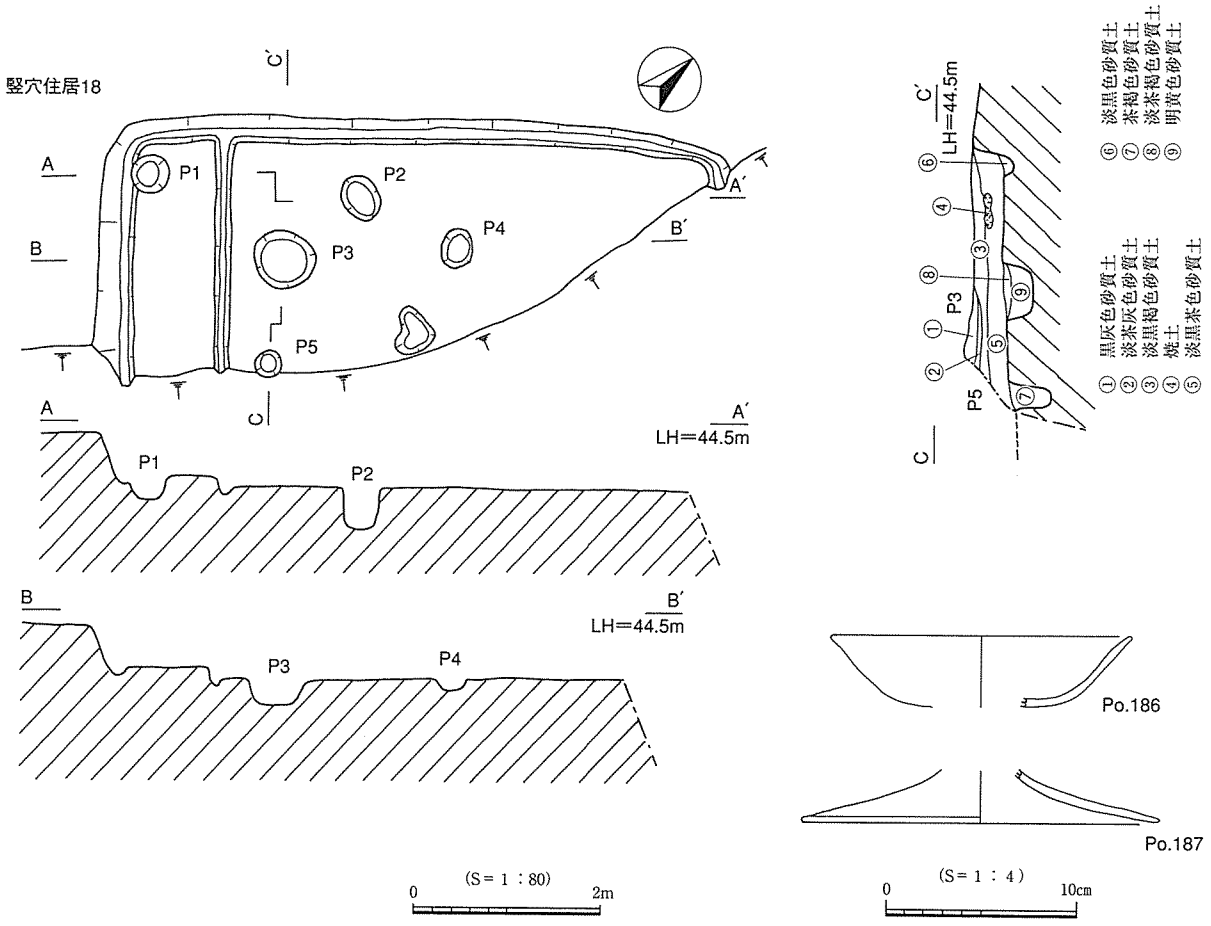
出土遺物は、埋土中より甕（Po.156～168）、壺（Po.169～171）、鉢（Po.172）、高坏（Po.173）、擦石（S.46）、砥石（S.47）、ガラス玉（G.1）が出土している。また、ガラス玉（G.1）は、P13の埋土中から出土しているが、高温化の環境にあったにも関わらず、表面は融けていない。これは、ピット内の温度が、ガラス玉を溶かすほど上昇しなかったことを示していると考えられる。この住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期中葉に相当するものと考えられる。



第50図　竪穴住居16　遺構・遺物図



第51図　竪穴住居17　遺構・遺物図



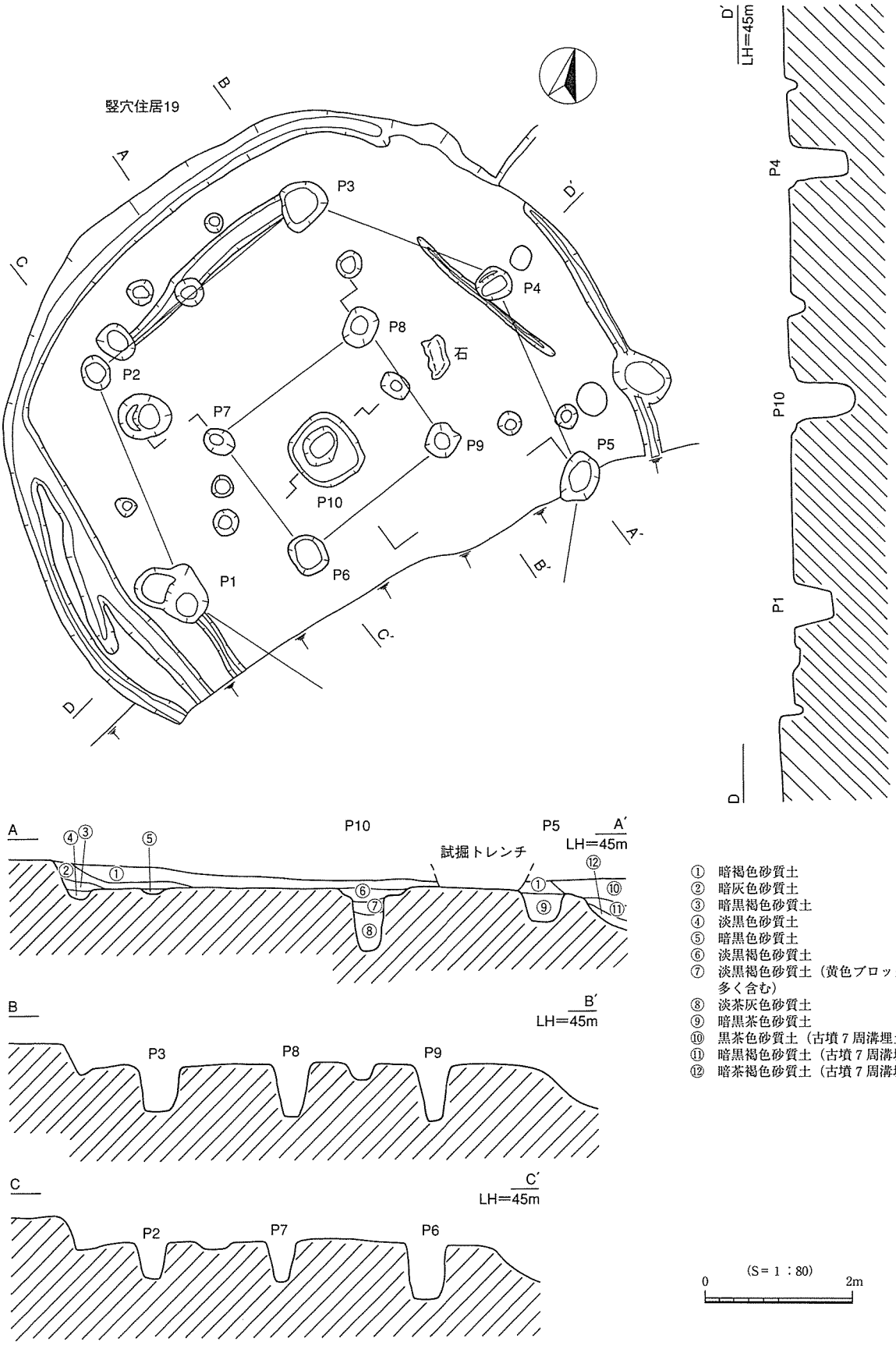
第52図　竪穴住居18　遺構・遺物図

竪穴住居16（第50図）

W－7区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。住居の規模は、長辺4.6m、短辺4.4m、深さは約40cmで、周囲には幅15cm、深さ約10cmの壁溝が巡る。主柱穴は4基で、直径20cmから40cm、深さ35cmから80cmである。また、P4の底部から石が検出されており、根石かまたは柱の長さを調節するために置かれた石と考えられた。中央ピットは直径40cm程の円形で、周囲には馬蹄形に5cmほど土が盛られている。また、この住居の北側床面において、焼土と炭化材の広がりが認められるため、本住居は焼失住居と考えられる。炭化材は、W4、W6のように、壁沿いに直立する形で分布するものと、W1、W5のように、住居中央に向かって倒れているものが見られる。W7は、P2の上面に直立した状態で検出したもので、柱材の可能性が考えられる。出土遺物は、埋土中から甕（Po.178～180）、高坏（Po.181）、台付土器（Po.182）などが出土している。この住居の時期は、出土した遺物から、弥生時代後期後葉のものと考えられる。

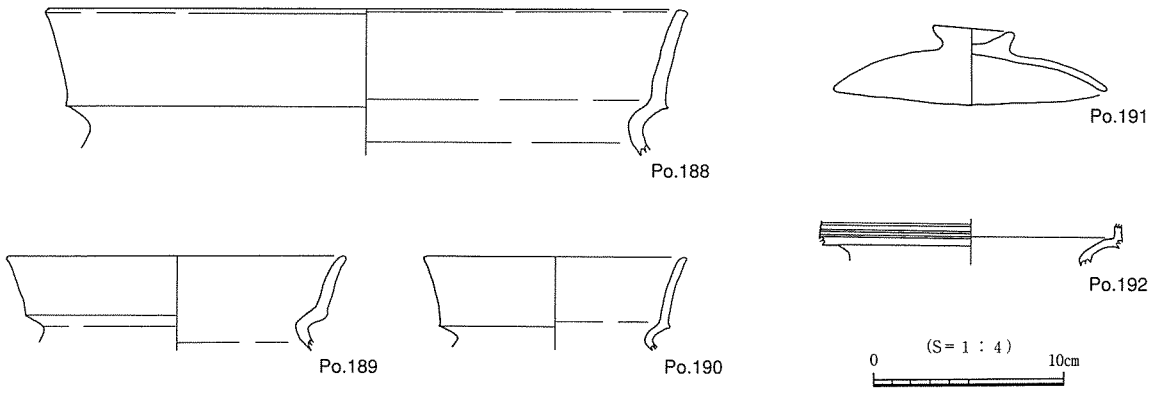
竪穴住居17（第51図）

W－7区で検出した円形の竪穴住居である。古墳5の周溝によって切られており、掘立柱建物17とは切り合う関係にあるが、試掘トレンチにより竪穴住居の床面まで掘削されていたために、掘立柱建物17との前後関係を明らかにすることは出来なかった。また、この住居の南側には、壁溝が2条巡っており、拡張を示すものと考えられる。住居の規模は、古段階の住居が、直径6mから6.4m、深さ20cmで、新段階の住居は、さらに南側へ60cmほど拡張され、楕円形状を呈していたものと考えられ



① 暗褐色砂質土
② 暗灰色砂質土
③ 暗黒褐色砂質土
④ 淡黒色砂質土
⑤ 暗黒色砂質土
⑥ 淡黒褐色砂質土
⑦ 淡黒褐色砂質土（黄色ブロック土を多く含む）
⑧ 淡茶灰色砂質土
⑨ 暗黒茶色砂質土
⑩ 黒茶色砂質土（古墳7周溝埋土）
⑪ 暗黒褐色砂質土（古墳7周溝埋土）
⑫ 暗茶褐色砂質土（古墳7周溝埋土）

第53図　竪穴住居19　遺構図



第54図　竪穴住居19　遺物図

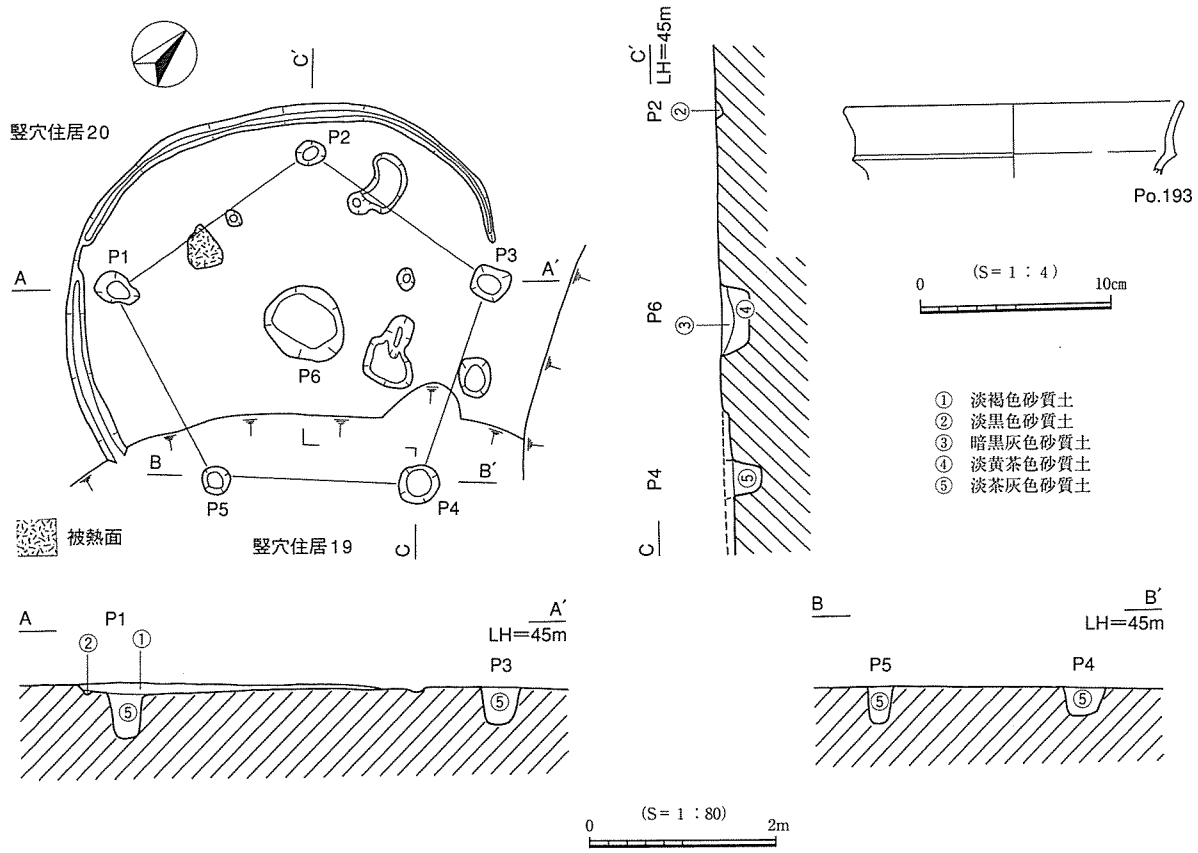
る。柱穴は、古段階が5基、新段階が6基で、新段階の住居は、柱穴P1とP2の掘り形をそのまま利用して建てられている。中央ピットは深さ60cmで、不整方形を呈する。壁溝は、幅15cm、深さ10cm程度である。また住居の床面には、赤く変色した被熱痕跡が数箇所見られる。出土遺物は、埋土中から甕（Po.183）、高坏（Po.184）、壺（Po.185）、釘と見られる鉄器片（F.7）が出土している。この住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期中葉のものと考えられる。

竪穴住居18（第52図）

W－5区の北東部で検出した方形の竪穴住居である。住居の大半は、現代の土取によって消滅している。規模は、一辺が6.8m前後、深さ60cmである。柱穴は複数検出したが、対応関係にある柱穴がなく、配列は不明である。住居の周囲には、幅20cm、深さ約10cmの溝が巡り、南西部に奥行き90cmのベッド状の高まりが見られる。出土遺物は、高坏（Po.186、187）が埋土中から出土している。この住居の時期は、出土した遺物から古墳時代前期前葉のものと考えられる。

竪穴住居19（第53・54図）

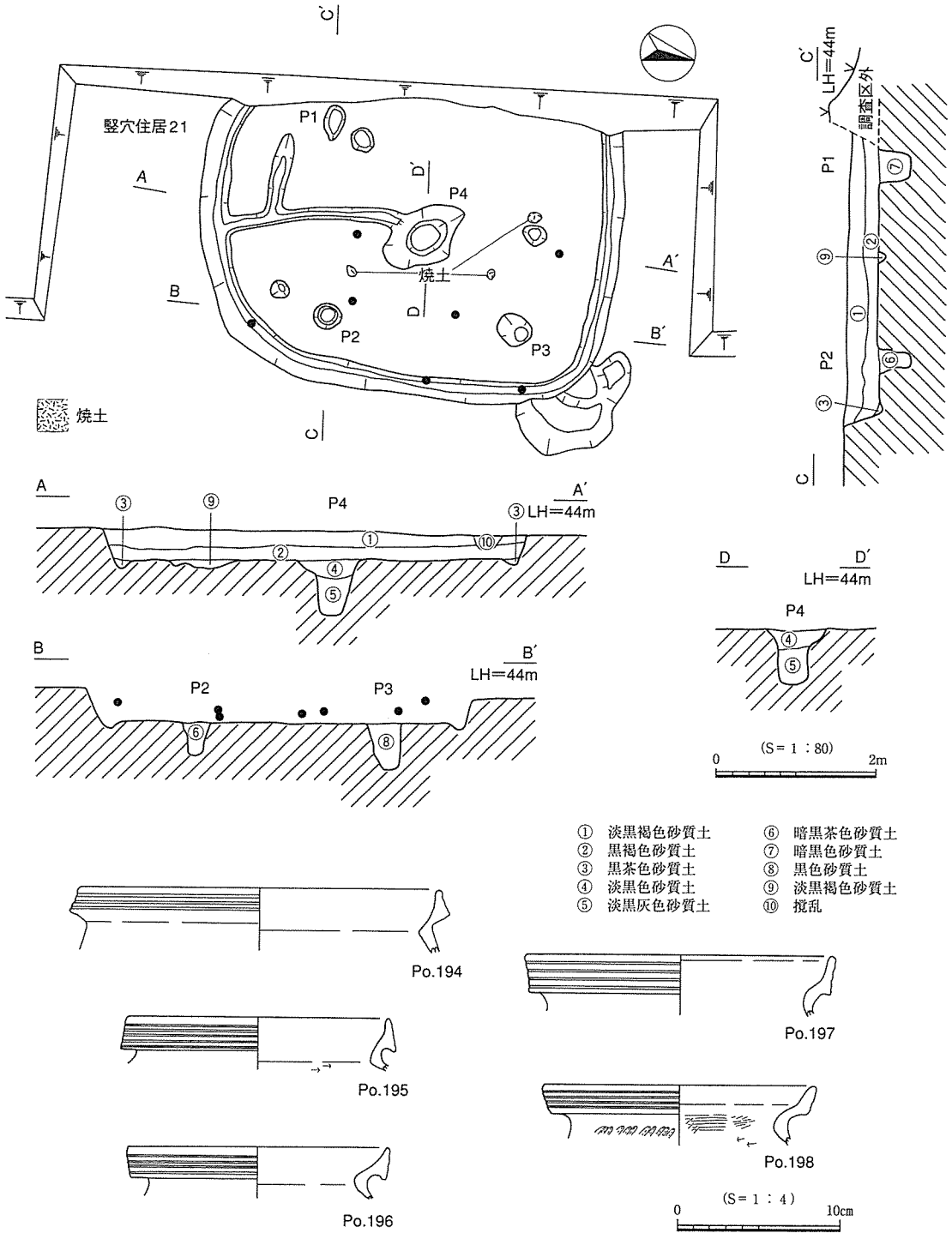
W－5区で検出した円形の竪穴住居である。住居の北側は竪穴住居20と切り合うが、埋土の遺存状態が悪く、両者の前後関係を明らかにすることは出来なかった。また住居の東側は、古墳7の周溝により削り取られている。主柱穴は、中央ピット寄りに4基、住居の壁寄りに6基ないし7基以上存在するものと考えられる。また、P2からP3の間、P1、P4沿いに溝が伸びる。住居内の仕切りを示すものとも考えられるが、断定は出来なかった。住居の規模は、直径が8.6m前後と推測され、深さは、南側で30cm程残存している。柱穴は、直径が40cmから50cmで、深さは60cmから80cm程度である。中央ピットは、検出面が隅丸方形で、底面は円形を呈する。規模は、検出面で一辺約90cm、底面で直径40cm程度、深さ約80cmである。壁溝は、幅15cmから30cm、深さ10cm程度で、南東部は2条になる。住居の拡張を示すものか。出土遺物は、甕（Po.188～190）、蓋（Po.191）、弥生土器の甕（Po.192）が埋土中から出土している。この住居の時期は、出土した遺物から古墳時代前期前葉のものと考えられる。



第55図　竪穴住居20　遺構・遺物図

竪穴住居20（第55図）

W－5区で検出した円形の竪穴住居である。住居の南側が竪穴住居19と切りあうが、埋土の遺存状態が悪く、前後関係を明らかにすることが出来なかった。規模は、直径が4.5m程度と推測され、深さは東側で10cm程度しか残っていなかった。住居内には、幅20cm、深さ5cm程度の壁溝が巡り、主柱穴は5基と考えられ、中央ピットを持つ。柱穴の規模は、直径が20cmから40cm、深さ40cm程度である。中央ピットは長径80cm、短径60cmで、深さは30cmである。出土遺物は、甕の口縁部片（Po.193）が出土しているが、表土中からの出土であり、この住居に伴うものか判断できなかった。



第56図　竪穴住居21　遺構・遺物図

竪穴住居21（第56図）

W－6区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。住居の西側は、調査区外に伸びる。規模は、一辺が5.2m、深さは40cm程度である。住居内には、幅20cm、深さ10cm程の溝が巡る。主柱穴は4基と推測されるが、調査では3基しか検出されなかった。柱穴の規模は、直径が30cmから40cm、深さは40cmから50cmである。中央ピットは、南側の壁溝と接続する溝を持つ楕円形のもので、長辺が1.1m、短辺60cm、深さは60cmである。床面には赤い被熱の痕跡が3箇所認められた。出土遺物は、埋土中から甕（Po.194～198）が出土している。この住居の時期は、出土した遺物から弥生時代後期前葉から中葉に属するものと考えられる。

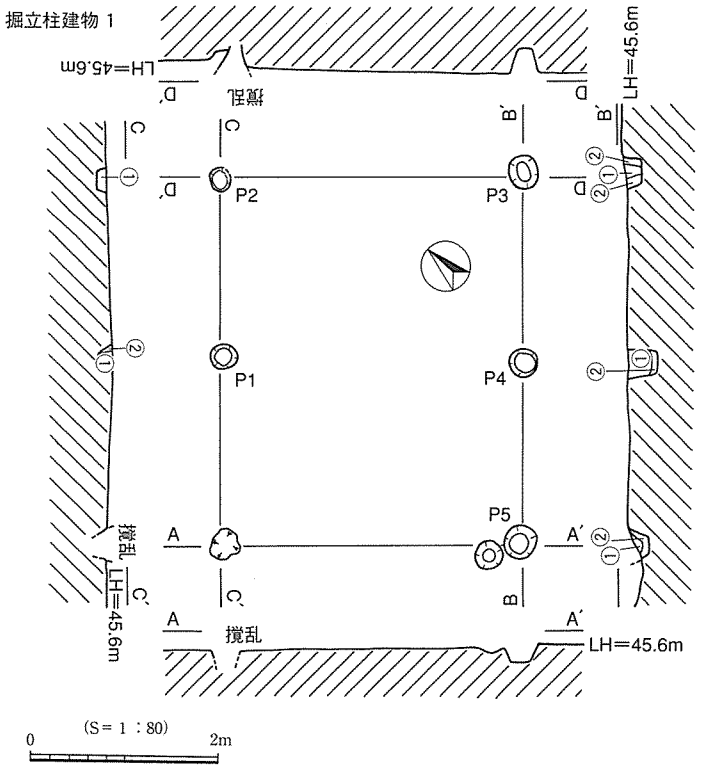
3．掘立柱建物跡

掘立柱建物１（第57図）

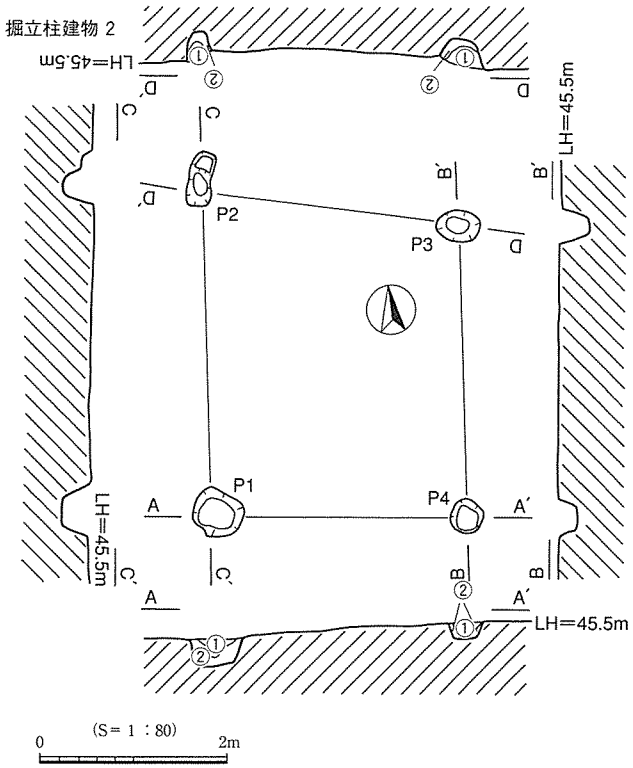
Ｅ－１区の南部で検出した２間×１間の掘立柱建物である。南西部の柱穴は、樹木の根によって撹乱されており、検出することは出来なかった。建物の規模は、柱間の寸法が、東西3.2m、南北3.9mを測る。柱穴は、直径が20cmから30cm、深さ10cmから30cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物２（第57図）

Ｅ－１区の西部で検出した１間×１間の掘立柱建物である。柱間の長さが不揃いで、平面形はいびつな菱形を呈する。建物の規模は、東西2.7m、南北3.2mから3.4m、柱穴は、直径30cmから40cm、深さ20cmから30cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。



① 黒茶褐色砂質土
② 黒茶褐色砂質土(黄色ブロック土を含む)



① 黒灰色砂質土
② 淡褐色粘質土

第57図　掘立柱建物１・２　遺構図

掘立柱建物３（第58図）

Ｗ－２区の東部で検出した１間×１間の掘立柱建物である。掘立柱建物２と重複するが、前後関係を明らかにすることは出来なかった。規模は、東西２m、南北2.4mで、柱穴は、直径25cmから40cm、深さ20cmから30cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物４（第58図）

Ｗ－２区の東部で検出した１間×１間の掘立柱建物である。規模は、東西1.8m、南北2.8mで、柱穴は、直径30cm、深さ25cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物５（第58図）

Ｗ－２区の東部で検出した２間×１間の掘立柱建物である。桁行の柱穴が西に寄っている。規模は、東西2.1m、南北２mで、柱穴の直径は30cmから40cm、深さ10cmから30cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物６（第58図）

Ｅ－３区で検出した１間×１間の掘立柱建物である。規模は、東西２m、南北2.3mで、柱穴の直径は、30cm、深さ15cmから25cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物７（第59図）

Ｅ－２、３区の東部で検出した２間×１間の掘立柱建物である。規模は、東西1.9m、南北3.1mで、柱穴の直径は40cmから50cm、深さ30cmから60cmである。出土遺物は、柱穴内から弥生土器の底部（Po.199）が出土している。この遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期以降のものと考えられる。

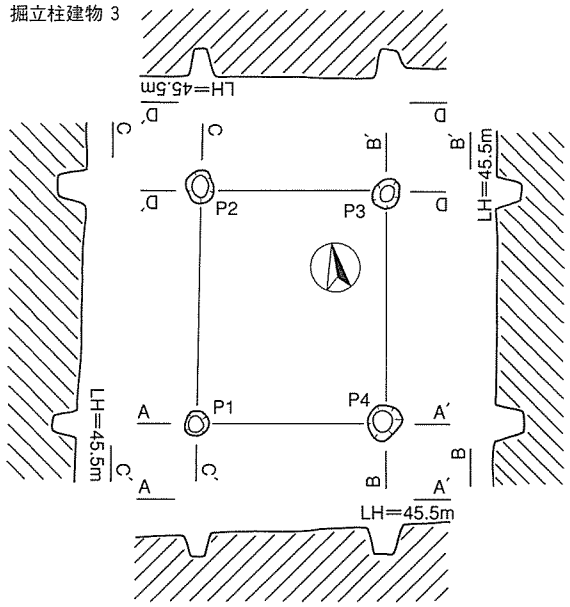
掘立柱建物８（第59図）

Ｅ－２、３区で検出した１間×１間の掘立柱建物である。規模は、東西2.2m、南北1.6mで、柱穴の直径が30cmから35cm、深さ10cmから40cmである。出土遺物は、柱穴内から壺の口縁部片（Po.200）が出土している。この遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期中葉以降のものと考えられる。

掘立柱建物９（第59図）

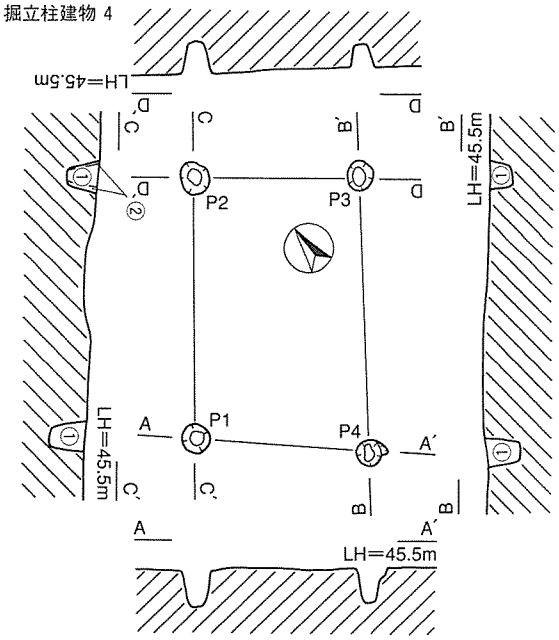
Ｅ－２、３区で検出した１間×１間の掘立柱建物である。規模は、東西1.3m、南北２m、柱穴の直径が30cmから50cmで、深さは50cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物 3



(S＝1：80)

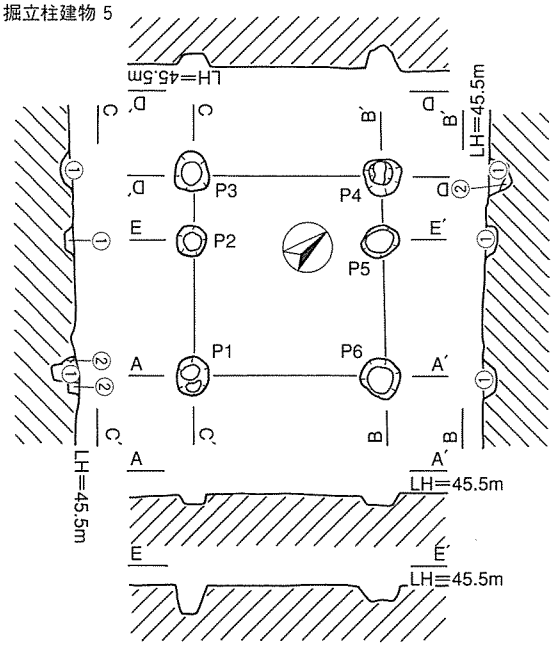
掘立柱建物 4



① 淡黒茶色砂質土
② 黒色砂質土

(S＝1：80)

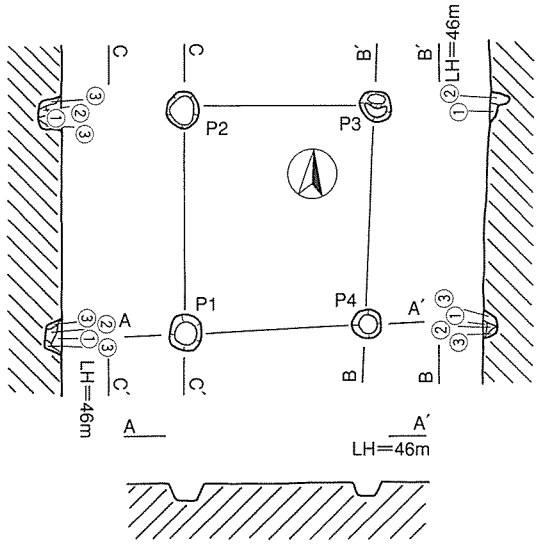
掘立柱建物 5



① 黒灰色砂質土
② 淡茶色粘質土

(S＝1：80)

掘立柱建物 6

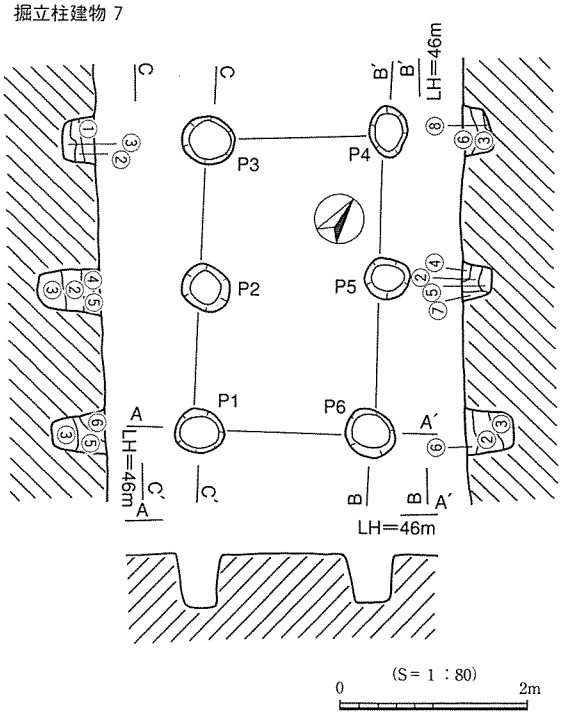


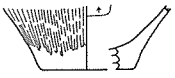
① 淡茶色砂質土
② 茶褐色砂質土
③ 灰色砂質土(黄色ブロック土を含む)

(S＝1：80)

第58図　掘立柱建物 3 ～ 6　遺構図

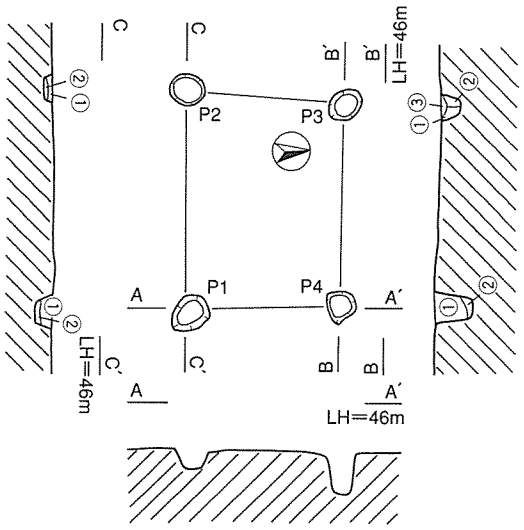
掘立柱建物 7



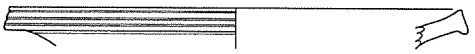


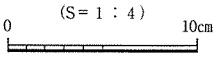
① 暗褐色砂質土
② 暗灰色砂質土(黄色ブロック土を含む)
③ 暗黒褐色砂質土
④ 灰褐色砂質土
⑤ 暗茶灰色砂質土(黄色ブロック土を含む)
⑥ 灰褐色砂質土
⑦ 黒色砂質土
⑧ 淡黄褐色粘質土

掘立柱建物 8

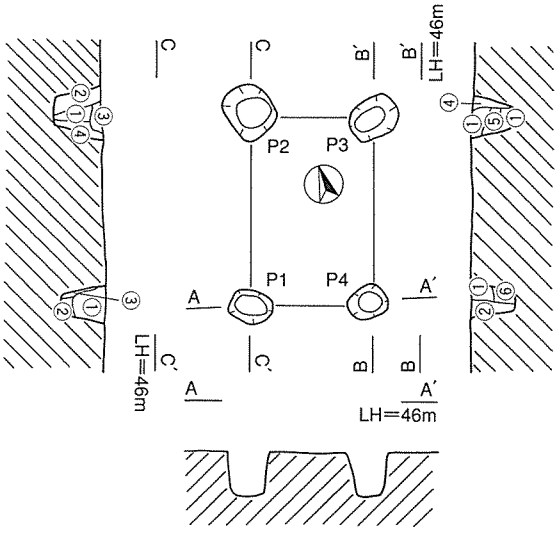


① 黒色砂質土
② 淡茶色粘質土
③ 暗黒色砂質土



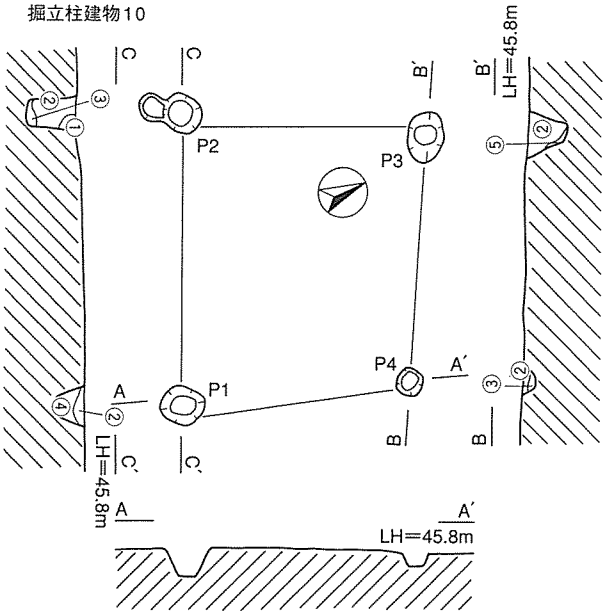


掘立柱建物 9



① 黒色砂質土(黄色ブロック土を含む)
② 茶褐色砂質土
③ 淡茶色砂質土
④ 淡茶色砂質土(黄色ブロック土を含む)
⑤ 黒色砂質土
⑥ 淡茶色粘質土

掘立柱建物10



① 灰色砂質土(黄色ブロック土を含む)
② 黒色砂質土
③ 淡茶色粘質土
④ 暗褐色砂質土
⑤ 淡茶色粘土

第59図　掘立柱建物 7 ～10　遺構・遺物図

掘立柱建物10（第59図）

Ｅ－２、３区で検出した１間×１間の掘立柱建物である。柱間の長さが不揃いで、平面形はいびつな菱形を呈する。規模は、東西が2.8mから３m、南北2.5mで、柱穴の直径は25cmから40cm、深さ15cmから50cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物11（第60図）

Ｅ－３区、古墳１の墳丘上で検出した２間×１間の掘立柱建物である。P6が土坑５を切り、P3が土壙墓３に切られている。規模は、東西３m、南北1.9mで、柱穴の直径は45cmから50cm、深さ30cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物12（第60図）

Ｅ－３区で検出した２間×１間の掘立柱建物である。規模は、東西２m、南北2.2mで、柱穴の直径は30cmから40cm、深さ10cmから30cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物13（第60図）

Ｗ－３区の東部で検出した１間×１間の掘立柱建物である。柱間の長さが不揃いで、平面形はいびつな菱形を呈する。規模は、東西が2.9mから３m、南北２mから2.2mで、柱穴の直径は、30cmから50cm、深さ30cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物14（第60図）

Ｅ－４区で検出した１間×１間の掘立柱建物である。規模は、東西が2.2m、南北2.8m、柱穴の直径は30cm、深さ10cmから30cmである。出土遺物は、柱穴内から擦石（S.49）が出土している。

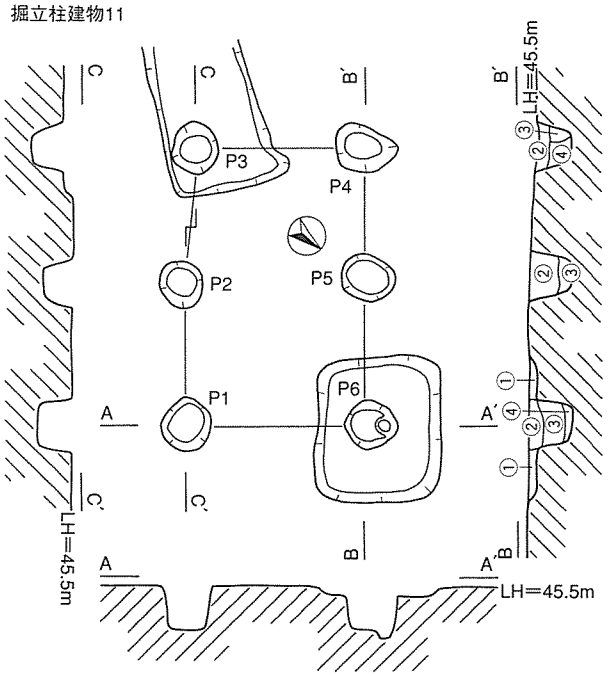
掘立柱建物15（第61図）

Ｅ－４区、古墳３の墳丘上で検出した２間×１間の掘立柱建物である。P5が東へ突出しており、柱筋の通りが悪い。規模は、東西1.8mから２m、南北3.6mから3.8m、柱穴の直径は30cm、深さ20cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物16（第61図）

Ｗ－３、４区で検出した２間×１間の掘立柱建物である。東側の柱穴が、竪穴住居14に切られている。規模は、東西が2.6m、南北1.8mで、柱穴の直径は30cmから60cm、深さ25cmから50cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明であるが、竪穴住居14に先行するものと考えられる。

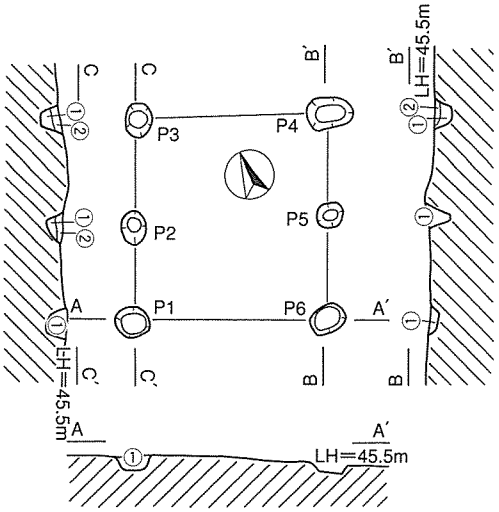
掘立柱建物11



① 暗黒褐色砂質土
② 黒灰色砂質土
③ 黄色粘土
④ 黒色砂質土

(S＝1：80)
0 2m

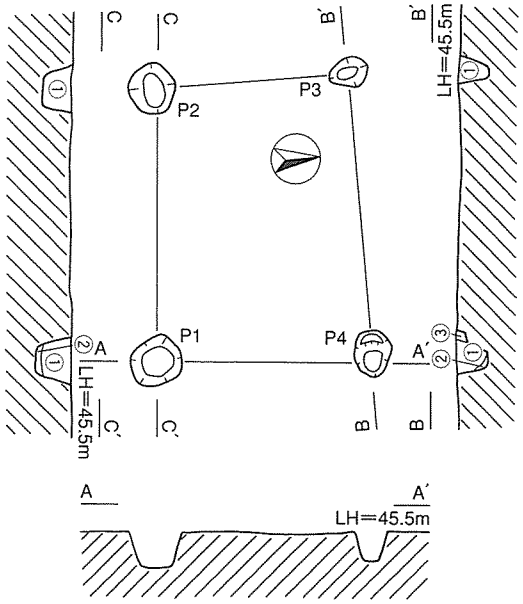
掘立柱建物12



① 黒色砂質土
② 暗灰色砂質土

(S＝1：80)
0 2m

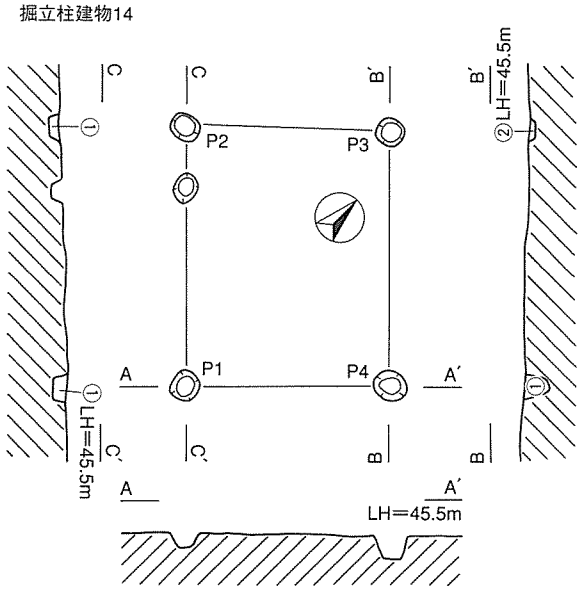
掘立柱建物13



① 暗褐色砂質土
② 淡茶色粘土
③ 灰色砂質土

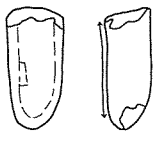
(S＝1：80)
0 2m

掘立柱建物14



① 褐色砂質土
② 淡褐色砂質土

(S＝1：80)
0 2m

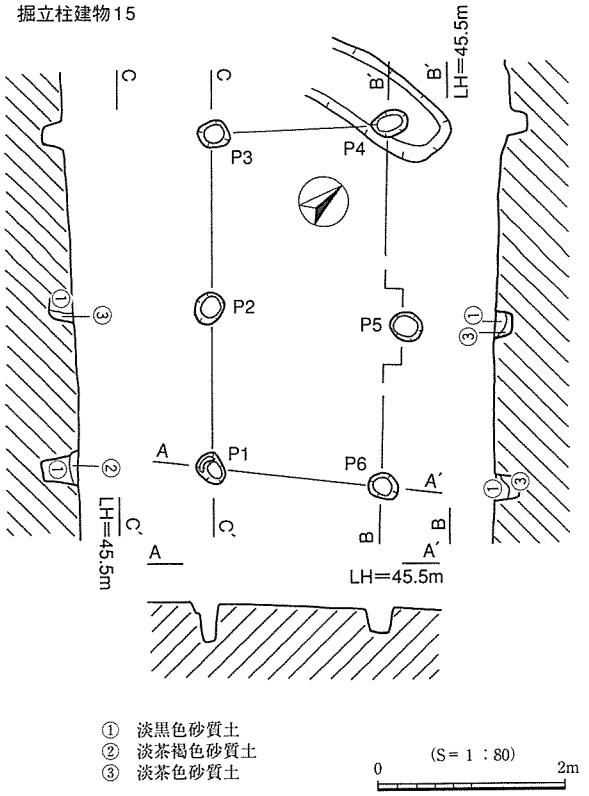


S.49

(S＝1：4)
0 10cm

第60図　掘立柱建物11～14　遺構・遺物図

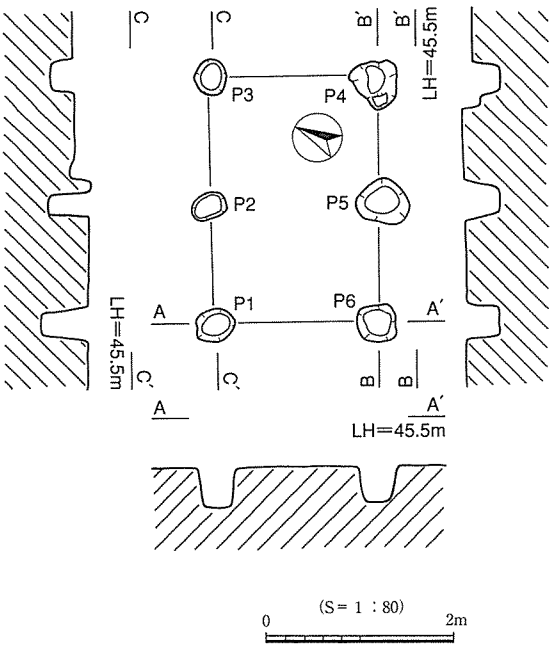
掘立柱建物15



① 淡黒色砂質土
② 淡茶褐色砂質土
③ 淡茶色砂質土

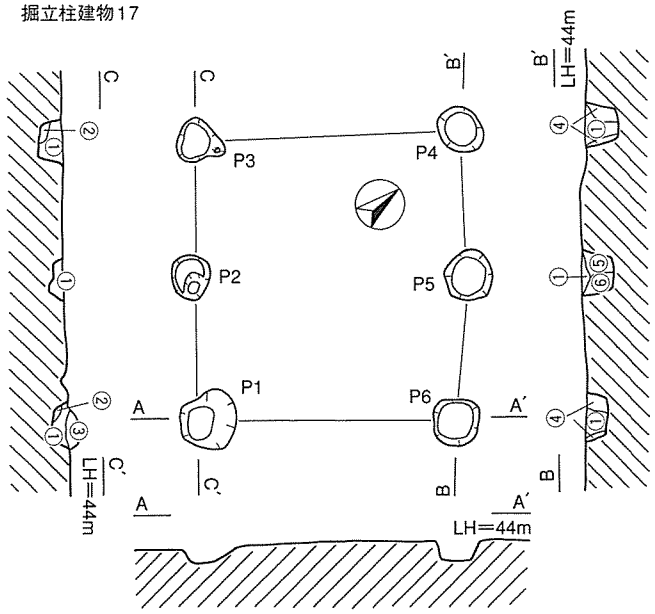
(S＝1：80)
0 2m

掘立柱建物16



(S＝1：80)
0 2m

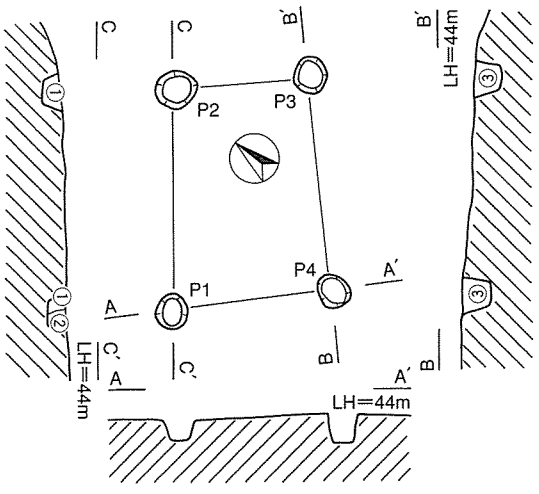
掘立柱建物17



① 暗黒色砂質土
② 淡茶色砂質土
③ 黒色砂質土
④ 暗灰色砂質土
⑤ 淡茶灰色砂質土
⑥ 暗灰色砂質土

(S＝1：80)
0 2m

掘立柱建物18



① 黒褐色砂質土
② 淡茶色砂質土
③ 淡褐色砂質土

(S＝1：80)
0 2m

第61図　掘立柱建物15～18　遺構図

掘立柱建物17（第61図）

W－7区の東部で検出した2間×1間の掘立柱建物である。竪穴住居17と切り合うが、前後関係を明らかにすることは出来なかった。規模は、東西3m、南北2.8m、柱穴の直径は40cmから60cm、深さ10cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物18（第61図）

W－7区で検出した1間×1間の掘立柱建物である。柱間の長さが不揃いで、平面形はいびつな台形を呈する。規模は、東西1.4mから1.6m、南北2.3m、柱穴の直径は30cmから40cm、深さ20cmから30cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物19（第62図）

W－4区の中央部で検出した1間×1間の掘立柱建物である。この遺構は、竪穴住居13によって切られている。また、北側が道路によって削平されているため、2間以上の規模があった可能性も考えられる。規模は、東西2.4m、南北2.3mで、柱穴の直径は40cmから50cm、深さ50cmである。柱穴からの出土遺物は無く時期は不明であるが、竪穴住居13に先行するものと考えられる。

掘立柱建物20（第62図）

W－4区の中央部で検出した1間×1間の掘立柱建物である。掘立柱建物19と重複しているが、前後関係を明らかにすることは出来なかった。規模は、東西2m、南北2.7mである。柱穴の直径は40cmから50cm、深さ50cmである。柱穴からの出土遺物は無く時期は不明であるが、竪穴住居13に先行するものと考えられる。

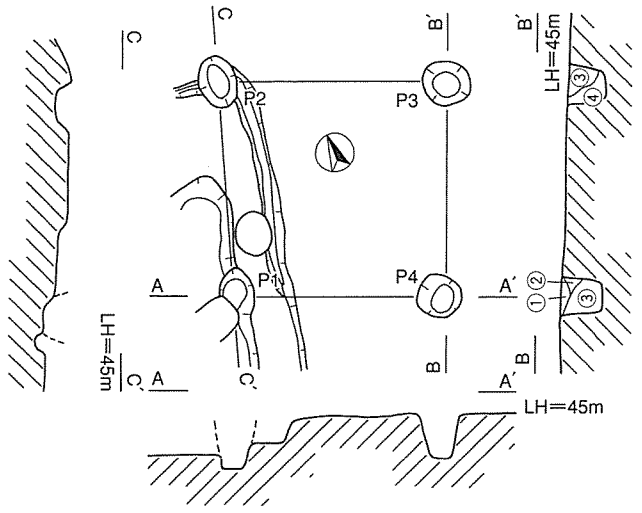
掘立柱建物21（第62図）

W－6、7区の古墳6の墳丘上で検出した2間×2間の掘立柱建物である。規模は、東西が4.6m、南北3.5mで、柱穴の直径が30cmから40cm、深さ30cmから70cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

4．溝状遺構1（第63図）

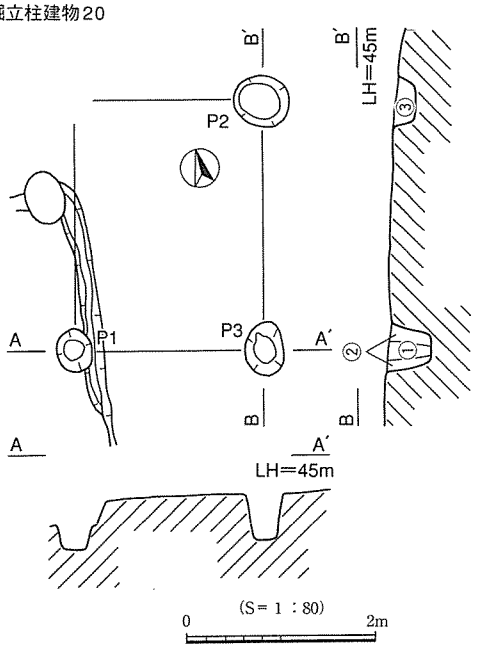
E－7区からW－8区にかけて検出した溝状の遺構で、検出長は約40mである。丘陵の裾部をカットすることによって形作られている。断面形は逆台形を呈し、底面の幅が50cmから1m前後、深さは南側で3mから4m、北側で50cmから60cm程度である。溝の埋土は、下層が淡黄茶色の砂質土であり、地山のローム層の土とほぼ同一である。上層は、褐色の砂質土、粘質土が堆積している。堆積状況から判断すると、溝の掘削後それほど時間を経ずに上層付近まで一気に埋没している状況が窺える。この遺構からの出土遺物は無く時期は不明であるが、表土剥ぎの段階で、古墳時代前期の土器（第92図、Po.272～274）が出土しており、古墳時代前期以前には埋没したものと考えられる。本遺構の性格については、弥生時代後期の集落を巡る環壕であった可能性が考えられる。

掘立柱建物19



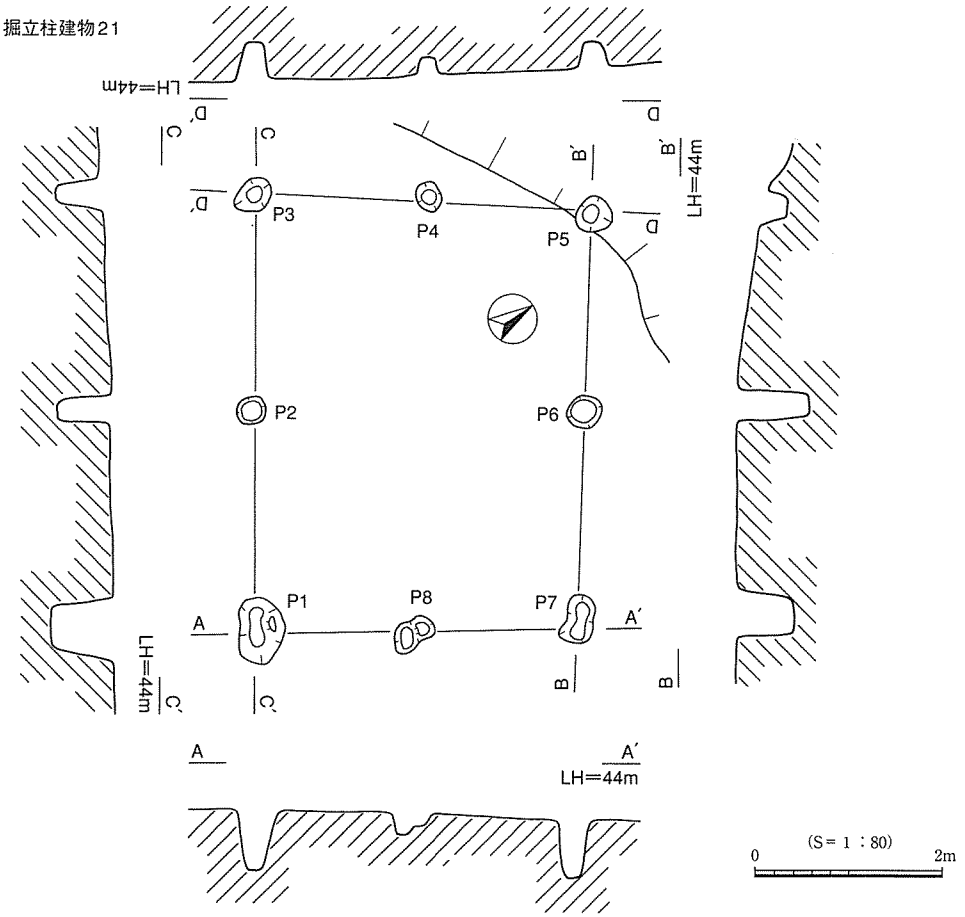
① 淡茶色砂質土
② 暗褐色砂質土
③ 淡黒色砂質土
④ 淡灰茶色砂質土

掘立柱建物20

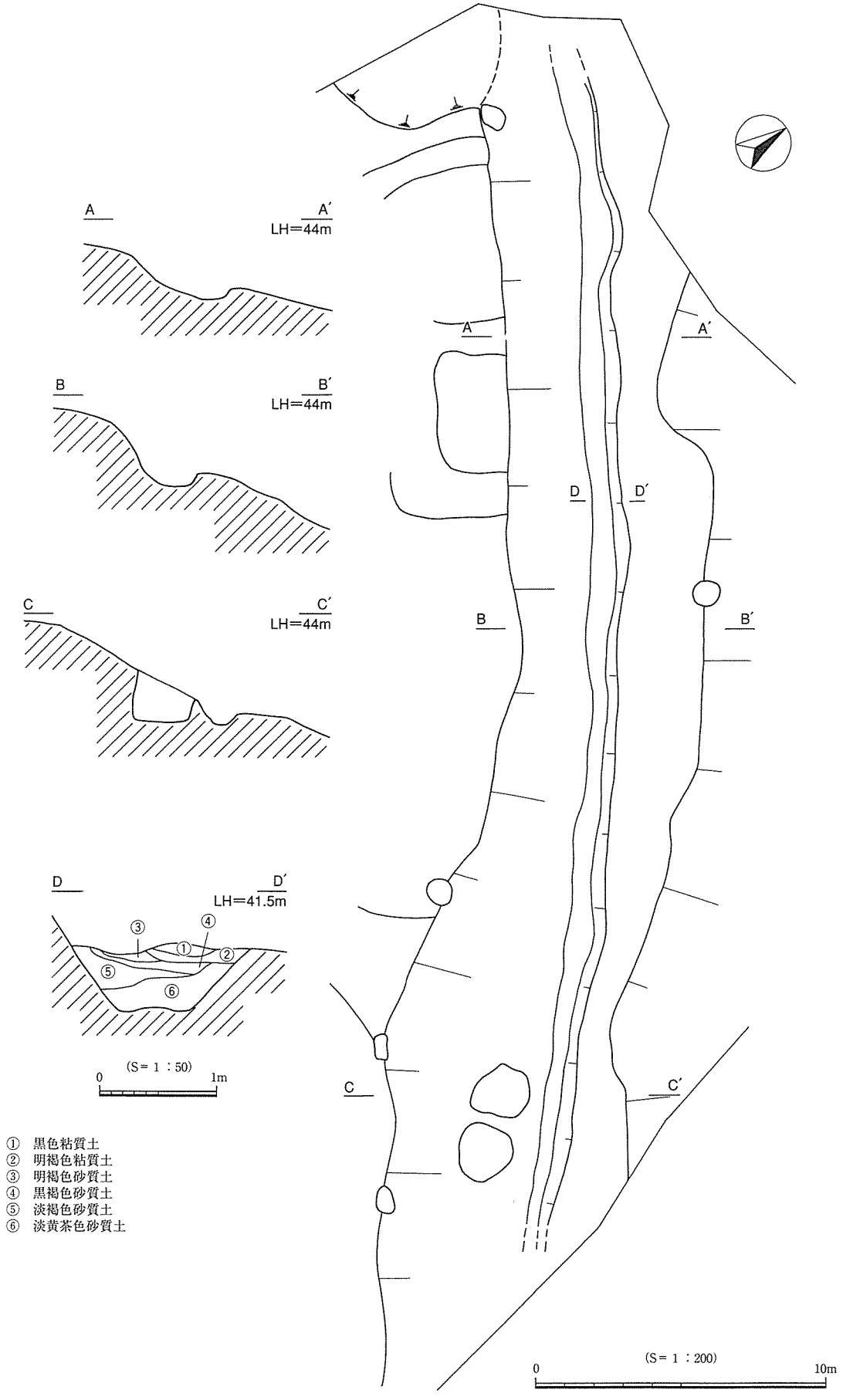


① 黒色砂質土
② 淡黒褐色砂質土(黄色ブロック土を含む)
③ 暗灰色砂質土

掘立柱建物21



第62図　掘立柱建物19～21　遺構図



第63図　溝状遺構１　遺構図

第５節　古墳時代前期から古墳時代後期の調査（墳墓）

古墳など埋葬施設の調査では、丘陵上より円墳７基、土壙墓11基、土器棺墓１基、諏訪神社旧境内地より、横穴墓の墓道部を１基検出した。古墳の保存状態は、墳丘部から周溝にいたるまで削平されているものがあり、良好とは言えない状況であったが、周溝内に埋葬施設が残るものもあった。この古墳群は、調査地の北側に分布している諏訪古墳群の支群と考えられるが、直径30m近い大形の円墳もあり、諏訪古墳群の中心的な位置を占めていた可能性も考えられる。

古墳１（第64・65図）

Ｅ－２、３区に位置する円墳である。墳丘の直径が15m、周溝を含めた直径が20mで、周溝の深さは30cmから60cmである。墳丘部は耕作により削平されており、中心部の埋葬主体は確認できなかったが、墳丘の西側から、土壙墓１基と周溝内から土壙墓２基を検出した。出土遺物は、周溝内の埋土中から、須恵器の坏（Po.201、202）、高坏（Po.203、204）、壺（Po.205）、甕（Po.206）、土師器長頸壺（Po.213）などが出土している。また周溝内から古代の須恵器坏蓋（Po.209）、砥石（S.51～53）、煙管の吸口（B.1）と羅宇（W.1）などの混入した遺物も出土している。この古墳の時期は、出土した遺物から古墳時代中期（５世紀後半から６世紀前半）のものと考えられる。

土壙墓１（第66図）

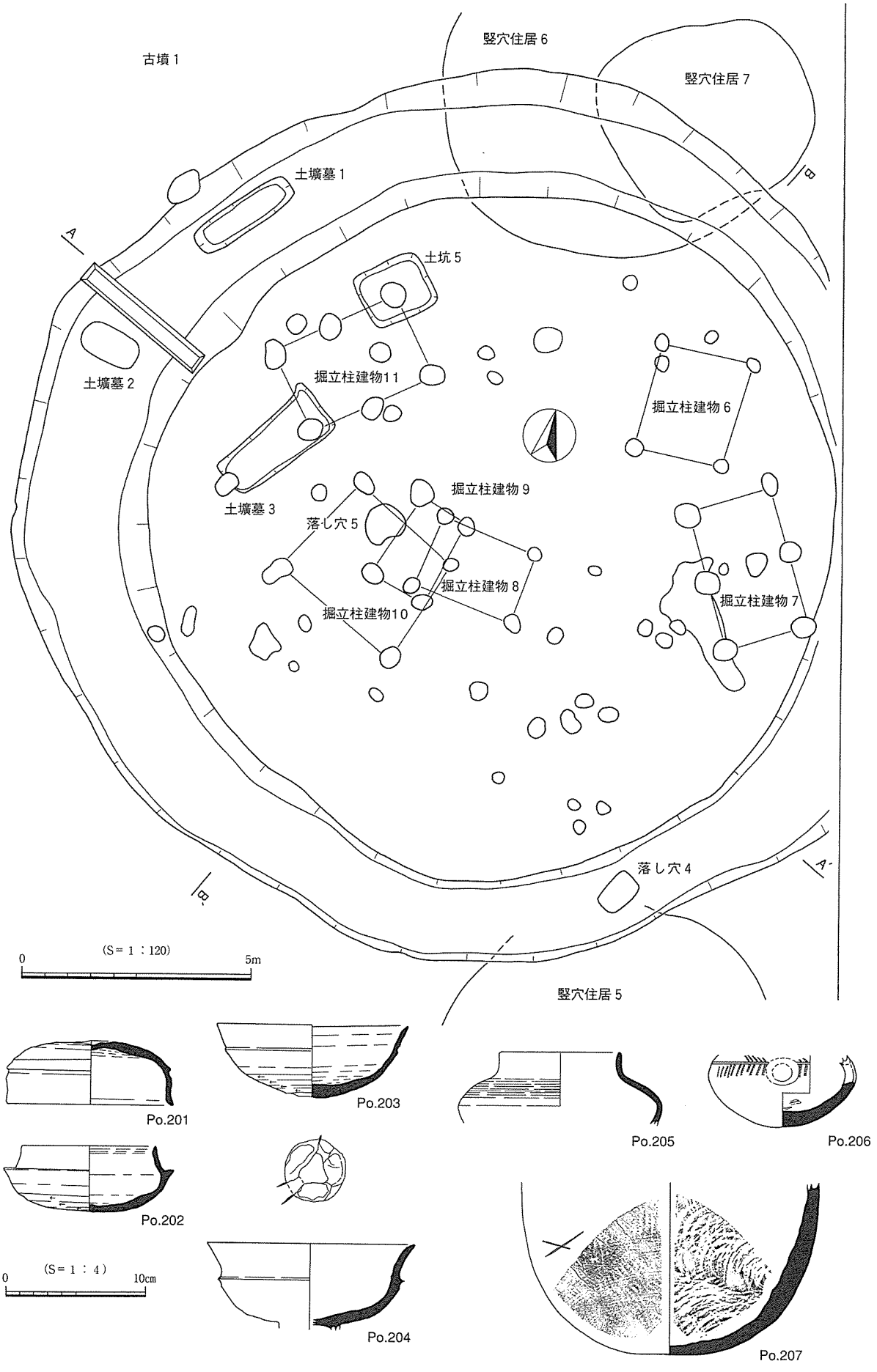
古墳１北西部の周溝内において検出した土壙墓である。規模は、長辺が2.4m、短辺70cm、深さ60cmである。副葬品は見られなかったが、埋土の中層から上層にかけて須恵器甕（Po.215）、土師器甕（Po.216、217）が出土しており、墓壙上に供献されていたものと考えられる。木棺、木蓋の痕跡は確認されなかった。墓壙内の南西部床面、50cm×25cmの範囲に赤色の顔料が撒かれていた。この顔料については、蛍光Ｘ線分析（第四章、第六節）の結果、ベンガラと推定されている。この遺構の時期は、出土した遺物から古墳時代中期（５世紀後半から６世紀前半）のものと考えられる。

土壙墓２（第66図）

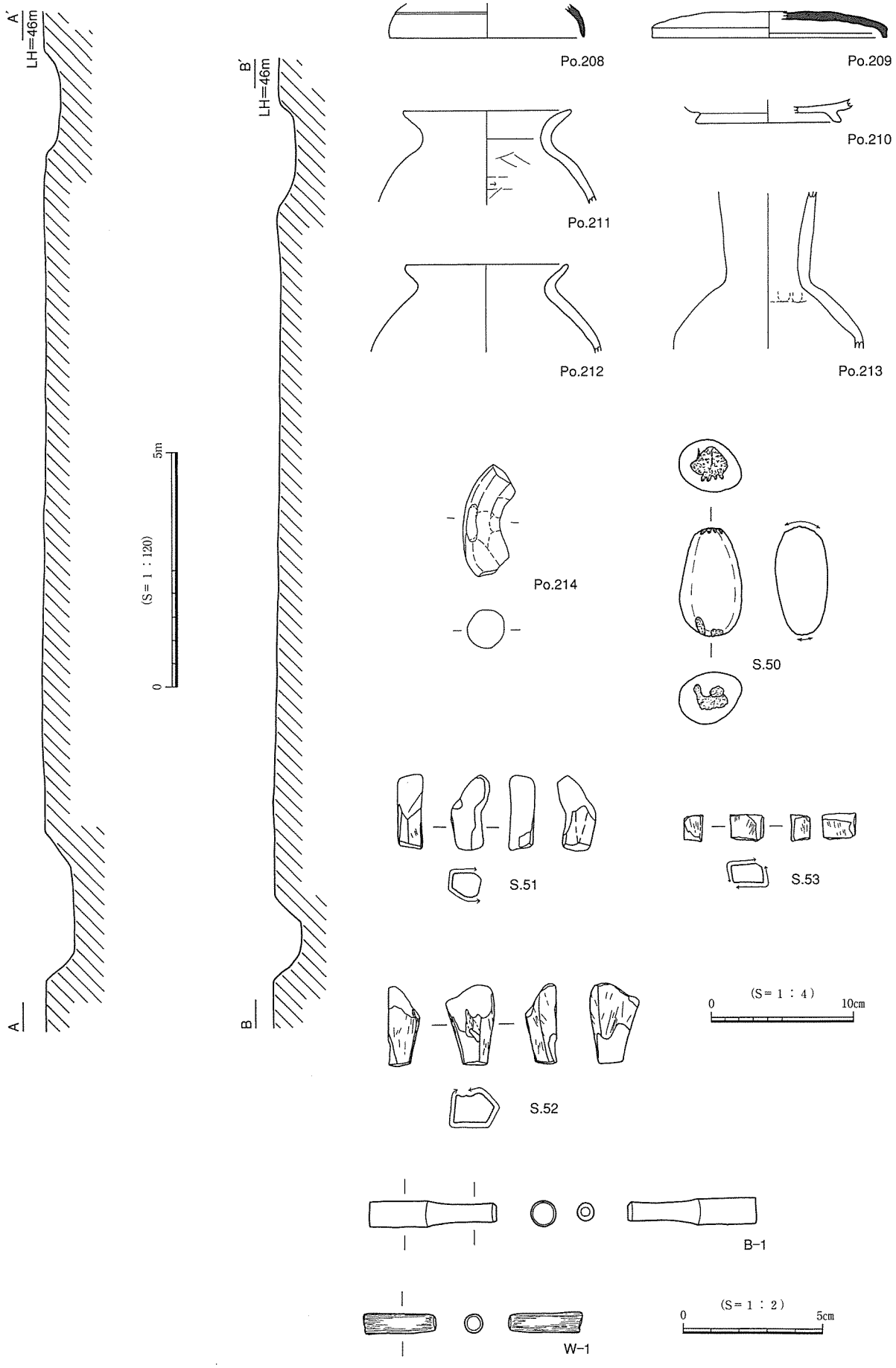
古墳１西部の周溝内において検出した楕円形の土壙である。規模は、長辺が1.5m、短辺70cm、深さ45cmである。遺構の南側に、人頭大から拳大の川原石が組まれている。遺構の性格については不明であるが、土壙墓１と同様に周溝内埋葬の施設と考えた。この遺構に伴う出土遺物は無く時期は不明である。

土壙墓３（第66図）

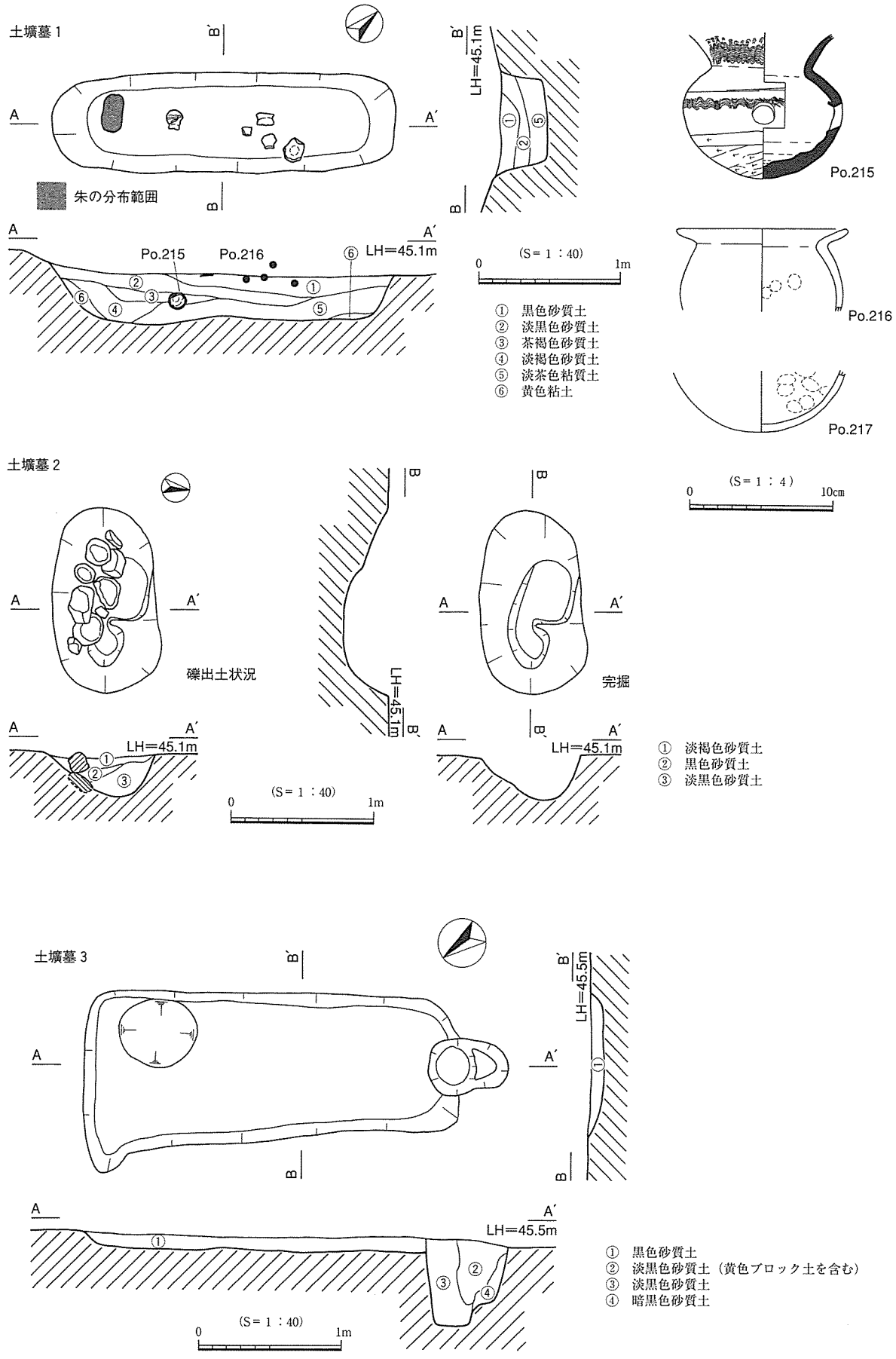
古墳１の西部、墳丘上において検出した長方形の土壙である。古墳１に先行する掘立柱建物11の柱穴を切っており、古墳１と同時期の可能性が考えられる。規模は、長辺が2.2m前後、短辺１mから1.2m、残存する深さが10cmである。検出面において精査したが、木棺痕跡は確認されなかった。形態的な特徴から土壙墓と考えた。本遺構からは遺物の出土は見られなかった。



第64図　古墳１　遺構・遺物図１



第65図　古墳１　遺構・遺物図２



第66図　土壙墓1～3　遺構・遺物図

古墳２（第67図）

Ｅ－３区からＷ－３区にかけて検出した円墳である。落し穴６、竪穴住居８を切っている。規模は直径が８ｍ程度で、周溝を含めた直径は約10m、深さは10cmから20cmである。周溝の南西部を橋状に掘り残している。墳丘は削平されているが、主体部と考えられる長方形の土壙が、墳丘の中央に竪穴住居８を切る形で遺存している。遺物については、周溝内から弥生土器（Po.218、219）が出土しているが、竪穴住居８に伴う遺物と考えられるため、時期については不明である。

土壙墓４（第68図）

古墳２の墳丘中央で検出した埋葬施設である。遺構の東側は、竪穴住居８を切っている。規模は長辺が2.3m、短辺80cm以上、深さ15cmで墓壙内に幅15cm、深さ10cmの溝が巡る。周溝は、石棺の棺材を据え付けるためのものとも考えられたが、断面では抜き取った痕跡は確認されなかった。本遺構の時期については、埋土中からの出土遺物が無く時期は不明である。

土壙墓５（第68図）

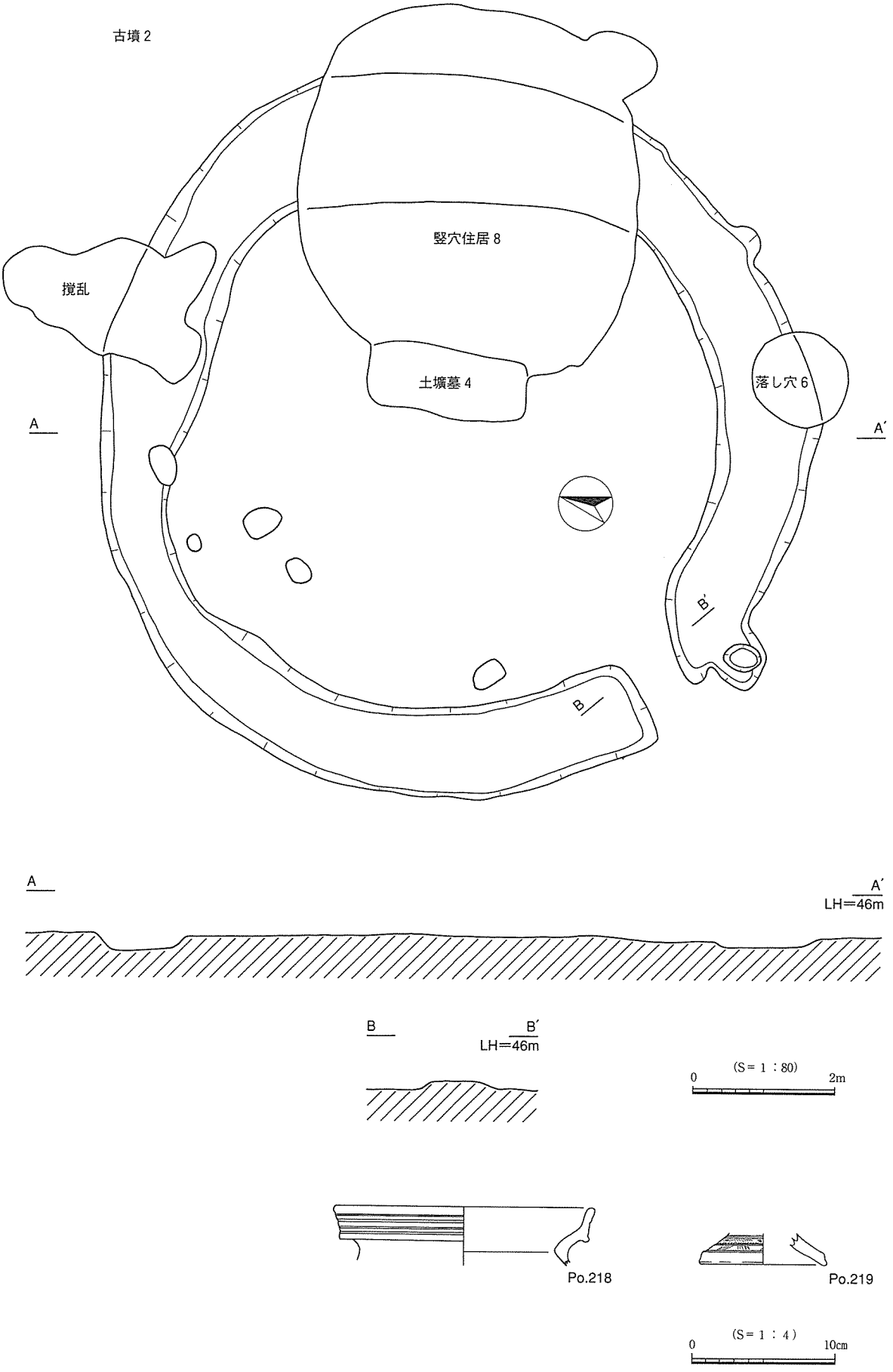
竪穴住居13内で検出した方形の土壙である。土壙の底面に溝が２条、存在することから、木棺墓の可能性が考えられる。棺内の規模は長辺が１ｍ程度、短辺が50cm、深さ30cm程度と考えられる。出土遺物は、埋土中より器種不明の鉄製品断片（F.8）が出土している。時期については、竪穴住居13を切っていることから、古墳時代前期以降に作られたものと考えられる。

古墳３（第69図）

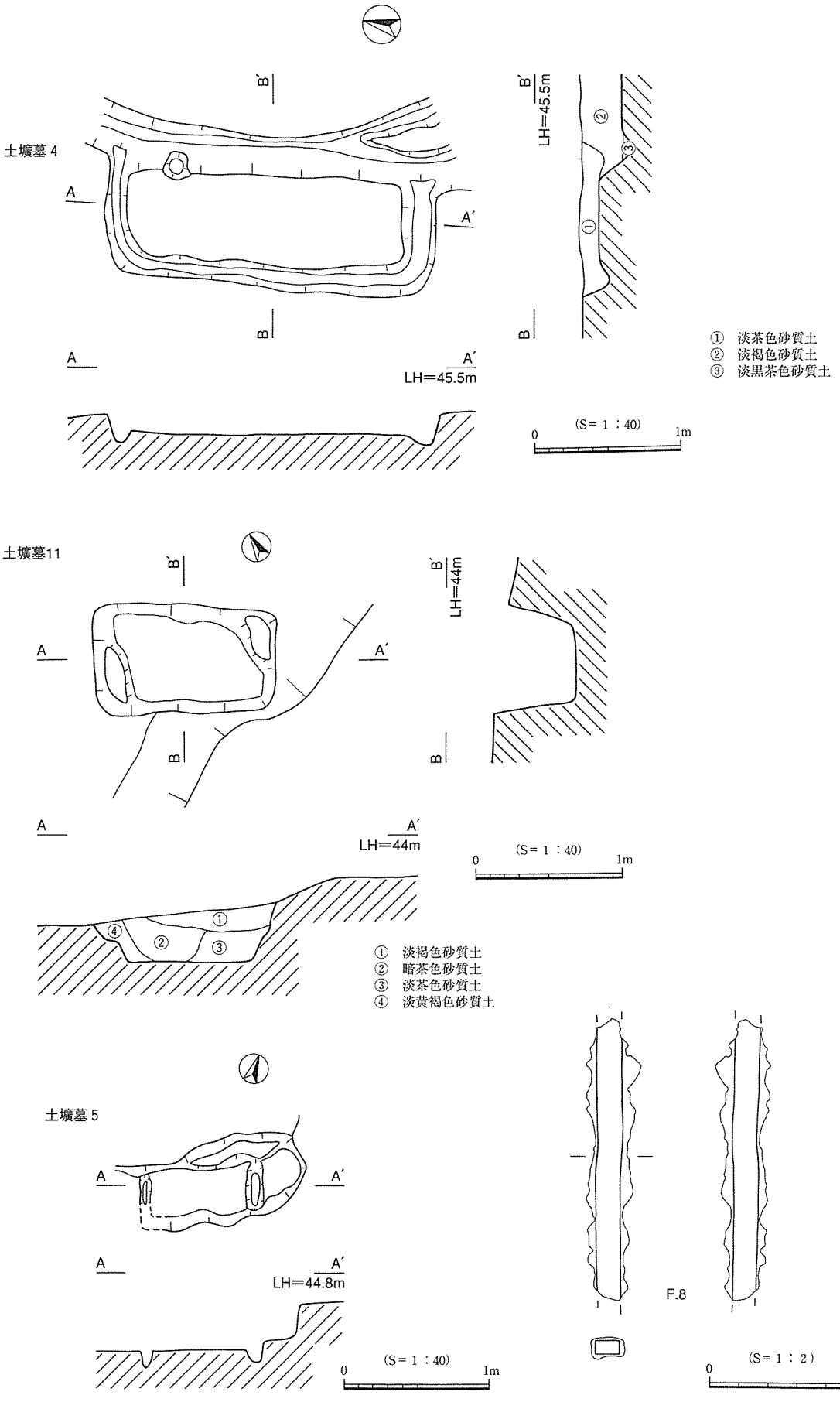
Ｅ－４区で検出した円墳である。規模は墳丘の直径が８ｍ前後、周溝を含めた直径が10mから11m程度と推測される。撹乱が著しく、墳丘、埋葬施設とも削平されており、周溝も部分的にしか確認されなかった。この遺構の時期については、出土遺物が無いため不明であるが、竪穴住居10を切っており、古墳時代前期以降のものと考えられる。

古墳４（第70図）

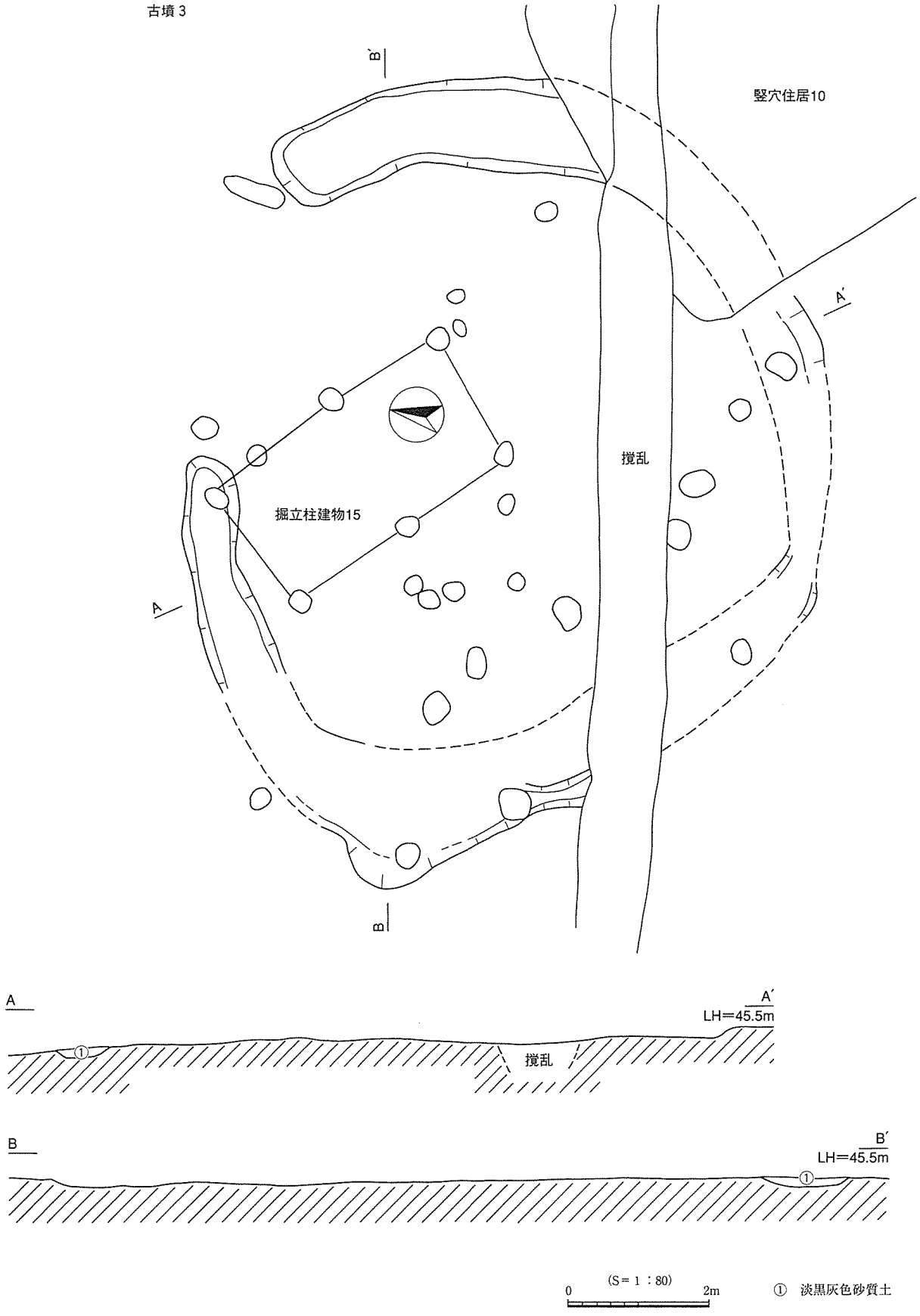
Ｗ－４区で検出した円墳である。遺構の保存状態が悪く、東側部分の周溝しか遺存していない。規模は、直径８ｍ程度の円墳と考えられる。遺物は、周溝内から土師器壺（Po.220）が出土している。本遺構の時期は、出土した遺物から古墳時代前期後半から中期のものと考えられる。



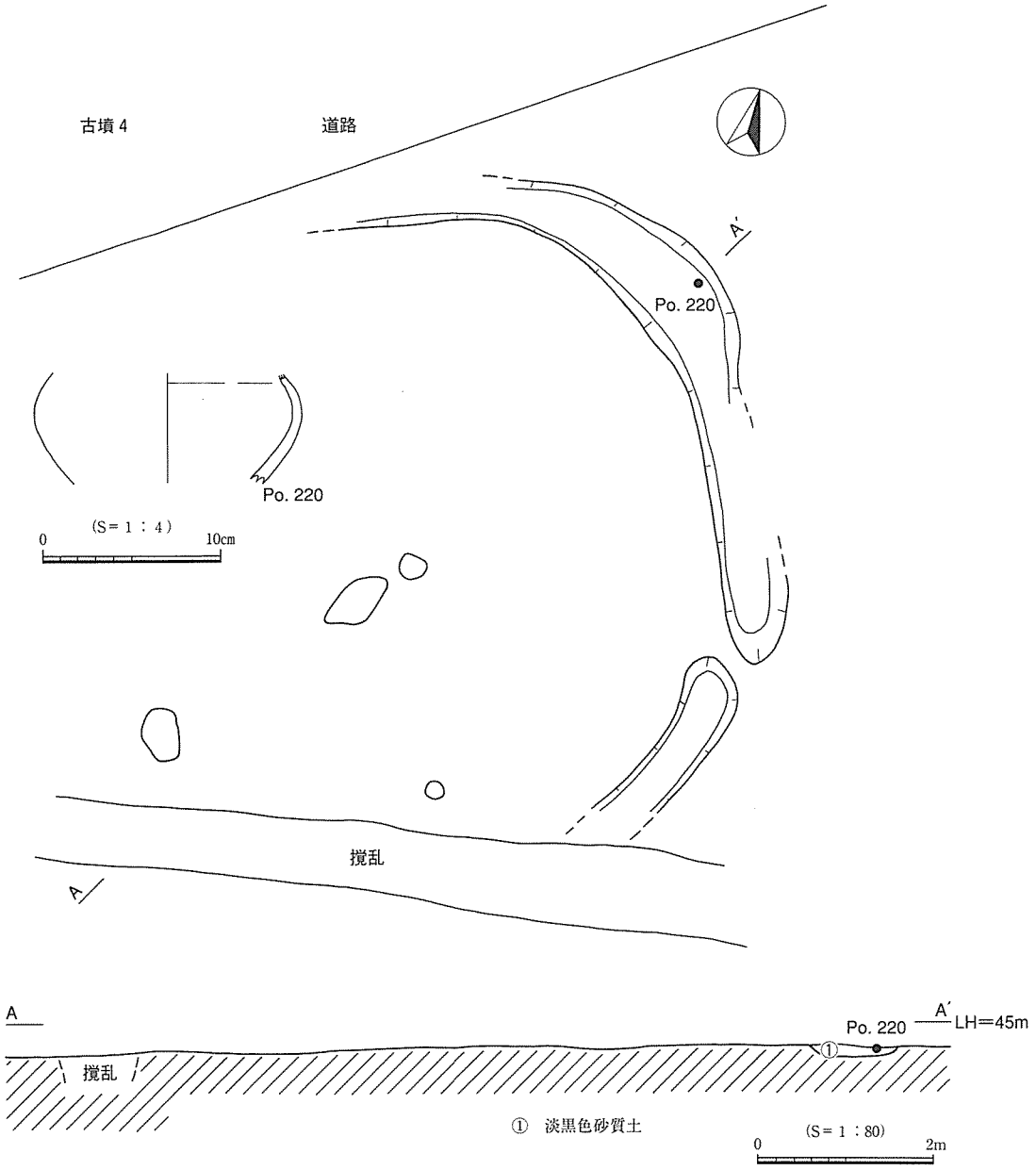
第67図　古墳2　遺構・遺物図



第68図　土壙墓4・5・11　遺構・遺物図


古墳3
B´
竪穴住居10
A´
撹乱
掘立柱建物15
A
B
A
A´
LH=45.5m
①
撹乱
B
B´
LH=45.5m
①
(S=1：80)
0
2m
① 淡黒灰色砂質土

第69図　古墳3　遺構図



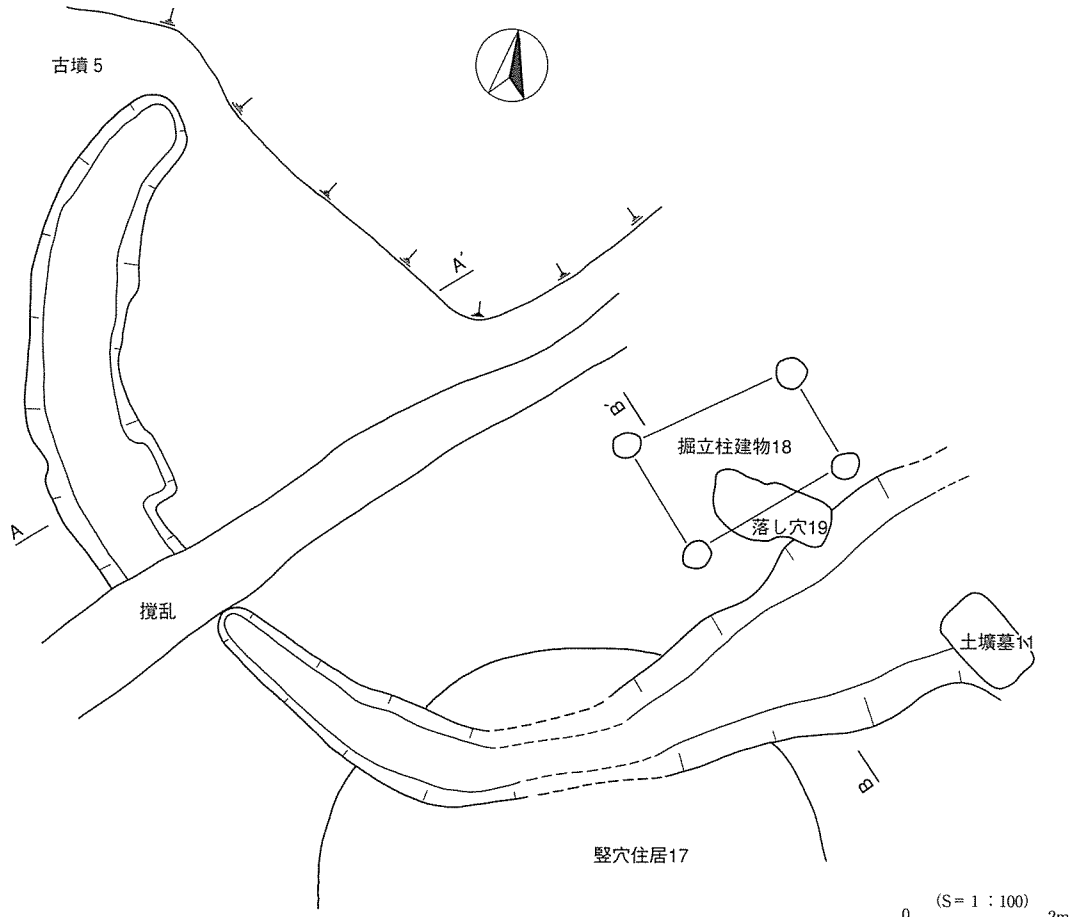
第70図　古墳4　遺構・遺物図

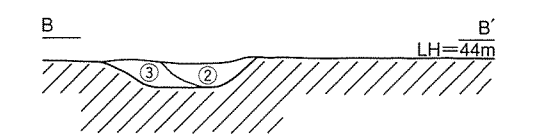
古墳5（第71図）

W－7区で検出した円墳と考えられる遺構である。周溝の北側は、周溝墓2によって切られているが、北側の斜面に隣接しており、当初から「コ」の字形に途切れていた可能性も考えられる。墳丘部の規模は、直径が9m程度で、周溝を含めた直径は12m程度と推定される。遺物は、周溝内から底部が打ち欠かれた土師器直口壺（Po.221）、土師器甕（Po.222）、土師器高坏（Po.223）、須恵器甕体部片（Po.224、225）が出土している。本遺構の時期は、出土した遺物から古墳時代中期のものと考えられる。

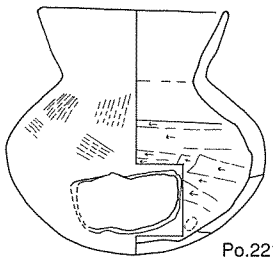
土壙墓11（第68図）

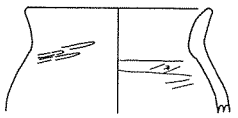
古墳5の周溝部東側で検出した方形の土壙である。古墳の周溝内に位置することから、周溝内埋葬に伴う土壙墓と考えた。規模は、長辺が1.2m、短辺が70cm、残存する深さが40cmである。本遺構の時期については、出土遺物が無く時期は不明である。





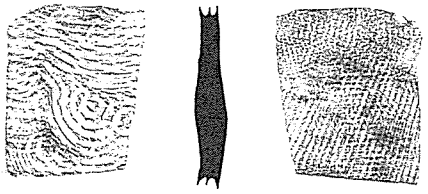
① 淡黒色砂質土
② 灰褐色砂質土
③ 暗褐色砂質土


Po.221


Po.222

Po.223

Po.224


Po.225

(S=1:4)
0
10cm

第71図　古墳5　遺構・遺物図

古墳6（第72・73図）

6区から7区にかけて検出した円墳である。墳丘は既に削平されており、盛土は残っていなかった。南側は、古墳7と周溝を共有している。墳丘の規模は直径が15m、周溝を含めた直径が20m前後である。また、周溝の深さは20cmから30cmである。墳丘部の北側から方形の土壙墓を4基、南側から楕円形の土壙墓を1基検出している。なお、墳丘の中央部は、撹乱が著しく中心的な埋葬施設は確認されなかった。西側周溝内には、供献儀礼に使用されたと見られる土師器高坏（Po.226～233）が出土している。また、北西部の周溝内から中世のものと見られる土師器の土鍋片（Po.234）が出土している。この遺構の時期は、出土した遺物から古墳時代前期後半から中期のものと考えられる。

土壙墓6（第74図）

古墳6の墳丘内、北側で検出した方形の土壙である。墳丘上で検出されたことから、古墳6に伴う土壙墓の可能性が高いものと考えた。規模は長辺が85cm、短辺が50cm、残存する深さが35cmである。本遺構の時期については、出土遺物が無く時期は不明である。

土壙墓7（第74図）

古墳6の墳丘内、北側で検出した方形の土壙である。墳丘上で検出されたことから、古墳6に伴う土壙墓の可能性が高いものと考えた。規模は長辺が70cm、短辺が45cm、残存する深さが20cmである。本遺構の時期については、出土遺物が無く時期は不明である。

土壙墓8（第74図）

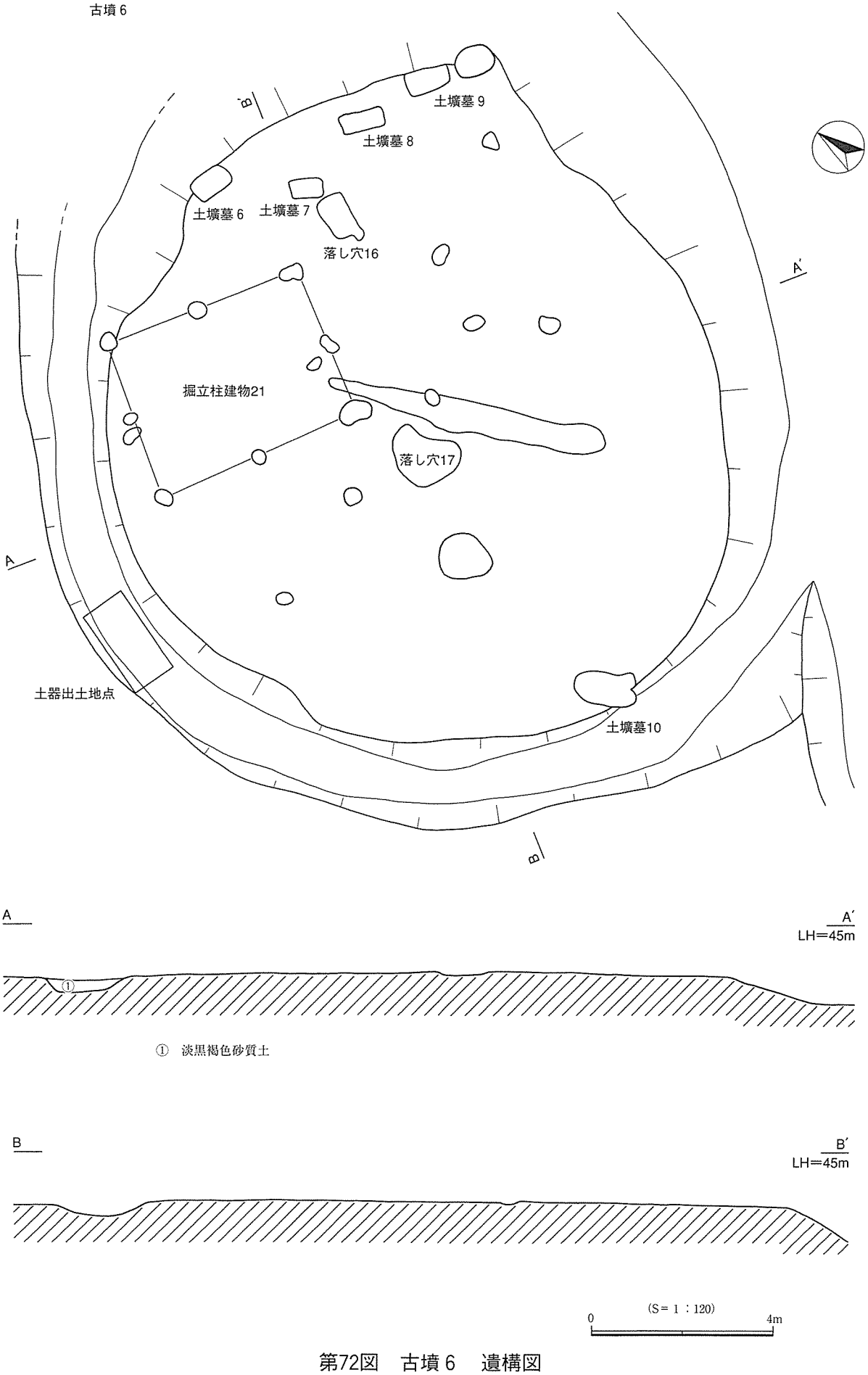
古墳6の墳丘内、北側で検出した方形の土壙である。墳丘上で検出されたことから、古墳6に伴う土壙墓の可能性が高いものと考えた。規模は長辺が90cm、短辺が45cm、残存する深さが40cmである。本遺構の時期については、出土遺物が無く時期は不明である。

土壙墓9（第74図）

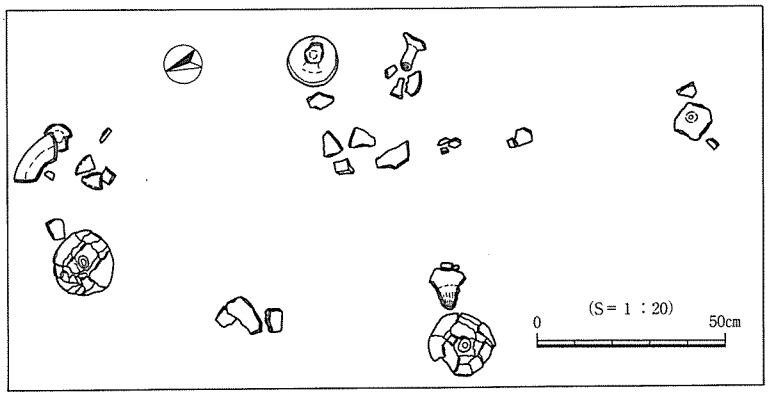
古墳6の墳丘内、北側で検出した方形の土壙である。墳丘上で検出されたことから、古墳6に伴う土壙墓の可能性が高いものと考えた。規模は長辺が1m、短辺が50cm、残存する深さが50cmである。また、木棺痕跡については確認されなかったが、土壙底面の周囲に裏込め状の土が存在することから、木棺墓であった可能性も考えられる。本遺構の時期については、出土遺物が無く時期は不明である。

土壙墓10（第74図）

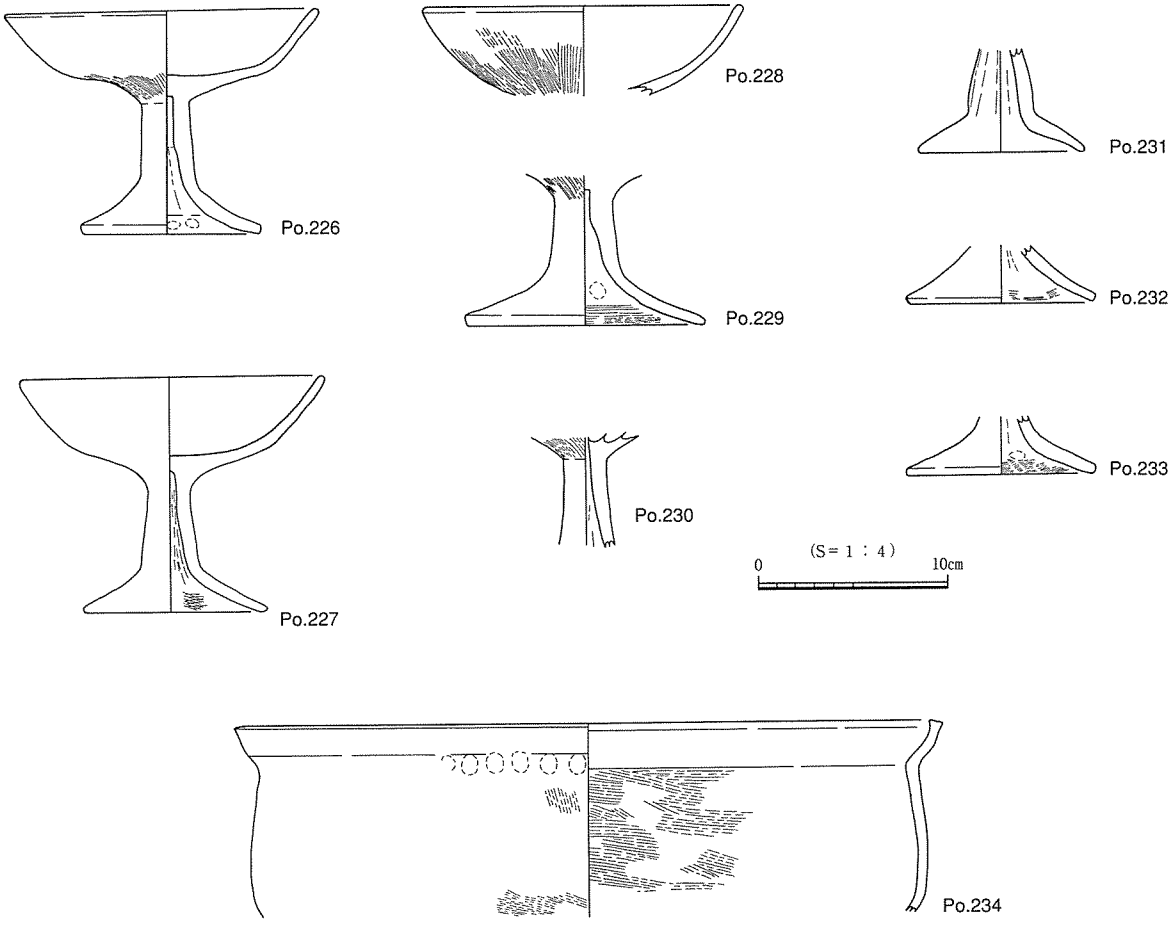
古墳6の墳丘内、南側で検出した楕円形の土壙である。墳丘上で検出されたことから、古墳6に伴う土壙墓の可能性が高いものと考えた。規模は長辺が1.4m、短辺が75cm、残存する深さが15cmである。本遺構の時期については、出土遺物が無く時期は不明である。


古墳6
土壙墓9
土壙墓8
土壙墓6
土壙墓7
落し穴16
掘立柱建物21
落し穴17
土器出土地点
土壙墓10
A
A′
B
B′
A
A′
LH=45m
①
① 淡黒褐色砂質土
B
B′
LH=45m
(S=1：120)
0
4m

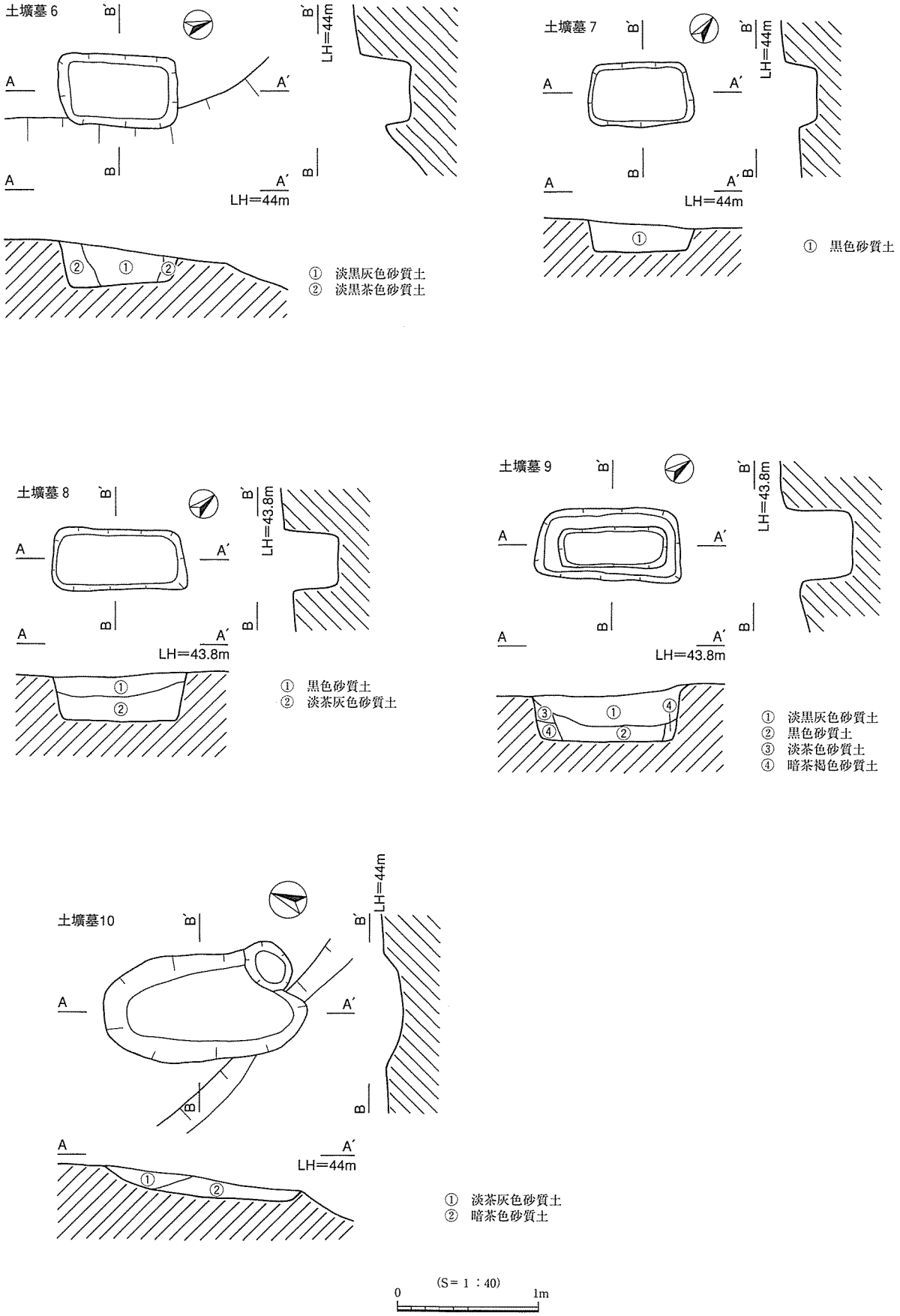
第72図　古墳6　遺構図



土器出土地点平面図



第73図　古墳６　遺物図



第74図　土壙墓 6 ～10　遺構図

古墳７（第75・76図）

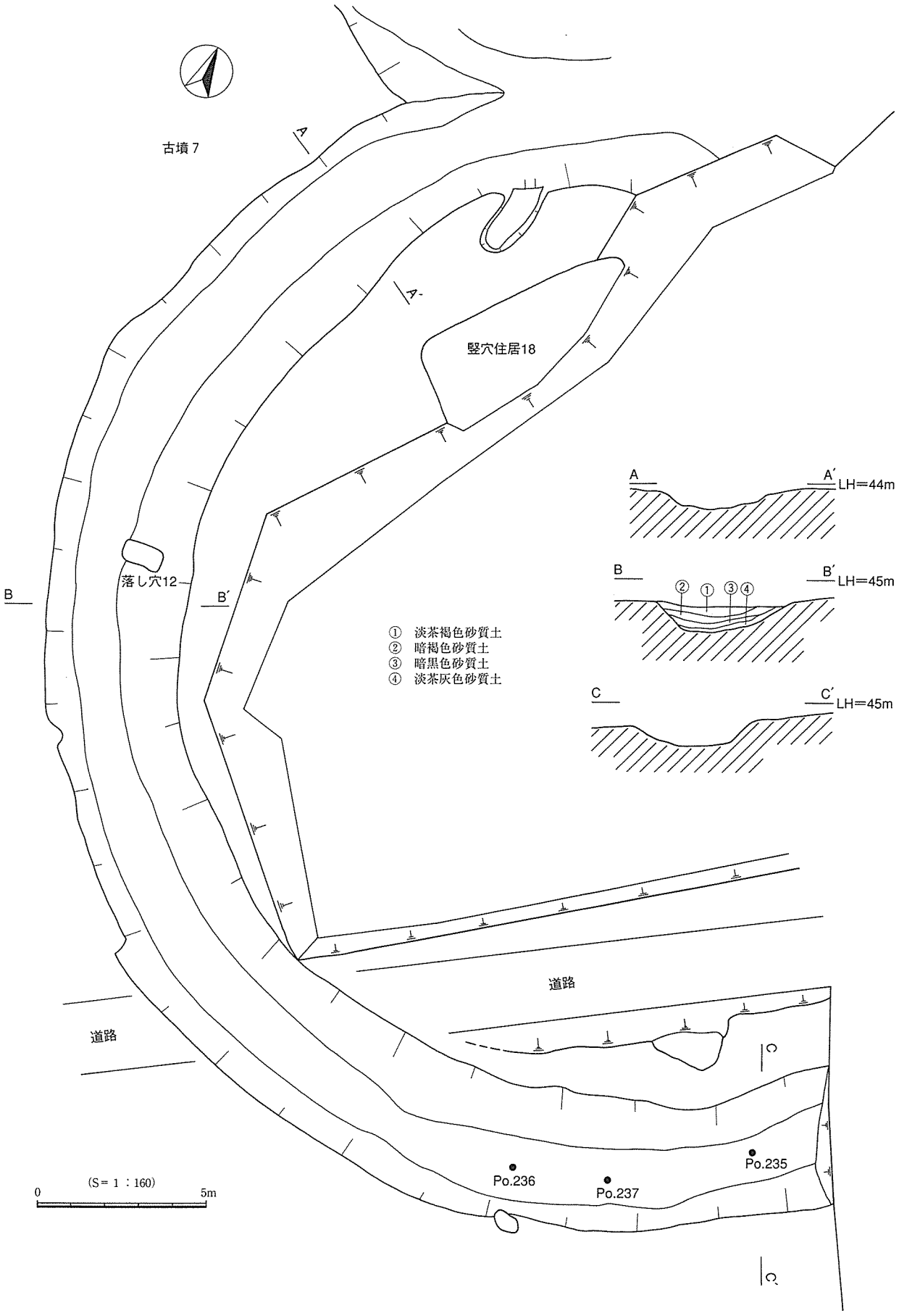
４区から６区にかけて検出した大形の円墳である。墳丘部の大半は、戦後に行われた土取で消滅している。墳丘の規模は、直径が27m、周溝を含めた直径が35mと推定される。周溝の深さは１m程度で、断面形は緩やかな「U」字形を呈する。出土遺物は、周溝の西側底部から土師器壺（Po.235）、が破砕された状態で出土しており、供献儀礼に使用されたものと考えられる。本遺構の時期は、出土した遺物から古墳時代前期末から中期前半に属するものと考えられる。

土器棺墓１（第77図）

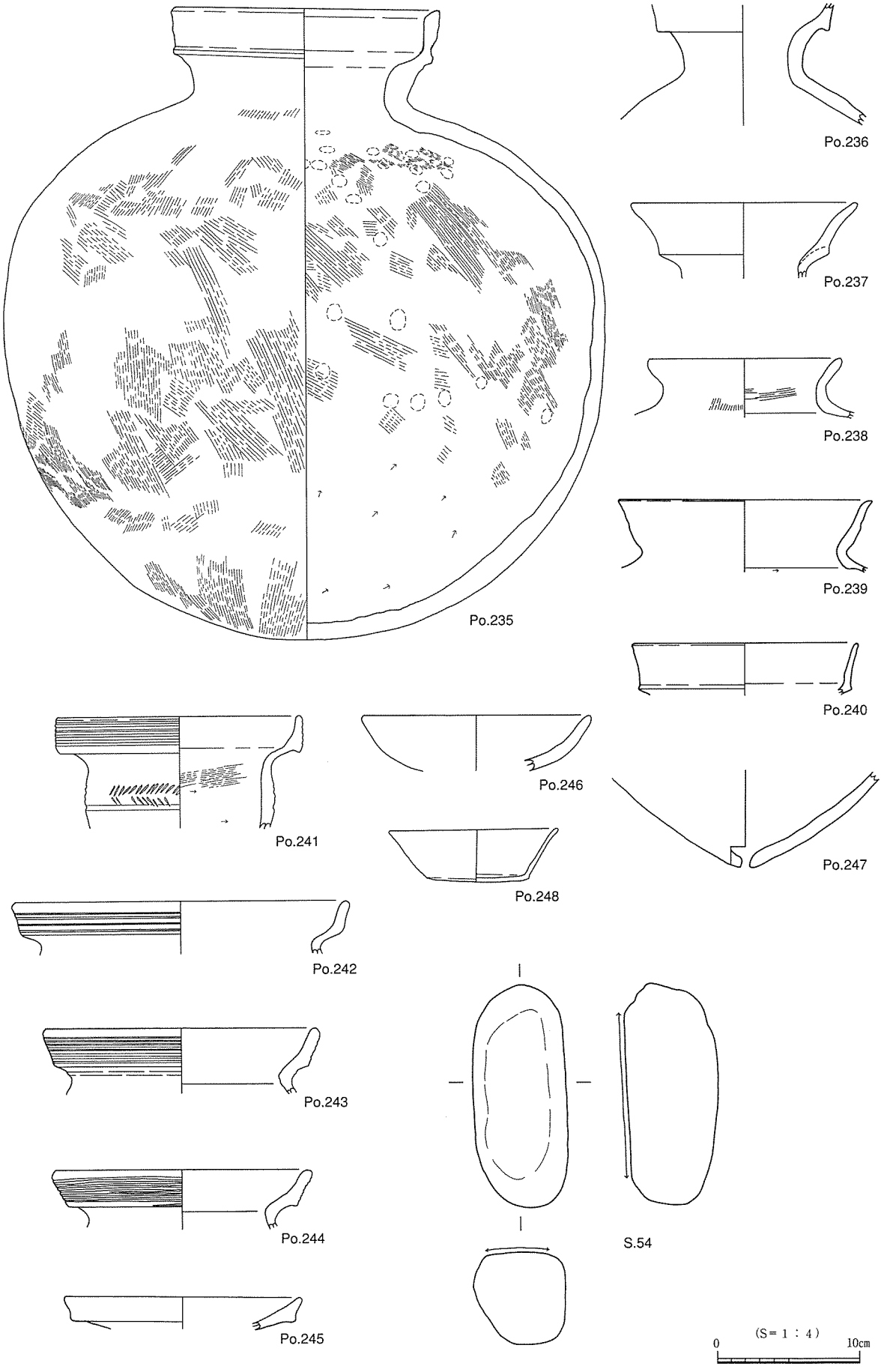
W－２区で検出した大形の土器棺墓である。口縁部を北に向けて、横倒しの状態で検出された。土器棺の上部は、過去の耕作により失われていた。棺として使用されている土器は、大形の甕形土器で、やや肩の張るプロポーションに、体部をハケ調整し、肩部に波状の紋様が巡る。内面はヘラケズリ調整され、大形の土器としては薄手の作りである。復元口径は48cm、胴部径65cm、残存高が56cmを測る。丸底の土器と考えられる。土器棺が安置されていた土壙は、長辺が80cm、短辺50cm、深さ30cmの長楕円形で、東側に存在する竪穴住居４を切っている。棺内から副葬品は出土しなかった。また、棺蓋についても確認できず、どのように閉塞されていたのか明らかにすることはできなかった。この遺構の時期は、棺として使用されていた土器から、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。

横穴墓１（第78・79図）

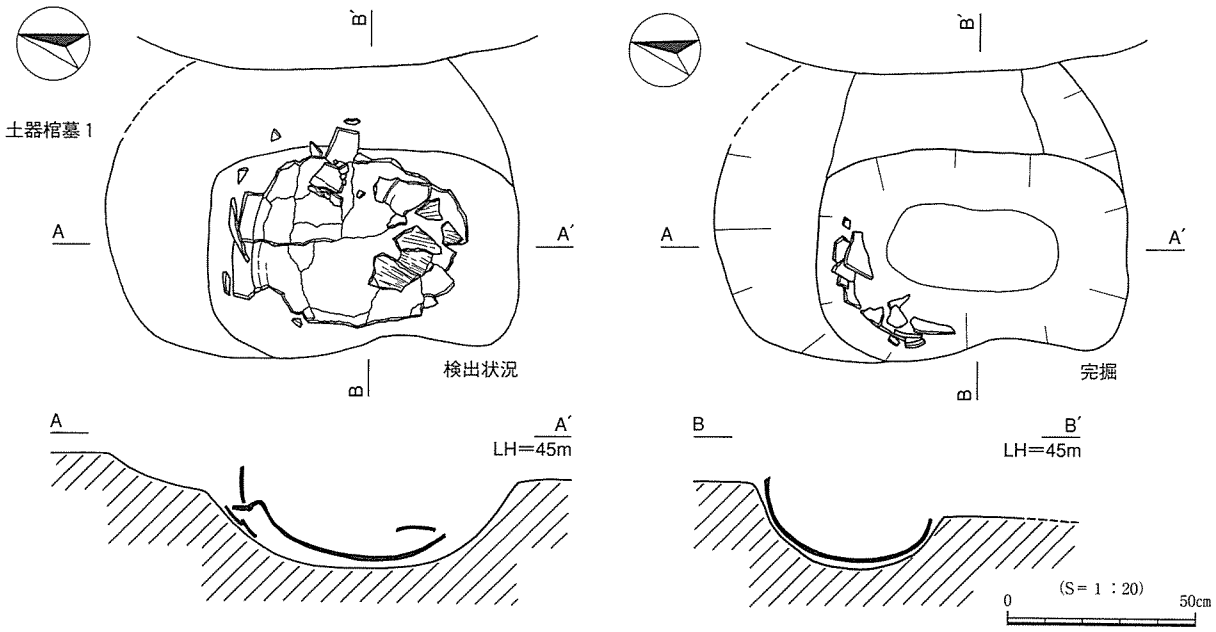
W－９区の西側で検出した横穴墓である。検出したのは墓道部と閉塞石までである。恐らく、中世における平坦地の造成により、上部が削平されたものと考えられる。墓道部は、残存する長さ５mで、幅は閉塞部で１m、東側の入口部で３m程度である。閉塞部には閉塞石が残り、20cmから50cm程度の大きさの河原石を用いている。また、墓室内からは排水溝が伸びている。排水溝は、検出した長さ5.7m、幅20cmから30cmで、深さは10cmから15cmを測る。出土した遺物は、墓道部の北東部の床面において、須恵器の瑞（Po.250）と、横瓶（Po.251）が出土した。瑞は、口縁部を欠くが、胴部の径が10cmの平底のもので、６世紀後半に相当するものと考えられる。横瓶は、ほぼ完形に近いもので、口径が13cm、長径44cm、短径24cm、高さ26cmで、外面にタタキ調整、内面に当て具の痕跡が残る。胴端部の内面は、当て具の痕跡により接合部が消滅し、外面はカキ目調整される。この遺構の時期は、出土した遺物から古墳時代後期後半のものと考えられる。

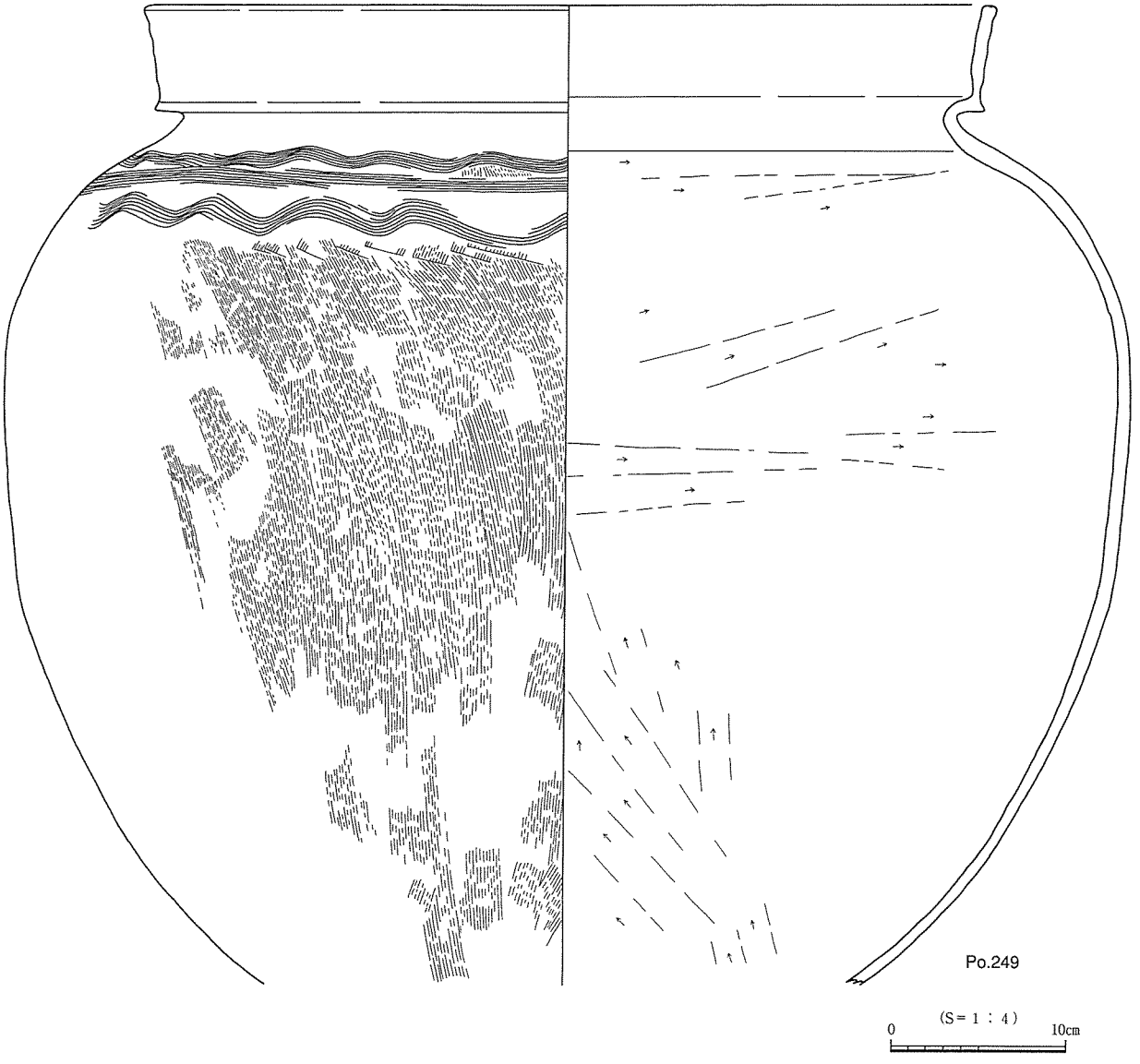

古墳7
A
A'
竪穴住居18
落し穴12
B
B'
① 淡茶褐色砂質土
② 暗褐色砂質土
③ 暗黒色砂質土
④ 淡茶灰色砂質土
A
A'
LH=44m
B
B'
LH=45m
C
C'
LH=45m
道路
道路
Po.235
Po.236
Po.237
(S=1:160)
0
5m

第75図　古墳7　遺構図

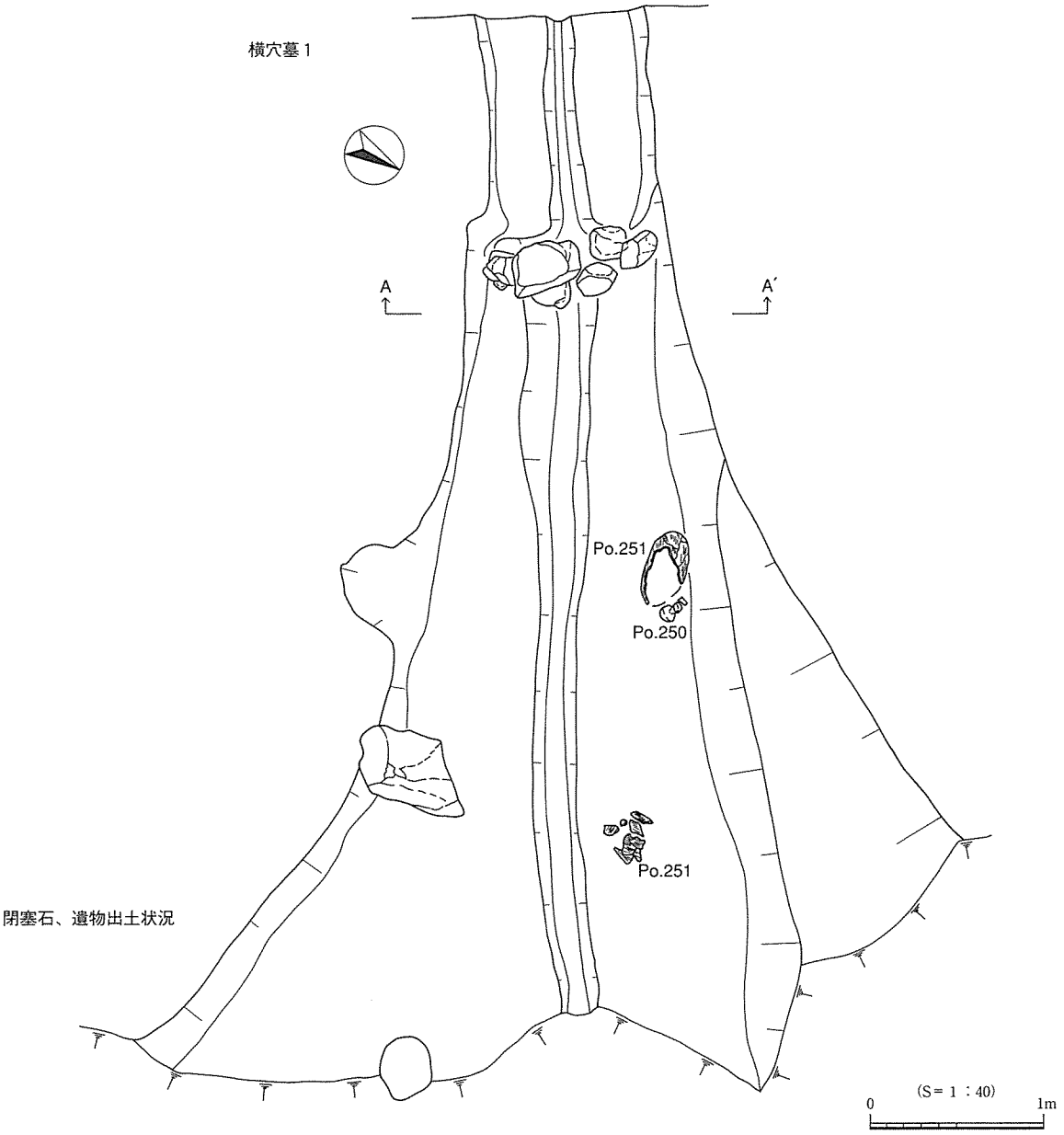

Po.235
Po.236
Po.237
Po.238
Po.239
Po.240
Po.241
Po.246
Po.247
Po.248
Po.242
Po.243
Po.244
Po.245
S.54
(S=1:4)
0
10cm

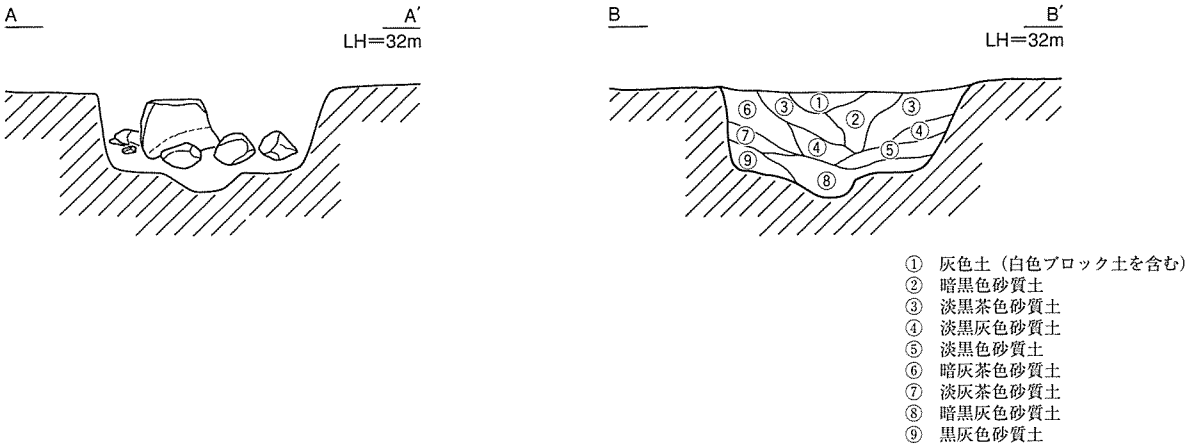
第76図　古墳７　遺物図





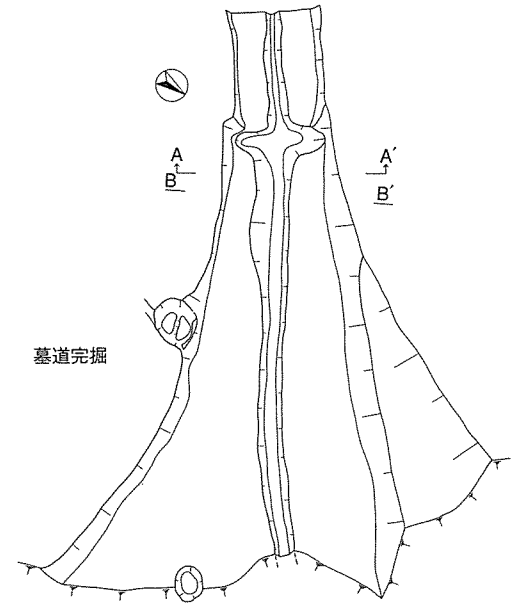
第77図　土器棺墓１　遺構・遺物図

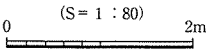


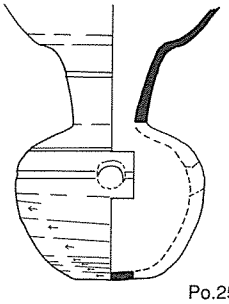


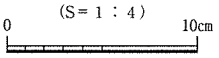
① 灰色土（白色ブロック土を含む）
② 暗黒色砂質土
③ 淡黒茶色砂質土
④ 淡黒灰色砂質土
⑤ 淡黒色砂質土
⑥ 暗灰茶色砂質土
⑦ 淡灰茶色砂質土
⑧ 暗黒灰色砂質土
⑨ 黒灰色砂質土

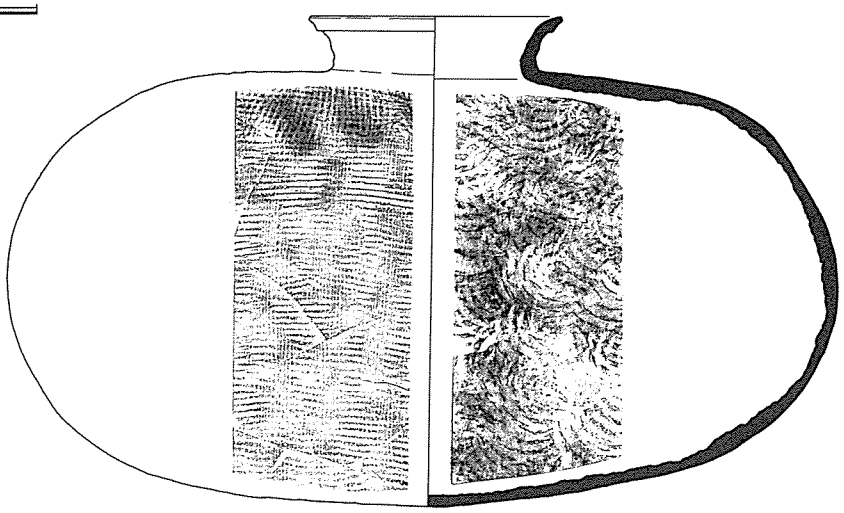
第78図　横穴墓１　遺構図

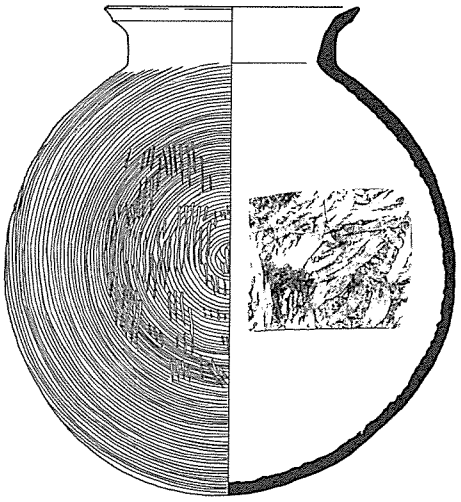












第79図　横穴墓１　遺構・遺物図

第6節　中・近世の調査

古代から中近世の遺構は、丘陵上の調査区ではあまり顕著ではないが、墳墓と考えられる遺構が見つかっている。また、遺構に伴わない遺物として掲載した土師器、陶磁器類が見つかっている。

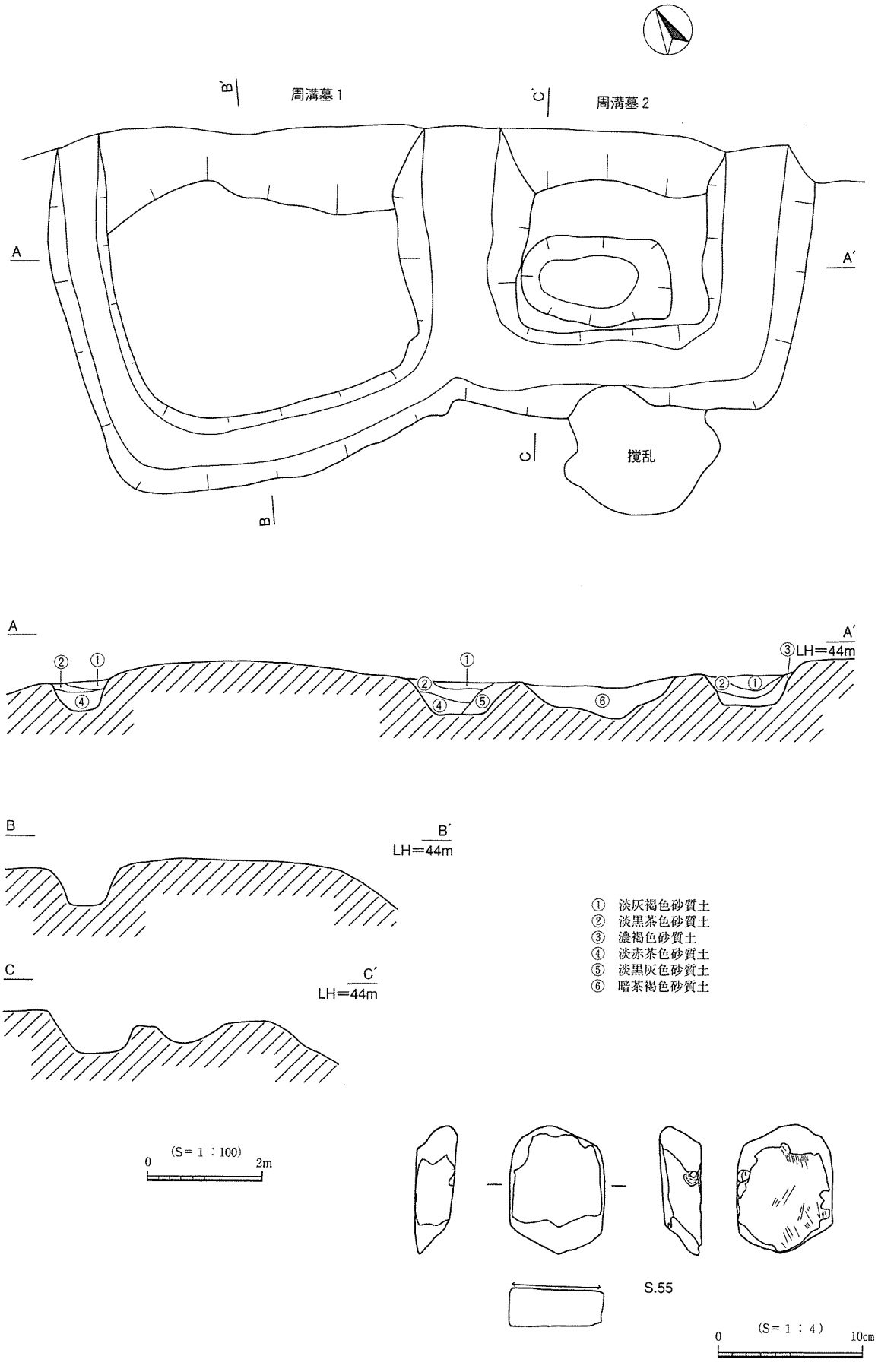
中世の遺構を多く検出したのは、諏訪神社の旧境内地区からである。丘陵の斜面を大きくカットし、造成された平坦面に掘立柱建物が建てられており、土坑や鍛治作業に伴って作られたと考えられる炉跡を検出している。これらの遺構の性格については、諏訪神社の創建時期を示すものか、土豪クラスの住居か、判明しなかったが、南側で検出した掘立柱建物は、布堀状の堀形を持つ大形のもので、神社建築に繋がる可能性も考えられる。

周溝墓1（第80図）

W－8区の斜面側において検出した方形の周溝墓である。周溝を共有して周溝墓2が位置する。南北が5m、東西が4mの規模を持ち、幅80cmから1.2m、深さ1.2mの周溝を掘削することにより区画されている。墳丘部は盛土が無く、主体部も確認できなかった。出土遺物は無く時期は不明である。

周溝墓2（第80図）

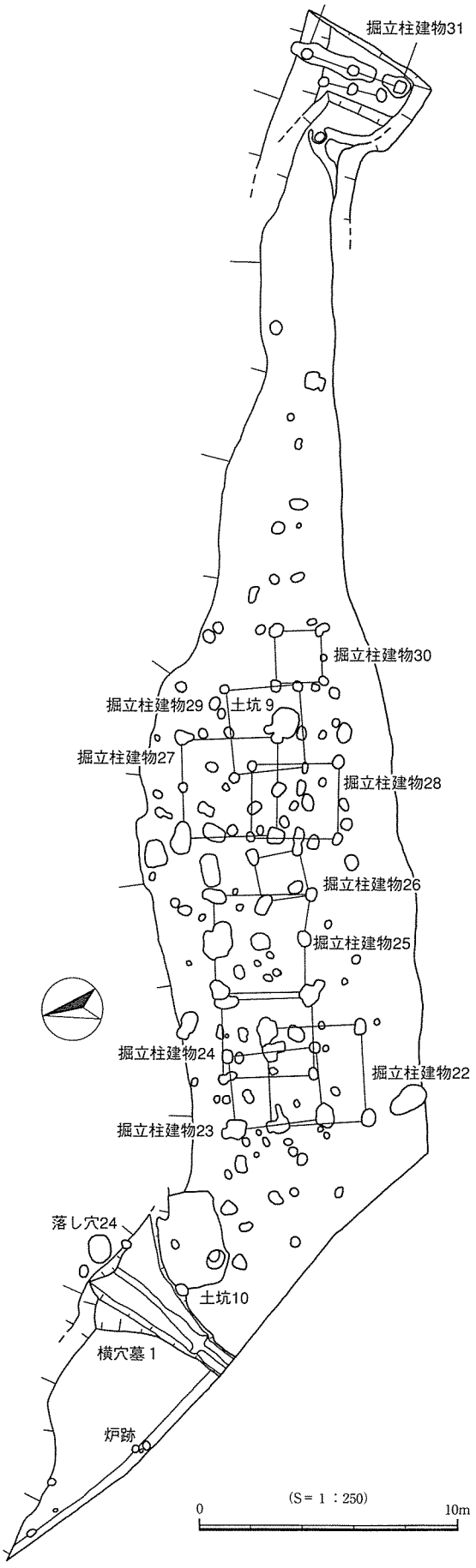
W－8区の斜面側において検出した方形の周溝墓である。周溝を共有して周溝墓1に隣接する。南北が3m、東西が2.5mの規模を持ち、幅1.5m、深さ80cmの周溝を掘削することにより区画されている。墳丘上の中央西寄りの地点から、長辺2.5m、短辺1.5m、深さ40cmの土壙を検出した。土壙内からの出土遺物は無く性格は不明であるが、位置的な関係から埋葬主体部の可能性が考えられる。出土遺物は、周溝墓2の北側に位置する溝状遺構1の表土剥ぎ作業中に、表面に梵字が彫りこまれている五輪塔の風空輪（S.58）と、同じ石材の破片（S.57）が出土している。



第80図　周溝墓1・2　遺構・遺物図

平坦地（第81図）

諏訪神社の旧境内に位置する、丘陵斜面を大きくカットして造成された平坦地で、掘立柱建物を建てるために造成されたものと考えられる。規模は、検出した長さで、南北が10m以上、東西は60m以上になるものと思われる。平坦地の北側は、斜面をカットした際の盛土によって造成されており、その盛土中から土師器皿（Po.275）などが出土している。これらの遺物から、本遺構は中世前半期以降に造成されたものと考えられる。



第81図　諏訪神社旧境内調査地遺構図

掘立柱建物22（第82図）

平坦地で検出した１間×１間の掘立柱建物である。掘立柱建物23、24と重複関係にあるが、柱穴の切り合いが無く、前後関係を推測することは出来なかった。建物の規模は、柱間の寸法が東西南北とも3.7mで、柱穴は直径が40cmから60cm、深さ20cmから60cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く、正確な時期を決定するには至らなかった。

掘立柱建物23（第82図）

平坦地で検出した１間×１間の掘立柱建物である。建物の規模は、柱間の寸法が、東西2.8m、南北は3.4mを測る。柱穴は、直径が40cmから90cm、深さ50cmから60cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無いため不明である。

掘立柱建物24（第82図）

平坦地で検出した１間×１間の掘立柱建物である。建物の規模は、柱間の寸法が、東西３m、南北は3.5mを測る。柱穴は、直径が30cmから60cm、深さ40cmから70cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物25（第82図）

平坦地で検出した２間×１間の掘立柱建物である。西側の柱穴は、掘立柱建物24の柱穴を切っている。また、東南部の柱穴は掘立柱建物26の柱穴と同一であるが、前後関係を明らかにすることは出来なかった。建物の規模は、柱間の寸法が東西3.8m、南北は3.5m～3.7mを測る。柱穴は、直径が40cmから70cm、深さ30cmから50cmである。また、南東部の柱穴は、やや南に寄っており、建物の柱筋は揃わない。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物26（第83図）

平坦地で検出した１間×１間の掘立柱建物である。建物の規模は、柱間の寸法が東西南北とも1.8mを測る。柱穴は、直径が30cmから60cm、深さ30cmから60cmである。出土遺物は、P1の埋土中から、底部に糸切の痕跡が残る土師器皿（Po.252～254）が出土している。この遺構の時期は、出土遺物から16世紀代のものと考えられる。

掘立柱建物27（第83図）

平坦地で検出した２間×１間の掘立柱建物である。掘立柱建物28、29と重複関係にあるが、前後関係を明らかにすることは出来なかった。建物の規模は、柱間の寸法が東西3.8m、南北は3.7mを測る。柱穴は、直径が40cmから60cm、深さ20cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

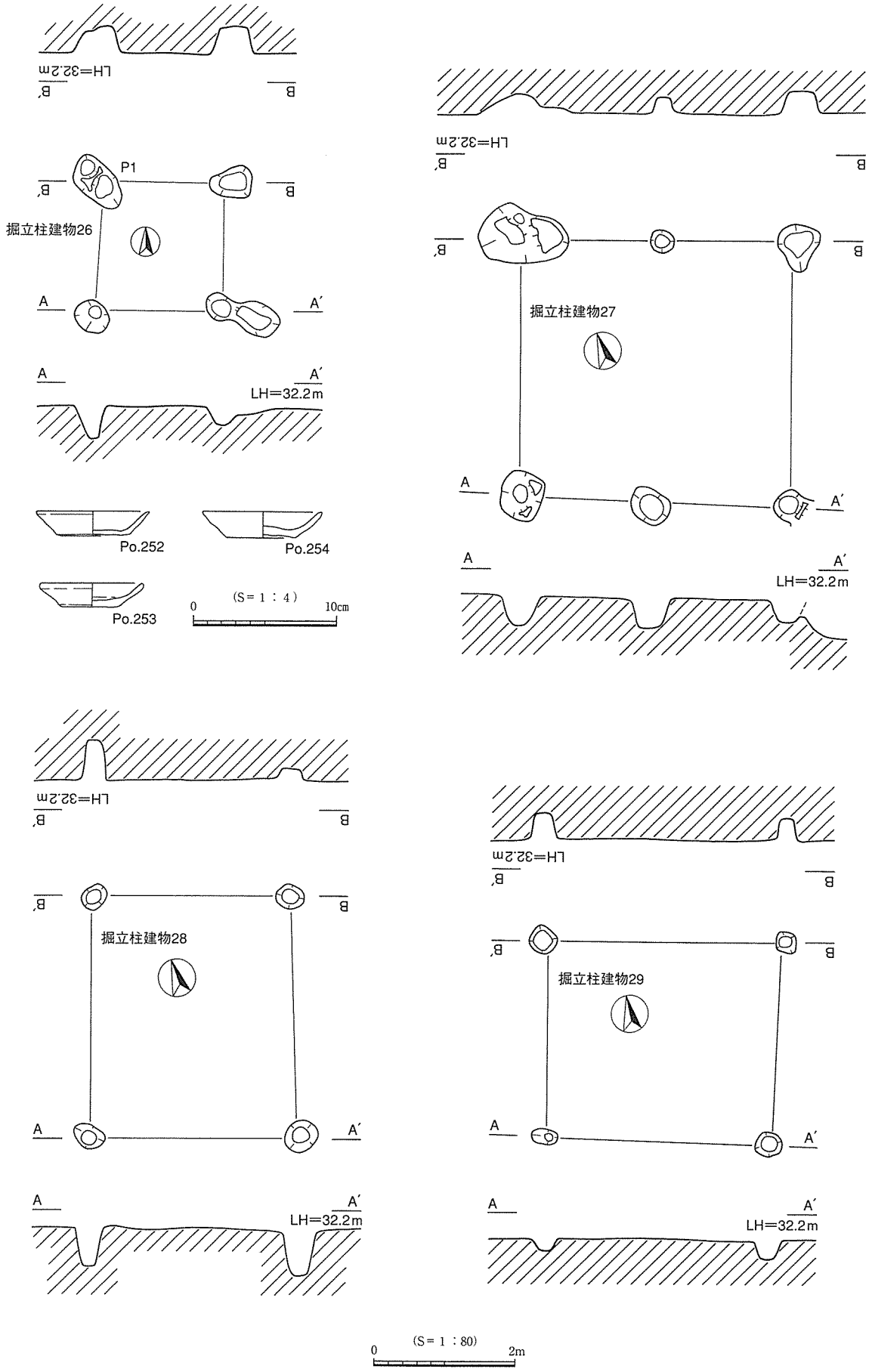
① 淡褐色砂質土
② 暗褐色土（地山ブロック土を含む）
③ 淡黒茶色砂質土
④ 暗茶色砂質土
⑤ 淡赤茶色砂質土

① 淡褐色砂質土
② 茶褐色土（礫を含む）
③ 暗褐色砂質土
④ 暗茶灰色砂質土
⑤ 暗褐色砂質土
⑥ 明茶色砂質土

① 淡灰茶色砂質土
② 暗茶褐色砂質土
③ 灰色砂質土
④ 灰茶色砂質土

① 明灰色砂質土
② 淡黄茶色砂質土
③ 暗茶色砂質土
④ 淡灰茶色砂質土
⑤ 灰色砂質土
⑥ 灰茶色砂質土
⑦ 暗灰色砂質土
⑧ 灰褐色砂質土
⑨ 暗茶褐色砂質土
⑩ 灰色粘質土

第82図　掘立柱建物22～25　遺構図



第83図　掘立柱建物26～29　遺構・遺物図

掘立柱建物28（第83図）

平坦地で検出した１間×１間の掘立柱建物である。建物の規模は、柱間の寸法が東西2.8m、南北3.4mを測る。柱穴は、直径が30cmから40cm、深さ15cmから60cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物29（第83図）

平坦地で検出した１間×１間の掘立柱建物である。建物の規模は、柱間の寸法が東西3.2m、南北2.8mを測る。柱穴は、直径が20cmから40cm、深さ20cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物30（第84図）

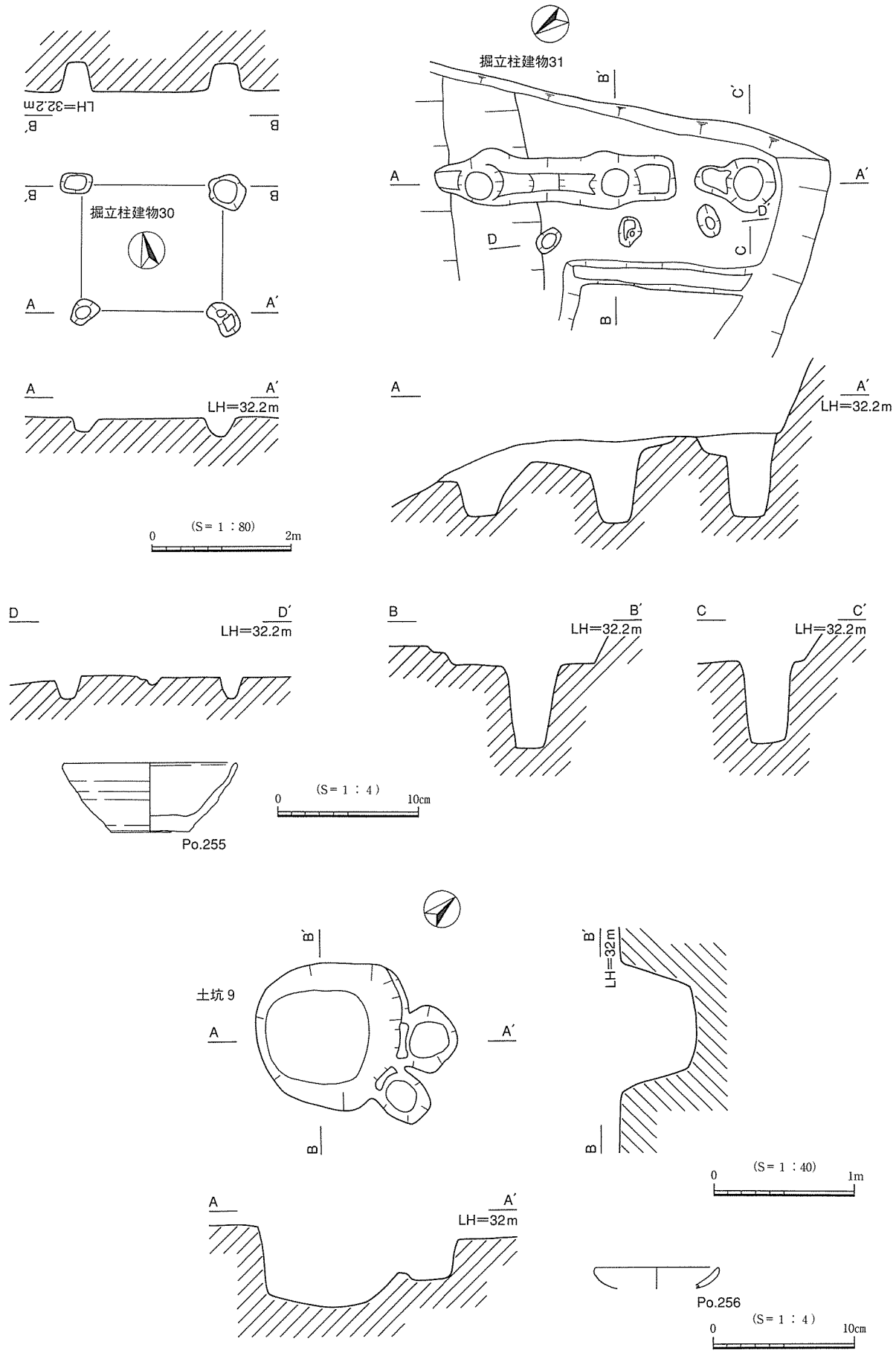
平坦地で検出した１間×１間の掘立柱建物である。掘立柱建物29と重複関係にあるが、前後関係を明らかにすることは出来なかった。建物の規模は、柱間の寸法が東西２m、南北1.8mを測る。柱穴は、直径が30cmから50cm、深さ20cmから40cmである。この遺構の時期については、出土遺物が無く不明である。

掘立柱建物31（第84図）

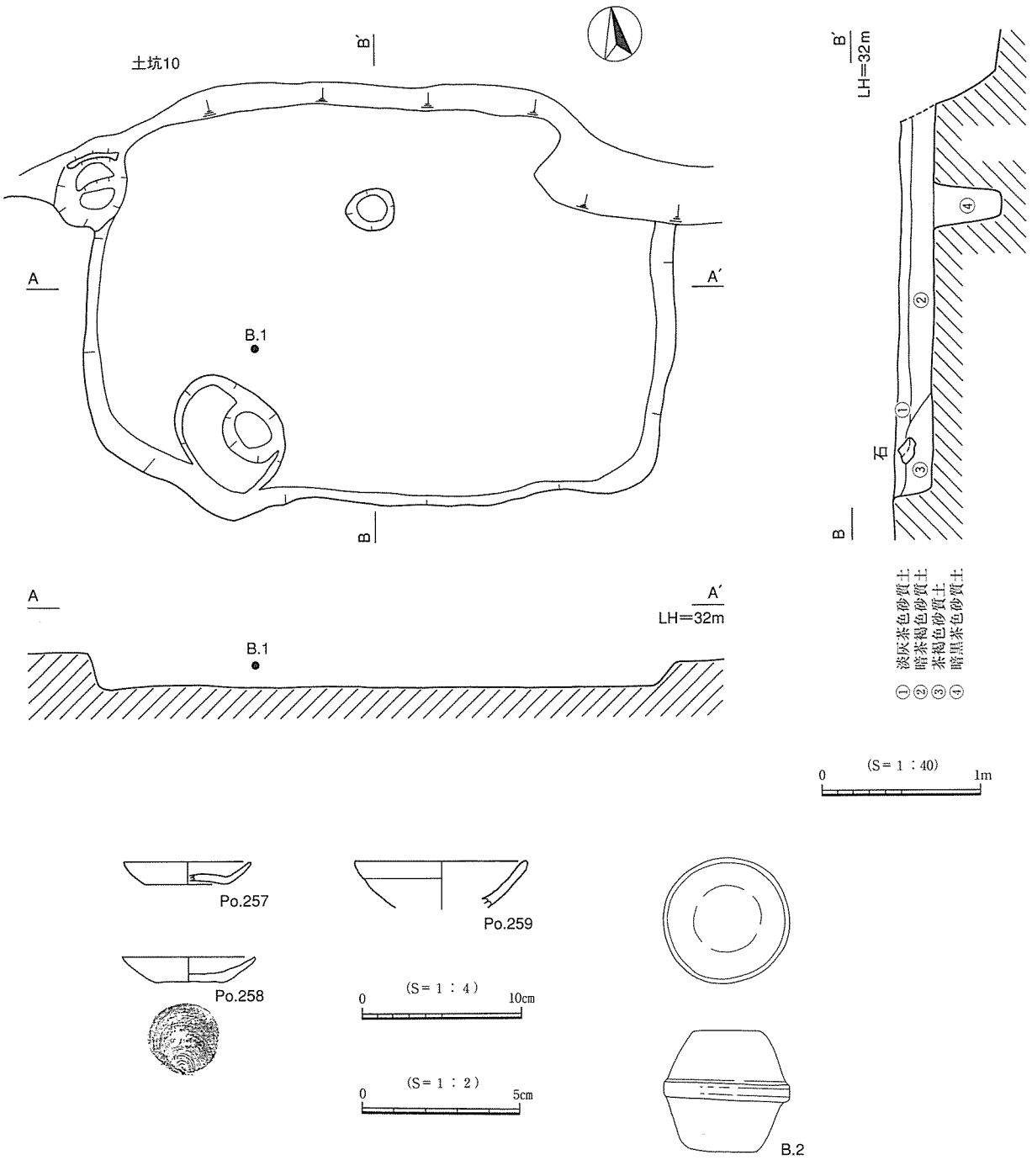
平坦地の東部、調査区境付近で検出した布堀の掘形を持つ掘立柱建物である。柱列は１条のみ検出している。検出当初は、溝状の遺構であると誤認したため、セクションの設定に失敗した。布堀部の掘形は、残存する長さが3.4m、幅80cmである。柱の掘形は底面が円形を呈し、直径40cm前後、深さは1.2mを測る。また、この建物に関連するものか不明であるが、この遺構の西側に３基のピットが並んでいる。出土遺物は、布堀の柱穴内から土師器坏（Po.255）が出土している。この遺構の時期は、出土した遺物から15世紀代のものと考えられる。

土坑９（第84図）

平坦地の中央に位置する、やや歪んだ円形の土坑である。北側を掘立柱建物27の柱穴と切り合うが、明確な切り合い関係は判明しなかった。規模は、直径１mから1.2m、深さは60cmである。遺物は、埋土中より土師器皿口縁部片（Po.256）が出土している。時期は、出土した遺物から16世紀代のものと考えられる。



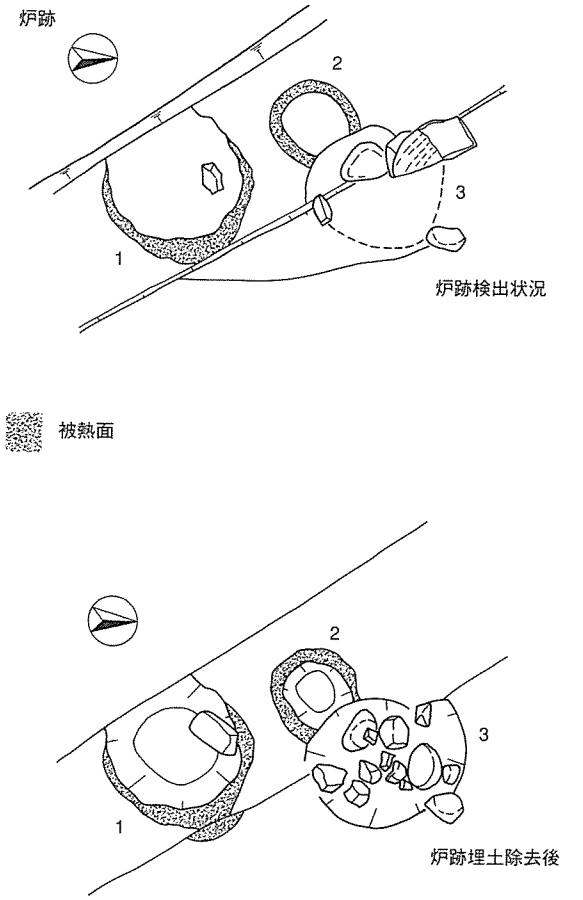
第84図　掘立柱建物30～31・土坑9　遺構・遺物図



第85図　土坑10　遺構・遺物図

土坑10（第85図）

平坦地の北側で検出した長方形の土坑である。遺構の北側は、試掘トレンチによって切られている。規模は、東西が3.7m、南北が2.5m以上で、深さは20cmである。出土遺物は、埋土中より土師器皿（Po.257～259）のほか、小形の碗を合わせ口状にした青銅製品（B.2）が出土している。遺構の時期は、出土した土師器皿から16世紀後半から17世紀前半のものと考えられる。



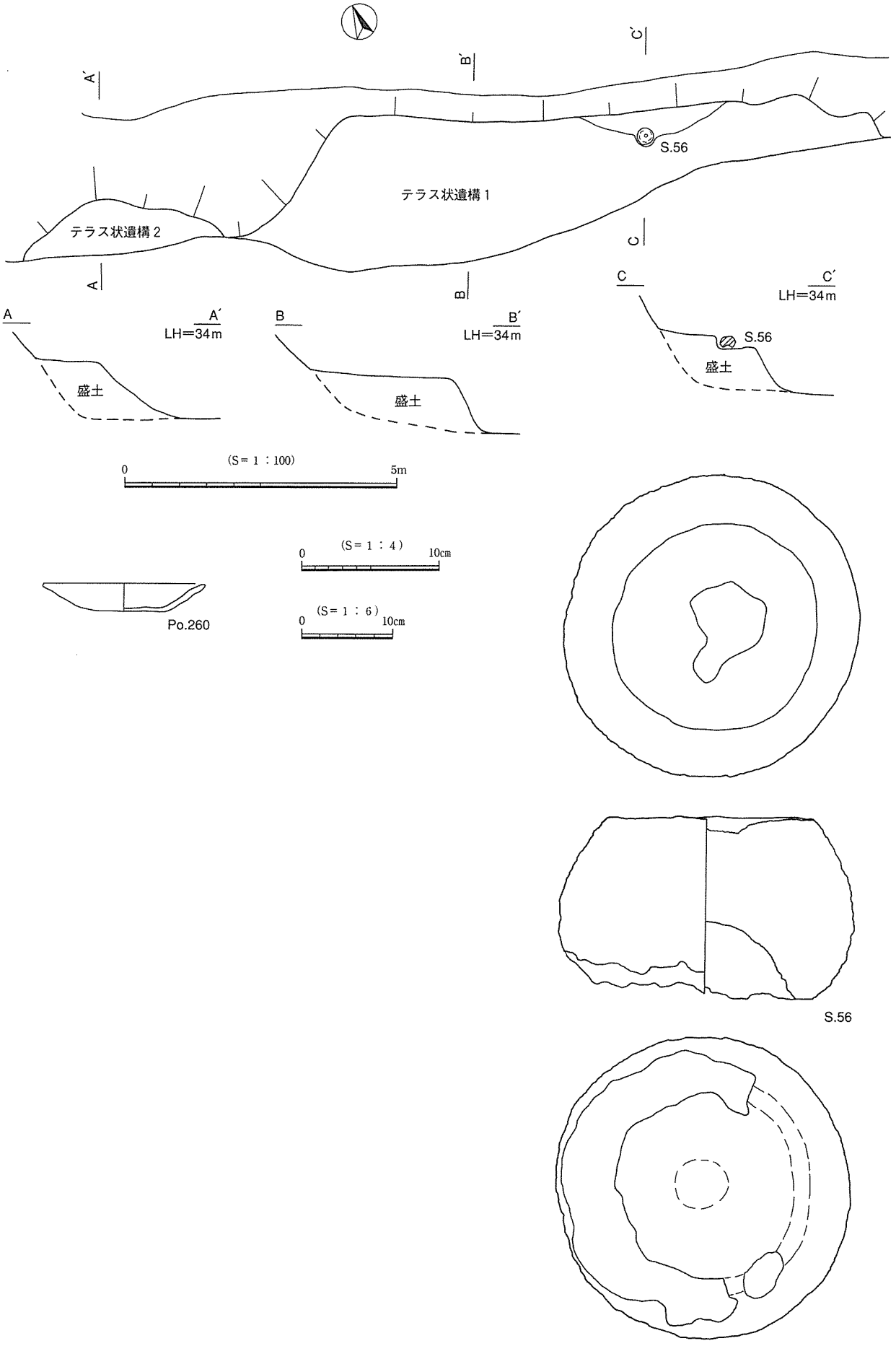
第86図　炉跡１～３　遺構図

炉跡（第86図）

調査区の北側で検出した被熱痕跡を３箇所、明瞭に留める炉跡である。調査区の境界に位置していたため、検出した段階で、すでに断ち割りによって大半の遺構が削平されていた。炉跡は、３基確認し、１は検出面の直径が80cm、２は直径50cm、３は直径70cmである。１と２は、検出面の周囲が赤く変色し、中央部に炭の混じる黒茶褐色の砂質土が堆積していた。３は、赤変した痕跡は見られなかったが、検出面で数点の礫が露出しており、内部には炭まじりの黒茶褐色砂質土が堆積していた。これらの埋土は、全て持ち帰り、水洗洗浄を実施した。その結果、小鉄滓と鍛造剥片、粒状滓が検出されたため、主に鍛錬鍛冶を行う遺構であったと考えられる。この遺構に伴う出土遺物は無く時期は不明であるが、１の埋土から出土した炭化物から、AMS年代測定（第四章第二節）により、1200年の年代値が得られている。

テラス状遺構１・２（第87図）

平坦地の南側斜面に盛土をして再造成されたテラス状の遺構である。テラス１は、東西10m、南北2.5m程度の規模で、テラス２は、東西3.5m、南北１mである。どちらの遺構も下層の平坦地との比高差は１m程度である。テラス１では、遺構面に五輪塔の水輪（S.56）が置かれており、建物の礎石として利用された可能性が考えられるが、これに対応する礎石は見つからなかった。出土遺物は、五輪塔のほか、土師器皿（Po.260）が出土している。この遺構の時期は、出土した遺物から、16世紀後半から17世紀前半に相当するものと考えられる。



第87図　テラス状遺構１・２　遺構・遺物図

第７節　時期不明の遺構

調査区の全域において、遺物を伴わない土坑が見つかっている。大きく分けて、土坑底面の中央に小ピットを持つものと、持たないものの２種類が見られるが、平面形が楕円形のものや、正円形、長方形のものなど違いが見られる。形態的な特徴から、落し穴と考えられる。この遺構については、縄紋時代に属するものと考えられるが、時期を特定する手がかりが無いため、年代を推定する根拠に乏しい。

落し穴１（第88図）

Ｅ－１区において検出した土坑である。西側を竪穴住居３によって切られている。平面形は隅丸方形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺1.45m、短辺１m、深さ0.9mである。小ピットは、直径0.2m程度、深さ0.4mである。埋土は、黒ボクに類似した黒色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴２（第88図）

Ｅ－１区の西側において検出した土坑である。平面形は円形で、若干斜めに掘り込む。小ピットは持たない。規模は、直径0.9m、深さ1.6mである。埋土は、黒ボクに類似した濃黒色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴３（第88図）

Ｗ－２区の東側において検出した土坑である。平面形は円形で、底面に向かって広くなる。小ピットは持たない。規模は、検出面の直径が0.6m、底面の直径が0.7m、深さは１mである。埋土は、黒ボクに類似した黒色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴４（第88図）

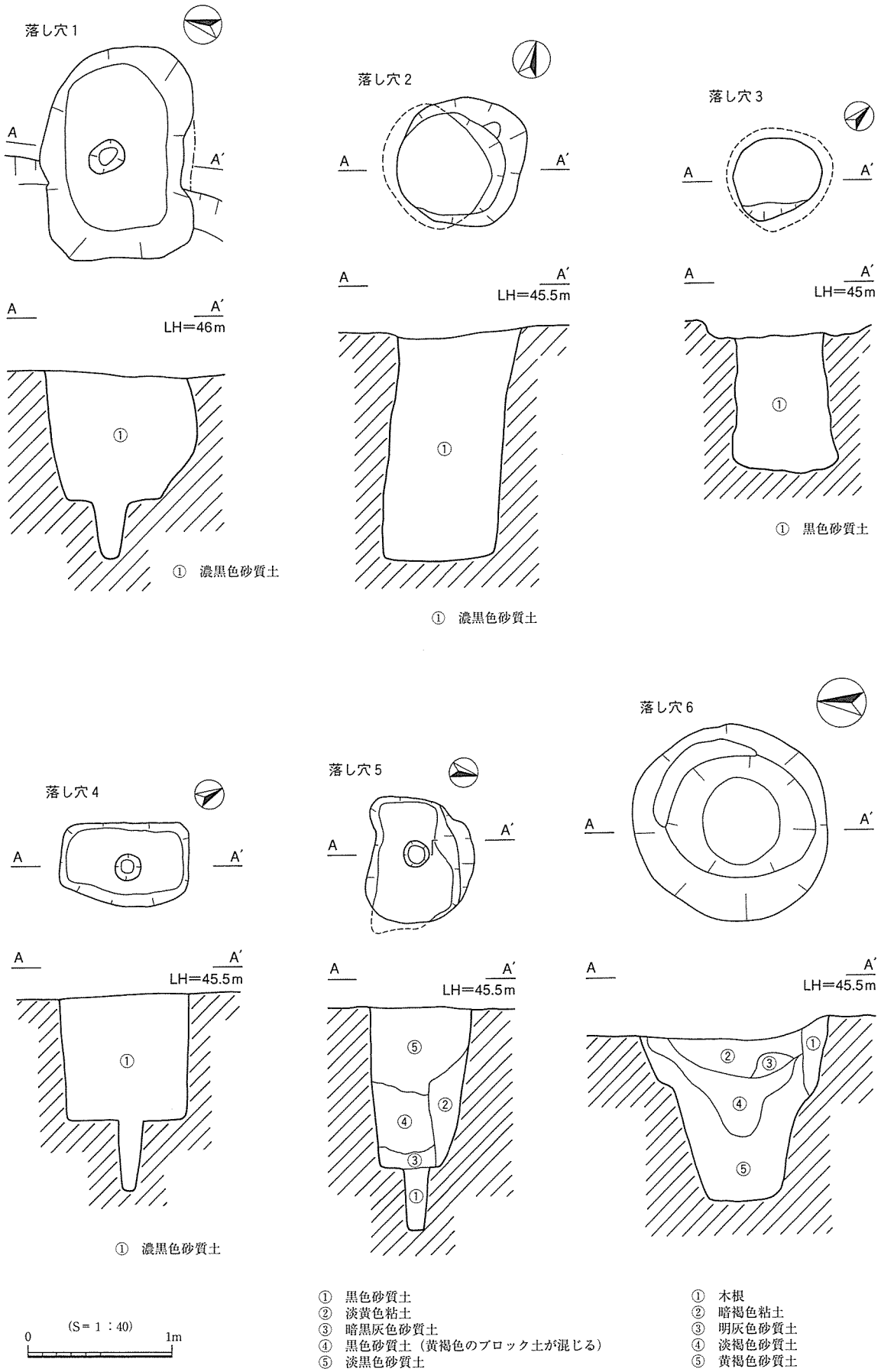
Ｅ－２区において検出した土坑である。遺構上面は、古墳１の周溝によって切られている。平面形は長方形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が0.9m、短辺が0.6m、深さが0.9mである。小ピットは、直径が0.2m、深さは0.5mである。埋土は、黒ボクに類似した濃黒色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴５（第88図）

Ｅ－３区の古墳１の墳丘上において検出した土坑である。平面形はやや歪んだ長方形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が0.9m、短辺が0.7m、深さ1.1mである。小ピットは、直径が0.2m、深さ0.4mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴６（第88図）

Ｗ－３区の古墳２の周溝内において検出した土坑である。平面形は円形で、壁面は段状になる。小ピットは持たない。規模は、直径が1.3m、深さが1.2mである。埋土は、黄褐色、灰色系のロームに類似した砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。



第88図　落し穴1～6　遺構・遺物図

落し穴７（第89図）

Ｅ－３区の西側において検出した土坑である。北西部を竪穴住居８によって切られている。平面形は長楕円形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が１m、短辺が0.8m以上、深さは0.7mである。小ピットは、直径が0.1m、深さ0.15mと浅い。埋土は、濃黒色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴８（第89図）

Ｗ－３区の竪穴住居８の床面において検出した土坑である。平面形は隅丸長方形で、小ピットを持たない。規模は、長辺が0.9m、短辺が0.6m、深さ1.2mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴９（第89図）

Ｗ－４区の南側において検出した土坑である。平面形は隅丸長方形で、小ピットを持たない。規模は、長辺が1.1m、短辺が0.7m、深さ1.2mである。埋土は、淡黒褐色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴10（第89図）

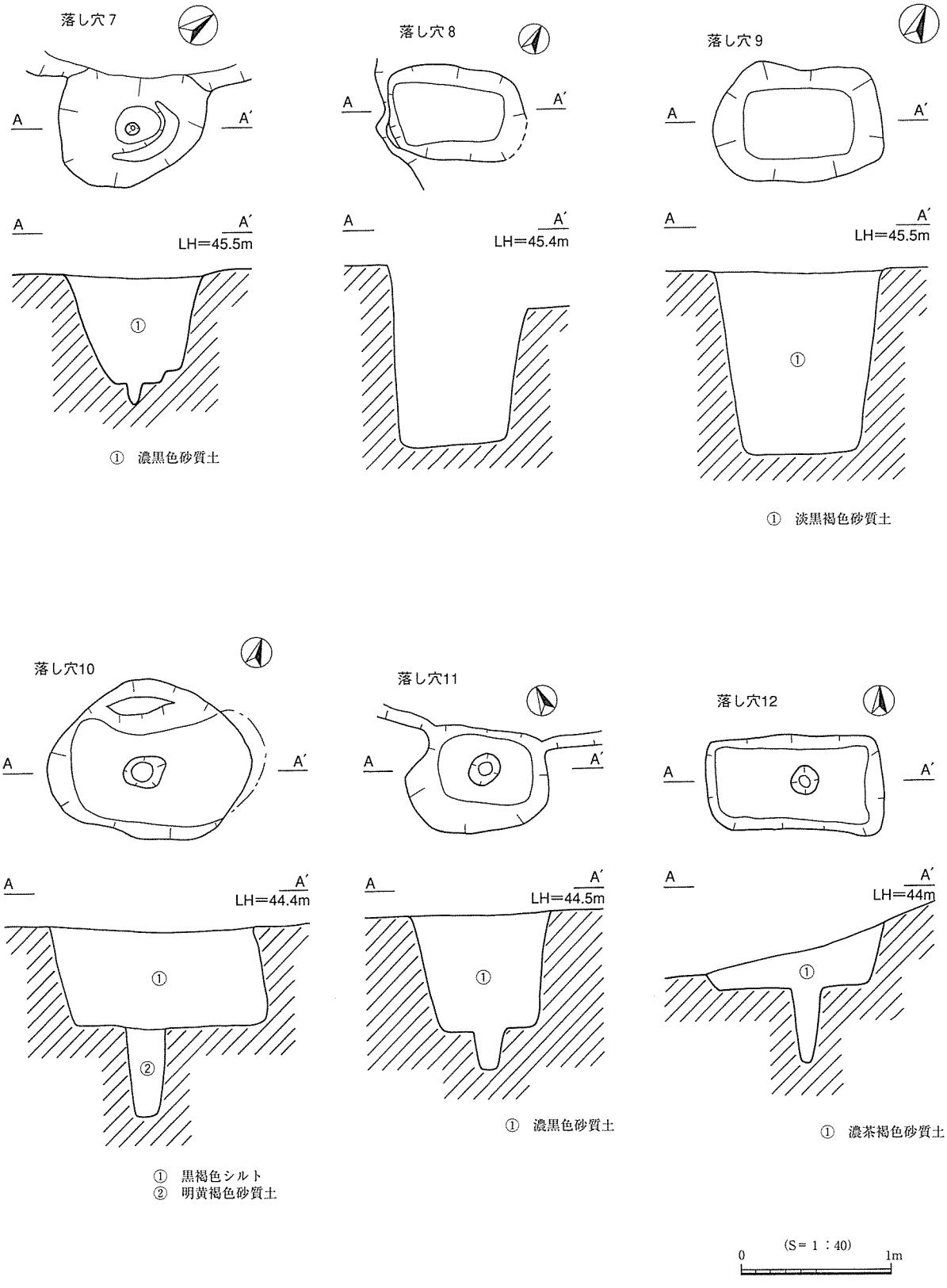
Ｗ－４区の竪穴住居13の床面において検出した土坑である。平面形はいびつな長楕円形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が1.4m、短辺が1.1m、深さが0.6mである。小ピットは、直径が0.2m、深さ0.6mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴11（第89図）

Ｗ－４区の拡張部分において検出した土坑である。北部を竪穴住居15によって切られている。平面形は楕円形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が0.9m、短辺が0.7m以上、深さ0.8mである。小ピットは、直径が0.2m、深さが0.3mである。埋土は、濃黒色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴12（第89図）

Ｗ－５区の古墳７の周溝内において検出した土坑である。遺構の上部は、周溝により削平されている。平面形は長方形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が1.2m、短辺が0.6m、深さ0.4mである。小ピットは、直径が0.2m、深さ0.5mである。埋土は、濃茶褐色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。



第89図　落し穴７～12　遺構・遺物図

落し穴13（第90図）

Ｅ－６区の古墳７の周溝内において検出した土坑である。遺構の上部は、周溝と時期不明の撹乱により削平されている。平面形は隅丸長方形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が1.1m、短辺0.8m、深さ0.5mである。小ピットは、直径が0.3m、深さ0.8mである。埋土は、濃黒色砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴14（第90図）

Ｗ－５区の北西部において検出した土坑である。平面形はややいびつな円形で、底面に小ピットを持つ。規模は、遺構検出面の直径が1.2m程度、底面の直径は0.5m、深さ0.3m。小ピットは、直径が0.2m、深さ0.3mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴15（第90図）

Ｗ－６区の中央部において検出した土坑である。平面形はいびつな楕円形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が1.2m、短辺が0.9m、深さ1.3mである。小ピットは、直径0.15m、深さ0.3mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴16（第90図）

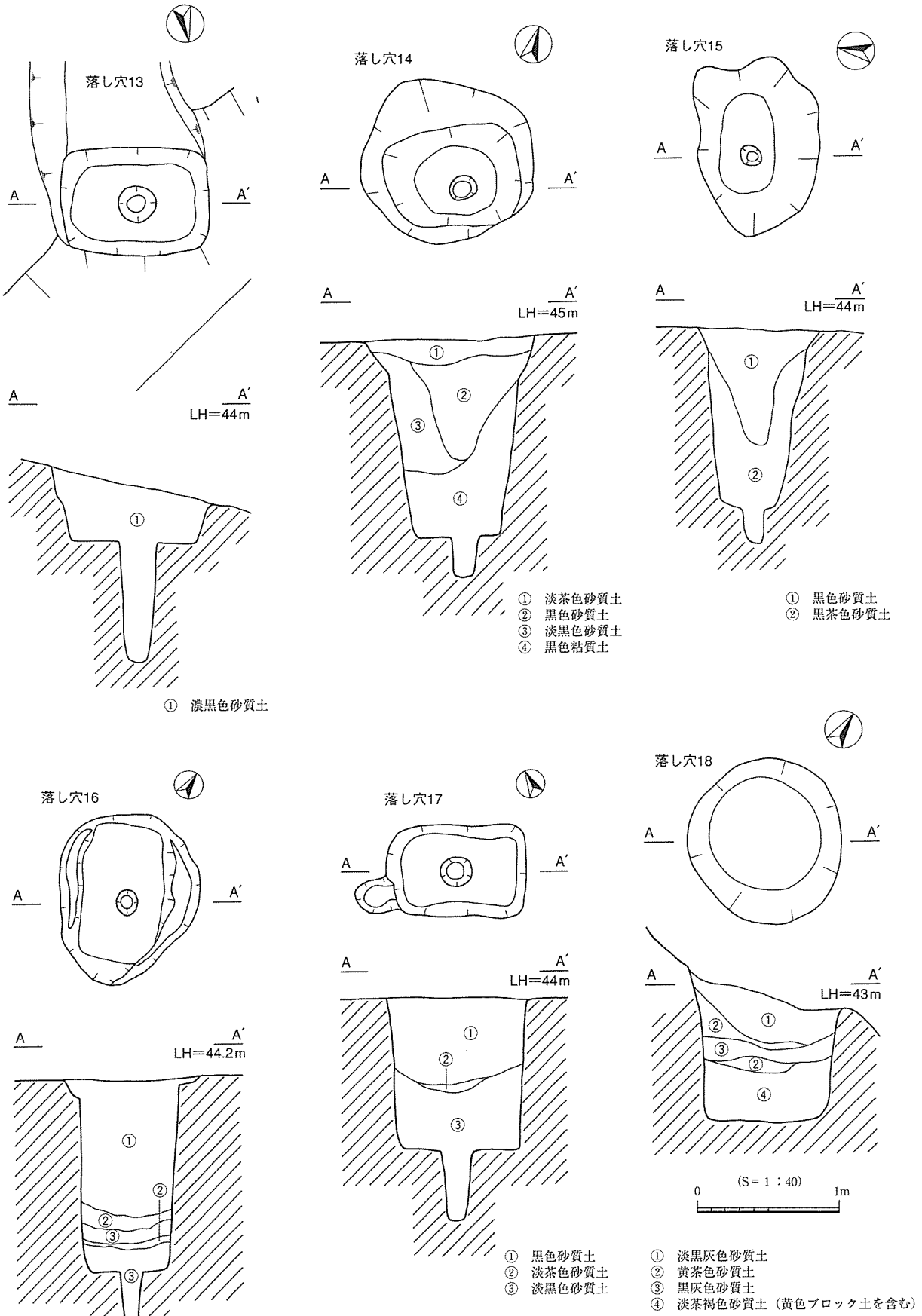
Ｗ－６区の古墳６の墳丘上において検出した土坑である。平面形はいびつな長方形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が1.2m、短辺が１m、深さ1.4mである。小ピットは、直径が0.15m、深さ0.45mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴17（第90図）

Ｅ－６区の古墳６の墳丘上において検出した土坑である。平面形は長方形で、底面に小ピットを持つ。規模は、長辺が１m、短辺が0.65m、深さ1.1mである。小ピットは、直径が0.2m、深さは0.5mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴18（第90図）

Ｅ－７区の斜面において検出した土坑である。平面形は円形で、小ピットを持たない。規模は、直径1.1m程度、深さが1.1mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。



第90図　落し穴13～18　遺構・遺物図

落し穴19（第91図）

W－7区の古墳5の墳丘上において検出した土坑である。二時期の落し穴が重複しているが、埋土からは、切り合いの前後関係が判然としなかった。平面形は2基とも楕円形と推測され、それぞれ小ピットを持つ。規模は、西側の落し穴が、長辺1.1m程度、短辺0.7m、深さ1.5mである。小ピットは、直径が0.1m、深さは0.2mである。東側の落し穴が、長辺1m程度、短辺が0.6m、深さ1.2mである。小ピットは、直径が0.15m、深さ0.1mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴20（第91図）

W－7区の古墳5の墳丘上において検出した土坑である。平面形はいびつな円形で、小ピットを持たない。規模は、直径が0.6m程度、深さは0.9mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴21（第91図）

W－7区の周溝墓1の南側で検出した土坑である。遺構の大半は周溝によって削平されている。平面形は長方形と推測され、小ピットを持つ。規模は、長辺が1.5m以上、短辺が0.7m、深さは0.8mである。小ピットは、直径が0.15m、深さは0.3mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴22（第91図）

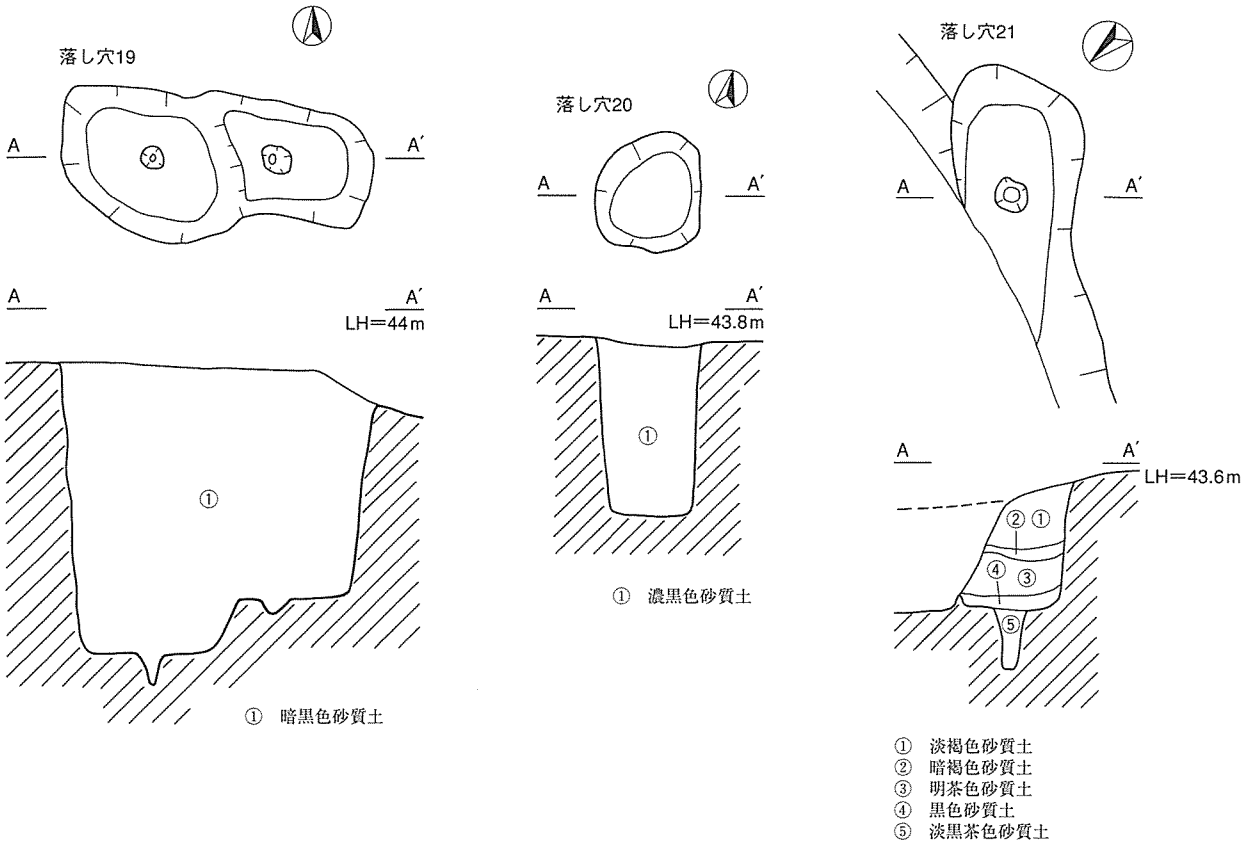
W－8区の周溝墓1の北側で検出した土坑である。斜面の落ち際に位置しているため、遺構の上部が流出している。平面形は長方形で、小ピットを持たない。規模は、長辺が1.1m、短辺が0.6m、深さは0.5m程度が残存している。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴23（第91図）

W－8区の溝状遺構1の北平坦地で検出した土坑である。平面形は円形で、小ピットを持たない。規模は、直径が0.7～0.9m程度、深さは1.4mである。埋土は、淡褐色の砂質土である。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。

落し穴24（第91図）

横穴墓1の墓道部において検出した土坑である。平面形はいびつな円形で、小ピットを持つ。規模は、直径が0.9～1m程度、残存する深さは0.5mである。小ピットは、直径が0.2m、深さが0.4mである。遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。



第91図　落し穴19～24　遺構・遺物図

第8節　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、丘陵上の調査区から、弥生時代前期から近世までのものが多数出土している。

Po.261の壺は、弥生時代前期のもので、溝状遺構の更に下位の斜面、黒色土中から出土しており、この周辺に当該期の遺跡が存在したことを示すものと考えられる。Po.262は丸底の壺形土器。Po.263は高坏の脚部。Po.264は端部に凹線が巡る器台の脚部。Po.265は大形の甕で、肩部にヘラ状の工具で刺突紋を施す。Po.266は口縁部が内彎する土師器の壺形土器で、口縁端部外面に刺突紋が施される。Po.267は須恵器坏身で、口縁の立ち上がりが大きく、端部に沈線が巡る。Po.268は高台を持つ須恵器の壺底部。Po.269は受け口状を呈する土師器の土鍋で、内面にハケ目を残す。Po.270は小口径の土師器皿で、底部は糸切りされる。Po.271は、唐津皿の破片で、内面に鉄絵が描かれる。S.58は五輪塔の風空輪で、外面に梵字が彫られている。S.57も外面を平滑に加工した痕跡の残る石材で、S.58と同様に五輪塔の一部材であろう。両者とも丘陵上に位置する周溝墓1・2の北側斜面下から表土掘削中に出土しており、周溝墓1・2に伴う五輪塔であった可能性が高いものと考えられる。

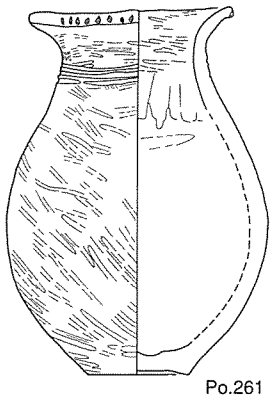
諏訪神社の旧境内からは、中世の土師器、坏皿類が多く出土している。一方、中世陶磁器の出土量は少なく、土器組成の面で一般の集落とは様相の異なる点があるものと考えられる。土師器皿に関しては、坏状の器形で、底部が押圧調整されるA群（Po.275、Po.276）、回転台から底部をヘラで起すB群（Po.277、Po.278）、底部に指押さえの痕跡が明瞭に残るC群（Po.279、Po.280）、てづくねによって製作されるグループをD群とし、口径が12cm程度のものを1類（Po.281～Po.284）、口径が8cm程度の小形のものを2類（Po.281～Po.284）として細分した。回転台で整形され、底部を糸切する皿は、全てE群とし、口径が12cm程度のものを1類（Po.290～Po.292）、口径が8cm程度の小形のものを2類（Po.293～Po.297）、口径が2類に類似するもので、底部糸切りの範囲が直径3cm程度のものを3類（Po.298）とした。また、プロポーションが、E－3類と類似する陶器製の小皿（Po.299）を4類とした。

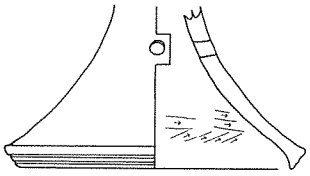
Po.300は、口縁が受け口状を呈する土師器土鍋である。内面にハケ調整の痕跡が明瞭に残る。Po.301は、須恵質の甕形土器の口縁部片である。Po.302は天目茶碗の口縁部片である。平坦地の下層、黒色土中から出土しており、造成の時期を知る手がかりになるものと考えられる。Po.303は、見込みに砂目積の痕跡を残す唐津皿である。Po.304は陶器の皿底部で見込みを蛇目釉剥ぎする。Po.305、Po.306は、備前焼の徳利で、いわゆる鶴首徳利と称されるものである。2点ともほぼ完形品で、Po.305は底部を静止糸切りする。Po.306は、肩部にヘラ記号が施される。どちらも16世紀後半から17世紀前半に相当するものと考えられる。このうち、Po.306は、テラス1の検出中に出土している。

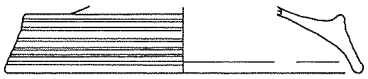
このほか、諏訪神社の旧境内の北側斜面下の黒色土中からは、縄紋時代から古墳時代前期までの遺物が出土している。Po.307は、縄紋土器の浅鉢で、口縁部に2条の沈線が巡る。Po.308～Po.310は、弥生時代後期の甕で、頸部に刺突紋が施される。Po.311は土師器の壺口縁部。Po.312は、台付の壺か鉢の脚部である。

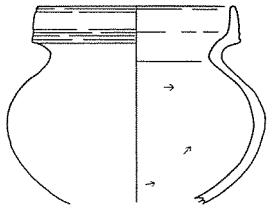
諏訪神社の北側を走る道路は、旧境内地内から搬出された土砂が崩落する危険があったため、通行規制をかけて対処していた。調査が終了した平成17年3月31日に規制を解除し、重機により道路脇の

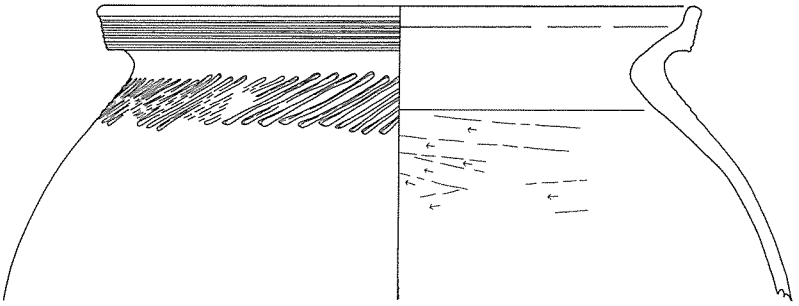
斜面を掘って道路幅を広げる工事をしていたところ、標高25.2mの黒色土中より、完形品の甕Po.318が出土した。口縁端部はやや厚く、内面はヘラケズリし、底部に指押さえの痕跡をとどめている。外面は、肩部をヨコハケ調整する。底部は、焼成後に穿孔されている。Po.319は、口径25.6cmの大形の甕で、胎土や調整手法から、底部Po.320と同一固体と考えられる。口縁端部は面を持ち、プロポーションは、肩部が大きく張りだす倒卵形を呈するものと考えられる。Po.313は口縁に凹線が巡る甕、Po.314は口縁が大きく外方に伸びる壺。Po.317は緩やかに伸びる壺で、口縁端部に沈線が巡る。Po.316、Po.317は、土師器甕で、口縁端部はやや厚い。

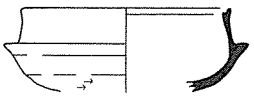

Po.261


Po.263

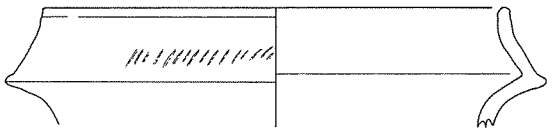

Po.264

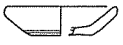

Po.262

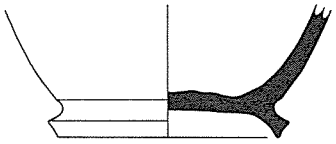

Po.265

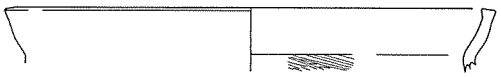

Po.267

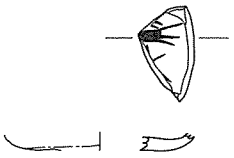
(S=1:4)
0 10cm

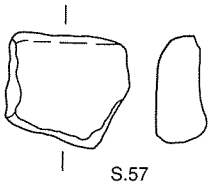

Po.266

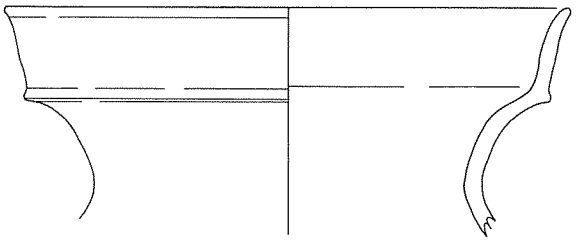

Po.270


Po.268

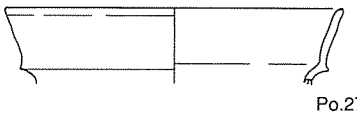

Po.269

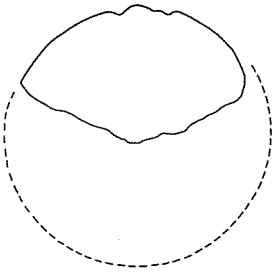

Po.271

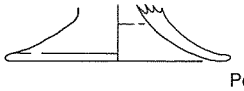

S.57


Po.272

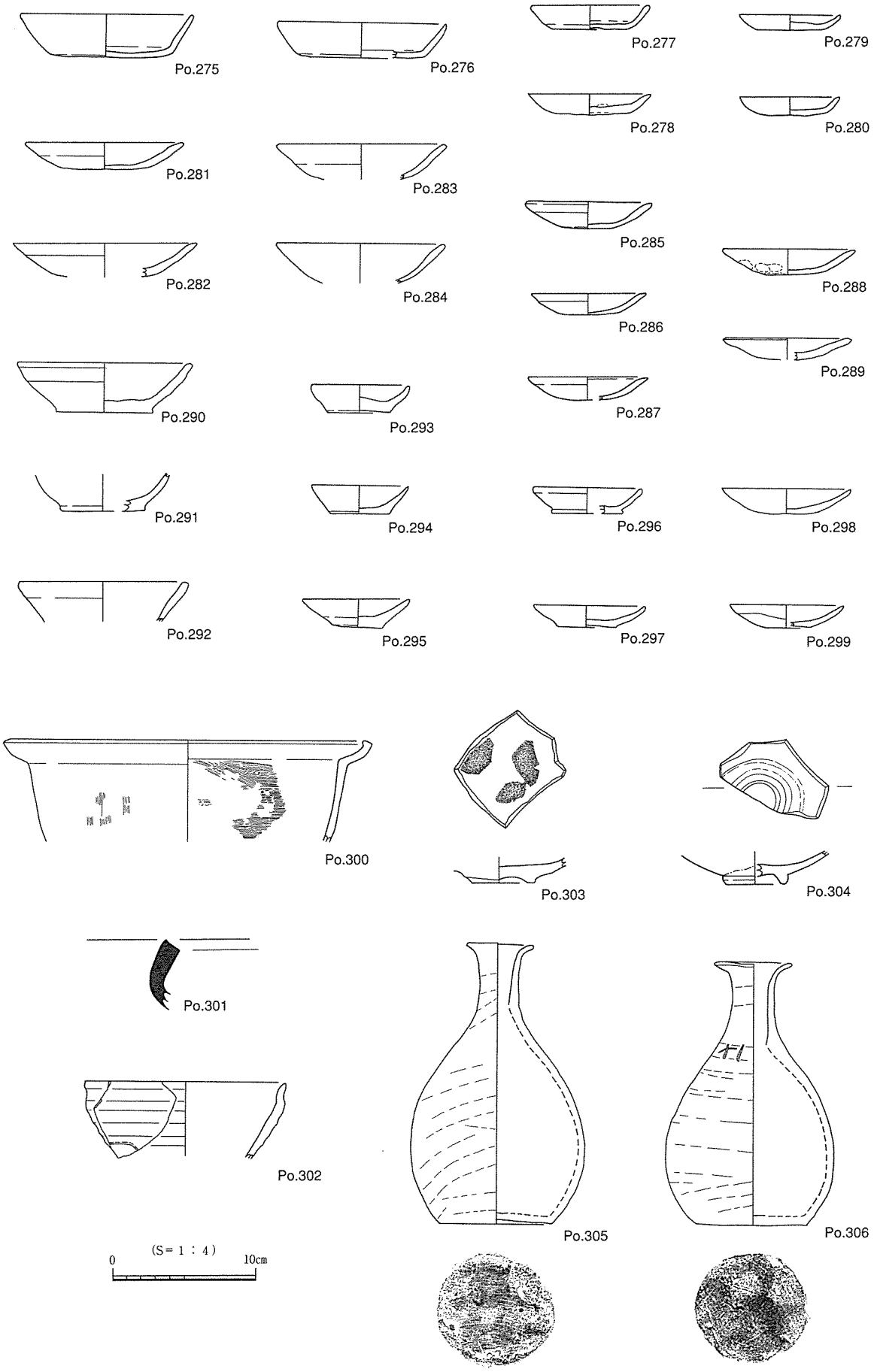
S.58


Po.273

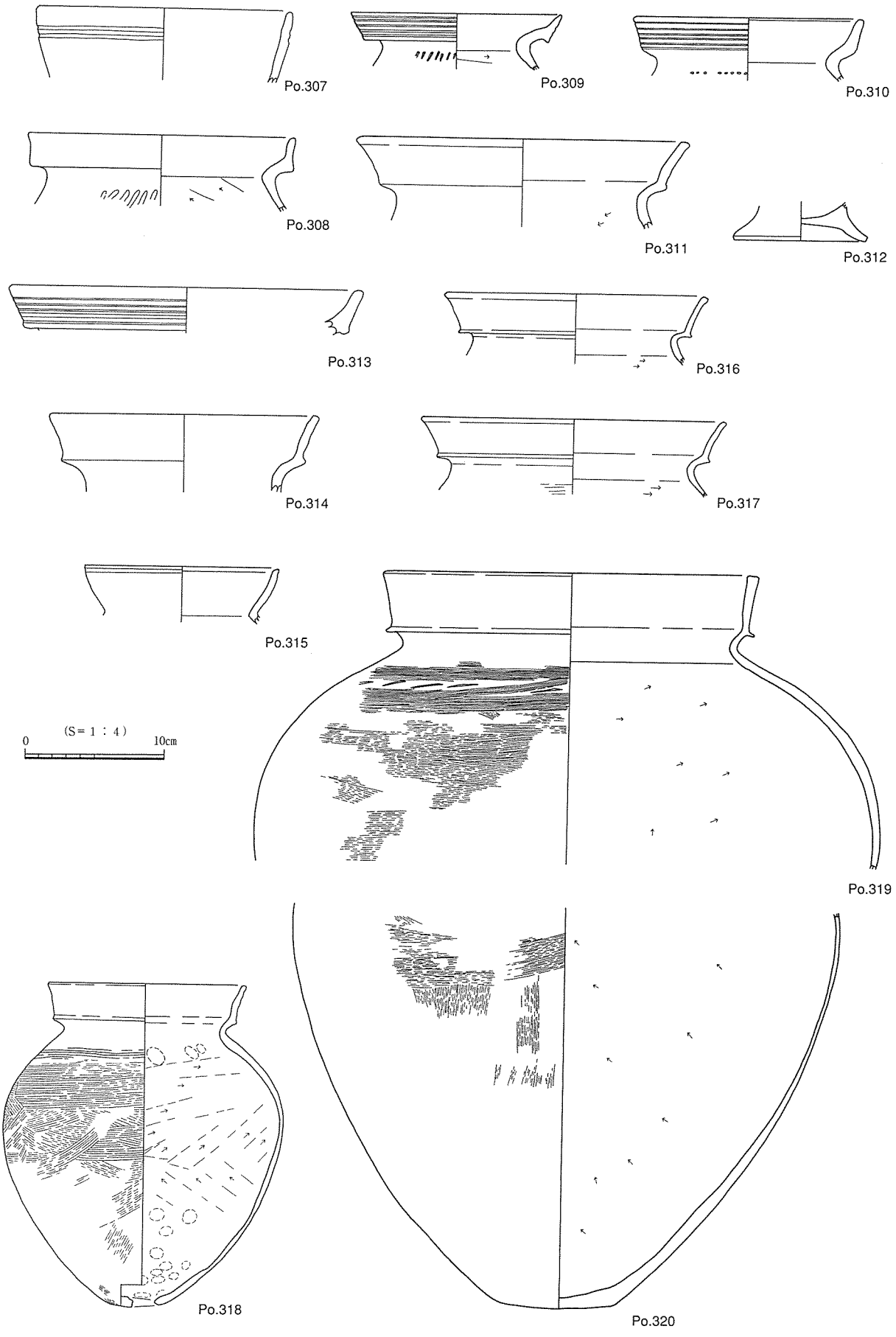



Po.274

第92図　遺構外出土遺物図１



第93図　遺構外出土遺物図２



第94図　遺構外出土遺物図 3

第4章　理化学的分析

第1節　米子市諏訪西山ノ後遺跡の火山灰分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

鳥取県西部米子市域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、大山や三瓶など中国地方の火山のほか、姶良、鬼界、阿多、阿蘇など九州地方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な石器が検出された諏訪西山ノ後遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、火山ガラス比分析と屈折率測定を行い、指標テフラの検出同定を試みることになった。調査分析の対象となった地点は、深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）と、ナイフ形石器S.1検出地点の2地点である。

2．土層の層序

(1) 深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）

深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）では、下位より黄色軽石層（層厚60cm以上、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径4mm）、黄色砂質細粒軽石層（層厚31cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径3mm）、砂混じりで若干赤みがかった褐色土（層厚30cm）、赤色がかった褐色土（層厚14cm）、褐色がかった灰色土（層厚11cm）、わずかに褐色がかった灰色土（層厚10cm）、黄色土（層厚8cm）、灰褐色土（層厚6cm）、黒灰褐色土（層厚11cm）、暗灰褐色作土（層厚24cm）が認められる（図95）。

(2) ナイフ形石器S.1検出地点

ナイフ形石器S.1検出地点では、下位より赤色がかった褐色土（層厚10cm以上）、より褐色がかった灰色土（層厚9cm）、わずかに褐色がかった灰色土（層厚11cm）、黄色土（層厚7cm）、灰褐色土（層厚3cm）が認められる（図96）。これらのうち、わずかに褐色がかった灰色土からナイフ形石器S.1が検出されている。

3．火山ガラス比分析

深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）と、ナイフ形石器S.1検出地点において、土層ごとあるいは基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち、18試料を対象に火山ガラス比分析を行った（図95）。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

1）試料12gを秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）分析篩により1/4―1/8㎜の粒子を篩別。

5）偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

(2) 分析結果

深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）と、ナイフ形石器S.1検出地点における火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして、その内訳を表2に示す。深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）では、試料11より上位で無色透明のバブル型ガラスが認められ、試料5にその出現ピークが認められる（23.2%）。この試料に含まれる火山ガラスは、量が多い順に無色透明のバブル型ガラス（21.6%）、分厚い中間型ガラスおよび繊維束状に発泡した軽石型ガラス（各0.8%）である。なお試料1には、無色透明のバブル型ガラス（12.4%）のほかに、ごく少量ながら淡褐色を呈するバブル型ガラス（0.8%）が認められる。

一方、ナイフ形石器S.1検出地点でも、試料2′や試料1に比較的多くの火山ガラスが認められる。前者には量の多い順に、無色透明のバブル型ガラス（12.4%）、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（0.8%）、淡褐色のバブル型ガラス（0.4%）および中間型ガラス（0.4%）が認められる。また後者には、量の多い順に、無色透明のバブル型ガラス（12.4%）と、繊維束状およびスポンジ状に発泡した軽石型ガラス（1.6%、0.4%）が含まれている。

4．屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）の試料5と、ナイフ形石器S.1検出地点の試料3の2点を対象として、温度変化型屈折率測定装置（京都フィッション・トラック社製RIMS86）により火山ガラスの屈折率測定を試みた。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）の試料5に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.498－1.500である。またナイフ形石器S.1検出地点の試料3に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.498－1.499である。

5．考察

深掘トレンチ（H－Ⅳ区2－5グリッド西断面）における火山ガラスの出現ピークである試料5（4層）に含まれる火山ガラスについては、無色透明のバブル型で特徴づけられることや、その屈折率などから、約2.4～2.5万年前[*1]に南九州地方の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995）と考えられる。一方、ナイフ形石器S.1検出地点において、同様の形態や色調をもつ火山ガラスの出現ピークのすぐ下位のナイフ形石器が検出された土層（5層）から採取された試料3に含まれる火山ガラスについても、無色透明のバブル型で特徴づけられることや、その屈折率などからATに由来すると考えられる。

これらのことから、火山ガラスの出現ピークをATの降灰層準とするならば、深掘トレンチ（H－

Ⅳ区２－５グリッド西断面）では黄色土から採取された試料５付近、ナイフ形石器Ｓ.1検出地点でも黄色土から採取された試料２′付近（いずれも４層）にATの降灰層準があると推定される。そうすると、少なくともナイフ形石器Ｓ.1が検出された土層（５層）は、ATより下位にあると考えられる。ただし、ナイフ形石器Ｓ.1検出地点における分析結果のように、ATに由来する火山ガラスについては、その下位のナイフ形石器Ｓ.1の包含層中にも比較的多く含まれており、より慎重に層位を議論するとすれば、AT降灰後に石器包含層が最終的に形成されたことも考慮した方が良いように思われる。

なお、最下位の成層した軽石層については、鉱物として普通角閃石やカミングトン閃石のほか、少量の黒雲母などが含まれていることから、約13万年前以降に大山火山から噴出した大山松江軽石（DMP、町田・新井、1979、2003）と思われる。高精度の同定のためには、重鉱物組成分析や屈折率測定が行われると良い。

６．まとめ

米子市諏訪西山ノ後遺跡の２地点において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、姶良Tn火山灰（AT、約2.4～2.5万年前*1）に由来する可能性が高い火山ガラスを検出することができた。石器包含層は、ATの降灰層準の可能性のあるその出現ピークより下位にある。しかしながら、この火山ガラスはナイフ形石器Ｓ.1の包含層中にも混在しており、慎重に石器の層位を考える上ではこのことも考慮しておく必要がある。

＊１　放射性炭素（^{14}C）年代。ATの暦年較正年代については、約2.6～2.9万年前と推定されている（町田・新井、2003）。

文献

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代。第四紀研究、34、p. 377-379。

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義。科学、46、p. 339-347。

町田　洋・新井房夫（1979）大山倉吉軽石層―分布の広域性と第四紀編年上の意義。地学雑、88、p. 313-330。

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会、276p。

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会、336p。

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代。第四紀研究、26、p. 79-83。

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討―タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の^{14}C年代．地質雑、99、p. 787-798。

表２　火山ガラス比分析結果

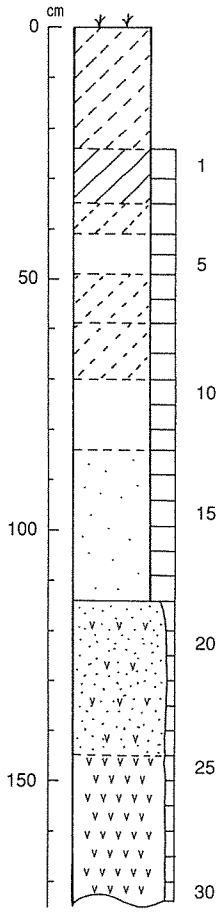
地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
深堀トレンチ（Ｈ－Ⅳ区４－５グリッド西断面）	1	31	2	0	0	0	0	217	250
	3	26	0	0	0	0	0	224	250
	5	54	0	0	2	0	2	192	250
	7	18	0	0	4	1	0	227	250
	9	3	0	0	2	0	0	245	250
	11	2	0	0	0	0	0	248	250
	13	0	0	0	1	1	0	248	250
	15	0	0	0	0	1	1	248	250
	17	0	0	0	0	0	0	250	250
	23	0	0	0	0	0	0	250	250
	27	0	0	0	0	0	0	250	250
ナイフ形石器Ｓ.1検出地点	1	31	0	0	0	1	4	214	250
	2	20	0	0	2	0	0	228	250
	2	31	1	0	1	2	0	215	250
	3	15	0	0	2	0	1	232	250
	4	4	0	0	5	0	0	241	250
	6	2	0	0	2	3	0	243	250
	8	3	0	0	1	1	0	245	250

数字は粒子数。bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型、cl：透明、pb：淡褐色、br：褐色、sp：スポンジ状、fb：繊維束状。

表３　屈折率測定結果

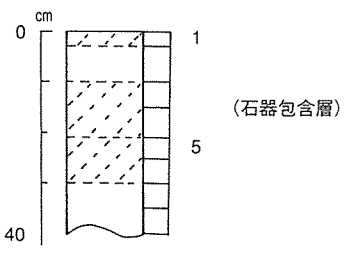
地点	試料	火山ガラスの屈折率（n）
深堀トレンチ（Ｈ－Ⅳ区２－５グリッド西断面）	5	1.498－1.500
ナイフ形石器Ｓ.1検出地点	3	1.498－1.499

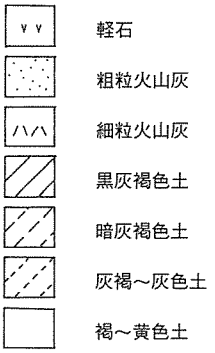
屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）による。



数字はテフラ分析の試料番号

第95図　Ｈ－Ⅳ区4－5グリッドの土層柱状図





数字はテフラ分析の試料番号

第96図　ナイフ形石器S.1出土地点の土層柱状図

第２節　諏訪西山ノ後遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１．試料と方法

試料名	遺構	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	竪穴住居１	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No. 2	竪穴住居４	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No. 3	竪穴住居５	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No. 4	竪穴住居16	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No. 5	竪穴住居３	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No. 6	竪穴住居７	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No. 7	炉跡１	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No. 8	土坑９	炭化物	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS

※１）AMSは加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

２．測定結果

試料名	測定No. (Beta−)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦）
No. 1	201576	1990±60	−27.7	1950±60	交点：cal AD 60 1σ：cal BC 10～AD 110 2σ：cal BC 60～AD 220
No. 2	201577	1900±40	−25.0	1900±40	交点：cal AD 100 1σ：cal AD 70～130 2σ：cal AD 30～220
No. 3	201578	2120±40	−26.6	2090±40	交点：cal BC 100 1σ：cal BC 170～50 2σ：cal BC 200～10
No. 4	201579	1980±40	−26.2	1960±40	交点：cal AD 50 1σ：cal AD 10～80 2σ：cal BC 40～AD 120
No. 5	203207	1960±40	−28.3	1910±40	交点：cal AD 90 1σ：cal AD 60～130 2σ：cal AD 20～220
No. 6	203208	1950±40	−26.2	1930±40	交点：cal AD 70 1σ：cal AD 40～110 2σ：cal BC 10～AD 140
No. 7	203209	810±40	−25.4	800±40	交点：cal AD 1250 1σ：cal AD 1210～1270 2σ：cal AD 1180～1280
No. 8	203210	670±40	−25.2	670±40	交点：cal AD 1300 1σ：cal AD 1290～1310、 ：cal AD 1370～1380 2σ：cal AD 1270～1400

1）^{14}C年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2）$\delta^{13}C$（デルタ）測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

第3節　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定（その1）

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、諏訪西山ノ後遺跡において検出された竪穴住居3（ＳＩ3）と竪穴住居15（ＳＩ15）の埋土中より出土した炭化材40点である。

3．方法

試料を割折して炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と

同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1,000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

結果を表4に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　写真図版25－1・2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材である。現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科　写真図版25－3

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性ともにやや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片であり広範囲の観察が困難であったため、シイ属の同定にとどまる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　写真図版26－4

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。とくに農耕具に用いられる。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科　写真図版26－5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、なかには結晶を含むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

ヤマグワ　*Morus australis* Poiret　クワ科　写真図版26－6

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬で靭性に富み、建築などに用いられる。

クスノキ　*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ科　写真図版27－7

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

サクラ属　*Prunus*　バラ科　写真図版27－8

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～５細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

エゴノキ属　*Styrax*　エゴノキ科　写真図版27－９

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに２～４個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する半環孔材（散孔材）である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

５．所見

諏訪西山ノ後遺跡より出土した炭化材は、クリ29点、シイ属１点、コナラ属アカガシ亜属１点、ケヤキ２点、ヤマグワ４点、クスノキ１点、サクラ属１点、エゴノキ属１点であった。クリは、温帯に広く分布する落葉広葉樹である。暖温帯と冷温帯の中間域では、純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地に生育する。また、二次林としての性格も持つ。コナラ属アカガシ亜属とクスノキは、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。ケヤキ、ヤマグワ、サクラ属、エゴノキ属は、温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹であり、山地や谷沿いなどの適潤地に生育する。以上のように、諏訪西山ノ後遺跡出土の炭化材は、いずれも遺跡周辺からもたらすことができる樹種であったと考えられる。

第４節　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定（その２）

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、諏訪西山ノ後遺跡の竪穴住居３（ＳＩ－３）、竪穴住居１（ＳＩ－１）、竪穴住居16（ＳＩ－16）、竪穴住居７（ＳＩ－７－２）の埋土中より出土した炭化材37点である。

3．方法

試料を割折して、炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1,000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

結果を表５に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　写真図版28－１・２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科　写真図版28－３

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性ともやや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片であり広範囲の観察が困難であったため、シイ属の同定にとどまる。

コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　写真図版29－４

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織で

ある。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　写真図版29－5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　写真図版29－6

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭であり、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。なお、本試料は小片であるうえに保存状態が悪く、広範囲の観察は困難であったため、ブナ科以上の詳細な同定は困難であった。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科　写真図版30－7

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、なかには結晶を含

むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は１～７細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径３mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

サンショウ属　*Zanthoxylum*　ミカン科　写真図版30－８

横断面：やや小型で丸い道管が、単独あるいは２個放射方向に複合して散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。軸方向柔細胞がターミナル状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりサンショウ属に同定される。サンショウ属には、カラスザンショウ、イヌザンショウ、サンショウなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の低木から高木、または藤本である。

草本　grass

木材の形質を呈していない。

５．所見

同定の結果、諏訪西山ノ後遺跡の炭化材は、クリ14点、シイ属３点、コナラ属コナラ節２点、コナラ属クヌギ節６点、コナラ属アカガシ亜属１点、ブナ科（クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか）３点、ケヤキ５点、サンショウ属１点、草本２点であった。クリは、温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帯と冷温帯の中間域では、純林を形成することもある。コナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節も、温帯に広く分布する落葉広葉樹である。またクリとコナラ属クヌギ節は、乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林としての性格も持つ。シイ属とコナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。ケヤキは、温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹であり、山地や谷沿いなどの適潤地に生育する。サンショウ属も温帯を中心に広く分布する広葉樹である。

以上のことから諏訪西山ノ後遺跡出土の炭化材は、周辺に生育し、遺跡に比較的容易にもたらすことができる樹種であったと考えられる。

第５節　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定（その３）

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林

植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、諏訪西山ノ後遺跡のＳＩ15より出土した炭化材24点である。

3．方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義)、放射断面（柾目と同義)、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

結果を表６に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　写真図版31－１

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～３列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　写真図版31－２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～３列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科　写真図版31－３

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～２列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は１～７細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径３mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

ヤマグワ　*Morus australis* Poiret　クワ科　写真図版32－４・５

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは２～３個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の１～３細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～６細胞幅ぐらいである。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬で靭性に富み、建築などに用いられる。

クスノキ科　Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は炭化による変形から不明瞭な点が多いため、クスノキ科の同定にとどめる。ただし、道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

サクラ属　*Prunus*　バラ科　写真図版32－６

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

5．所見

諏訪西山ノ後遺跡で出土した炭化材は、多いものから、ヤマグワ10点、ケヤキ６点、サクラ属３点、コナラ属コナラ節２点、コナラ属クヌギ節２点、クスノキ科１点であった。ヤマグワとケヤキは谷沿いや流路沿いの適潤地に生育し、サクラ属はやや乾燥した斜面等に、コナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節は日当たりの良い山野や乾燥した台地や丘陵地に分布する。これらはいずれも温帯に広く分布する落葉広葉樹である。

クスノキ科は温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林である。いずれの樹種も温帯もしくは温帯下部の暖温帯に分布する樹種ばかりであり、遺跡の周辺か近隣よりもたらすことのできる樹種であったとみなされる。ヤマグワとケヤキが多いことからこれらの樹木の生育する谷沿いあるいは流路沿いの適潤な環境が近接して分布していたとみられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p. 20-48。

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p. 49-100。

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第１号、植生史研究会、p. 242

表４　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定結果（その１）

試料		結果（学名／和名）	
ＳＩ３	Ｗ１	*Styrax*	エゴノキ属
	Ｗ２	*Castanopsis*	シイ属
	Ｗ３	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ５	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ６	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ７	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ９	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ10	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ11	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ12	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ13	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
	Ｗ14	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ15	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ16	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ17	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ18	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ19	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ20	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ21	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ22	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
	Ｗ23	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ24	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ25	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ26	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ27	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
	Ｗ28	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
	Ｗ29	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
	Ｗ30	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
	Ｗ31	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
	Ｗ32	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ33	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ34	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ35	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ36	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ37	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ38	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ39	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
	Ｗ40	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ15	Ｗ１	*Prunus*	サクラ属
	Ｗ２	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ

表５　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定結果（その２）

試料		結果（学名／和名）	
ＳＩ－３	Ｗ－41	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－３	Ｗ－42	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－３	Ｗ－43	*Castanopsis*	シイ属
ＳＩ－３	Ｗ－44	*Castanopsis*	シイ属
ＳＩ－１	Ｗ－１	*Castanopsis*	シイ属
ＳＩ－１	Ｗ－２	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
ＳＩ－１	Ｗ－３	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
ＳＩ－１	Ｗ－４	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
ＳＩ－１	Ｗ－５	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
ＳＩ－１	Ｗ－６	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
ＳＩ－１	Ｗ－７	grass	草本
ＳＩ－１	Ｗ－８	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
ＳＩ－１	Ｗ－９	grass	草本
ＳＩ－16	Ｗ－１	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－16	Ｗ－２	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
ＳＩ－16	Ｗ－３	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
ＳＩ－16	Ｗ－４	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
ＳＩ－16	Ｗ－５	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
ＳＩ－16	Ｗ－６	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
ＳＩ－16	Ｗ－７	*Zanthoxylum*	サンショウ属
ＳＩ－16	Ｗ－８	*Quercus* sect. *Aegilop*s	コナラ属クヌギ節
ＳＩ－16	Ｗ－９	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
ＳＩ－７－２	Ｗ－１	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
ＳＩ－７－２	Ｗ－２	Fagaceae	ブナ科(クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか)
ＳＩ－７－２	Ｗ－３	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－４	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－５	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－６	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－７	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－８	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－９	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－10	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－11	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－12	Fagaceae	ブナ科(クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか)
ＳＩ－７－２	Ｗ－13	Fagaceae	ブナ科(クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか)
ＳＩ－７－２	Ｗ－14	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
ＳＩ－７－２	Ｗ－15	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ

表６　諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定結果（その３）

試　料	結　果（学名／和名）	
ＳＩ15Ｗ－３	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
Ｗ－４	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－５	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－６	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
Ｗ－７	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
Ｗ－８	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－９	*Prunus*	サクラ属
Ｗ－11	*Prunus*	サクラ属
Ｗ－12	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
Ｗ－13	Lauraceae	クスノキ科
Ｗ－14	*Prunus*	サクラ属
Ｗ－15	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
Ｗ－16	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
Ｗ－17	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
Ｗ－18	*Quercu*s sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
Ｗ－19	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
Ｗ－20	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
Ｗ－21	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－22	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－23	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－24	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－25	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－26	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
Ｗ－27	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ

第６節　諏訪西山ノ後遺跡の蛍光Ｘ線分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。この方法を用いて、考古学分野では朱やベンガラなどの顔料分析、リン-カルシウムの含量分析などが行われている。また、指標となる特定の元素の検出パターンの比較から、石器（黒曜石など）や土器（須恵器など）の産地を推定することも可能となっている。

２．試料

試料は、古墳の周溝内から見つかった土壙墓１（ＳＫ15）の底面から検出された赤色顔料である。ここでは、赤色顔料の構成元素から顔料の種類を同定する目的で蛍光Ｘ線分析を行った。測定は、赤色の強い部分と弱い部分の２箇所について実施し、比較検討を行った。

3．分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム

（日本電子㈱製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間300秒、照射径20㎜、電圧30keV、試料室内真空である。

4．分析結果

表7に各元素の定量分析結果（wt%）を示す。

表7　諏訪西山ノ後遺跡の蛍光X線分析結果

単位：wt（%）

	地点・試料	土壙墓1底面の赤色顔料	
原子No.	化学式	1（赤色部）	2（弱赤色部）
13	Al_2O_3	21.967	28.381
14	SiO_2	43.891	46.505
16	SO_3	0.000	0.245
19	K_2O	1.606	2.242
20	CaO	0.469	0.558
22	TiO_2	0.756	1.467
23	V_2O_5	0.005	0.027
25	MnO	0.523	0.491
26	Fe_2O_3	30.784	20.084

5．考察

赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS)、ベンガラ（酸化第二鉄：Fe_2O_3)、鉛丹（酸化鉛：Pb_3O_4）が知られている（市毛、1998、本田、1995)。

分析の結果、赤色部では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（Fe_2O_3）の含量は30.8%を示しており、弱赤色部の20.1%の約1.5倍と明らかに高い値である。

以上の結果から、土壙墓1（SK15）の底面から検出された赤色顔料はベンガラと考えられる。

文献　市毛　勲（1998）新版朱の考古学。考古学選書。雄山閣出版

本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料。考古学と自然科学。31・32、p. 63-79。

第5章　総括

1．旧石器時代

本発掘調査の成果の一つとして、旧石器時代のナイフ形石器がローム層中から出土したことがあげられる。この資料は、米子市内では初めてのローム層中からの出土事例となり、今後の調査の指標となるものと思われる。また、火山灰分析の結果から、石器が含まれていた層からATが検出され、長者原台地上にもATの降灰層が存在することが明らかとなった。まだ肉眼観察ではAT層を認識することが難しいレベルではあるが、今後、長者原台地に分布するローム層の調査を進めていくことで、新たな旧石器時代遺跡を発見する機会に恵まれるものと考えられる。また石材については、ナイフ形石器が圭岩を使用するものであり、表土中から出土している剥片類が、鉄石英を主体としていることに大きな違いがあげられる。剥片の石材は、島根県松江市の花仙山周辺に産出する玉髄に類似しているが、鉄石英は鳥取県内でも採取される石であるため、使用石材の選択と流通の問題に関して、更なる検討が必要である。いずれにせよ、本資料は山陰地方における旧石器時代遺跡の立地と石材の問題について、一石を投じるものとなった。

2．縄紋時代

縄紋時代の資料は、落し穴と見られる土坑が検出されている。この土坑は、形態的に、円形、楕円形、長方形のものがあり、中央に小ピットを持つものと持たないものがあげられる。立地については、丘陵上のみならず、斜面にも造られており、分布状況から特徴を見出すことは難しい。また、遺構内から土器が出土しなかったため、時期を特定することは出来なかった。また、土坑内の埋土は、黒ボクに類似した砂質土が中心であり、縄紋時代において、この丘陵上に黒ボクの堆積層が存在したことを示している。弥生時代の遺構埋土からは、黒ボクは検出されておらず、弥生時代後期以前に消滅してしまったものと考えられる。

3．弥生時代から古墳時代の集落

弥生時代の調査では、前期にまで遡る時期の遺構は確認できなかったが、遺構に伴わない資料として、完形品の壷型土器が1点出土している。周辺の遺跡では、諏訪遺跡群別所新田地区で弥生時代前期の土壙墓群が確認されているほか、諏訪南山崎遺跡からも前期土器の出土がみられる。今回は一点のみの出土ではあるが、この調査地周辺においても、弥生時代前期の遺構が存在することを示唆するものであると思われる。

弥生時代中期には、人為の活動痕跡は認められないが、中期後半に土坑が作られている。出土した土器は、甕の頸部内面まではヘラケズリが及ばないもので、口縁直下に退化した指頭圧の痕跡を残すものが見られ、中期後半でも終末に近い様相を呈する。この段階の竪穴住居は検出されていないが、集落の開始期を示すものと考えられる。

弥生時代後期前葉には、竪穴住居3、21の2棟が作られる。竪穴住居3は、直径8mを超える大形の住居であり、中心的な存在と考えられるが、周辺に同時期の住居が建てられず、閑散とした集落の姿という印象を受ける。

続く後期中葉には、住居の数が増加する。竪穴住居３、５、６、15、17は、直径６mから７mの住居で、東西方向に列状に並んでいる。また、竪穴住居14は、柱穴を持たない構造の小規模な竪穴で、住居とは断定できないが、焼失痕跡により、上屋が架けられていたことと、床面に被熱痕が残ることから、竪穴住居に類似した建物として機能していたことが想定される。

続く後期後葉には住居の数が減少し、竪穴住居16のみが検出されている。原因は定かではないが、この段階で集落規模の縮小が起こったものと考えられる。

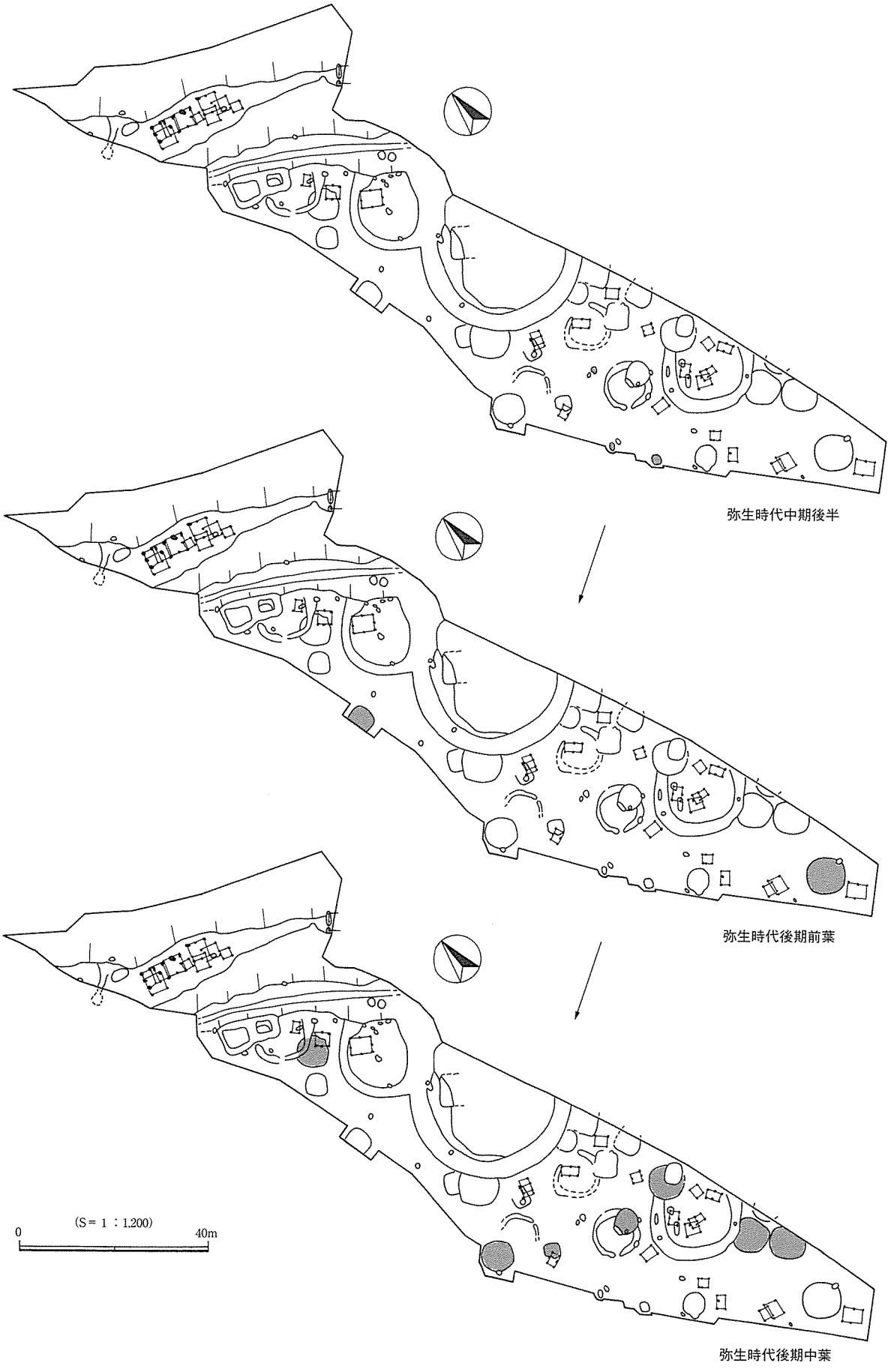
弥生時代終末期には、確実な資料を抽出できないが、土坑４は、出土した土器から、この時期に相当するものと考えられる。また、青木Ⅴ・Ⅵ期に相当する資料は、竪穴住居10から良好な資料が出土しているが、青木Ⅳ期の資料は少ないものと考えられる。そして、続く古墳時代前期前半(青木Ⅶ期)に、居住区としての集落は終焉し、古墳群へと姿を変えていく。また、掘立柱建物については、遺物がほとんど出土していないため、時期を特定することは出来なかったが、上記の遺構と共に、倉庫や住居として利用されていたと考えられる。

集落部での調査で特筆すべきことは、焼失住居が７棟検出されたことが挙げられる。これまで、鳥取県内では200例ほどの焼失住居の検出例が見られるが、小規模な集落でまとまって見つかる例は多くはなく、この事例が際立っている。ただ、焼失した時期については、バラつきがみられるため、一度に焼かれたという解釈は成り立たないという点を強調しなければならない。住居内からは完形品の土器などは出土しないことから、あらかじめ住居内を片付けてから焼いている可能性が高いものと考えられる。また、焼土と共に垂木などの部材が焼け落ちた状況で見つかっており、建物については、現状のまま焼かれたことを示している。部材などを再利用することなく燃している状況から、建物を廃棄するにあたって、火をつけて処分する方法がとられたとも考えられる。また、竪穴住居16の柱穴上面から、直立した状態の木材を検出したが、柱穴内には炭化材は残っていなかった。恐らく、柱穴内の柱までは火が回らず、焼け残ってしまったため、土中にあった柱は腐ってしまったものと考えられる。また、竪穴住居15のピット内から出土したガラス玉も、高温の環境下にあったにも関わらず、表面は熔けていなかった。こうしたことから、地面に埋まっている柱材が、炭化して残る可能性は低いものであると考えられる。

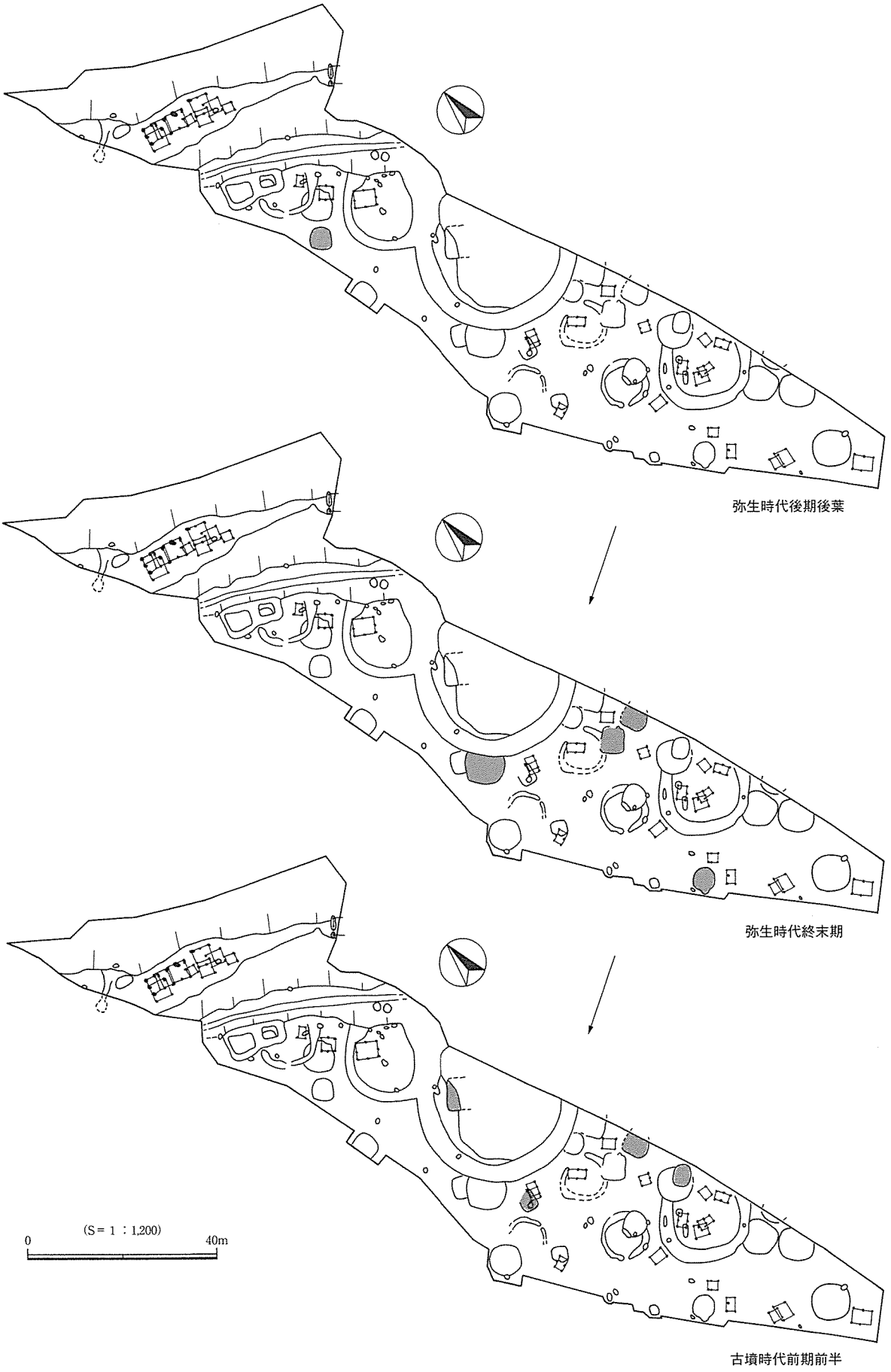
丘陵の端部で見つかった、溝状遺構１については、出土遺物が無く、掘削された時期を明らかにすることができなかったが、上層の埋土より、古墳時代前期の土器が出土していることから、集落活動が開始される弥生時代中期後半から後期の時期のいずれかに掘削され、早い段階で埋め戻されたものと考えられる。溝の立地や、形態的な特徴から、集落を区画する環壕の可能性が高いものと考えられるが、日野川左岸地域では、福市遺跡において後期の環壕が存在した可能性が指摘されているに過ぎず、環壕遺跡の分布を再考する必要が生じた。

４．古墳

古墳時代には、前期の集落が弥生時代後期から引き続き存在するが、前期の後半から古墳群が形成されはじめ、中期には、墓域として機能するようになる。後期の古墳ははっきりしないが、後期になると斜面に横穴が作られ、引き続き、墓域が継続するようである。古墳の変遷を追うと、古墳時代前期後半に土器棺墓１が、古墳時代前期末から中期初めに古墳７が、中期後半に古墳１が相当するものと考えられる。また後期には、横穴墓１が作られており、この地域が横穴墓の分布範囲であることが



第97図　遺構変遷図１



第98図　遺構変遷図２

判明した。

古墳の周溝内からは、土器が出土しているものがいくつかある。古墳6では、高坏ばかりが散乱した状態で見つかったほかに、古墳5の周溝からは、底部を打ち欠いた土師器の直口壺、古墳7では大形の壺が破砕された状態で出土している。これらの資料は、葬送儀礼に伴う供献土器と考えられる。

いずれの古墳も埋葬施設については、墳丘部が後世の耕作により、削平されていて残っていなかったが、周辺の埋葬施設はいくつか確認している。土器棺墓1は、大形の甕形土器を用いたもので、通常このサイズの土器は、古墳の埋葬施設以外ではほとんど使用されないため、専用棺の可能性が考えられる。口縁は複合口縁で、やや肩の張るプロポーションである、時期を決しがたい遺物であるが、古墳時代前期中葉から後葉のものと理解しておく。

土壙墓は周溝内埋葬である土壙墓1、や古墳6の墳丘部から検出された小規模な土壙墓などが見つかっているが、副葬品を持つものは少なく、時期決定を行う根拠に欠ける。また、土壙墓1からは、床面に顔料のベンガラを撒いた状況が確認されており、葬送儀礼の様子を窺わせる資料が得られている。

諏訪神社の旧境内地で見つかった横穴墓1は、中世に行われた平坦地の造成工事により、上部が削平されたものと考えられる。墓室は調査区外に伸びるため全容はつかめなかったが、墓道部は、石により閉塞され埋め戻されていたために、鏃や横瓶などの遺物が撹乱されることなく保存されたと考えられる。

5．古代

古代には、今回の調査区では少量の遺物が出土したに過ぎないが、昭和58年の調査区では、胞衣埋納土坑を伴う掘立柱建物が検出されており、付近に集落が存在したことが明らかとなっている。本調査区では、当該期の遺跡の展開を窺わせる資料は希薄であるが、古墳群を避けて集落が作られていた可能性があるものと考えられる。

6．中世から近世

中世には、諏訪神社の旧境内地において、大規模なテラスを造成して建物を建てている状況が判明した。また、平坦地の北東部で検出した炉跡の埋土からは、鍛造剥片と粒状滓が出土しており、鍛治遺構に伴う炉であった可能性が高い。ここからは、製品や砥石などの遺物は出土していないため、どのような工程が行われていたのか定かではないが、平坦地の造成後に作られているものと考えられることから、建物の建設作業に使われた道具類の加工、修理がなされていた可能性もあろう。

出土遺物では、土師器の皿が多く、輸入陶磁器や煮沸具の出土量がごく少数であることから、一般的な集落の土器組成と比較しても土師器皿の割合が高いものと思われる。かわらけが主体であるという要素が、宗教的な施設の存在を示す資料として評価することが出来るのか、検討する必要がある。土師器の皿については、製作時の特徴と法量の違いから分類を試みた。出土した資料については、底部押圧技法の皿、回転台を用いた皿、てづくね成形による皿とバリエーションに富むが、概ね、13世紀から16世紀の土師器皿の様相に一致するものと考えられる。近隣では、尾高城から出土している回転台成形の土師器皿に類似するが、詳細な編年にまで踏み込む余地は無く、まだまだ資料不足の感が否めない。類例の増加が待たれる。

また、掘立柱建物は、平坦地において10棟検出することが出来たが、他にも多数の柱穴があり、復元できなかった建物が相当数あるものと考えられる。検出時に十分な検討が出来なかったため、セクションの設定に不備が目立ち、建物の前後関係が明らかにされなかったものも多く、課題を残す結果となった。建物の構造を見ると、２間×１間、１間×１間の建物が主体的であるが、平坦地の東側で検出した掘立柱建物は、布堀の掘形と大形の柱穴を持つものであり、特異な建造物と考えられる。今回の調査では西側の柱列しか検出できず、建物の規模を明らかにすることは出来なかったが、神社建築に繋がる可能性もあるため、今後も類例の調査を進めていく必要があろう。

遺構の変遷については、建物の重複する様子から、少なくとも３時期の変遷が追えるようである。今のところ、15世紀から16世紀の時期に掘立柱建物が作られ、中世末から近世初頭にテラスを造成している状況が窺える。近世以降も諏訪神社の境内として利用されていたが、近世の遺物の出土は少なく、顕著な遺構も確認されなかった。諏訪神社の社叢として、管理されていた様子が窺える。

以上のように、諏訪神社旧境内地の調査からは、中世後半期の遺構、遺物の変遷を探る上での資料が得られたが、中世段階における平坦地の造成と、掘立柱建物の建立が、諏訪神社の起源を中世後半期にまで遡らせるものなのかという問題に関しては、判断がつきかねた。こうした解釈については、遺跡調査の限界点を示しているといえよう。

７．自然科学分析

自然科学分析では、テフラ分析、放射性炭素年代測定、樹種同定、蛍光Ｘ線分析を実施した。テフラ分析については、ナイフ形石器が出土した翌日に試料採取が行われたため、ナイフ形石器出土地点の土からは、良好な試料が得られたといえよう。新鮮で撹乱のない断面の提供が重要な要素であると考える。また、土層断面の分層についても、ローム層はこれまで地山という認識で過ごされてきたため、自然層位の認識が十分ではなく、課題を残すものとなった。経験を積むことと同時に、自然科学分野の研究者との連携が必要であると痛感する。年代測定については、竪穴住居５（BC100）→竪穴住居16（AD50）→竪穴住居１（AD60）→竪穴住居７（AD70）→竪穴住居３（AD90）→竪穴住居４（AD100）という結果が得られているが、竪穴住居３の年代などは新しく出すぎる結果となり、土器の編年観との矛盾が多く見られる結果となった。また、中世の試料についても、炉跡の年代が13世紀中葉、土坑９の年代が、14世紀初頭の年代値が得られている。炉跡については、共伴する遺物が無く、比較検討する要素を持たないが、諏訪神社境内より出土している遺物の年代よりも古く出ている。掘立柱建物の建替の状況から、複数期の土地利用のあり方が窺えるが、この段階にまで遡るものか、今後の検討課題といえよう。

樹種同定では、焼失住居の建築部材について分析を実施している。傾向としては、クリ、ヤマグワの利用頻度が高いことがわかる。これらの木材は、近隣の森から切り出されたものと考えられる。今回の調査地点では、良好な分析試料に恵まれなかったため、花粉分析を実施しなかったが、近隣の遺跡を調査する際には注意する必要があろう。蛍光Ｘ線分析については、古墳１の周溝内から検出された、土壙墓１の底部から出土した赤色顔料の試料を分析し、ベンガラであるとの結果を得た。

８．まとめ

以上、諏訪西山ノ後遺跡の調査成果を時代ごとにまとめた。今回の調査により、諏訪西山ノ後遺跡

が、旧石器時代から近世に至る、複合遺跡であることが明らかとなった。また、長者原台地において旧石器時代の遺跡を見出したことは大きな成果であった。旧石器時代の遺跡については、これまでも大山山麓の遺跡において、断片的な資料が報告されていたが、ブロックを伴うような確実な資料は見つかっておらず、その存在については謎のままであった。筆者自身も、平成12年に米子市吉谷において実施した吉谷銭神遺跡の調査以来、縄紋時代早期以前の遺跡について注目してきたが、実際に遺跡を見つけることは出来なかった。今回の発見は、古墳周溝内の埋土中からナイフ形石器が出土したことがきっかけではあったが、表土から鉄石英製の剥片が出土していることを気に留めていなければ見過ごしていたかも知れなかった。とは言え、弥生時代集落の調査を完了させ、新たにグリッドを設定し、ローム層の調査に入ってから石器が出土するまでの期間は長かった。作業員もローム層の調査は初めての経験であり、当初の調査予定の期間を大幅に超過することとなった。

このような慌しい状況で行われた調査ではあったが、米子市内でも旧石器時代の遺跡がローム層中に存在するという証明は、これで果たされたといえる。今後は、試掘調査でもローム層まで掘削し、堆積しているローム層の状況を把握していく努力が必要となろう。いずれにせよ、鳥取県内の旧石器時代遺跡の調査は、まだまだ緒についたばかりであり、これからの調査研究の進展が期待される。これまで旧石器時代遺跡調査の経験が無かった筆者にとっても、地山と信じて疑わなかったローム層から、石器が出てくるという貴重な体験を味わうことができた。旧石器時代遺跡の調査について、不慣れな筆者に温かくご指導、ご教示いただいた方々に感謝申し上げる。

参考文献

小原貴樹編　1978年『尾高城址』米子市教育委員会

佐伯純也　2001年『吉谷銭神遺跡Ⅰ』㈶米子市教育文化事業団

清水真一　1992年「因幡・伯耆」『弥生土器の様式と編年』木耳社

下高端哉　1999年『米子内遺跡発掘調査報告書』米子市教育委員会

青木遺跡発掘調査団編　1978年『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育委員会

濵田竜彦　2003年『妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会

表８　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表１

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
13	1	土坑１	弥生土器 壺	22.0	7.6	50.8	淡黄褐色	体部下半：ケズリ 体部上半：ハケ	壺部：上半ハケ・下半ミガキ 肩部：５条の沈線 口縁：３条の凹線	
13	2	土坑１	弥生土器 壺	(25.0)	(7.2)	47.5	淡黄褐色	上半：風化 中央部ハケ 下半：ケズリ	胴部：ハケ 下半：ミガキ 頸部：４条の凹線	
13	3	土坑１	弥生土器 壺底部		7.4	(30.3)	淡黄褐色	下半：ケズリ	胴部：風化 下半：ケズリ	
13	4	土坑１	弥生土器 壺		8.3	(42.5)	淡黄褐色	胴部：ハケ 底部：ミガキ	胴部：風化 下半：ケズリ	
14	5	土坑１	弥生土器 甕	(18.1)	(5.5)	37.1	淡黄褐色	上半：ハケ 下半：ケズリ	上半：ハケ 下半：ミガキ 口縁部：３条の凹線	
14	6	土坑１	弥生土器 台付壺		14.7	(19.2)	淡黄褐色	壺部：ハケ・ナデ・指オサエ 脚部：指オサエ・ナデ・ケズリ 脚端部：ナデ	壺部：ハケ・ミガキ 壺部最大径付近：刺突紋 脚部：ナデ 脚端部上：６条凹線 脚端部下：２条凹線 脚柱部：３条凹線	脚部４方向に三角形の透かし
14	7	土坑１	弥生土器 壺			(7.7)	淡黄褐色	頸部：ナデ 体部：ナデ・指オサエ	頸部：３条凹線・ナデ 体部：ハケ	
14	8	土坑１	弥生土器 甕	(15.3)		(8.4)	淡黄褐色	不明	口縁：３条凹線 体部：ナデ・ハケ	
14	9	土坑１	弥生土器 甕	(10.4)		(5.0)	淡橙黄色	口縁：ナデ 体部：ハケ	口縁：２条凹線 体部：ナデ・ハケ	内面口縁～外面煤付着
14	10	土坑１	弥生土器 甕	(16.6)		(2.6)	茶灰色	ナデ	４条凹線・ナデ	
14	11	土坑１	弥生土器 甕	(16.6)		(2.4)	橙褐色	ナデ	３条凹線・ナデ	
14	12	土坑１	弥生土器 甕	(21.0)		(1.9)	橙褐色	ナデ	４条凹線・ナデ	
14	13	土坑１	弥生土器 底部		5.5	(7.5)	外：淡橙黄褐色 内：淡黄褐色	体部：ケズリ 底面：ナデ	体部：ナデ 底面：ナデ	内外面煤付着
14	14	土坑１	弥生土器 底部		(8.4)	(2.9)	橙褐色	不明	不明	
15	15	土坑２	弥生土器 甕	(17.4)		(11.0)	橙褐色	不明	口縁：２条凹線 体部：ハケ	体部外黒斑
15	16	土坑２	弥生土器 壺	(14.7)		(7.9)	橙褐色	不明	口縁：３条凹線 頸部以下：ナデ 頸部：４条凹線	
15	17	土坑２	弥生土器 台付壺		(13.9)	(13.1)	淡黄褐色	受部：ハケ 脚部：指オサエ・ナデ・ケズリ 脚端部：ナデ	受部：ハケ 脚部：ナデ 脚端部：２条凹線	
16	18	土坑３	弥生土器 壺			(15.4)	淡黄褐色	頸部上：ハケ→ナデ 頸部以下：ナデ・指頭圧痕	ハケ 頸部：５条凹線	

表９　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表２

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
16	19	土坑３	弥生土器 甕			(2.9)	淡橙灰色	ナデ	４条凹線 頸部下：貼付突帯 →ナデ	
16	20	土坑３	弥生土器 甕	(19.0)		(5.6)	茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：３条凹線 頸部下：貼付突帯 →ナデ 体部：ナデ	
16	21	土坑３	弥生土器 甕	(18.0)		(3.0)	黒色	ナデ	４条凹線・ナデ	
16	22	土坑３	弥生土器 甕			(6.4)	橙褐色		口縁：ナデ 体部：不明	
16	23	土坑３	弥生土器 甕	(24.4)		(10.3)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ハケ	口縁：５条凹線 体部：ハケ	外面煤付着
16	24	土坑３	弥生土器 底部		(4.4)	(2.7)	黒褐色	ナデ	ナデ	底部穿孔
16	25	土坑３	弥生土器 底部		(3.4)	(1.9)	淡橙灰色	ナデ	体部：ミガキ 底面：ナデ	
17	26	土坑４	弥生土器 甕	(17.3)		(13.4)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：不明 体部上：波状紋	
17	27	土坑４	弥生土器 甕	(18.0)		(9.1)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ	
17	28	土坑４	弥生土器 甕	(15.6)		(7.0)	淡赤褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ナデ	
17	29	土坑４	弥生土器 甕	(21.8)		(5.0)	淡茶褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：不明 体部：ナデ	
17	30	土坑４	弥生土器 甕	(21.6)		(4.3)	暗茶灰色	ナデ	不明	
17	31	土坑４	弥生土器 甕	(14.8)		(5.4)	暗茶灰色	口縁：不明 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ナデ	
17	32	土坑４	弥生土器 甕	(18.6)		(5.3)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ナデ	
17	33	土坑４	弥生土器 底部			(4.5)	淡黄褐色	ケズリ	不明	
17	34	土坑４	弥生土器 高坏	(24.8)		(10.6)	淡黄橙色	受部：ミガキ 脚部：ケズリ	受部：ミガキ 脚部：不明	
17	35	土坑４	弥生土器 高坏		(15.6)	(2.7)	淡茶灰色	ケズリ・ハケ・ナデ	ナデ	外面赤色塗彩
20	36	竪穴住居１	弥生土器 甕	17.8	8.6	31.7	外：橙色 内：淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：４条凹線 上半：ハケ 下半：ミガキ	
20	37	竪穴住居１	弥生土器 甕	(17.4)		(4.9)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：５条凹線 体部：ナデ	
20	38	竪穴住居１	弥生土器 器台	(17.8)		(4.7)	淡赤灰色	ナデ	口端部：７条凹線 ナデ	
20	39	竪穴住居１	弥生土器 壺	(17.0)		(2.0)	淡赤灰色	ナデ	口縁４条凹線	
20	40	竪穴住居１	土錘	(2.8)		(5.3)	淡赤灰色	未調整	ナデ・ケズリ	
23	41	竪穴住居２	弥生土器 壺	(9.4)		(2.1)	淡赤灰色	ナデ	ナデ	
23	42	竪穴住居２	弥生土器 底部		(3.6)	(3.7)	橙褐色	ナデ	不明	
26	43	竪穴住居３	弥生土器 甕	(14.5)		(8.6)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ハケ・指オサエ	口縁：３条凹線 体部：ハケ	

表10　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表３

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
26	44	竪穴住居３	弥生土器 甕	(12.4)		(2.7)	暗茶色	ナデ	３条凹線・ナデ	
26	45	竪穴住居３	弥生土器 甕	(16.0)		(3.2)	暗茶色	不明	口縁：４条凹線・ ナデ	外面煤付着
26	46	竪穴住居３	弥生土器 壺	(17.0)		(5.7)	茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：３条凹線・ ナデ 体部：ナデ	
26	47	竪穴住居３	弥生土器 壺	(20.0)		(3.1)	茶灰色	不明	口縁：１条凹線 ナデ	
26	48	竪穴住居３	弥生土器 壺	18.3		(8.0)	淡黄褐色	口縁：ナデ 頸部：ナデ・指オサエ 体部：ケズリ	口縁：５条凹線 頸部：ナデ 体部：ナデ 体部上：刺突紋	内外口縁部黒斑
26	49	竪穴住居３	弥生土器 底部		5.4	(2.5)	橙褐色	ナデ	ナデ	
28	50	竪穴住居４	土師器 甕	(14.9)		(9.4)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	
28	51	竪穴住居４	土師器 甕	(15.2)		(9.6)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	体部外煤付着
28	52	竪穴住居４	土師器 甕	(17.9)		(5.6)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外口縁部煤付着
28	53	竪穴住居４	土師器 甕	(16.0)		(4.4)	淡橙灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
28	54	竪穴住居４	土師器 甕	(15.4)		(3.7)	茶灰色	ナデ	ナデ	
28	55	竪穴住居４	土師器 甕	(17.8)		(4.8)	淡茶灰色	不明	不明	
28	56	竪穴住居４	土師器 甕	(17.7)		(5.1)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	口縁端部に黒斑
28	57	竪穴住居４	土師器 甕	(17.0)		(5.6)	淡黄灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	
28	58	竪穴住居４	土師器 甕	(19.6)		(5.3)	淡赤灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ	口縁外黒斑
28	59	竪穴住居４	土師器 甕	(19.2)		(13.8)	淡黄橙色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ 上部に波状紋	体部外煤付着
28	60	竪穴住居４	土師器 甕	(20.6)		(5.2)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	口縁部に黒斑
28	61	竪穴住居４	土師器 甕	(23.6)		(4.5)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
28	62	竪穴住居４	土師器 甕	(23.6)		(5.2)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
28	63	竪穴住居４	土師器 甕	(25.7)		(4.7)	淡茶灰色	不明	ナデ	
28	64	竪穴住居４	土師器 甕	(14.6)		(6.5)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	口縁外煤付着 口縁～頸部内面黒斑
28	65	竪穴住居４	土師器 甕	(16.0)		(5.4)	褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	内外煤付着
28	66	竪穴住居４	土師器 甕	(14.6)		(3.8)	淡白茶色	不明	ナデ	
28	67	竪穴住居４	土師器 甕	(17.7)		(4.9)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
28	68	竪穴住居４	土師器 甕	(16.8)		(4.1)	淡灰褐色	ナデ	ナデ	

表11　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表４

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
28	69	竪穴住居４	弥生土器 甕	(13.0)	－	(4.0)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：２条凹線 体部：ナデ・刺突紋	
28	70	竪穴住居４	土師器 甕	(27.8)		(11.7)	淡黄褐色	不明	口縁：ナデ 体部：ハケ	
29	71	竪穴住居４	土師器 壺	(16.7)	－	(9.0)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：波状紋	
29	72	竪穴住居４	土師器 壺	(16.8)		(7.9)	淡茶灰色	不明	ナデ	外口縁黒斑
29	73	竪穴住居４	土師器 壺	(19.0)		(10.7)	淡黄褐色	口縁～頸部：不明 体部：ケズリ	不明	
29	74	竪穴住居４	土師器 壺	(13.6)		(5.0)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
29	75	竪穴住居４	土師器 壺	(11.3)		(4.8)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	外黒斑
29	76	竪穴住居４	土師器 高坏	(29.6)		(6.3)	茶灰色	不明	ナデ	
29	77	竪穴住居４	土師器 高坏	30.1		(24.8)	茶灰色	受部：ケズリ・ハケ 脚部：ケズリ	受部：ハケ 脚部：ケズリ	口縁端部煤付着
29	78	竪穴住居４	土師器 台付壺	16.4	8.3	13.2	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ・ナデ 脚部：ナデ（シボリ目有）	口縁：ナデ 体部：ハケ・ナデ 脚部：ナデ（指頭圧痕有）	ほぼ完存 外面煤付着
29	79	竪穴住居４	土師器 台付鉢	(17.8)	11.1	(10.9)	淡黄褐色	受部：ナデ 脚部：ケズリ・ナデ	ナデ	
29	80	竪穴住居４	土師器 鉢	(18.7)	(4.4)		淡黄褐色	ナデ	ナデ・ハケ	
29	81	竪穴住居４	土師器 高坏		(12.0)	(1.4)	淡褐色	ナデ	ナデ	
29	82	竪穴住居４	土師器 低脚坏		(6.1)	(4.9)	淡茶灰色	受部：不明 脚部：ナデ	不明	脚部完存
29	83	竪穴住居４	土師器 蓋or低脚坏		(2.3)		淡茶灰色	不明	不明	
29	84	竪穴住居４	土師器 低脚坏		(5.5)	(3.3)	外：淡黄橙色 内：淡黄褐色	受部：ナデ 脚部：ケズリ・ナデ	受部：ハケ・ナデ 脚部：ナデ	
29	85	竪穴住居４	土師器 器台	(21.6)		(4.4)	黄褐色	不明	ナデ	
29	86	竪穴住居４	土師器 器台			(5.5)	淡茶灰色	不明	不明	
29	87	竪穴住居４	土師器 器台、甑形土器		(27.4)	(5.2)	茶灰色	ケズリ・ナデ	ナデ	
29	88	竪穴住居４	土師器 高坏			(10.4)	淡黄褐色	脚部：ナデ	脚部：ハケ・ナデ	
29	89	竪穴住居４	土器 底部		(5.0)	(2.2)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	外面黒斑
29	90	竪穴住居４	土器 底部		(6.2)	(2.3)	淡褐色	ナデ	ナデ	
31	91	竪穴住居５	弥生土器 甕	(18.0)		(6.3)	淡褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：５条凹線・ナデ 体部：ナデ	外面煤付着

表12　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表５

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
31	92	竪穴住居５	弥生土器 甕	(14.2)		(1.7)	淡赤褐色	ナデ	３条凹線・ナデ	
31	93	竪穴住居５	弥生土器 鉢	(16.0)		(3.3)	淡黄褐色	ナデ	ナデ	
33	94	竪穴住居６	弥生土器 甕	(12.6)		(5.6)	淡茶灰色	口縁：ナデ・ミガキ 体部：ケズリ	口縁：６条凹線・ナデ 体部：ナデ	
33	95	竪穴住居６	弥生土器 甕	(15.6)		(3.8)	暗茶灰色	口縁：不明 体部：ケズリ	口縁：４条凹線・ナデ 体部：ナデ	
33	96	竪穴住居６	弥生土器 甕	(20.4)		(6.2)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	不明	
33	97	竪穴住居６	弥生土器 甕			(6.6)	暗赤褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ナデ・刺突紋	
33	98	竪穴住居６	弥生土器 壺	(15.0)		(5.7)	橙褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
33	99	竪穴住居６	弥生土器 高坏		(11.1)	(10.2)	淡黄褐色	受部：ナデ 脚部：ケズリ 脚端部：ハケ→ナデ	受部：不明 脚部：ハケ 脚端部：ナデ	受部内面黒斑
33	100	竪穴住居６	弥生土器 高坏			(6.9)	淡黄褐色	ケズリ	ナデ	４方向円孔
33	101	竪穴住居６	弥生土器 底部		(10.0)	(6.9)	淡茶色	不明	不明	外面黒斑
33	102	竪穴住居６	弥生土器 底部		(11.6)	(7.9)	淡茶色	ケズリ・ナデ	体部：ハケ	
33	103	竪穴住居６	弥生土器 底部		(5.5)	(3.7)	淡赤褐色	ナデ	不明	
33	104	竪穴住居６	弥生土器 台付土器		(15.8)	(4.0)	淡茶灰色	不明	ナデ	
35	105	竪穴住居７	土師器 甕	(17.4)		(5.0)	淡赤灰色	口縁：ナデ 体部：不明	口縁：ナデ 体部：ナデ	
35	106	竪穴住居７	土師器 甕	(18.4)		(5.4)	暗茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ナデ	
35	107	竪穴住居７	土師器 壺	(15.4)		(3.5)	暗茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：不明	
35	108	竪穴住居７	土師器 壺		7.0	(7.4)	暗茶灰色	ケズリ→ナデ	ナデ	外面下部黒斑
35	109	竪穴住居７	弥生土器 甕	(15.4)		(3.6)	淡灰色	口縁：不明 体部：ケズリ	口縁：４条凹線 体部：不明	
36	110	竪穴住居８	弥生土器 甕	(13.0)		(3.5)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：４条凹線 体部：ナデ	
36	111	竪穴住居８	弥生土器 甕	(17.6)		(3.2)	茶灰色	不明	３条凹線	
36	112	竪穴住居８	弥生土器 甕	(17.8)		(2.8)	淡褐色	ナデ	ナデ	
36	113	竪穴住居８	弥生土器 甕	(12.3)		(4.1)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ナデ	
36	114	竪穴住居８	弥生土器 器台	(19.6)		(4.4)	茶灰色	ナデ	不明	
36	115	竪穴住居８	弥生土器 底部		(7.0)	(4.7)	淡茶灰色	不明	不明	
36	116	竪穴住居８	弥生土器 底部		(8.2)	(2.2)	淡赤色	不明	不明	

表13　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表6

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
36	117	竪穴住居8	弥生土器 底部		(7.2)	(2.1)	淡赤褐色	不明	不明	
36	118	竪穴住居8	弥生土器 底部		(5.8)	(1.8)	淡赤褐色	不明	不明	
37	119	竪穴住居9	土師器 甕	(15.6)		(5.3)	淡茶褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ナデ	
37	120	竪穴住居9	弥生土器 甕	(19.6)		(4.8)	淡赤褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：7条凹線 体部：ナデ	
37	121	竪穴住居9	土師器 台付土器		(9.0)	(2.2)	淡茶灰色	不明	不明	
37	122	竪穴住居9	土器 底部		(16.0)	(2.0)	淡茶褐色	不明	不明	
37	123	竪穴住居9	土器 底部		(9.0)	(7.9)	淡茶色	不明	不明	底面に黒斑
37	124	竪穴住居9	土師器 甑形土器、 把手				淡茶灰色		ナデ	
37	125	竪穴住居9	土師器 甑形土器、 把手				淡赤褐色	ナデ	ナデ	
38	126	竪穴住居10	土師器 甕	(17.0)		(5.8)	淡茶色	不明	不明	
38	127	竪穴住居10	土師器 甕	(16.6)		(5.4)	淡茶灰色	不明	不明	
38	128	竪穴住居10	土師器 甕	(17.8)		(4.2)	茶灰色	ナデ	ナデ	
38	129	竪穴住居10	土師器 甕	(18.6)		(4.9)	茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	不明	
38	130	竪穴住居10	土師器 甕	(19.6)		(5.3)	茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	不明	
38	131	竪穴住居10	土師器 甕	(14.8)		(4.5)	淡茶色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	不明	
39	132	竪穴住居10	土師器 甕	27.7		(22.7)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 上部：波状紋 体部：ハケ	
39	133	竪穴住居10	土師器 甕			(18.2)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 上部：波状紋 体部：ハケ	
39	134	竪穴住居10	土師器 甕	(30.6)		(5.1)	淡茶色	不明	不明	
39	135	竪穴住居10	土師器 甕	(17.6)		(9.5)	淡茶色	不明	不明	
39	136	竪穴住居10	土師器 器台	(15.4)		(10.0)	灰茶色	不明	不明	外体部黒斑
39	137	竪穴住居10	土師器 台付土器	(19.0)		(5.3)	淡茶灰色	不明	不明	
39	138	竪穴住居10	土師器 高坏脚部？		(13.0)	(4.4)	暗茶灰色	不明	不明	
39	139	竪穴住居10	土師器 壺		3.7	(5.0)	外：淡褐色 内：淡黄褐色	体部：ハケ 底部：ナデ・指頭圧痕	不明	
39	140	竪穴住居10	土師器 壺			(31.3)	淡黄褐色	ケズリ	ハケ後ヨコハケ 3段の刺突紋	
40	141	竪穴住居10	土師器 甑形土器	38.5	13.4	72.6	淡黄褐色	ケズリ	タテハケ	

表14　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表７

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
42	142	竪穴住居11	土師器 甕	(21.6)		(5.5)	淡茶灰色	口縁：不明 体部：ケズリ？	ナデ	
42	143	竪穴住居11	土師器 甕	(19.6)		(6.4)	淡茶灰色	口縁：不明 体部：ケズリ？	ナデ	
43	144	竪穴住居12	弥生土器 甕			(3.3)	淡赤褐色	口縁：不明 体部：ケズリ	口縁：２条凹線 体部：ナデ	
44	145	竪穴住居13	土師器 壺	(17.6)		(8.0)	淡茶灰色	ナデ	不明	
44	146	竪穴住居13	土師器 甕	(26.7)		(5.4)	淡赤褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
44	147	竪穴住居13	土師器 甕	(16.8)		(4.1)	淡赤褐色	ナデ	ナデ	
44	148	竪穴住居13	土師器 甕	(22.0)		(5.4)	淡茶灰色	不明	不明	
44	149	竪穴住居13	土師器 器台	(24.6)		(5.7)	淡茶灰色	不明	不明	
44	150	竪穴住居13	土師器 器台		(23.0)	(4.2)	淡茶灰色	ケズリ	ナデ	
44	151	竪穴住居13	土師器 器台		(16.4)	(3.8)	黒色	ケズリ・ナデ	６条凹線・ナデ	
44	152	竪穴住居13	土師器 甑形土器			(10.2)	淡黄橙色	ケズリ	風化	
44	153	竪穴住居13	土師器 甑形土器		(14.9)	(22.8)	淡黄橙色	ケズリ・ナデ	ハケ・ナデ	152と同一固体
45	154	竪穴住居14	弥生土器 壺	(17.0)		(3.6)	橙褐色	ナデ	２条凹線・ナデ	
45	155	竪穴住居14	弥生土器 壺			(4.5)	茶灰色	ナデ	３条以上凹線	
48	156	竪穴住居15	弥生土器 甕	(9.0)		(4.3)	橙褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：２条凹線 体部：ナデ	
48	157	竪穴住居15	弥生土器 甕	(17.2)		(4.3)	淡黄橙色	ケズリ	口縁部：３条凹線	
48	158	竪穴住居15	弥生土器 甕	(19.7)		(5.2)	橙色	ケズリ	肩部：刺突紋 口縁部：３条凹線	
48	159	竪穴住居15	弥生土器 甕	(16.7)		(3.6)	淡黄橙色	ケズリ	口縁部：２条凹線	
48	160	竪穴住居15	弥生土器 甕	(15.2)		(5.3)	淡黄橙色	ケズリ	肩部：刺突紋 口縁部：２条凹線	
48	161	竪穴住居15	弥生土器 甕	(22.7)		(5.4)	明橙色	体部：ケズリ 頸部：ヨコハケ	肩部：刺突紋 口縁部：５条凹線	
48	162	竪穴住居15	弥生土器 甕	(24.2)		(6.0)	橙色	体部：ケズリ 頸部：ヨコハケ	体部：タテハケ 口縁部：７条凹線	
48	163	竪穴住居15	弥生土器 甕	(17.6)		(6.1)	淡黄褐色	ケズリ	肩部：刺突紋 口縁部：５条凹線	
48	164	竪穴住居15	弥生土器 甕	(19.7)		(4.6)	灰茶色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
48	165	竪穴住居15	土師器 甕	(19.4)		(5.3)	淡黄橙色	ケズリ	ヨコナデ	
48	166	竪穴住居15	土師器 壺	(16.0)		(4.6)	淡黄褐色	ケズリ	ヨコナデ	
48	167	竪穴住居15	弥生土器 壺	(43.3)		(8.8)	淡黄橙色	ケズリ	口縁：５条の凹線 体部：タテハケ	
48	168	竪穴住居15	弥生土器 底部		16.2	(8.6)	淡黄橙色	ケズリ	ハケ	167と同一固体

表15　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表８

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
48	169	竪穴住居15	弥生土器 壺			(4.9)	淡黄橙色	ナデ	５条凹線・ナデ	
48	170	竪穴住居15	弥生土器 壺	(16.2)		(8.1)	淡黄褐色	ケズリ、指押え	風化	
48	171	竪穴住居15	弥生土器 壺			(9.3)	灰茶色	ナデ・ケズリ 指頭圧痕	７条以上凹線 ナデ	
48	172	竪穴住居15	弥生土器 鉢	(13.5)		(3.8)	淡黄褐色	ナデ	ナデ	
48	173	竪穴住居15	弥生土器 高坏			(3.6)	灰茶色	ナデ	ナデ	
48	174	竪穴住居15	弥生土器 底部		(7.0)	(4.5)	淡黄褐色	ケズリ	ハケ	
48	175	竪穴住居15	弥生土器 底部		6.6	(4.8)	淡黄褐色	ケズリ	ハケ	
48	176	竪穴住居15	弥生土器 底部		5.5	(3.4)	淡黄橙色	ケズリ	ハケ	
48	177	竪穴住居15	弥生土器 底部		(7.9)	(3.4)	淡黄橙色	ケズリ、ナデ	風化	
50	178	竪穴住居16	弥生土器 甕	17.7		(19.6)	赤褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：貝殻復縁凹線 体部上：貝殻復縁刺突紋 体部：ナデ	外面煤付着
50	179	竪穴住居16	弥生土器 甕			(5.6)	黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ 頸部下：貝殻復縁刺突紋	外面煤付着
50	180	竪穴住居16	弥生土器 甕	(17.8)		(3.1)	灰茶色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
50	181	竪穴住居16	弥生土器 器台	(17.8)		(2.7)	外：淡灰色 内：黒色	ナデ・ミガキ	４条凹線・ナデ	
50	182	竪穴住居16	弥生土器 台付土器		(10.8)	(4.2)	暗橙灰色	ナデ	不明	
51	183	竪穴住居17	弥生土器 甕			(3.7)	淡茶灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：３条凹線 頸部下：貝殻腹縁刺突紋 体部：ナデ	
51	184	竪穴住居17	弥生土器 器台		(17.0)	(3.6)	淡茶灰色	ナデ	４条凹線・ナデ	
51	185	竪穴住居17	弥生土器 壺	(22.0)		(10.1)	淡橙色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：５条凹線 頸部下：刺突紋 体部：ナデ	
52	186	竪穴住居18	土師器 高坏	(15.6)		(3.8)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	
52	187	竪穴住居18	土師器 高坏		(18.6)	(2.8)	淡茶灰色	不明	不明	
54	188	竪穴住居19	土師器 甕	(33.5)		(7.7)	暗灰褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	外面黒斑
54	189	竪穴住居19	土師器 甕	(19.8)		(5.0)	淡茶色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	不明	
54	190	竪穴住居19	土師器 甕	(13.7)		(4.9)	淡橙灰色	口縁：不明 体部：ケズリ	不明	
54	191	竪穴住居19	土師器 蓋			4.0	灰茶色	ナデ	ナデ・ハケ	つまみ径4.0 蓋径14.3
54	192	竪穴住居19	弥生土器 甕			(2.4)	淡茶褐色	ナデ	３条以上凹線 ナデ	外面黒斑

表16　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表９

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
55	193	竪穴住居20	土師器 甕	(17.8)		(3.9)	明灰茶色	不明	ナデ	
56	194	竪穴住居21	弥生土器 甕	(22.0)		(3.9)	淡黒茶色	ナデ	３条凹線・ナデ	
56	195	竪穴住居21	弥生土器 甕	(16.0)		(3.2)	淡灰褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：５条凹線 体部：ナデ	
56	196	竪穴住居21	弥生土器 甕	(16.0)		(3.2)	淡灰茶色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：４条凹線 体部：ナデ	
56	197	竪穴住居21	弥生土器 甕	(19.0)		(3.7)	暗灰茶色	ナデ	４条凹線・ナデ	
56	198	竪穴住居21	弥生土器 甕	(16.7)		(3.7)	淡橙褐色	口縁：ナデ 頸部：ハケ 体部：ケズリ	口縁：４条凹線 頸部下：刺突紋 体部：ナデ	
59	199	掘立柱建物 ７	弥生土器 底部		(4.8)	(3.3)	橙褐色	ケズリ・ナデ	ナデ→ミガキ	
59	200	掘立柱建物 ８	弥生土器 壺	(24.0)		(2.0)	黒茶色	ナデ	３条凹線・ナデ	
64	201	古墳１周溝 内	須恵器 坏蓋	11.8		4.6	暗灰色	ナデ	天井部：回転ヘラケズリ 口縁：ナデ	
64	202	古墳１周溝 内	須恵器 坏身	9.7		4.8	暗灰色	ナデ	口縁～体部上半：ナデ 底部～立ち上がり：回転ヘラケズリ	
64	203	古墳１周溝 内	須恵器 高坏	13.7		(5.4)	外：灰色～淡灰色 内：淡灰色	ナデ	口縁～体部上半：ナデ 底部～立ち上がり：回転ヘラケズリ	
64	204	古墳１周溝 内	須恵器 高坏	(15.0)		(6.2)	淡灰色	ナデ	ナデ	
64	205	古墳１周溝 内	須恵器 壺	(8.6)		(5.2)	暗灰色	ナデ	ナデ 体部：ナデ・カキメ	
64	206	古墳１周溝 内	須恵器 𤭯			(5.2)	灰色	ナデ	ナデ 胴部最大径付近：１条沈線を挟み、貝殻腹縁刺突紋２段。	外面自然釉付着 胴部中位円孔
64	207	古墳１周溝 内	須恵器 壺			(12.4)	淡灰色	当て具痕	タタキ後ナデ	「×」ヘラ記号
65	208	古墳１周溝 内	須恵器 坏蓋	(13.8)		(2.4)	灰色	ナデ	ナデ	
65	209	古墳１周溝 内	須恵器 蓋	(16.6)		1.8	淡灰色	ナデ	ナデ	
65	210	古墳１周溝 内	土師器 坏身		(10.0)	(1.6)	淡赤灰色	不明	不明	
65	211	古墳１周溝 内	土師器 甕	(11.8)		(6.8)	明褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
65	212	古墳１周溝 内	土師器 甕	(11.4)		(6.2)	黒褐色	不明	ナデ	
65	213	古墳１周溝 内	土師器 長頸壺			(11.6)	淡橙色	ナデ	ナデ	
65	214	古墳１周溝 内	土師器 把手部				灰茶色		ナデ	甑の把手部

表17　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表10

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
66	215	土壙墓1	須恵器 甕				褐色 胴下半～底部：淡灰色	ナデ	口縁：波状紋 体部上：ナデ2条沈線 体部最大径付近に波状紋 体部下：ケズリ	内外口縁～胴部下半自然釉 胴部中位円孔
66	216	土壙墓1	土師器 甕	(11.4)		(5.8)	暗橙色	口縁：ナデ 体部：不明 一部指頭圧痕	ナデ	
66	217	土壙墓1	土師器 底部			(4.3)	淡茶褐色	ナデ・指頭圧痕	ナデ	
67	218	古墳2周溝内	弥生土器 甕	(18.0)		(4.1)	明灰茶色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	4条凹線・ナデ	
67	219	古墳2周溝内	弥生土器 台付土器		(8.5)	(2.2)	黄褐色	ナデ	6条沈線→綾杉紋	
70	220	古墳4周溝内	土師器 壺			(6.2)	灰茶色	ナデ	ナデ？	外面赤色塗彩
71	221	古墳5周溝内	土師器 直口壺	(9.8)		13.1	淡赤褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	胴部下半に穿孔
71	222	古墳5周溝内	土師器 甕	(9.6)		(5.5)	淡茶褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
71	223	古墳5周溝内	土師器 高坏			(3.9)	淡茶灰色	不明	ハケ	内外面赤色塗彩
71	224	古墳5周溝内	須恵器 甕片				暗灰色	当て具痕	タタキ	
71	225	古墳5周溝内	須恵器 甕片				暗灰色	当て具痕	タタキ	
73	226	古墳6周溝内	土師器 高坏	16.4	11.2	12.0	外：赤色 内：受部→赤色 脚部→橙色	受部：ナデ 脚部：シボリ目・ナデ	受部：ハケ 脚部：ナデ	受部内外面・脚部外面赤色塗彩
73	227	古墳6周溝内	土師器 高坏	15.9	12.5	9.4	淡茶灰色	受部：ナデ 脚部：シボリ目・ハケ	受部：不明 脚部：ナデ	受部内外面・脚部外面赤色塗彩
73	228	古墳6周溝内	土師器 高坏	(16.6)		(4.8)	淡茶灰色	ナデ	ナデ・ハケ	内外面赤色塗彩
73	229	古墳6周溝内	土師器 高坏		12.3	(8.0)	外：赤色 内：淡橙黄色	シボリ目・ナデ・ハケ	受部：ハケ 脚部：ナデ	外面赤色塗彩 脚端部一部黒斑
73	230	古墳6周溝内	土師器 高坏			(5.8)	外：赤色 内：橙色	シボリ目	受部：ハケ 脚柱部：ナデ	外面赤色塗彩
73	231	古墳6周溝内	土師器 高坏		(8.4)	(5.5)	橙褐色	シボリ目・ナデ	ナデ	
73	232	古墳6周溝内	土師器 高坏		(9.6)	(3.0)	淡茶灰色	シボリ目・ナデ・ハケ	ナデ	外面赤色塗彩
73	233	古墳6周溝内	土師器 高坏		9.6	3.1	外：赤色 内：橙色	シボリ目・ナデ・ハケ	ナデ	外面赤色塗彩
73	234	古墳6周溝内	土師器 鍋	(36.4)		(10.2)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ハケ	口縁：ナデ 体部：ハケ	
76	235	古墳7周溝内	土師器 壺	18.4		44.8	淡黄橙色	上半：ハケ 下半：ケズリ	ハケ	
76	236	古墳7周溝内	土師器 壺			(8.5)	淡灰茶色	不明	不明	
76	237	古墳7周溝内	土師器 壺	(17.6)		(5.3)	褐色	ナデ	ナデ	

表18　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表11

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
76	238	古墳７周溝内	土師器 壺	(13.2)		(4.2)	淡茶灰色	口縁：不明 頸部：ハケ 体部：ケズリ	口縁：不明 体部：ハケ	
76	239	古墳７周溝内	土師器 壺	(18.6)		(5.1)	淡橙灰色	ケズリ	ナデ	
76	240	古墳７周溝内	土師器 甕	(17.7)		(3.7)	暗茶灰色	ナデ	ナデ	
76	241	古墳７周溝内	弥生土器 壺	(17.1)		(7.9)	外：黄褐色 内：淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ・ハケ	口縁：５条凹線 体部：ナデ １条凹線後２段ヘラ状工具刺突紋	
76	242	古墳７周溝内	弥生土器 甕	(23.6)		(3.7)	橙褐色	不明	４条凹線	
76	243	古墳７周溝内	弥生土器 甕	(19.0)		(4.6)	灰茶色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：７条凹線 体部：ナデ	
76	244	古墳７周溝内	弥生土器 甕	(17.8)		(4.2)	淡橙灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：８条凹線 体部：ナデ	
76	245	古墳７周溝内	弥生土器 器台？	(16.6)		(2.3)	黒褐色	ナデ	ナデ	
76	246	古墳７周溝内	土師器 坏	(16.0)		(3.9)	灰茶色	ナデ	ナデ	
76	247	古墳７周溝内	土師器 底部			(5.8)	灰茶色	ナデ	不明	
76	248	古墳７周溝内	土師器 埦	10.9	7.2	3.7	橙褐色	ナデ	ナデ	
77	249	土器棺墓１	土師器 甕	(47.7)		(55.8)	淡黄褐色	ケズリ	タテハケ 肩部：波状紋	
79	250	横穴墓１	須恵器 𤭯		(3.9)	(14.5)	灰色	口縁～頸部：ナデ 体部：不明	口縁～体部上半：ナデ 体部下半～底部：ケズリ 胴部上位と中位に沈線	胴部中位円孔
79	251	横穴墓１	須恵器 横瓶	13.2		26.1	灰色	当て具痕	体部：タタキ 端部：カキメ	
83	252	掘立柱建物26	土師器 皿	7.8	5.2	1.7	黄褐色	ナデ	ナデ 底面：ヘラ切	
83	253	掘立柱建物26	土師器 皿	7.0	3.7	1.7	橙色	ナデ	ナデ 底面：回転糸切	
83	254	掘立柱建物26	土師器 皿	8.3	4.9	1.8	黄褐色	ナデ	ナデ 底面：回転糸切	
84	255	掘立柱建物31	土師器 坏	(12.2)	(5.6)	4.9	淡橙灰色	ナデ	ナデ 底面：回転糸切	
84	256	土坑９	土師器 皿	(8.8)		(1.5)	黄褐色	ナデ	ナデ	
85	257	土坑10	土師器 皿	(8.0)	(5.2)	(1.4)	淡茶灰色	ナデ	ナデ 底面：糸切後ナデ	煤付着
85	258	土坑10	土師器 皿	8.4	4.4	1.6	淡赤褐色	ナデ	ナデ 底面：回転糸切	
85	259	土坑10	土師器 皿	(8.8)		(4.0)	茶灰色	ナデ	ナデ	
87	260	テラス１	土師器 皿	11.8	5.0	2.1	淡黄褐色	ナデ	ナデ 底面：指オサエ後ナデ	

表19　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表12

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
92	261	丘陵部下 斜面 黒色土	弥生土器 壺	10.5	5.3	19.4	淡黄橙色	口縁：ミガキ 頸部：シボリ 体部：ナデ	口縁：ミガキ 頸部：3条沈線 体部：ミガキ 底面：ナデ	口唇部：キザミ 胴部内面剥離 胴部外面黒斑
92	262	丘陵部下 斜面 黒色土	弥生土器 壺	(10.3)		(10.4)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：3条凹線→ナデ 体部：ナデ	胴部外面下半煤付着
92	263	W－5区 表土	弥生土器 高坏		(14.4)	(8.5)	灰茶色	ケズリ・ナデ	ナデ 端面：2条凹線	外面赤色塗彩
92	264	E－2区 表土	弥生土器 器台		(18.6)	(3.5)	暗灰茶色	ケズリ	6条凹線・ナデ	内外面赤色塗彩
92	265	E－3区 表土	弥生土器 甕	(31.2)	(15.7)		赤褐色	ケズリ	体部：風化 頸部：刺突紋 口縁部：6条凹線	
92	266	E－3区 表土	土師器 壺	(24.1)		(6.3)	淡茶褐色	ナデ	ナデ 端面下部に刺突紋	
92	267	E－2～3区 表土	須恵器 坏身	(11.0)		(4.4)	暗灰色	ナデ	口縁～体部上半：ナデ 底部～立ち上がり：回転ヘラケズリ	
92	268	E－2区 表土直下 SI6付近	須恵器 壺		(11.8)	(7.0)	灰色	ナデ	ナデ	高台付
92	269	W－7区 表土	土師器 鍋	(24.6)		(3.4)	淡灰色	口縁：ナデ 体部：ハケ	ナデ	
92	270	E－4区 表土	土師器 皿	(3.2)	(5.9)	(1.5)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
92	271	E・W－2・3区 表土	陶器 皿			(0.9)	淡緑灰色		底面露胎	鉄絵唐津
92	272	溝状遺構1 検出土上	土師器 壺	(29.6)		(12.0)	淡赤褐色	ナデ	ナデ	
92	273	溝状遺構1 検出土上	弥生土器 甕	(18.6)		(4.0)	明茶灰色	ナデ	ナデ	
92	274	溝状遺構1 検出土上	土師器 高坏		11.6	(3.0)	灰茶色	ナデ	ナデ	
93	275	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	12.0	5.8	3.0	淡黄褐色	ナデ	ナデ 底面：指オサエ	
93	276	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	(11.8)	(8.8)	(2.4)	淡茶灰色	ナデ	ナデ 指オサエ	
93	277	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	8.1	5.2	1.7	淡赤褐色	ナデ	ナデ 底面：ケズリ	
93	278	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	(8.6)	(5.2)	(1.5)	淡茶灰色	ナデ	ナデ 底面：ヘラ切	
93	279	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	(7.0)	(4.8)	(1.1)	暗茶色	ナデ	ナデ 底面：指オサエ	
93	280	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	(7.0)	(4.5)	(1.3)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
93	281	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	(11.0)	(4.2)	(1.9)	淡黄色	ナデ	ナデ	
93	282	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	(13.0)		(2.4)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
93	283	諏訪神社旧 境内地	土師器 皿	(11.6)		(2.5)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	

表20　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表13

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
93	284	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(11.7)		(2.8)	淡黄褐色	ナデ	ナデ	
93	285	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	8.5	3.4	1.9	淡茶灰色	ナデ	ナデ 底面：ヘラ切後ナデ	
93	286	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(7.8)	(3.8)	(1.5)	灰色	ナデ	ユビオサエ後ナデ	
93	287	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(8.2)		(1.6)	淡黄褐色	ナデ	ナデ	
93	288	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	9.1	2.8	1.9	淡茶灰色	ナデ	ナデ 指オサエ	
93	289	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(8.6)		(1.5)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
93	290	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(12.2)	(6.6)	(3.5)	淡茶灰色	ナデ	ナデ 底面：ヘラ切	
93	291	諏訪神社旧境内地	土師器 皿		(6.0)	(2.7)	淡茶灰色	ナデ	ナデ 底面：静止糸切	口縁付近（体部上）黒斑
93	292	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(11.8)		(2.8)	淡黄褐色	ナデ	ナデ	
93	293	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	6.8	4.2	1.9	淡赤褐色	ナデ	ナデ 底面：回転糸切	
93	294	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(6.8)	(4.2)	(2.0)	淡黄褐色	ナデ	ナデ 底部：回転糸切	
93	295	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	7.4	3.6	2.0	黄褐色	不明	不明 底面：糸切	口唇部煤付着
93	296	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(7.6)	(4.8)	(1.8)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
93	297	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	7.8	4.1	1.5	淡茶灰色	ナデ	ナデ 底面：回転糸切	
93	298	諏訪神社旧境内地	土師器 皿	(9.0)	(3.3)	(1.7)	淡赤褐色	ナデ	ナデ	
93	299	諏訪神社旧境内地	陶器 皿	(8.0)	(3.0)	(1.6)	灰色	釉	口縁：釉 ナデ	
93	300	諏訪神社旧境内地	土師器 鍋	(24.8)		(7.2)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ハケ	口縁：不明 体部：ハケ？	外面煤付着
93	301	諏訪神社旧境内地	須恵器 甕			(5.0)	暗灰色	ナデ	ナデ	
93	302	諏訪神社旧境内地	陶器 天目茶碗	(14.0)		(5.4)	茶灰色	釉	釉	
93	303	諏訪神社旧境内地	陶器 皿		(4.3)	(1.8)	緑灰色	ナデ	ケズリ	内面底部砂目
93	304	諏訪神社旧境内地	磁器 皿		(4.2)	(2.3)	暗白色	施釉	施釉 底面露胎	蛇目釉剥ぎ
93	305	諏訪神社旧境内地	陶器 備前焼徳利	4.5	7.8	19.9	褐色	ナデ	ナデ 底面：静止糸切	備前焼
93	306	諏訪神社旧境内地	陶器 備前焼徳利	5.1	7.8	18.6	褐色	ナデ	ナデ 底面：静止糸切	備前焼 頸部下と底面に同一ヘラ記号有
94	307	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土器 鉢	(18.0)		(5.1)	淡黒茶色	ナデ	ナデ 口縁：２条凹線	
94	308	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	弥生土器 甕	(19.2)		(5.2)	淡黒褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：不明 体部：ナデ	外面黒斑

表21　諏訪西山ノ後遺跡出土遺物観察表14

（復元値、反転・残存値は（　）表示）

図	No.	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
94	309	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	弥生土器甕	(14.0)		(4.0)	淡茶褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：5条凹線 頸部下：刺突紋 体部：ナデ	
94	310	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	弥生土器甕	(16.0)		(4.5)	淡橙灰色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：6条凹線 体部：ナデ	
94	311	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土師器甕	(23.0)		(6.3)	黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
94	312	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	台付土器		9.2	(2.8)	暗褐色	ナデ	ナデ	
94	313	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	弥生土器甕	(25.2)		(3.2)	明茶灰色	ナデ	ナデ 凹線有。条数は不明	
94	314	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土師器壺	(19.0)		(5.6)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
94	315	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土師器甕	(13.8)		(4.0)	灰褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
94	316	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土師器甕	(18.4)		(5.0)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	
94	317	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土師器甕	(21.6)		(5.4)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	
94	318	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	弥生土器甕	14.1		23.3	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ 頸部下位：波状紋	底面穿孔 内面下部・外面下半煤付着
94	319	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土師器壺	(25.6)		(21.0)	淡黄褐色	口縁：ナデ 体部：ケズリ	体部：ヨコハケ、刺突紋	320と同一固体
94	320	諏訪神社旧境内斜面下黒色土	土師器壺		8.0	(28.8)	淡黄褐色	ケズリ	ハケ	

表22　諏訪西山ノ後遺跡出土石器観察表

図	No.	層位・地区	種　別	法量(cm)			備　考
				最大長	最大幅	最大厚	
14	22	土坑1	石鏃	2.6	1.6	0.3	
20	23	竪穴住居1	擦石	7.5	4.7	6.6	
20	24	竪穴住居1	台石	26.3	12.6	7.8	
26	25	竪穴住居3	砥石	3.9	2.6	1.1	被熱痕
26	26	竪穴住居3	擦石	6.0	4.9	2.2	
26	27	竪穴住居3	擦石	9.5	5.0	2.6	
26	28	竪穴住居3	台石	12.4	14.0	7.8	
30	29	竪穴住居4	有溝石錘	3.3	1.1	1.1	
30	30	竪穴住居4	擦石	8.1	5.3	5.3	被熱痕
30	31	竪穴住居4	台石	26.5	16.2	9.9	
30	32	竪穴住居4	台石	18.4	13.6	8.5	
30	33	竪穴住居4	台石	19.5	14.7	7.3	
35	34	竪穴住居7	敲石	9.7	8.6	6.3	
35	35	竪穴住居7	砥石	3.2	2.4	8.0	
35	36	竪穴住居7	砥石	7.3	3.0	0.8	
34	37	竪穴住居7	台石	48.3	31.2	12.0	
34	38	竪穴住居7	台石	19.9	19.0	10.3	
36	39	竪穴住居8	台石	14.7	16.0	8.7	
36	40	竪穴住居8	砥石	9.6	5.8	2.9	
41	41	竪穴住居10	擦石	11.5	5.5	5.2	
41	42	竪穴住居10	台石	15.0	9.9	6.5	
41	43	竪穴住居10	台石	32.9	25.5	10.1	
42	44	竪穴住居11	擦石	13.0	6.7	6.7	
44	45	竪穴住居13	砥石	5.8	4.0	3.8	
49	46	竪穴住居15	擦石	14.7	8.0	5.2	
49	47	竪穴住居15	砥石	5.7	2.6	0.6	
50	48	竪穴住居16	擦石	8.6	6.4	5.4	
60	49	掘立柱建物14	擦石	6.4	3.0	2.3	
65	50	古墳1周溝	敲石	7.6	4.4	2.7	
65	51	古墳1周溝	砥石	5.2	2.1	1.7	
65	52	古墳1周溝	砥石	5.3	3.5	2.1	
65	53	古墳1周溝	砥石	1.9	2.4	1.3	
76	54	古墳7周溝	擦石	12.5	6.5	6.5	
80	55	周溝墓2周溝内	砥石	8.8	6.7	2.7	
87	56	テラス1	五輪塔（水輪）	33.4	32.6	20.1	
92	57	周溝墓2斜面下	五輪塔？	6.0	6.5	2.6	
92	58	周溝墓2斜面下	五輪塔（風空輪）	14.9	11.8	7.2	梵字

表23　諏訪西山ノ後遺跡　出土金属器観察表

図	No.	遺物種類（名称）	層位地区	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
30	F.1	板状鉄器	竪穴住居4	4	1.4	0.3	
30	F.2	針状鉄器	竪穴住居4	3.8	0.9		
37	F.3	ヤリガンナ刃部片	竪穴住居9	3	1	0.2	
37	F.4	棒状鉄器	竪穴住居9	3.1	1.1	0.5	
37	F.5	不明鉄器	竪穴住居9	4.2	2.1	1	表面に木質が遺存。
42	F.6	棒状鉄器	竪穴住居11	3.6	0.4	0.3	
51	F.7	釘	竪穴住居17	1.7	1.1	1	
68	F.8	鉄鏃？	土壙墓5	9.6	0.9	0.5	
65	B.1	煙管吸口	古墳1周溝内	4.6	0.9		内部に羅宇が遺存。
85	B.2	青銅製小形容器	土坑10	4		3.8	

表24　諏訪西山ノ後遺跡　出土玉類観察表

図	遺物番号	層位・地区	種類	材質	最大径（cm）	最大長（cm）	穴径（cm）	形態上の特徴
49	G.1	竪穴住居15 P13	管玉	ガラス	0.5	0.8	0.1	色調は、濃いコバルトブルーを呈する。